

元総社西川遺跡

史跡上野国分寺進入路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

元総社西川遺跡

史跡上野国分寺進入路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



調査区の全景（奥は史跡上野国分僧寺）

口絵 2



6号住居出土遺物（古墳時代初頭、26頁参照）



4号住居出土遺物（古墳時代後期、18頁参照）

序

『元総社西川遺跡』は、史跡上野国分寺進入路建設工事に伴って発掘された前橋市元総社町に所在した遺跡の発掘調査報告書です。平成12年1月から6月に発掘調査を、平成13年4月から9月に整理事業を、群馬県教育委員会から委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施しました。

発掘した遺跡は、相馬ヶ原扇状地が前橋台地に移行するあたりに位置し、古墳時代、奈良・平安時代の住居址などが発見されました。特にこの地は、上野国分僧寺・尼寺、上野国府、山王廃寺といった県内でも有数の埋蔵文化財の密集地で、早くから識者の注目をあびていました。本遺跡に隣接する史跡上野国分寺跡では、現在、県教育委員会により史跡整備事業がすすめられていますが、本報告書には、竪穴住居跡、またそこより数多く出土した土器など貴重な資料が報告されています。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでに群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、群馬町教育委員会、地元関係者から数々のご援助、ご指導、ご協力を賜りましたことに対し、深甚なる感謝の意を表し、併せて本報告が上野国分寺の創建及び本県の歴史を解明するための資料として、広く活用していただければ幸甚であります。

平成13年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

1 本書は、国分寺進入路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在地番は、以下のとおりである。

元総社西川（もとそうじゃにしかわ）遺跡

群馬県前橋市元総社町1530-1～9、1531-1・2番地

発掘調査時には上野国分寺参道Ⅲ（こうずけこくぶんじさんどうさん）遺跡の名称であったが、調査後、県教育委員会と前橋市教育委員会の協議の結果、参道遺跡という名称が適当でない事が判明したので、所在地の大字、小字の名称をとって元総社西川遺跡とした。

3 発掘調査は、群馬県教育委員会の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4 発掘調査の実施期間と調査面積は、以下の通りである。

平成12年1月5日～同年6月30日

面積 5664㎡

5 調査組織は以下のとおりである。

理事長 小野宇三郎

常務理事兼事務局長 赤山容造

管理部長 住谷進

調査研究部長 水田稔（平成11年度）、能登健（平成12年度）

総務課長 坂本敏夫

調査研究部課長 西田健彦（平成11年度）、中東耕志（平成12年度）

事務担当 笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、岡島伸昌、森下弘美、片岡徳雄、大沢友治、吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、若田誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、浅見宜記、吉田茂、蘓原正義

調査担当 井川達雄（平成11・12年度）

齊藤幸男（平成11年度）

笹澤泰史（平成12年度）

6 整理作業・報告書作成期間は以下のとおりである。

平成13年4月1日～平成13年9月30日までの6ヶ月

7 整理組織は以下のとおりである。

理事長 小野宇三郎

常務理事 吉田豊、赤山容造

管理部長 住谷進

調査研究部長 能登健

総務課長 大島信夫

資料整理課長 西田健彦

事務担当 笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、森下弘美、片岡徳雄、大沢友治、

	吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、若田誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田茂、蘓原正義
整理担当者	笹澤泰史
整理嘱託員	新井悦子
整理補助員	佐子昭子、渡辺フサ枝、萩原鈴代、阿部幸恵、武永いち

8 本書作成の担当者は次のとおりである。

編集	笹澤泰史	
執筆者	西田健彦	
	大木紳一郎	
	檜崎修一郎	
	古環境研究所	
	パレオ・ラボ	
	笹澤泰史	
遺物観察	縄文土器	山口逸弘
	瓦	高井佳弘
	石材	飯島静男（群馬地質研究会）
写真撮影	佐藤元彦	
	株式会社 測研（航空写真）	
	遺構写真は現場担当が撮影	
測量	株式会社測研（委託）	
	技研測量設計株式会社（委託）	
	竪穴住居、土坑遺構などは発掘調査従事者が測量	
保存処理	関邦一、土橋まり子、高橋初美、小材浩一	
遺物機械実測	佐藤美代子、田中富子、富沢スミ江、矢島三枝子	

9 当遺跡の内容をより詳細に浮き彫りにする意図で、次の各位に資料の分析・測定結果の玉稿賜った。

土層・テフラ分析	プラントオパール分析	古環境研究所
人骨・歯の鑑定	獣骨・歯の鑑定	檜崎修一郎
出土土器胎土分析		パレオ・ラボ

10 発掘調査及び出土遺物整理にあたっては、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。（敬称略）

前橋市教育委員会・群馬町教育委員会・関口功一・若狭徹・清水豊・田辺芳昭・早田勉・須田貞崇

11 出土遺物・図面・写真・記録などの資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

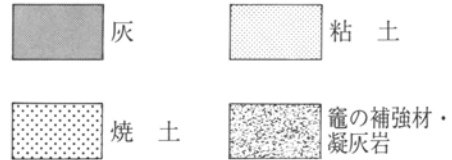
凡 例

1 本書中の遺構番号は、発掘調査時に付したものをそのまま使用している。

2 本書の遺構・遺物挿図の指示は次のとおりである。

(1) 挿図縮尺

竪穴住居跡	1/60
土坑	1/40
溝	1/100、1/200
土器実測	1/4
石器実測	1/1、1/3、1/4
鉄器実測	1/2
古銭	1/1
瓦	1/3
付図（全体図）	1/200



(2) 遺構図の方位記号は国家座標の北を表している。座標系は国家座標第Ⅸ系である。

(3) 住居の方位は、炉の付設された住居では住居の長軸線、竈が付設された住居では竈が付設された壁、あるいは竈が付設されたと推定される壁に直行する軸線の、真北からの角度とした。

(4) 遺物番号は本文、挿図、表と一致する。

(5) 竪穴住居跡の面積は、1/40図上でプランニメーターにより住居の壁の内側を3回測定し、計測平均値を採った。

(6) 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖（平成6年）によった。

(7) 本文中の遺構の位置は、国家座標Ⅸ系を用いたグリッドで表した。国家座標Ⅸ系を5m方眼に区切り、X、Y軸の南東隅の交点下3桁をグリッド名とした。

3 本文中で使用したテフラの記号は以下の通りである。

浅間B軽石 (As-B)	1108 (天仁元) 年	榛名二ッ岳伊香保テフラ (Hr-FP)	6世紀中葉
榛名二ッ岳渋川テフラ (Hr-FA)	6世紀初頭	浅間C軽石 (As-C)	4世紀初頭

As-C軽石の噴出年代については、3世紀に遡る可能性が指摘されている（若狭 徹「群馬の弥生時代が終わるとき」「人が動く・土器が動く 古墳が成立する頃の土器の交流」かみつけの里博物館 1998）。

目次

序文

口絵

例言・凡例

序章 調査の経過

- [1] 調査に至る経緯 (西田健彦) 1
- [2] 調査の経過 2
- [3] 調査の方法 2

第1章 遺跡の立地と環境

- [1] 位置と地理的環境 4
- [2] 歴史的環境 6

第2章 基本層序 12

第3章 検出された遺構・遺物

- [1] 竪穴住居 13
- [2] 土坑・井戸 43
- [3] 溝・畠 53
- [4] 遺構外出土遺物 65

第4章 自然科学分析

- [1] 土層とテフラの分析 (古環境研究所) 74
- [2] 植物珪酸体分析 (古環境研究所) 81
- [3] 元総社西川遺跡出土人骨 (檜崎修一郎) 86
- [4] 元総社西川遺跡出土馬歯 (檜崎修一郎) 91
- [5] S字状口縁台付甕の胎土材料 (パレオ・ラボ) 95

第5章 まとめ

- [1] 元総社西川遺跡出土の古墳時代前期の土器について (大木紳一郎) 105
- [2] 国分寺参道について 111
- [3] 上野国分僧寺南正面の集落変遷 114
- [4] 古式土師器産地推定の検討 118

遺物観察表 123

縄文土器 (山口逸弘)

瓦 (高井佳弘)

抄録

写真図版

挿 図 目 次

第1図	元総社西川遺跡位置図 (国土地理院5万分の1「前橋」使用)	1	第46図	22・25・29・30・37～39号土坑	48
第2図	調査区及び周辺地形図	3	第47図	44～46・2・26・27・31・34号土坑	49
第3図	遺跡周辺の地形分類 (『群馬県史』通史編1 図17、付図2を編図)	5	第48図	41・42号土坑、34・42号土坑出土遺物	50
第4図	遺跡周辺の地層断面図 (『群馬県史』通史編1 付図3を編図)	5	第49図	52号土坑、出土遺物	51
第5図	周辺遺跡分布図1 (国土地理院1:25,000「前橋・渋川」使用)	8	第50図	1号井戸、出土遺物	52
第6図	周辺遺跡分布図2 (群馬県教育委員会『西国分六川割遺跡』付図を編図)	10	第51図	溝・畝全体図	53
第7図	元総社西川遺跡基本土層図	12	第52図	1号溝	54
第8図	竪穴住居全体図	13	第53図	1号溝出土遺物(1)	55
第9図	1号住居	14	第54図	1号溝出土遺物(2)	56
第10図	1号住居掘り方、竈、出土遺物	15	第55図	2・5・6号溝	57
第11図	2号住居、1号竈	16	第56図	4号溝(1)	58
第12図	2号住居2号竈、出土遺物	17	第57図	4号溝(2)	59
第13図	3号住居竈、出土遺物	18	第58図	4～6号溝出土遺物	60
第14図	4号住居、遺物出土状況	19	第59図	7・8号溝	61
第15図	4号住居竈遺物出土状況	20	第60図	8号溝出土遺物(1)	62
第16図	4号住居掘り方、竈	21	第61図	8号溝出土遺物(2)	63
第17図	4号住居出土遺物(1)	22	第62図	9号溝	63
第18図	4号住居出土遺物(2)	23	第63図	1・2号畝	64
第19図	5号住居、遺物出土状況	24	第64図	遺構外出土遺物(1)	65
第20図	5号住居竈、出土遺物	25	第65図	遺構外出土遺物(2)	66
第21図	6号住居	26	第66図	遺構外出土遺物(3)	67
第22図	6号住居遺物出土状況、掘り方	27	第67図	遺構外出土遺物(4)	68
第23図	6号住居出土遺物(1)	29	第68図	遺構外出土遺物(5)	69
第24図	6号住居出土遺物(2)	30	第69図	遺構外出土遺物(6)	70
第25図	7号住居竈	30	第70図	遺構外出土遺物(7)	71
第26図	8号住居遺物出土状況	31	第71図	遺構外出土遺物(8)	72
第27図	8号住居、掘り方	32	第72図	自然科学分析一覧表	73
第28図	8号住居出土遺物	33	第73図	1区基本土層断面の土層柱状図	78
第29図	9号住居	33	第74図	2区基本土層断面の土層柱状図	78
第30図	9号住居掘り方、竈、出土遺物	34	第75図	2区8号住居址覆土の土層柱状図	79
第31図	10号住居、竈、出土遺物	35	第76図	1区4号住居址覆土の土層柱状図	79
第32図	11号住居、出土遺物	36	第77図	2区8号溝覆土の土層柱状図	79
第33図	12号住居	37	第78図	1区11号住居址覆土の土層柱状図	79
第34図	12号住居出土遺物	38	第79図	1区2号畝の土層柱状図	79
第35図	13号住居	38	第80図	緑部トレンチ2区台部の土層柱状図	79
第36図	13号住居竈、出土遺物	39	第81図	緑部トレンチ2区谷部の土層柱状図	79
第37図	14号住居	40	第82図	1区2号畝における植物珪酸体分析結果	84
第38図	16号住居、出土遺物	40	第83図	2区緑部トレンチにおける植物珪酸体分析結果	84
第39図	16号住居竈	41	第84図	人骨の出土状況	86
第40図	17・18号住居、竈、出土遺物	42	第85図	34号土坑出土人骨残存図	87
第41図	土坑・井戸全体図	43	第86図	出土馬歯残存図	94
第42図	1・5・6号土坑	44	第87図	胎土分析資料	101
第43図	8・28・48号土坑、8号土坑出土遺物	45	第88図	S字状口縁台付甕胎土中の粒子組成図	102
第44図	47・49・3・4・7・9～12号土坑	46	第89図	群馬県の概要地質図	103
第45図	13～21号土坑	47	第90図	土器胎土中の粒子顕微鏡写真	104
			第91図	S字状口縁台付甕の分類	109
			第92図	b2類相当の参考資料	109
			第93図	元総社西川遺跡周辺図①	112
			第94図	元総社西川遺跡周辺図②	114
			第95図	元総社西川遺跡周辺図③	116

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	9	第11表	出土永久歯の非計測的形質	90
第2表	土坑一覧表	51	第12表	馬歯出土表	93
第3表	テフラ検出分析結果	80	第13表	出土馬歯計測値	93
第4表	屈折率測定結果(2区基本土層)	80	第14表	S字状口縁台付甕と胎土の肉眼的特徴	101
第5表	テフラ検出分析結果(2区緑部トレンチ)	80	第15表	土器胎土中の砂粒分類	101
第6表	屈折率測定結果(2区緑部トレンチ)	80	第16表	S字状口縁台付甕胎土の砂土及び砂粒の特徴	102
第7表	1区2号畠における植物珪酸体分析結果	83	第17表	土器胎土中の粒子組成一覧表	102
第8表	2区緑部トレンチにおける植物珪酸体分析結果	83	第18表	僧寺南正面の竪穴住居跡の変遷	115
第9表	出土永久歯歯冠計測値及び比較表	89	第19表	鳥羽遺跡L~O区の竪穴住居跡の変遷	115
第10表	出土乳歯歯冠計測値及び比較表	89			

写 真 図 版 目 次

PL.1	元総社西川遺跡から上野国分僧寺の築地塀を望む 元総社西川遺跡(上空より)	PL.10	7号住居竈掘り方 7号住居竈断面B-B'
PL.2	1号住居全景 1号住居竈 1号住居遺物出土状況 1号住居貯蔵穴 1号住居掘り方全景		8号住居炭化材出土状況 8号住居断面C-C' 8号住居断面C-C'
PL.3	2号住居全景 2号住居1号竈 2号住居2号竈 2号住居2号竈断面E-E'	PL.11	8号住居柱穴1断面 8号住居柱穴2断面 8号住居柱穴3断面 8号住居炭化材出土状況 8号住居炭化材出土状況 8号住居炭化材下のAs-C軽石 8号住居遺物出土状況 8号住居遺物出土状況
PL.4	3号住居竈遺物出土状況 3号住居竈掘り方全景 4号住居全景 4号住居竈 4号住居貯蔵穴	PL.12	9号住居遺物出土状況 9号住居竈 9号住居掘り方全景 9号住居遺物出土状況 9号住居貯蔵穴
PL.5	4号住居掘り方全景 4号住居Hr-FA堆積状況 4号住居遺物出土状況 4号住居貯蔵穴周辺遺物出土状況 4号住居焼土炭化物分布範囲	PL.13	9号住居柱穴1断面 9号住居柱穴2断面 10号住居竈遺物出土状況 10号住居竈 11号住居全景
PL.6	4号住居竈遺物出土状況 4号住居竈周辺遺物出土状況 4号住居竈東遺物出土状況 4号住居竈遺物出土状況 4号住居竈遺物出土状況	PL.14	11号住居遺物出土状況 12号住居掘り方全景 12号住居遺物出土状況 12号住居遺物出土状況 12号住居遺物出土状況
PL.7	5号住居全景 5号住居竈遺物出土状況 5号住居竈掘り方全景 5号住居遺物出土状況 5号住居遺物出土状況	PL.15	13号住居全景 13号住居竈遺物出土状況 13号住居竈掘り方断面D-D' 14号住居全景 14号住居東壁断面
PL.8	6号住居全景 6号住居貯蔵穴 6号住居貯蔵穴断面 6号住居炉 6号住居調査風景	PL.16	16号住居遺物出土状況 17・18号住居掘り方全景
PL.9	6号住居C上遺物出土状況 6号住居C上遺物出土状況 6号住居炭化材出土状況 6号住居遺物出土状況 6号住居遺物出土状況	PL.17	17号住居貯蔵穴断面 17号住居掘り方断面A-A' 1号土坑全景 5号土坑全景 6号土坑全景 8号土坑全景 28号土坑全景 47・49号土坑全景

PL.18	48号土坑全景 3号土坑全景 4号土坑全景 7号土坑全景 9号土坑全景 10号土坑全景 11号土坑全景 12号土坑全景	PL.23	42号土坑遺物出土状況 52号土坑遺物出土状況 52号土坑遺物出土状況 1号井戸断面 1号井戸全景
PL.19	13号土坑全景 14号土坑全景 15号土坑全景 16号土坑全景 17号土坑全景 18号土坑全景 19号土坑全景 20号土坑全景	PL.24	1号溝全景 1号溝断面 1号溝全景 2号溝全景 8号溝（1区部分）
PL.20	21号土坑全景 22号土坑全景 23号土坑全景 24号土坑全景 25号土坑全景 29号土坑全景 30号土坑断面 37号土坑全景	PL.25	4号溝全景 4号溝遺物出土状況 4号溝断面B-B' 5号溝全景
PL.21	38号土坑全景 39号土坑全景 44号土坑全景 45号土坑全景 46号土坑全景 2号土坑全景 26号土坑全景 27号土坑全景	PL.26	6号溝全景 7号溝全景 8号溝全景
PL.22	34号土坑全景（人骨） 34号土坑全景（人骨） 34号土坑出土菌 31号土坑全景 41号土坑全景	PL.27	9号溝土層断面 2号畠全景
		PL.28	2号畠断面As-C軽石堆積状況 1号畠全景 2区縁部トレンチ調査風景 1区総社砂層上面 2区総社砂層上面
		PL.29	1～4号住出土遺物
		PL.30	4号住出土遺物
		PL.31	4号住出土遺物
		PL.32	4～6号住出土遺物
		PL.33	6号住出土遺物
		PL.34	6・8～12号住出土遺物
		PL.35	12・13・16・17号住、8・34号土坑出土遺物
		PL.36	34・42・52号土坑、1号井戸出土遺物
		PL.37	1・4号溝出土遺物
		PL.38	4・5・6・8号溝出土遺物
		PL.39	遺構外出土遺物(1)
		PL.40	遺構外出土遺物(2)
		PL.41	遺構外出土遺物(3)
		PL.42	遺構外出土遺物(4)

序章 調査の経過

[1] 調査に至る経緯

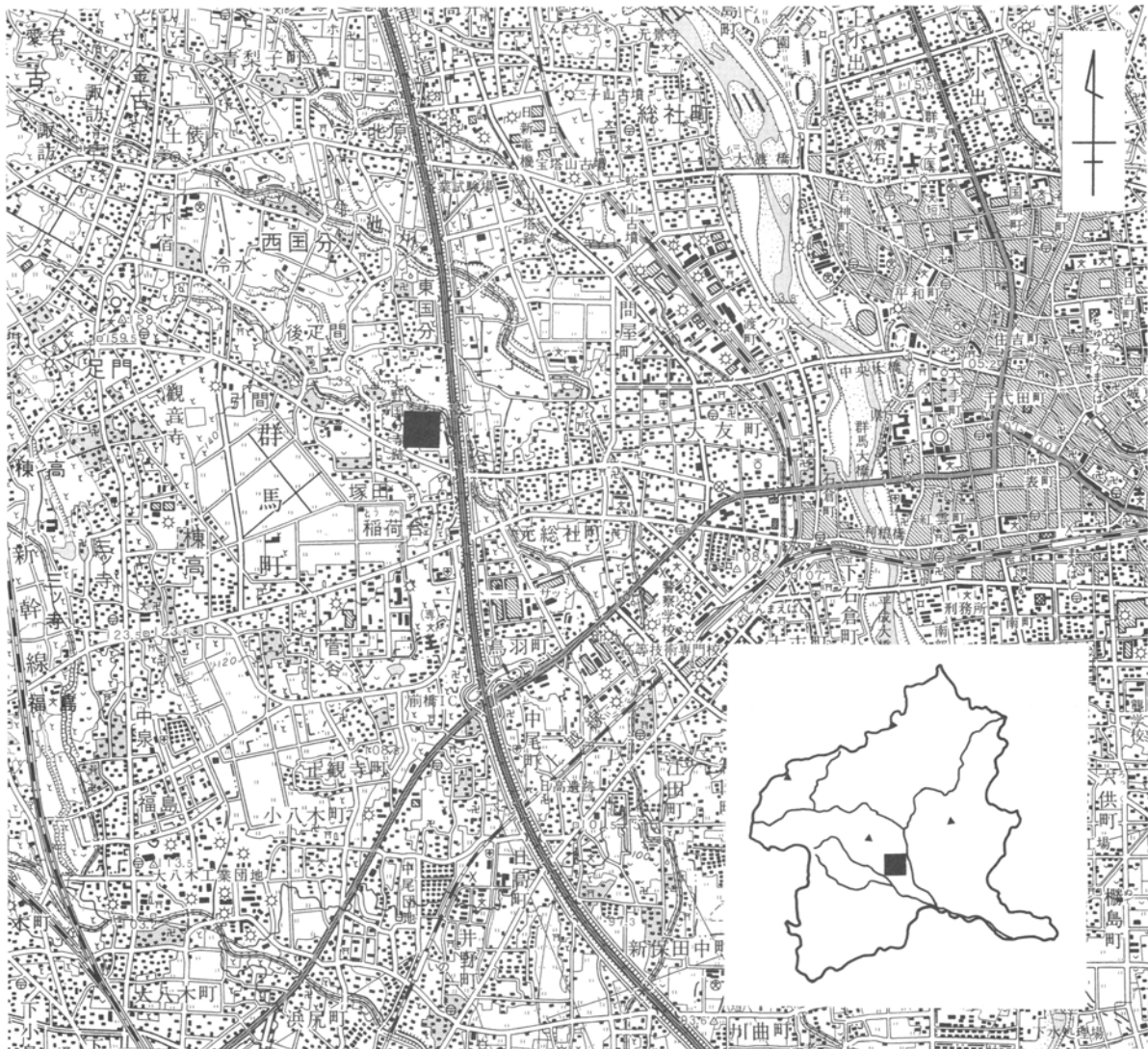
大正15年（1925）に指定の史跡上野国分寺跡は東西約218m、南北約230mの伽藍域を持つ。指定域の大半を群馬県教育委員会が公有地化し、昭和55年（1980）からは金堂及び塔の基壇、南辺築垣などを復元整備した。整備後は多くの見学者がある。

国分寺の正面入り口は南大門である。この門の南には参道の存在を窺わせる南北に伸びる細い地割りも認められた。そこで、見学者を南から導入する具体策が整備事業開始当初から検討されていた。

史跡上野国分寺跡整備委員会での審議などを経

て、群馬県教育委員会は国分寺跡の南に開通予定の広域幹線道路と南大門とを直線で結ぶ道路、「史跡上野国分寺跡進入路（天平の道）」を新設することにした。この道は長さが約360m、染谷川の南は車歩道と並木・駐車場、北は歩道の計画である。

進入路建設予定地全域が周知の埋蔵文化財包蔵地であった。調整の結果、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団を調査主体とし、用地買収が完了した染谷川以南の区域を対象区域として、工事实施に先立つ発掘調査を実施することになった。



第1図 元総社西川遺跡位置図（国土地理院5万分の1「前橋」使用）

[2] 発掘調査の経過

本遺跡は「上野国分寺参道Ⅲ遺跡」という名称で調査を開始した。

本遺跡に隣接する「国府南部遺跡群」（群馬町教育委員会）や、「上野国分寺参道遺跡」（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）において、「群馬県遺跡台帳」に国分寺参道と登録されている細長い短冊状の区割りから道路遺構が検出されなかったことはすでに報告されていたが、本遺跡が南大門とされている地点の真南に位置することや、2遺跡で調査された細長い短冊状の区割りの延長が、本遺跡の調査区にあたることから、道路状遺構の確認をしながら慎重に調査を進めていった。その後、遺跡名称が変更したのは例言の通りである。

調査は、概ね以下のとおりに経過した。

平成12年1月

6日より作業開始。11日より1区(2317㎡)表土掘削開始。道路遺構を想定し慎重に調査。1区西側に隣接する畑への進入路を確保するために調査1区西側2mを残して調査。1区調査終了後に残した進入路部分を調査することにする。遺構確認調査。1～3号住居跡、1号溝を確認。

2月 1区(2317㎡) 1～7号住居跡、4～7号溝調査開始。

2区(3347㎡)表土掘削終了。約2/3は圃場整備時の埋土と確認。台地から谷地への縁部の一部が重機により掘削され、攪乱を受けていたことが判明。8、9号住居調査開始。

3月 1区(2317㎡) 8～13号住居調査開始。

2区(3347㎡) 8号溝調査開始。

空撮。

平成12年4月

1区(2317㎡) 11～17号住居調査開始。総社層上面調査開始。

2区(3347㎡) 8～10号住居調査開始。

5月 1区(2317㎡) 総社層上面調査。西側2mの進入路部分を調査。

2区(3347㎡) 総社層上面調査。9号溝調査。短冊状の区割りからは溝が検出された。調査区内から道路状遺構は確認できなかった。

6月 1区(2317㎡) 総社層上面調査。1区と2区間の道路の下を調査。道路下を第1区とした。

2区(3347㎡) 総社層上面調査。

28日 埋め戻し終了。29日 引き渡し。

[3] 調査の方法

調査対象地区は、染谷川右岸国分寺進入路と駐車場建設予定地あわせて5664㎡である。

- (1) 表土掘削には、調査の効率化を図るために、掘削機械を使用した。
- (2) 調査対象区は、道路によって分断されていたため第2図に示すとおり遺跡南部を1区、北部を2区と呼称した。なお1区と2区を分断していた道路の下も調査し、1区に含めた。
- (3) 国家座標第Ⅸ系を基準に5mグリッドを設定した。東南角の交点下3桁をグリッド名称として呼称した。
- (4) 遺構名称は種別ごとに、通し番号を付した。遺物の取り上げに際し、遺構単位を基本とし、原位置をとどめる物については、その都度番号を付し、図面上に記録した。
- (5) 遺構等の測量には平板測量を用い、1/20縮尺図を原則とした。
- (6) 写真撮影には35mm版の白黒フィルムとカラースライドフィルム及び6×7版白黒フィルムを使用した。また撮影対象によって高所作業車を使用した。
- (7) 出土遺物の取り上げに際しては完形・大破片については図化等を行ったが、小破片については埋没土層ごと一括して取り上げた。



第2図 調査区及び周辺地形図

第1章 遺跡の立地と環境

[1] 位置と地理的環境

(1) 位置

本遺跡は、前橋市中心部から西へ約4kmの前橋市元総社町に所在する。遺跡地は元総社町の中でも西端にあり、群馬町と接している。本遺跡は染谷川を挟んで上野国分僧寺を北約200mに臨む地で、染谷川右岸に本遺跡、左岸に上野国分僧寺が位置する。本遺跡からは、赤城山・榛名山・妙義山の上毛三山をはじめとして、浅間山などの山々を見渡せる。標高は120~124mである。

(2) 地理的環境

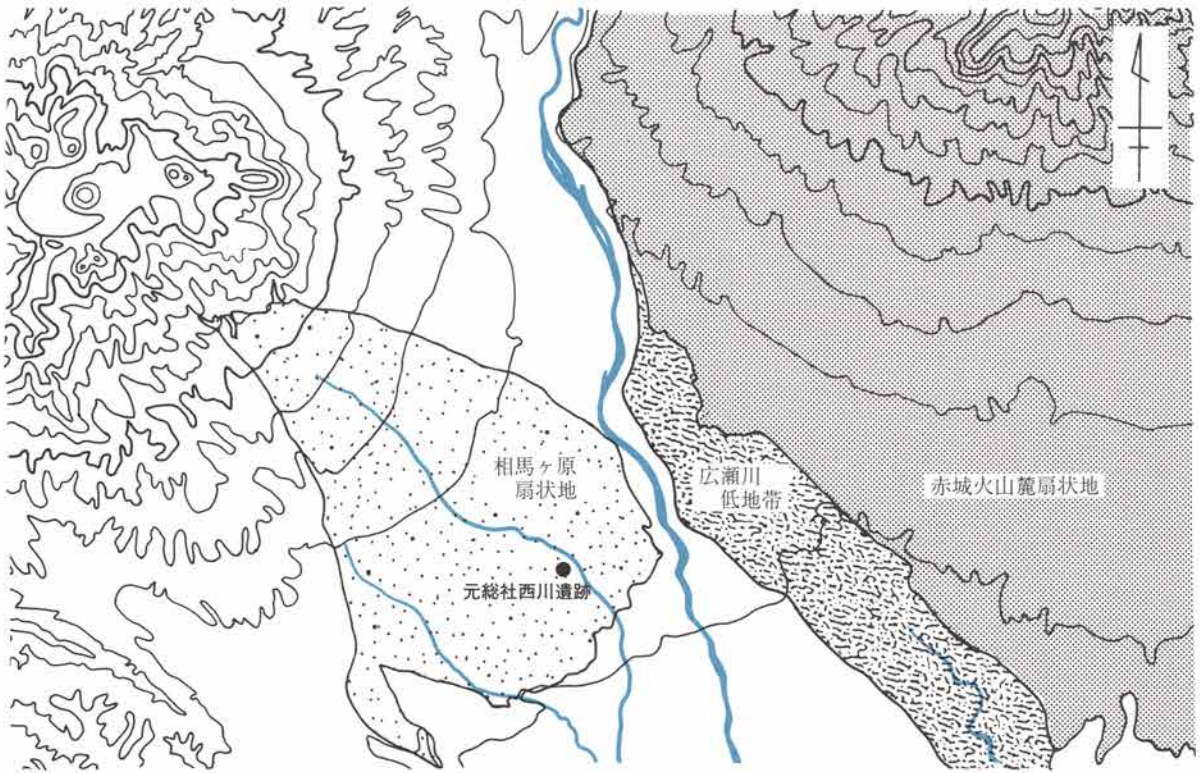
本遺跡は、榛名山東南部山麓に広がる相馬ヶ原扇状地の扇端が前橋台地に移行する付近に当たる。

相馬ヶ原扇状地は、榛名山東南麓に約1.4万年前に形成された扇状地であり、堆積物が、岩塊層と基質層の組み合わせからなることから山体崩落に伴う岩屑などれの堆積物に由来していると考えられている。この堆積物には、粗粒の斜長石と斜方輝石を斑晶として含む灰色の安山岩が多く認められる。その範囲は、標高600m付近を扇頂として、扇端地は標高110m付近に達し、北は渋川市南部から榛東村、吉岡町、箕郷町北東部、群馬町にわたる。この扇状地の傾斜変換線に当たる標高150m前後の地点には各所に湧水点がある。これらの湧水は、榛名山の標高260~280m付近(榛東村)に源を持つ。前橋台地は利根川が赤城山と榛名山の山麓の間から関東平野に流れ出した所に広がる約2万年前に形成された緩斜面の台地である。層位や分布域、含まれる岩石の特徴から、浅間山の山体崩落に由来していることが明らかにされている。前橋台地は、旧利根川の流域である桃の木川と烏川との間に広がる広大な台地面である。台地面は多少の起伏はあるが、ほとんどが平坦地形である。総社砂層は利根川右岸の前橋台地の上位に堆積しており、総社の市街地がのる扇状地を形成している。相馬ヶ原扇状地上には縄文時代のある時期に堆積した砂層が存在するが、この砂層が

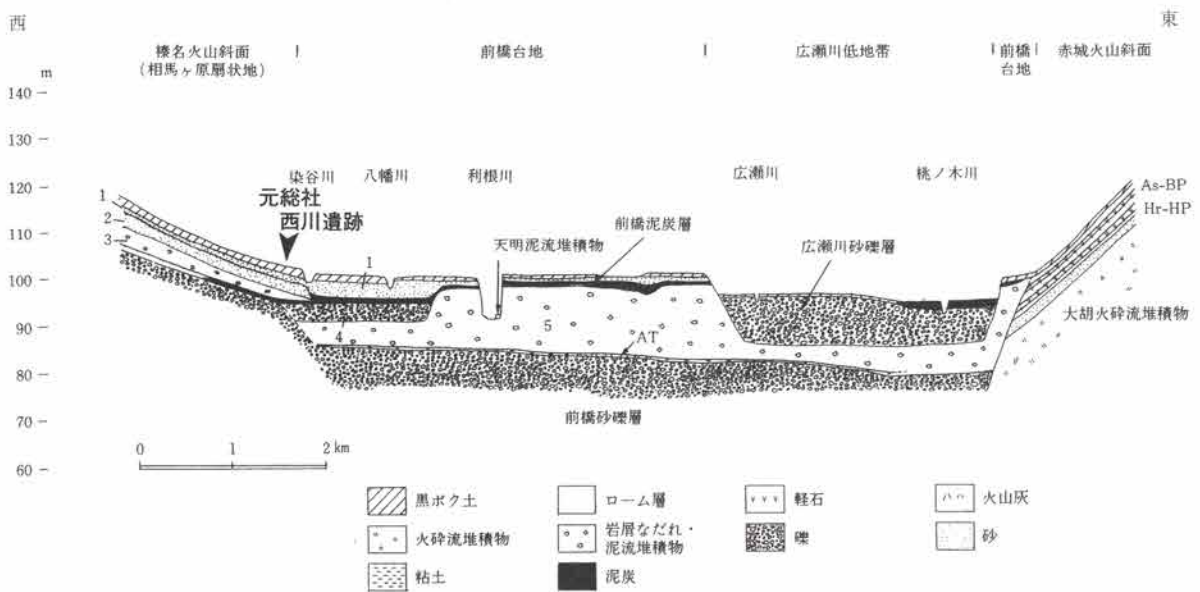
総社砂層と連続している可能性が高く、総社砂層は相馬ヶ原扇状地上も含めて幅広く堆積しているのではないかと考えられている。遺跡地の自然科学分析では、相馬ヶ原扇状地堆積物の上層から総社砂層堆積物に対比される可能性が高い水成層が確認された。遺跡地は、相馬ヶ原扇状地が前橋台地に移行する地域にあたり、本遺跡地までは、総社砂層と思われる砂層が広がりを持つことが明らかになった。相馬ヶ原扇状地堆積物層と総社砂層に対比される層の間には、浅間板鼻黄色軽石(As-Yp、1.3万年~1.4万年前)、浅間総社軽石(As-Sj、1万年前)の示標テフラが検出された。総社砂層に対比される層は、少なくとも浅間総社軽石(As-Sj、1万年前)より新しい。本遺跡の総社砂層に対比される層の上面には、As-A、As-B、As-C、Hr-FAなどを含む黒褐色土が覆っている。土層については、本報告書の第4章自然科学分析と、第2章基本層序を参照していただきたい。

また本遺跡南に接する染谷川は、榛東村に端を發し、前橋市元総社町地区を経て高崎市内で井野川に合流する相馬ヶ原扇状地上を流れる河川である。染谷川は扇状地面を開析し、その両岸に幅数十から数百mの低地(谷底平野)を形成している。本遺跡の地形は、染谷川によって開析された低地と台地からなる。台地部から遺構が検出されたが低地部からは、河川の開析などにより遺構は確認できなかった。台地部は、標高は123m後半から124m前半で、緩やかな東南斜面である。台地上は水はげがよい。染谷川によって開析された低地部は標高120m前後で、台地部と約5mの比高があり、縁部は浸食崖を形成している。遺跡地周辺の低地部は広いところで100mから150m、狭いところで60mの幅がある。調査により低地の上面が削平されていたことが明らかになったが、周辺には部分的な黒土層の存在があり、水田可耕地の可能性がある。

引用・参考文献 1980 『群馬県史 通史編1』
1998 『群馬町誌 資料編1』
2001 『群馬町誌 通史編上』 他



第3図 遺跡周辺の地形分類 (『群馬県史』通史編1 図17、付図2を編図)



1: 総社砂層, 2: 相馬ヶ原扇状地堆積物, 3: 障場岩層なだれ堆積物, 4: 元利根川段丘堆積物, 5: 前橋泥流堆積物。

第4図 遺跡周辺の地層断面図 (『群馬県史』通史編1 付図3を編図)

[2] 歴史的環境

縄文時代 榛名山東南麓の縄文時代の遺跡は、①早期の遺跡は比較的標高の高い火山山麓地域にある。②中期の遺跡は扇状地性段丘面の地域に占める割合が多く、遺跡の数が縄文時代の他の時期に比べて圧倒的に多い。③晩期の遺跡は標高130m付近に偏在する。本遺跡地周辺の該期の遺跡として鳥羽遺跡と国分僧寺・尼寺中間地域（以下、国分寺中間地域）等が挙げられる。本遺跡から北東、約400mの鳥羽遺跡では、縄文後期の竪穴住居跡1棟が検出された。他、縄文中期の土器片と石器が出土した。本遺跡から東、約300mの国分寺中間地域では、縄文中期の竪穴住居跡34棟と竪穴状遺構9基が検出された。本遺跡からは遺構は検出されなかったが、早期をのぞく前期～晩期の遺物が出土した。遺物は中期が圧倒的に多い。現在のところ、本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡は発見されていない。

弥生時代 遺跡地周辺で、弥生時代の集落及び土器片の出土が見られる地域は、現在までの所、標高150m前後以下に限られ、その多くは榛名山東麓を流れる比較的大きな河川の流域に目立つ。周辺の遺跡を見渡すと、後期になって遺構数が爆発的に増加する事に気づく。弥生時代中期後半の中核であった井野川中流域の集落は、ひとつは下流域へ、ひとつは井野川の上流域の支流である複数の小河川にそって高密度に発達する。周辺には井野川の支流に位置する遺跡（日高、正観寺、諸田遺跡など）があるが、規模などから推測して、中核に位置していたのが熊ノ堂遺跡や新保遺跡の集落であったと思われる。

本遺跡からは、樽式土器など弥生時代後期の遺物が出土した。遺物は、古墳時代初頭の竪穴住居跡から出土したものが多く、土器には弥生時代の系譜が濃厚に残されている。

古墳時代 榛名山東南麓の古墳時代前期の遺跡は、標高125m以下の比較的低い地域に見られる。それらの遺跡地周辺には、いずれも後背湿地や谷地が発達しており、水田可耕地が隣接していたことがわかっている。また、それらの大半は弥生時代の後期から継続的に営まれており、弥生時代からの伝統的な集落と考えられている。古墳時代前期のこの地域（井野川流域）は、伝統的な樽式土器が急速に姿を消し、外来系統の土器に取って代わられてゆく特徴がある。その動きは群馬県内でも最も早い時期に位置づけられており、東海西部系の典型的な土器が多くみられる。本遺跡では、東海西部系の外来土器と在地系の土器が共伴する住居など、古墳時代初頭の竪穴住居跡が4棟とAs-C下の畠が検出された。該期の周辺遺跡には、新保遺跡、熊ノ堂遺跡、保渡田荒神前遺跡、寺屋敷I遺跡、保渡田VII遺跡、国分寺中間地域、鳥羽遺跡などがあげられる。このうち最も近い国分寺中間地域では、前期の竪穴住居跡25棟、方形周溝墓1基等が検出された。

古墳時代中期から後期になると、周辺には群馬県内を代表する遺跡が分布する。三ツ寺I遺跡の居館跡は、全国で初めて発見された古墳時代首長層の館である。周辺で発見されたHr-FA下水田、1000棟を超える竪穴住居跡、葉師塚、八幡塚、二子山古墳の三つの前方後円墳を擁する保渡田古墳群等との関連が指摘され、5世紀中頃から6世紀、高度な技術力と大量の労働力を背景とした巨大な力が存在したことを明らかにした。また、本遺跡地北東に位置する遠見山古墳、王山古墳、総社二子山古墳、愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳を擁する総社古墳群は、5世紀から7世紀にかけて築造された古墳群で、上野地域と中央政権との関係を知る上で重要な意味を持つ。宝塔山古墳の南西に近接する白鳳期に建立された山王廃寺は、7世紀から少なくとも11世紀まで続いた「放光寺」であると考えられている。7世紀後半は宝塔山古墳、蛇穴山古墳が築造された時期で、共通の石材加工技術の存在が想定されることから、並行して造営が進められていたことが指摘され

ている。本遺跡ではHr-FAに埋没した竪穴住居跡1棟と6世紀後半～7世紀前半の竪穴住居跡が1棟検出された。

奈良・平安時代 本遺跡北約200mには、上野国分寺が所在する。上野国分寺の東約500mには尼寺、東へ約1kmには上野国府推定地、南に約1.5kmには東山道推定地があり、遺跡地周辺がこの時代の上野国、政治・文化・宗教の中枢を担った地であったことが伺える。国分寺は、天平13年(741年)に、聖武天皇により国ごとに鎮護国家のために金光明四天王護国之寺(僧寺)法華滅罪之寺(尼寺)の建立が命じられたことに始まる。『続日本紀』には天平勝宝元(794)年に碓氷郡の石上郡君諸弟と勢多郡の上毛野臣足人が、国分寺に知識物を献じたことにより外従五位下を授けられたことが記されており、上野国分寺はこのころに一応の姿が整ったとみられている。国分僧寺跡は、1980年から史跡の整備保存に伴って県教委が発掘調査し、伽藍域と主要建物の様子が明らかになった。周辺では、国分寺中間地域、鳥羽遺跡、国府南部遺跡群、国分寺参道遺跡、塚田村東遺跡などが調査され、築垣で囲まれた伽藍域とその周辺の様子が、研究されている。また、この地域の遺跡のほとんどすべてに、この時代の遺構が検出されるほど、該期の遺跡は密集している。周辺遺跡からは瓦、硯、銅椀など、国分寺や国府に近いといった立地を示す遺物が数多く出土している。本遺跡は、染谷川を挟んで南正面に位置するが、国分寺造営前後に位置づけられる竪穴住居跡や溝、平安時代の竪穴住居跡などが検出された。国分僧寺南大門から南に延びる参道の検出を予見する説もあったが、道路状の遺構は検出されなかった。

鎌倉時代以降 平安時代の末期、国衙役人の力が衰えたとはいえ、国府周辺は、地方の中心都市であり、軍事的・政治的に重要な位置に置かれていた。周辺遺跡では鎌倉時代を限定する調査例が少なく、大半が室町時代以降のものである。

本遺跡の調査第2区には、幅約10mの短冊状に直線に延びた区割りがあたっていた。染谷川を挟み、南大門から延びるこの区割りは『群馬県遺跡台帳』に(伝)国分僧寺参道と登録されている。この区割りは、『国府南部遺跡群』で、調査されたが、参道は検出されず、区割りからは中世の大溝が検出された。その後、『上野国分寺参道遺跡』でも区割りの当たる地点が調査されたが、やはり中世の溝が検出された。このような大規模な中世の溝は、この地域の歴史に深く関わると思われるが、今のところ多くのことは判っていない。

室町時代に入ると、上野守護は上杉氏、守護代は主に長尾氏で戦国時代まで続く。長尾氏(総社長尾)は、永享元年(1429年)に国府跡に蒼海城を置き、国府は完全に姿を消す。やがて戦国時代にはいと、強力な戦国大名の成長しなかった上野国は、北条・武田・上杉の戦国大名の争奪の場となり、100余年各地で戦乱が続いた。この間、西上州では箕輪城を本城とする長野氏が勢力を伸ばしたが、遺跡地周辺の菅谷城、蒼海城は長野氏にとって重要な砦であった。長野氏は最後まで上杉管領体制を護り抜いて北条、武田の両雄に対抗するが、武田信玄により滅亡させられる。その後、この地は武田、織田、北条、徳川の重臣が封ぜられる。

引用・参考文献

- 1971 『前橋市史』
- 1984・1991 『熊ノ堂遺跡』(助群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 1986～1992 『上野国分僧寺・尼寺中間地域1)～(8)』(助群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 1986他 『鳥羽遺跡』(助群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 1986他 『新保遺跡』(助群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 1988 『保渡田荒神前遺跡』(群馬町教育委員会)
- 1990 『群馬県史通史編1』
- 1991 『寺屋敷I遺跡』(群馬町教育委員会)
- 1994 『町内遺跡II』(群馬町教育委員会)
- 1997 『国府南部遺跡群発掘調査概報』(群馬町教育委員会)
- 1997 『上野国分寺参道遺跡』(前橋市埋蔵文化財発掘調査団)
- 1998 『群馬町誌資料編1』
- 前沢和之(1999)『上野国分寺跡』『群馬県遺跡大辞典』(助群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 2001 『群馬町誌通史編上』
- *国分寺中間地域は1986～1992『上野国分僧寺・尼寺中間地域』を指す。



第5図 周辺遺跡分布図1 (国土地理院1:25,000「前橋・渋川」使用)

大八木

開野

新田

新田

第 1 表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	時代	主な文献など	No	遺跡名	時代	主な文献など
1	元総社西川遺跡		本報告書	28	熊野谷遺跡	縄文中～平安	『熊野谷遺跡』 前橋市埋文調査団 1989
2	上野国分僧寺	奈良～	『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』 県教委 1989	29	柳原遺跡	奈良・平安	『清里南部遺跡群Ⅲ』 前橋市教育委員会 1981
3	上野国分尼寺	奈良～	『上野国分尼寺跡調査報告書』 県教委 1969・1970	30	北原遺跡	縄文中・弥生・ 古墳後～平安	『北原遺跡』 群馬町教育委員会 1986
4	上野国府推定域	奈良～	『閑泉樋南遺跡』 前橋市教育委員会 1983など	31	産業道路東遺跡	縄文前～中	『前橋史市』 前橋市教育委員会 1971
5	推定東山道	奈良～	『推定東山道』 群馬町教育委員会 1986など	32	産業道路西遺跡	縄文前～中	『前橋史市』 前橋市教育委員会 1971
6	上野国分寺参道遺跡	古墳～平安	『上野国分寺参道遺跡』 前橋市埋文調査団 1997	33	元総社寺田遺跡	縄文～中・近世	『元総社寺田遺跡』Ⅰ～Ⅲ 県埋文事業団 1993・1994・1996
7	国府南部遺跡群	古墳後～平安	『国府南部遺跡群』 群馬町教育委員会 1997	34	清里南部遺跡群 (下東西遺跡)	古墳・奈良・平 安	『清里南部遺跡群Ⅲ』 前橋市教育委員会 1986
8	上野国分僧寺尼寺 中間地域	縄文中～中・近 世	『上野国分僧寺尼寺中間地域1)～ (8)』県埋文事業団 1987～1992	35	柿木遺跡	縄文～中・近世	『柿木遺跡』 前橋市教育委員会 1984
9	鳥羽遺跡	古墳～中近世	『鳥羽遺跡』 県埋文事業団 1986・1988・1990・1992	36	日高遺跡	弥生～平安	『日高遺跡』 県埋文事業団 1982
10	山王廃寺	白鳳～平安	『山王廃寺跡発掘調査概報』 前橋市教育委員会 1976～1982	37	大屋敷遺跡群	縄文中・古墳前 ～中世	『大屋敷遺跡』Ⅰ～Ⅳ 前橋市埋文調査団 1993～1996
11	北谷遺跡	古墳?	『平成13年度調査遺跡発表会』 県埋文事業団 2001	38	草作遺跡	縄文～中・近世	『草作遺跡』 前橋市埋文調査団 1985
12	国分境遺跡	古墳後～平安	『国分境遺跡』 県埋文事業団 1990	39	弥勒遺跡	古墳・奈良・平 安	『弥勒遺跡』 前橋市埋文調査団 1990
13	国分境Ⅱ遺跡	古墳後～奈良	『国分境Ⅱ遺跡』 前橋市教育委員会 1992	40	塚田村東遺跡	平安	『塚田村東遺跡調査概報』 群馬町教育委員会 1986
14	国分境Ⅲ遺跡	古墳後～平安 縄文・中世	『国分境Ⅲ遺跡』 群馬町教育委員会 1993	41	北寝保窪古墳	古墳後	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
15	国分境Ⅳ遺跡	古墳後～平安・ 縄文中～	『国分境Ⅳ遺跡』 群馬町教育委員会 1998	42	下東西遺跡	縄文前～中世	『下東西遺跡』 県埋文事業団 1987
16	遠見山古墳	古墳中	『群馬総社古墳群』 観光資源保護財団 1977	43	下東西清水上遺跡	縄文～中・近世	『下東西清水上遺跡』 県埋文事業団 1998
17	王山古墳	古墳後	『群馬総社古墳群』 観光資源保護財団 1977	44	中尾遺跡	古墳～中世	『中尾遺跡』 県埋文事業団 1983・1984
18	総社二子山古墳	古墳後	『群馬総社古墳群』 観光資源保護財団 1977	45	西国分新田遺跡	古墳～中世	『冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金 古北十三町遺跡』県埋文事業団 1998
19	愛宕山古墳	古墳後	『群馬総社古墳群』 観光資源保護財団 1977	46	冷水村東遺跡	古墳～中世	『冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金 古北十三町遺跡』県埋文事業団 1998
20	宝塔山古墳	古墳終	『群馬総社古墳群』 観光資源保護財団 1977	47	金古北十三町遺跡	奈良・平安・中・ 近世	『冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金 古北十三町遺跡』県埋文事業団 1998
21	蛇穴山古墳	古墳終	『群馬総社古墳群』 観光資源保護財団 1977	48	中島遺跡	奈良・平安・中世	『中島遺跡発掘調査概報』 前橋市教育委員会 1980
22	西国分遺跡群	縄文後・弥生・ 古墳中～中世	『西国分遺跡群』 群馬町教育委員会 1990	49	薬師前遺跡	縄文～中・近世	『富田遺跡群・西大室遺跡・清里南部 遺跡群』前橋市教育委員会 1980
23	西国分六ッ制遺跡	古墳後～中世	『西国分六ッ制遺跡』 群馬町教育委員会 1997	50	菅谷遺跡	弥生	
24	後正間遺跡	古墳中～平安	『後正間Ⅰ遺跡』 群馬町教育委員会 1986	51	吹屋遺跡	縄文～中世	『元島名B・吹屋遺跡』 県埋文事業団 1982
25	諏訪西遺跡	古墳後～平安・ 縄文・中世	『諏訪西遺跡』 群馬町教育委員会 1995	52	菅谷城跡	中世	『群馬県古城址址の研究』 山崎一 1971
26	小池遺跡	古墳後～平安・ 縄文・中世	群馬町教育委員会	53	金尾城	中世	『群馬県古城址址の研究』 山崎一 1971
27	西三社免遺跡	古墳中～平安	『西三蛇免遺跡』 群馬町教育委員会 1990	54	上野国分二寺中間 地域	奈良・平安	『上野国分尼寺跡・上野国分二寺中間 地域』県埋文事業団・県教委 1993



第6図 周辺遺跡分布図2 (群馬県教育委員会「西国分六川割遺跡」付図を編図)



この写真は、米軍撮影の空中写真を国土地理院の承認を得て掲載した。

第2章 基本層序

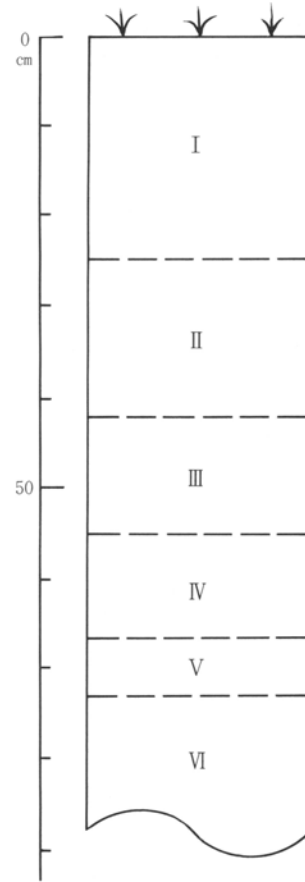
発掘調査で確認された遺構の時期を検討する上で、それがどのような土層の面で確認されたかが重要な手がかりとなる。その点で本遺跡の周辺には浅間山と榛名山の火山活動による噴出物の堆積が見られ、地学と考古学の両者の研究によって、それらの形成された時期がほぼ明らかにされている。

ここでは本文中の多数の断面図相互間の関連を理解しやすくするために、調査によって確認された土層を第Ⅰ層：現表土、第Ⅱ層：浅間B軽石（As-B）混土層、第Ⅲ層：榛名二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA）混土層、第Ⅳ層：浅間C軽石（As-C）混土層、第Ⅴ層：暗灰～暗褐色層（地山）、Ⅵ層：総社砂層に対比される層（地山）⁽¹⁾に大別して模式図に示しておく。

第Ⅲ層と第Ⅳ層は分層が困難で、第Ⅲ層中に第Ⅳ層中のAs-C軽石が混入したり、逆に第Ⅳ層中に第Ⅲ層中のHr-FAが混入したりしており、調査時にはⅢ層とⅣ層をあわせて、榛名二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA）、浅間C軽石（As-C）混土層として扱った。Ⅲ～Ⅴ層は、暗灰～暗褐色土と色調が似かよっている。遺構のほとんどがⅢ層～Ⅴ層を掘り込み、Ⅲ層～Ⅴ層を起源とする土が遺構の覆土となるため、プラン確認は困難を極めた。第Ⅵ層まで掘り込まれた遺構は、遺構の検出が比較的容易であった。

なお、本遺跡の2区（染谷川沿いの低地）では相馬ヶ原扇状地堆積層⁽²⁾までトレンチを入れたが、染谷川の開析と、攪乱によってⅠ～Ⅳ層までが削られていた。谷地のトレンチに関しては、ここで述べる地山層より下層であるので説明を省く。詳しくは、自然科学分析「土層とテフラ」（古環境研究所）を参照していただきたい。

注：(1)(2)総社砂層に対比すると思われる層、相馬ヶ原扇状地堆積層ともに地山の中に存在する層。詳しくは第1章[1]位置と地理的環境と第4章[1]土層とテフラの分析（古環境研究所）をあわせて参照していただきたい。



第7図 元総社西川遺跡基本土層図

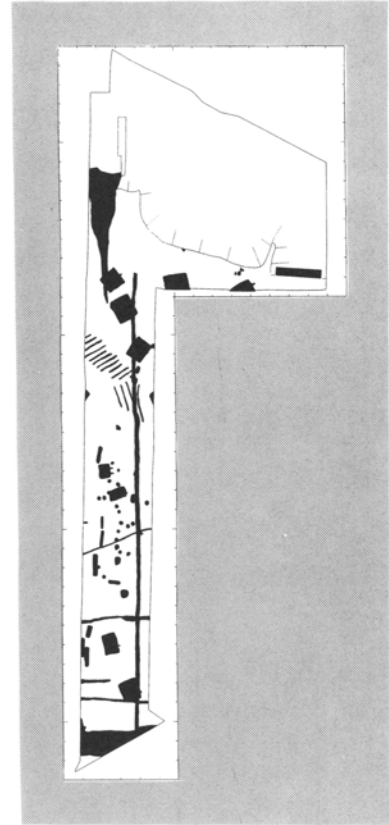
第7図 元総社西川遺跡基本土層図

- 第Ⅰ層 表土。耕作土。
- 第Ⅱ層 浅間B軽石（As-B）混土層。暗灰～暗褐色土。層厚地点により異なるが、ここでは17cmである。
- 第Ⅲ層 榛名二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA）混土層。暗灰～暗褐色土。層厚地点により異なるが、ここでは12cmである。
- 第Ⅳ層 浅間C軽石（As-C）混土層。暗灰～暗褐色土。層厚地点により異なるが、ここでは11cmである。
- 第Ⅴ層 わずかに浅間C軽石より小粒な白色軽石を含む。暗灰～暗褐色土。層厚地点により異なるが、ここでは7cmである。（地山）
- 第Ⅵ層 総社砂層に対比される層。（地山）

引用・参考文献 『史跡上野国分寺』群馬県教育委員会 1988

第3章 検出された遺構・遺物

[1] 竪穴住居



竪穴住居の概要

調査により古墳時代前期4棟、後期2棟、8世紀前半から中葉7棟、10世紀1棟、時期不明3棟、計17棟の竪穴住居が検出された。

弥生時代後期の在地色の強い土器と東海西部系の土器とが共伴する11・12号住居、東海西部系の土器を主要器種とする6・8号住居は、伝統的な規範と断絶、他地域との交流、社会的な画期を物語る重要な遺構である。出土土器については、まとめ「元総社西川遺跡出土の古墳時代前期の土器について」(大木紳一郎)を参照していただきたい。

奈良・平安時代、本遺跡北約200mには上野国分僧寺が存在していた。多くの人々が往来する巨大施設の目と鼻の先で、8世紀後半から9世紀までの竪穴住居が検出されなかったことは何を意味するのであろうか? 詳しくは、まとめ「上野国分僧寺の集落変遷」を参照していただきたい。

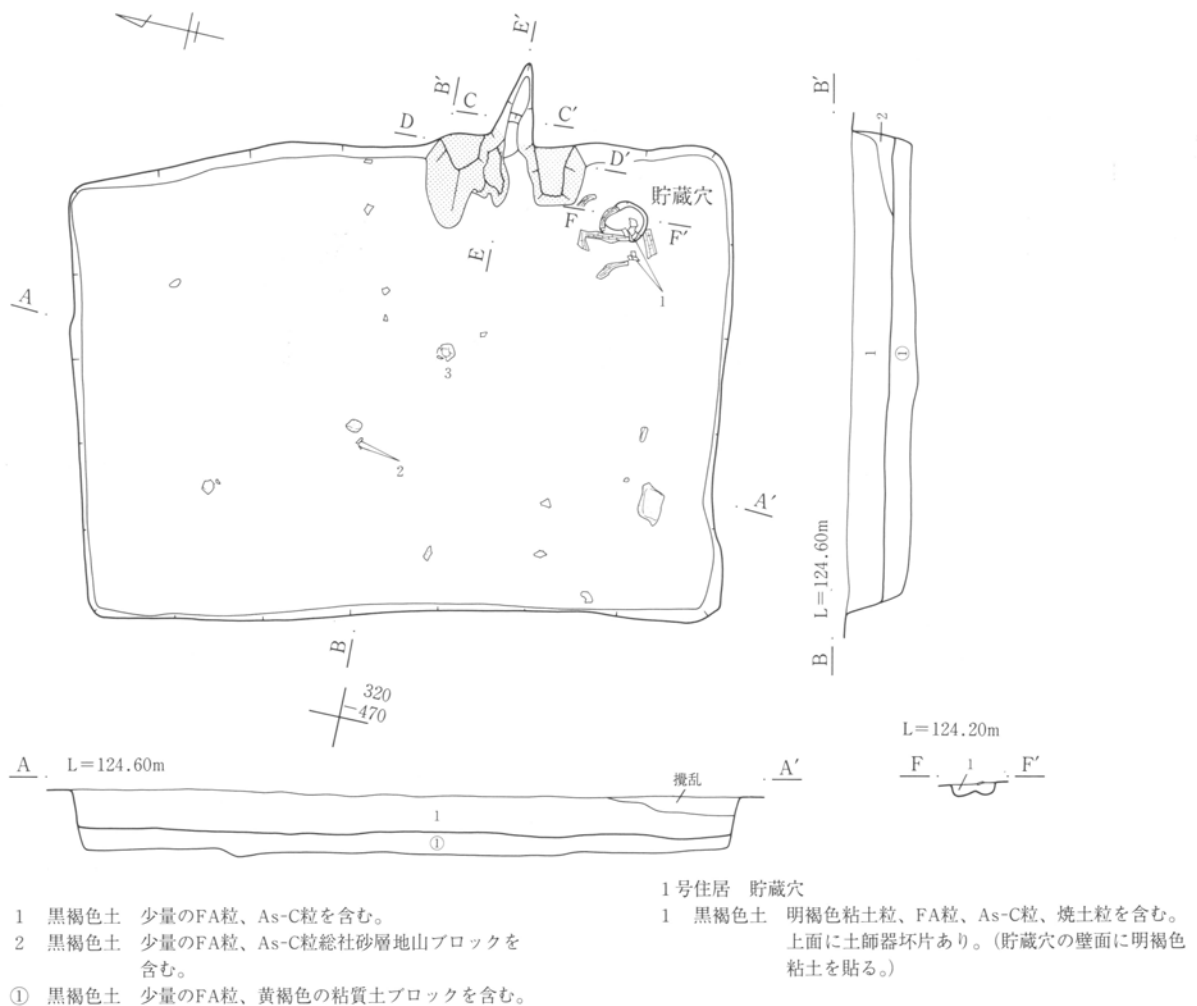
第8図 竪穴住居全体図

竪穴住居遺構・遺物

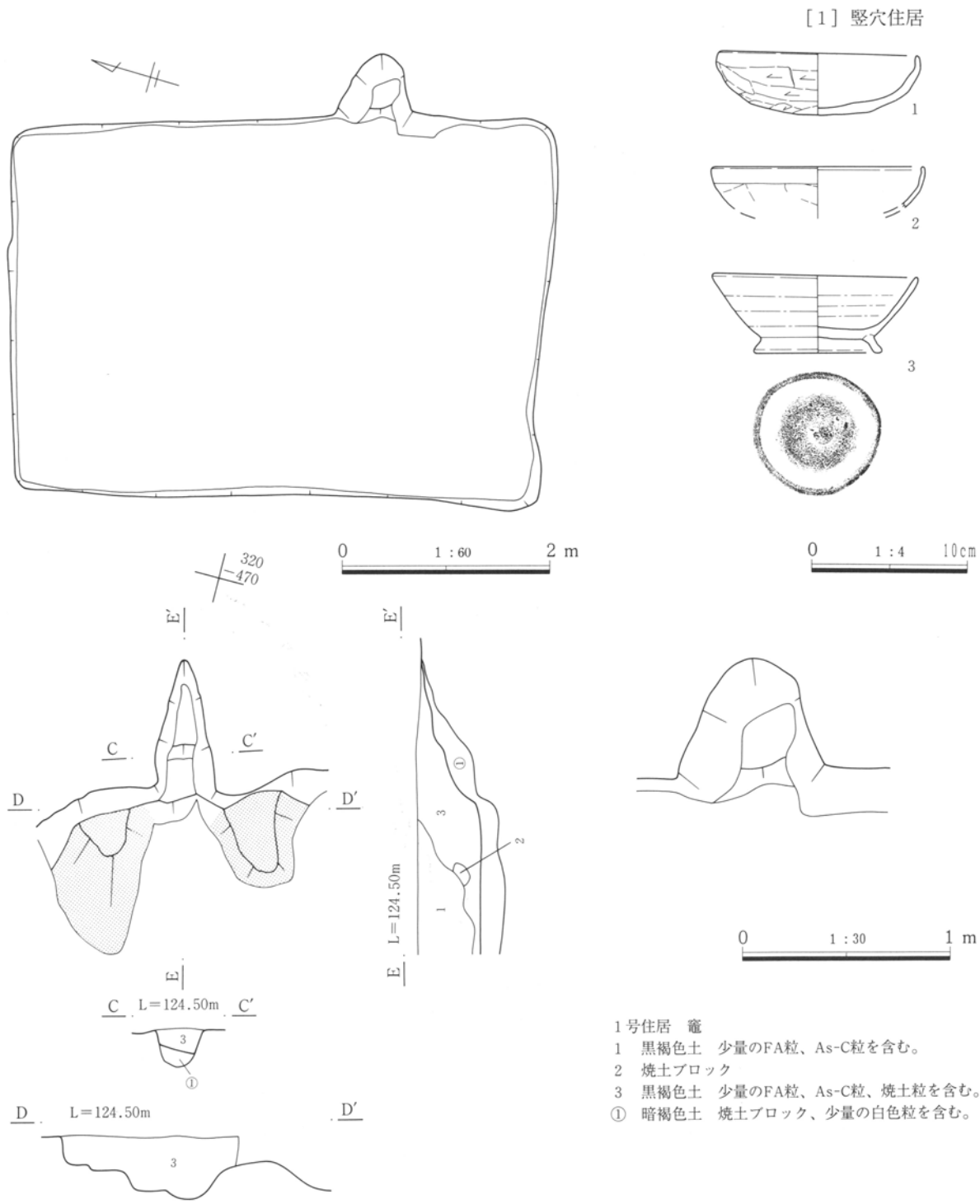
1号住居 (第9・10図、PL2・29)

位置 X=315~320, Y=465 **方位** N-75°-E **形状** 長軸5.1m・短軸3.7mで長軸を南北にもつ長方形である。**面積** 16.5m² **壁高** 28cm **重複** なし **覆土** Hr-FA、As-Cを含む。**床面** 掘り方面から厚さ15cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面はほぼ平坦である。床面は凹凸なく、平坦で整っている。**壁溝** なし **柱穴** なし **貯蔵穴** 住居の南東隅に設置。深さ9cm・長軸38cm、短軸30cmの楕円形を呈す。貯蔵穴周辺の床面からは炭化物が出土。

竈 東壁の南側に設置。燃烧部は幅26cm、奥行き50cmで、壁内に粘質土で固めた袖部を検出。一度掘ってから袖部をあらためて粘質土で構築。燃烧部は、壁内にある。煙道は幅20cm、奥行き55cmで緩やかに立ち上がる。**遺物** 土師器の坏、須恵器の碗が出土した。覆土中に国分寺瓦片が出土。**所見** 出土遺物から8世紀前葉から中葉と考えられる。



第9図 1号住居



[1] 竪穴住居

- 1号住居 竈
- 1 黒褐色土 少量のFA粒、As-C粒を含む。
 - 2 焼土ブロック
 - 3 黒褐色土 少量のFA粒、As-C粒、焼土粒を含む。
 - ① 暗褐色土 焼土ブロック、少量の白色粒を含む。

第10図 1号住居掘り方、竈、出土遺物

2号住居 (第11・12図、PL 3・29)

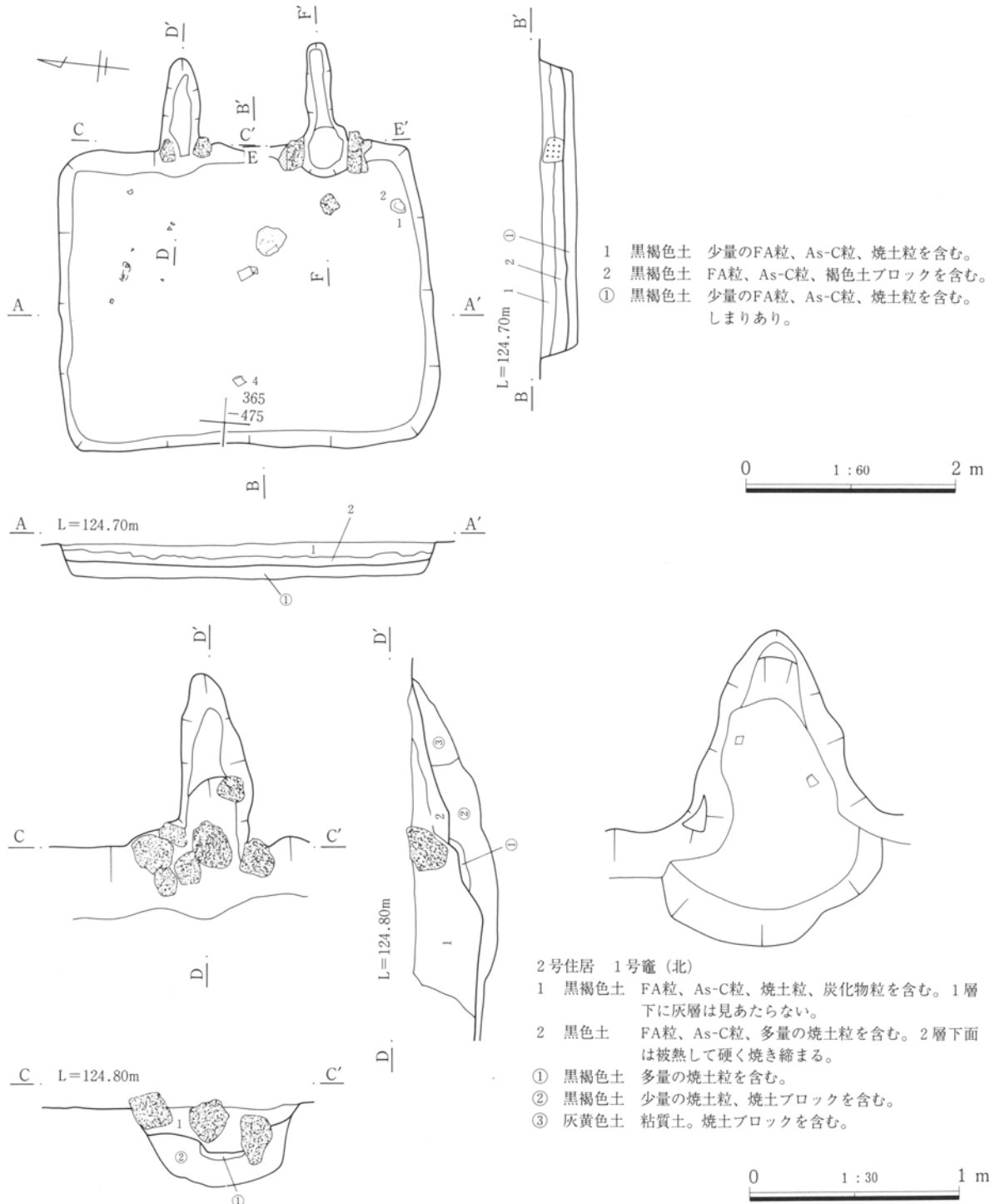
位置 X=360~365, Y=465 **方位** N-85°-E **形状** 長軸3.5m・短軸2.8mで長軸を東西にもつ長方形。**面積** 9.5㎡ **壁高** 19cm **重複** なし **覆土** Hr-FA、As-Cを含む。**床面** 掘り方面から厚さ12cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面はほぼ平坦である。床面は比較的平坦で整って

る。**壁溝** なし **柱穴** なし **貯蔵穴** なし **竈** 東壁の北側(1号竈)と南側(2号竈)の2カ所に確認。2号竈は燃焼部の幅42cm、奥行き40cmで、灰層が確認された。袖部は補強用の直方体に切り出された凝灰岩が検出された。竈構築材として用いられたと思われる凝灰岩が2号竈の西から出土。煙道は

第3章 検出された遺構・遺物

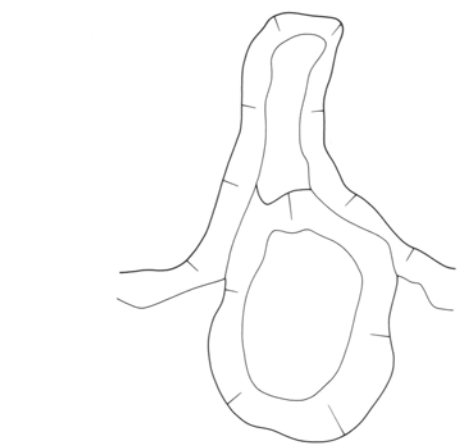
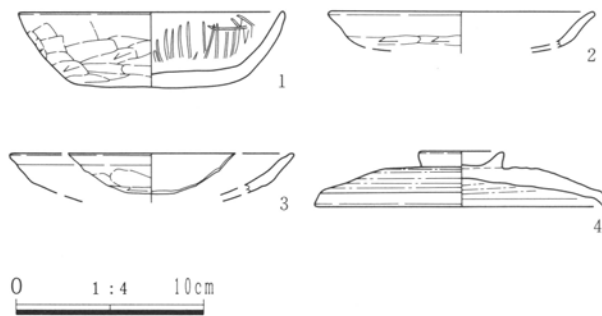
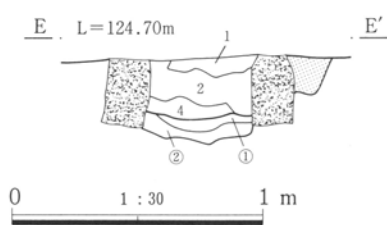
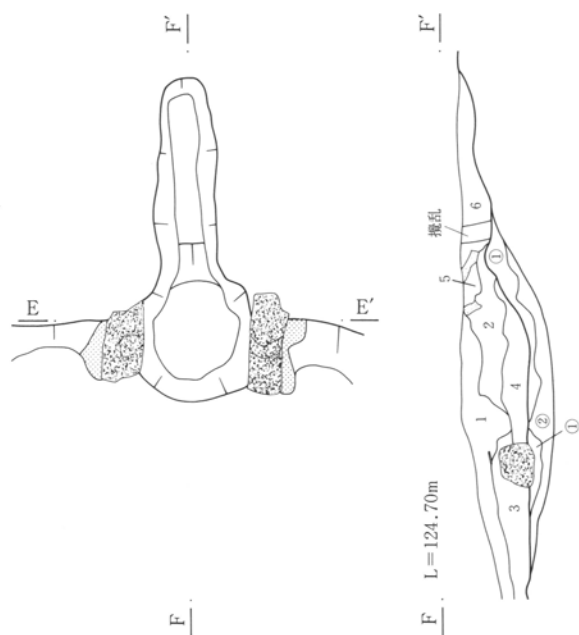
幅26cm、奥行き90cmで検出された。立ち上がりは非常に緩やかでほぼ水平に見える。煙道内部の横壁は約10cmの厚さで赤く焼土化していた。一方、1号竈は灰層が確認できなかった。竈構築に使用したと思われる凝灰岩の大部分が竈燃焼部に崩れていた。また、煙道部下面は被熱し、赤く焼き締まっていた。

遺物 土師器の坏、甕の破片、須恵器の蓋が出土。覆土に国分寺瓦が混入。**所見** 出土遺物から8世紀中葉と考えられる。西側の竈は凝灰岩が竈内部に崩れていたことや灰層が検出されなかったこと等から人為的に壊された可能性がある。



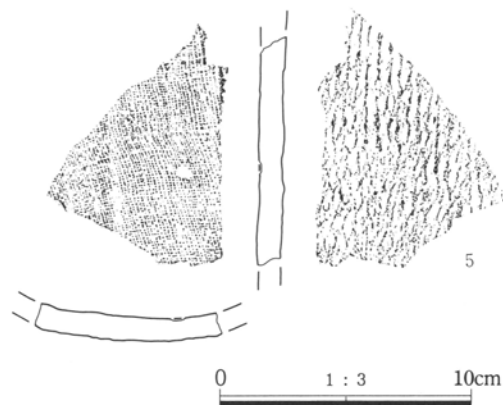
第11図 2号住居、1号竈

[1] 竪穴住居



2号住居 2号竈 (南)

- 1 黒褐色土 多量のFA粒、As-C粒、少量の焼土粒、被熱粘土粒、炭化物粒を含む。
- 2 黒褐色土 少量のFA粒、As-C粒、多量の焼土粒、凝灰岩ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 多量のFA粒、As-C粒、多量の焼土粒、被熱粘土粒、炭化物粒を含む。
- 4 暗褐色土 少量のFA粒、As-C粒、多量の焼土粒、炭化物粒を含む。4層下、7層上に灰層あり。
- 5 黒褐色土 多量の焼土粒、凝灰岩、多量の灰色粘土、少量の被熱粘土粒を含む。
- 6 黒褐色土 多量の焼土粒、少量の炭化物粒を含む。
- ① 焼土層 におい黄色粘土を含む。
- ② 暗褐色土 焼土ブロック、少量の白色粒を含む。



第12図 2号住居 2号竈、出土遺物

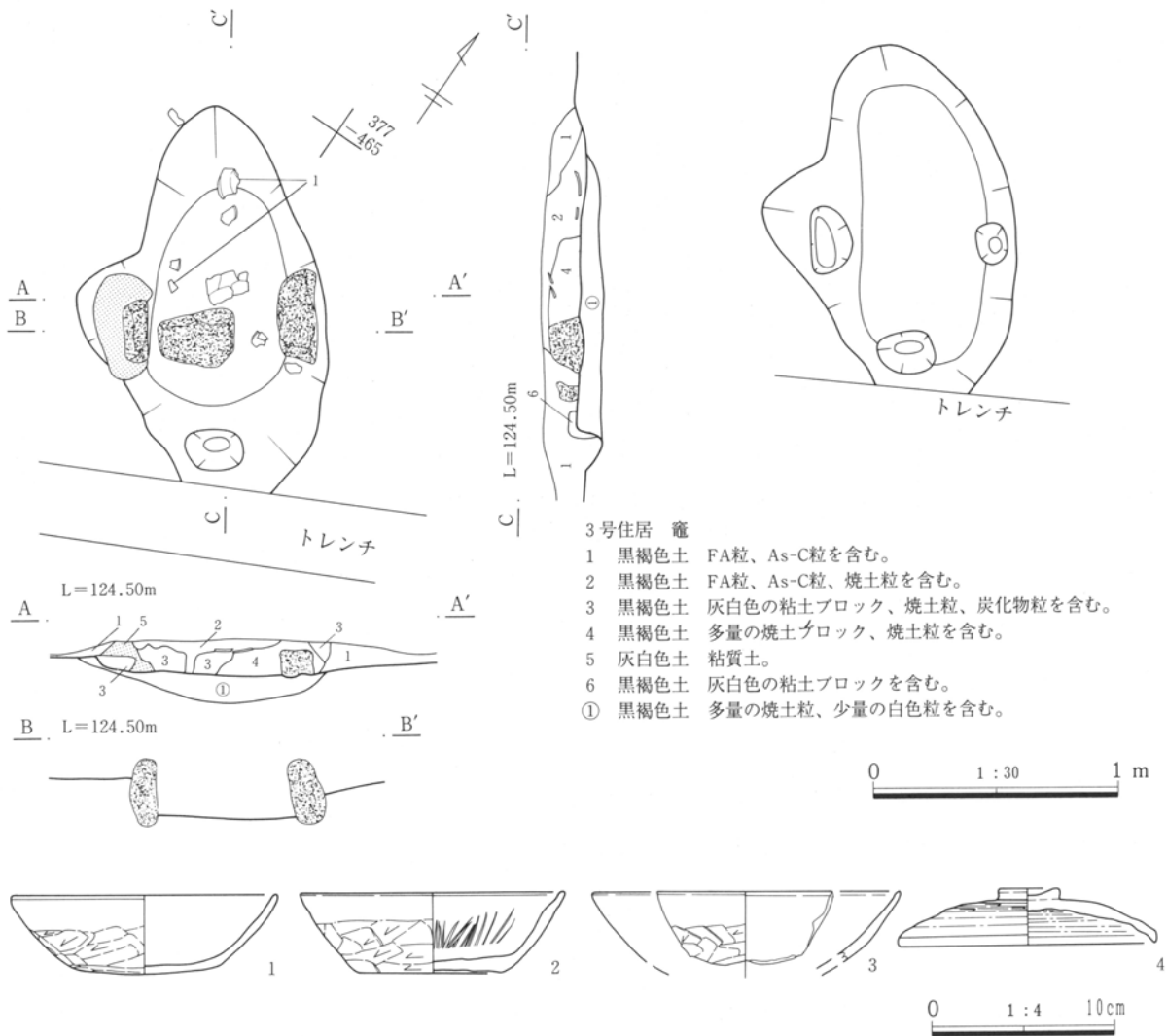
3号住居 (第13図、PL 4・29)

位置 X=375~385, Y=460~465 **方位** 測定不可能。
形状 竈のみの確認。 **面積** 測定不可能。
壁高 測定不可能。 **重複** なし **覆土** Hr-FA、As-Cを含む。
床面 確認できなかった。 **壁溝** 確認できなかった。
柱穴 確認できなかった。 **貯蔵穴** 確認できなかった。
竈 北壁に設置。灰白色の粘土層で竈を構築。西袖部には補強材として

使用した凝灰岩が出土した。

遺物 土師器の坏、甕の破片、須恵器の蓋が出土。

所見 竈の検出状況から北壁に設置されたものと判断した。出土遺物から8世紀中葉と考えられる。焚口は検出された凝灰岩より南で、燃焼部内から検出された小さな落ち込みが支脚を設置した跡だと思われる。



第13図 3号住居竈、出土遺物

4号住居 (第14~18図、PL 4・5・6・29・30・31・32)

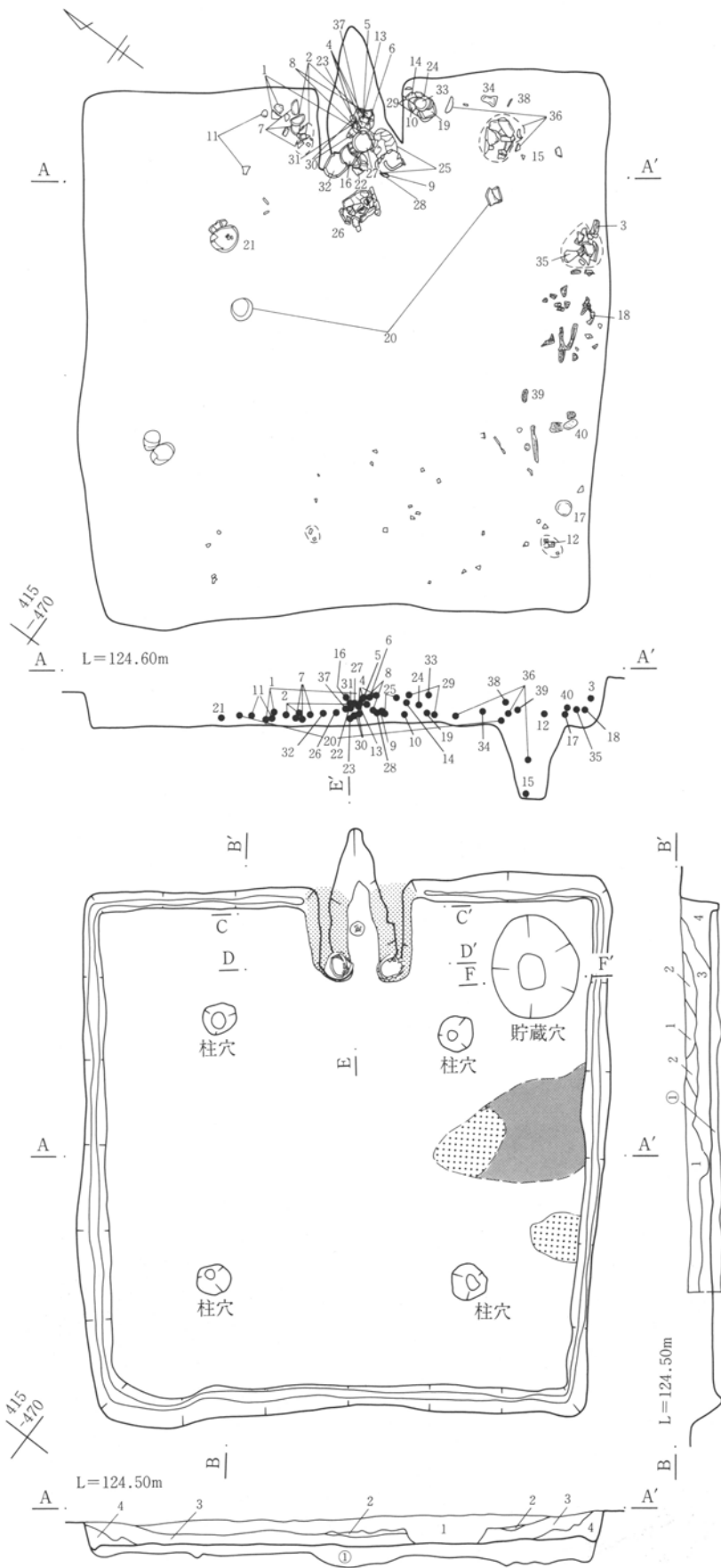
位置 X=410~415, Y=460~465 **方位** N-51°-E
形状 長軸4.8m・短軸4.7mのほぼ正方形。 **面積** 17.4m² **壁高** 20cm **重複** なし **覆土** Hr-FAが住居の床面に密着してレンズ状に10~15cm堆積。壁面付近には Hr-FA を含まない黒褐色土層が三角堆積。 **床面** 掘り方面から厚さ約10cmの埋め土を施して平坦な床面を造る。掘り方面は中央部が土坑状に深く掘り込まれる以外は、ほぼ平坦である。住居南東部の床面直上から炭化物と焼土が出土するが、全体的に焼けた跡はない。床面では確認できなかったが、掘り方面で、北西壁から2条南西壁から1条、壁に直交する浅い溝を確認。床面から掘り込まれた間仕切り溝の可能性が高い。床面は堅く締ま

っていた。

壁溝 幅10cm前後、深さ約8cmで全周し、レベルは一定せず、凹凸が多い。 **柱穴** 床面では確認できなかったが掘り方面調査時に床面から掘り込まれた柱穴を住居のほぼ対角線上に4個を確認した。4個とも床面から約20cmの深さ。 **貯蔵穴** 住居の東隅部に設置。長軸92cm、短軸76cm、深さ80cmの楕円形を呈する。 **竈** 北壁のほぼ中央部に設置。燃烧部は幅30cm、奥行き86cm。煙道は幅30cm、奥行き48cmで検出された。焚口部の両側に伏せた甕を埋め込んで補強し、火床の中央部やや西よりに小型台付甕の胴部を反転させた支脚が出土。支脚の上には坏等が8個重なって出土した。燃烧部支脚周辺からは竈に据

[1] 竪穴住居

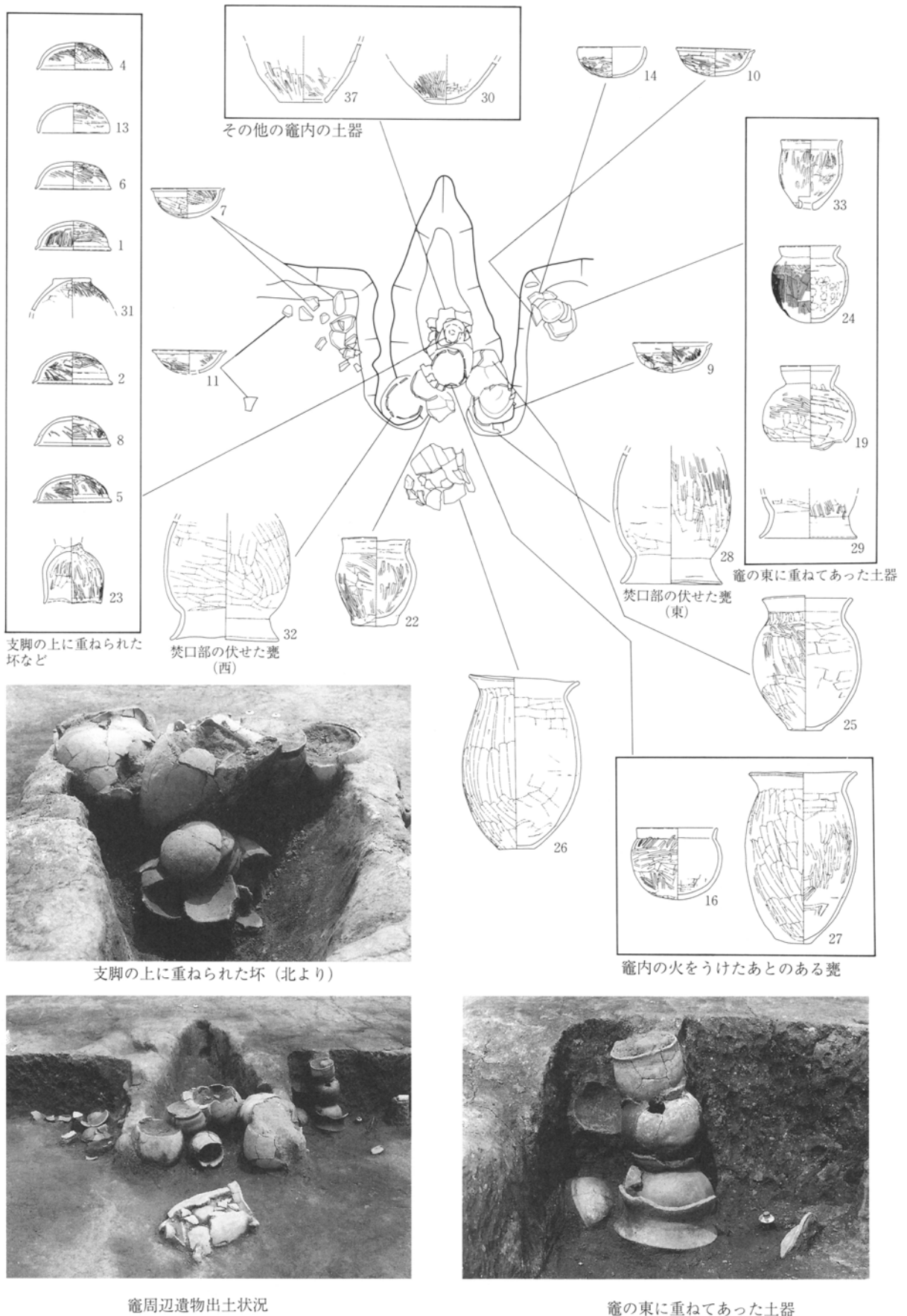
えてあったと思われる甕が位置を留めて出土した。遺物 土師器の坏、椀、壺、甕、小型台付甕、甌、棒状礫等が出土。ほとんどすべてが、Hr-FA直下の床直上から出土した。竈の東側に下から甕の口縁部 (No.29)、底部を打ち欠いたと思われる壺 (No.19)、小型の甕 (No.24)、小型の甌 (No.33) が重なって出土した。所見 竈東側の重なった土器や支脚付近から検出された甕はほぼ当時の生活で使用した場所を留めている。また実測可能な遺物だけで38個体あり、土器組成の点でも好資料である。それらすべての遺物は床面付近から出土し、床面直上に堆積している Hr-FA に埋没している。自然科学分析より、Hr-FA はユニットを形成しており一次堆積であることが判明した。



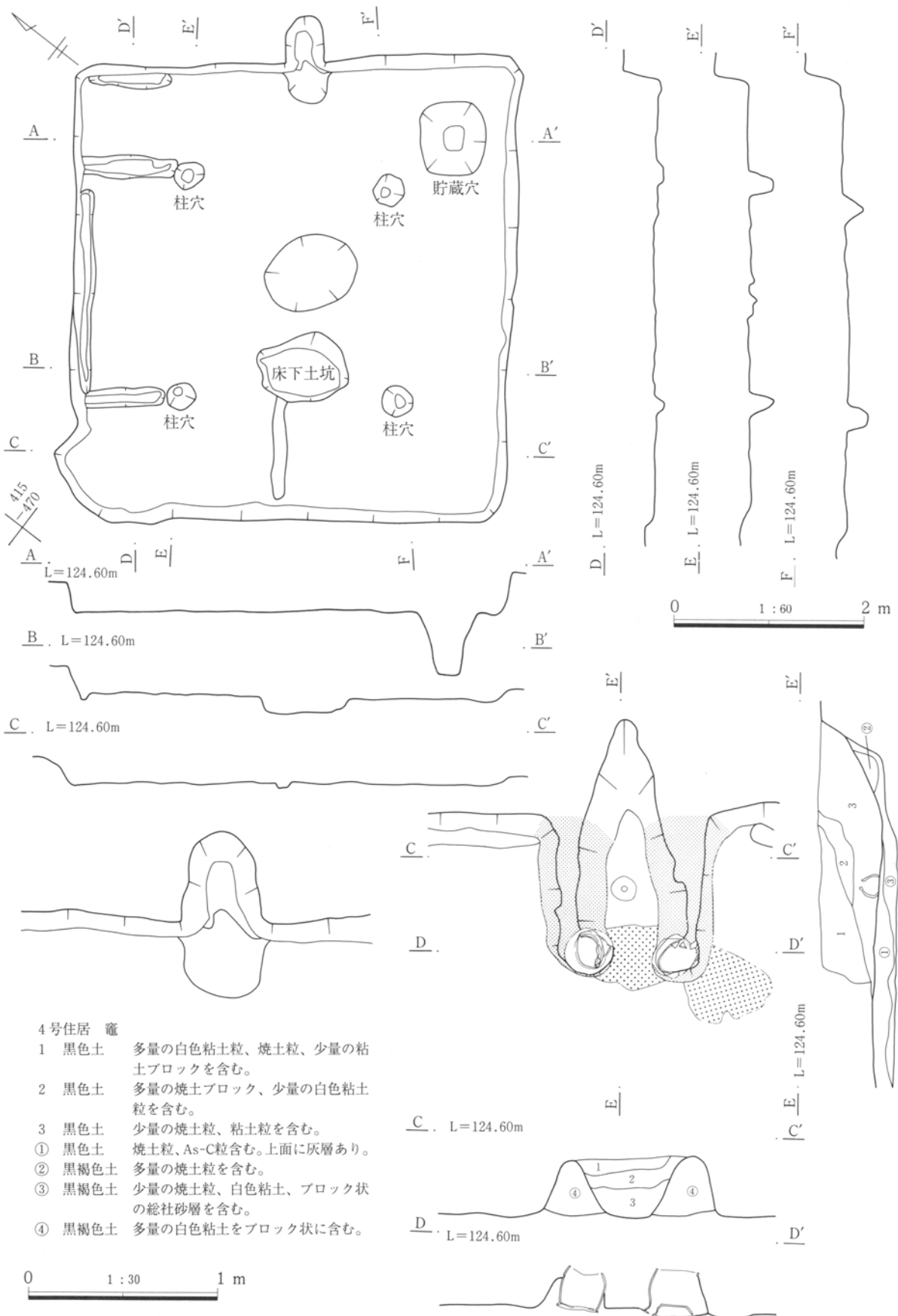
- 1 暗褐色土 多量のAs-C粒、炭化物粒を含む。
- 2 暗褐色土 多量のFA粒、As-C粒、炭化物粒を含む。
- 3 FA
- 4 黒褐色土 As-C粒、炭化物粒を含む。
- ① 黒褐色土 下層の総社砂層をブロック状に含む。

- 4号住居 貯蔵穴
- 1 FA
- 2 黒色土 焼土粒、As-C粒、白色粒を含む。
- 3 褐色土 総社砂層。
- 4 黒色土 やや締まり粘性は少ない。

第14図 4号住居、遺物出土状況

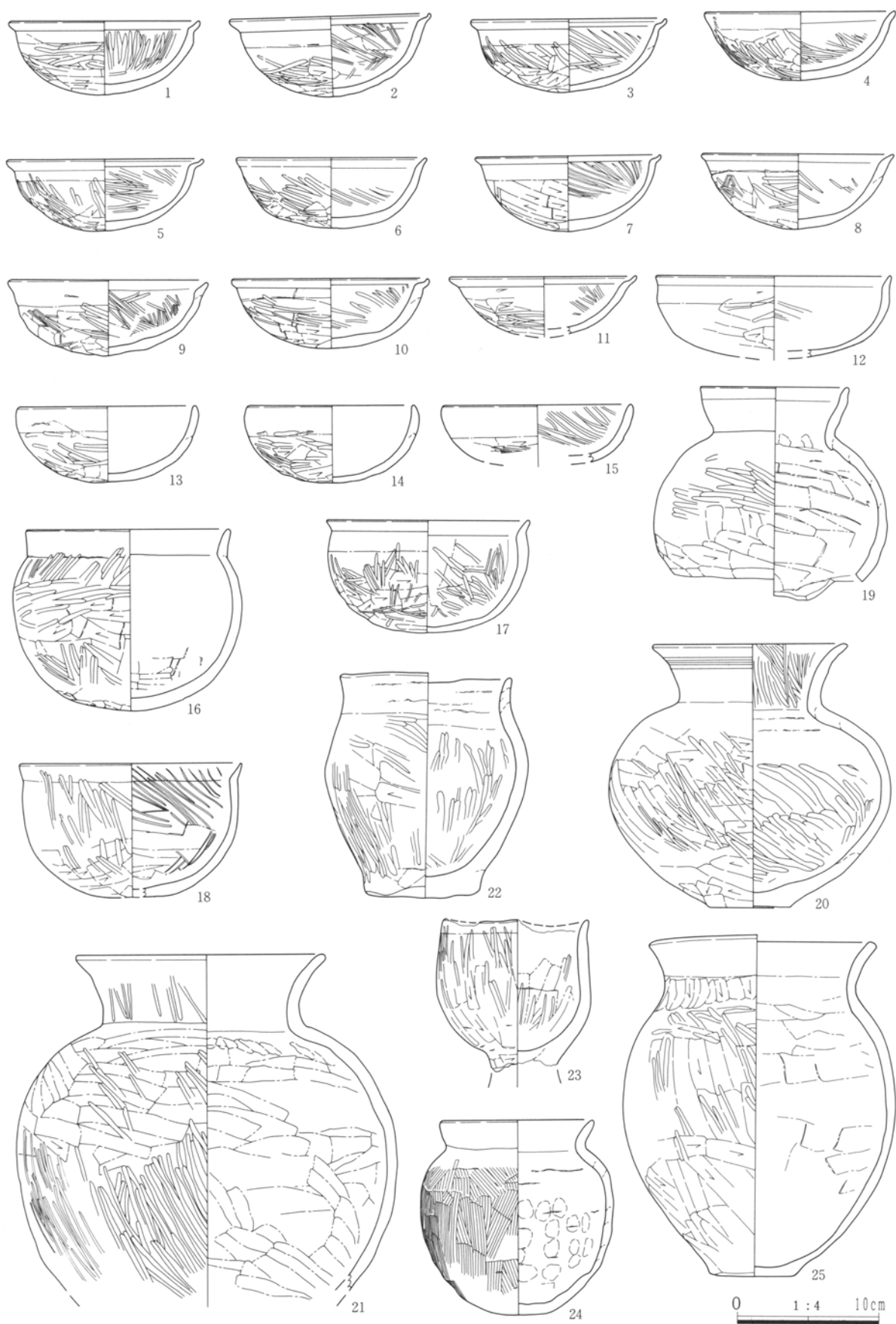


第15図 4号住居竈、遺物出土状況



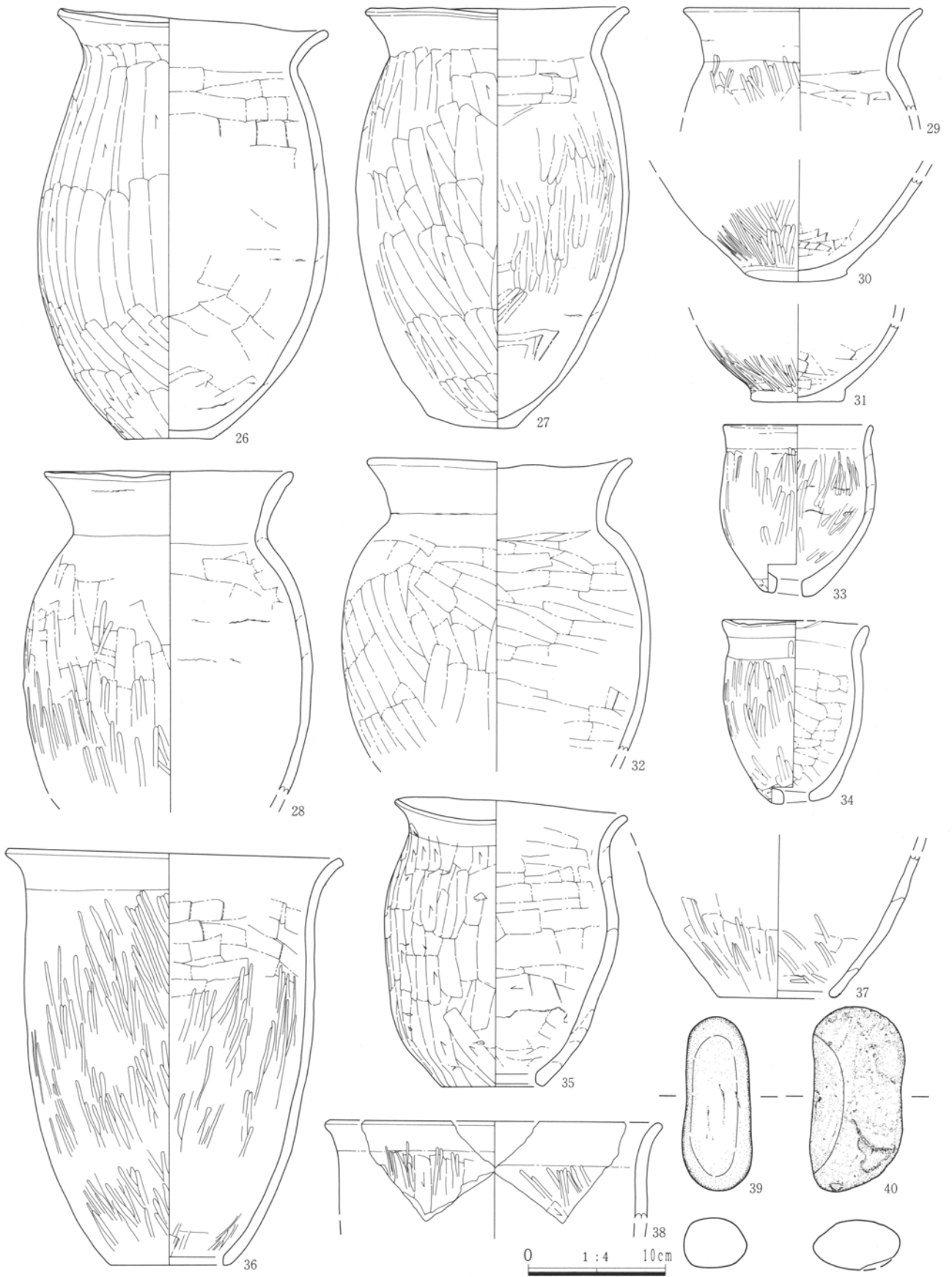
第16図 4号住居掘り方、竈

第3章 検出された遺構・遺物



第17図 4号住居出土遺物(1)

[1] 竖穴住居

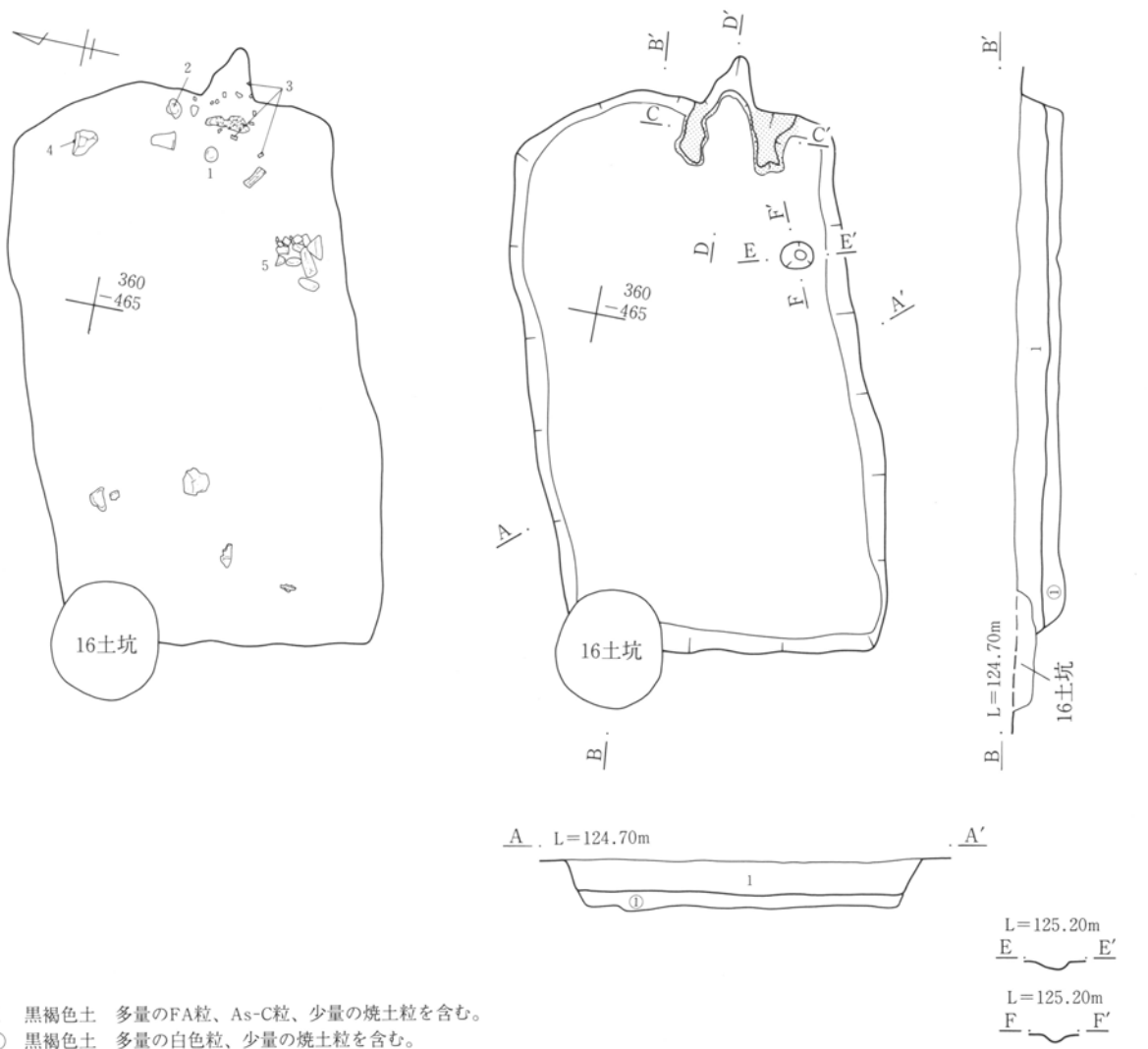


第18图 4号住居出土遺物(2)

5号住居 (第19・20図、PL 7・32)

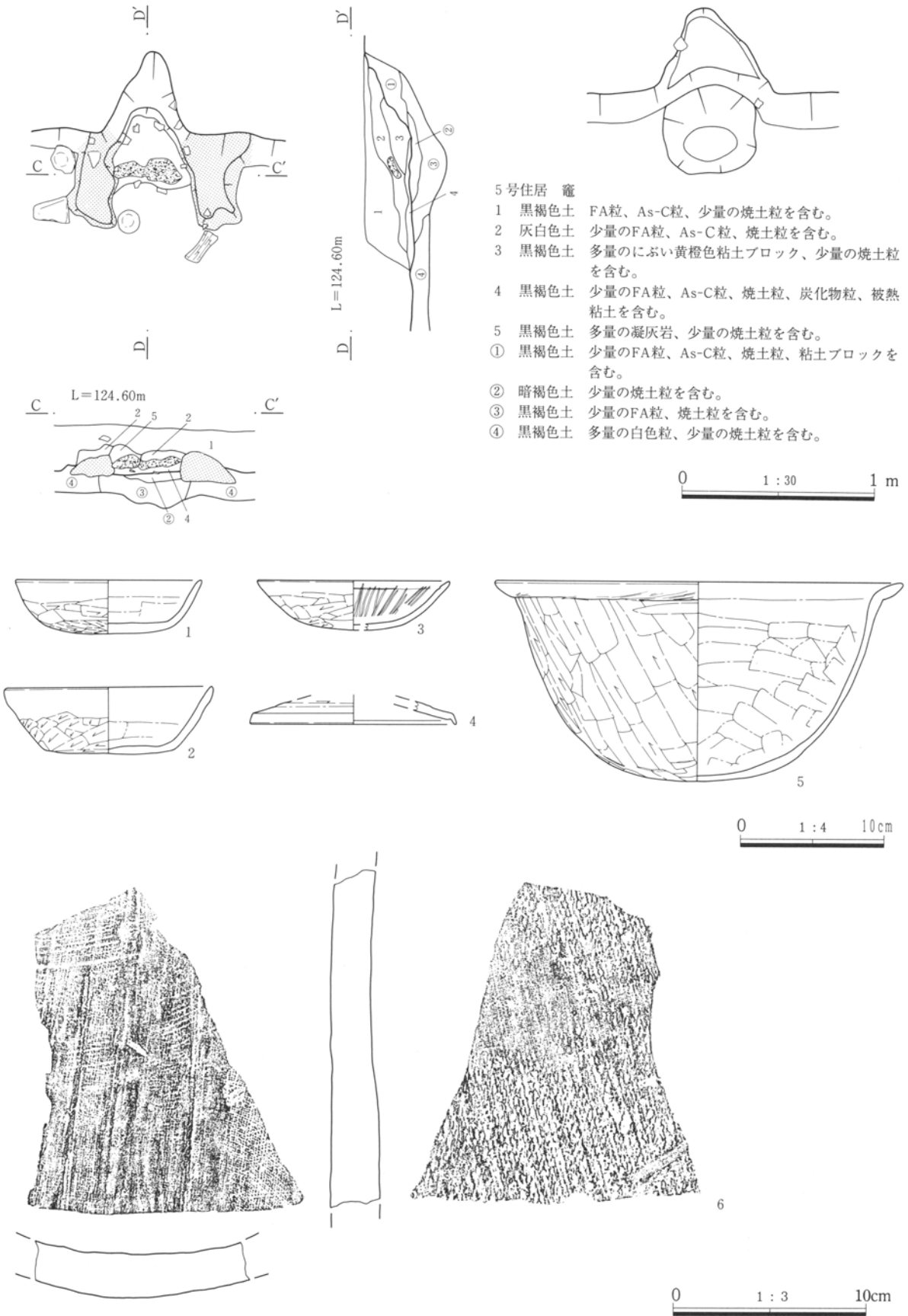
位置 X=355~360, Y=460~465 **方位** N-90°-E
形状 長軸4.5m・短軸2.5mで長軸を東西にもつ形の崩れた長方形。**面積** 10m² **壁高** 25cm **重複** なし **覆土** Hr-FA、As-Cを含む。**床面** 掘り方面から厚さ13cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方の面は、ほぼ平坦である。南壁際、竈付近に窪みをつくる。**壁溝** なし **柱穴** なし **貯蔵穴** 竈付近の窪みは貯蔵穴の可能性もあるが、鉢を据えるための窪みであるという調査所見を得た。**竈** 東壁の南側に設置。燃烧部は幅40cm、奥行き

60cm。煙道部は、幅20cm、奥行き28cmで、火床の底面から急角度で立ち上がる。袖部は粘質土を構築材として使用しており、一度掘ってから白色の粘質土を貼って竈の袖部を構築している。**遺物** 土師器の坏、鉢、甕の破片、須恵器の蓋が出土。覆土に国分寺瓦が混入。**所見** 竈付近の床面上の窪みは、浅く、形状などから、貯蔵穴とは考えにくい。窪み直上から丸底の鉢 (No. 5) が出土した。出土状況から鉢が窪みに据えてあったと推定した。遺構は出土遺物から8世紀中葉の所産と考えられる。



第19図 5号住居、遺物出土状況

[1] 竖穴住居



第20図 5号住居竈、出土遺物

6号住居 (第21・22・23・24図、PL 8・9・32・33・34)

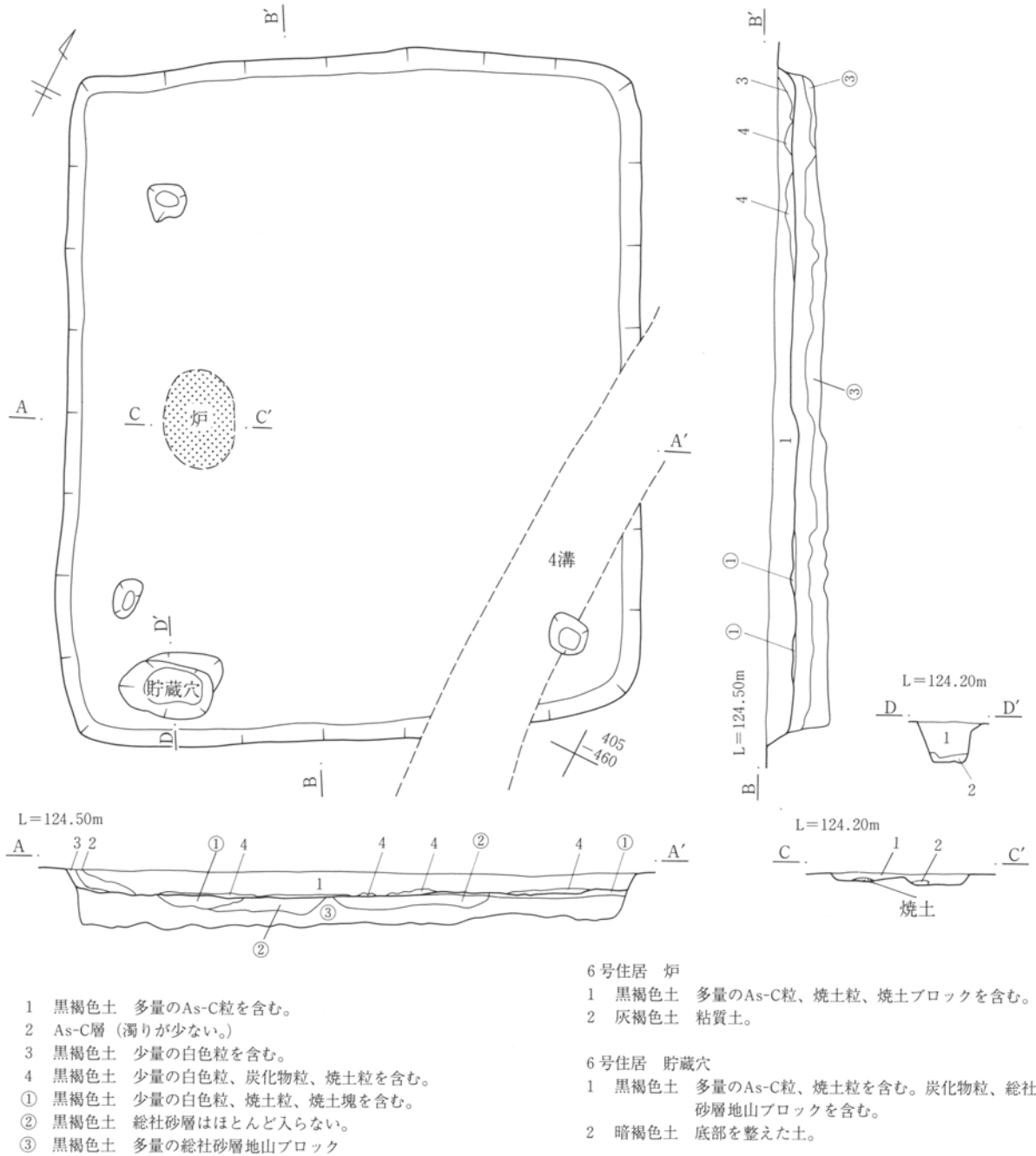
位置 X=400~410, Y=460~465 方位 N-61°-E

形状 長軸6.2m、短軸5.3mの長方形を呈する。

面積 26.2m² 壁高 22cm 重複 4号溝と重複。

遺構内から出土した遺物などから6号住居は4号溝に切られる所見を得た。土層断面からは、確認できなかった。覆土 覆土全体にAs-C軽石を多量に

含む。住居南西側には濁りの少ないAs-C軽石 (As-C層は、濁りの少ないものの直接降下したものではない可能性が高い) が堆積。床面 掘り方面から厚さ約19cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面は、ほぼ平坦。壁溝 なし 柱穴 床面では確認できなかったが掘り方面調査時に、住



第21図 6号住居

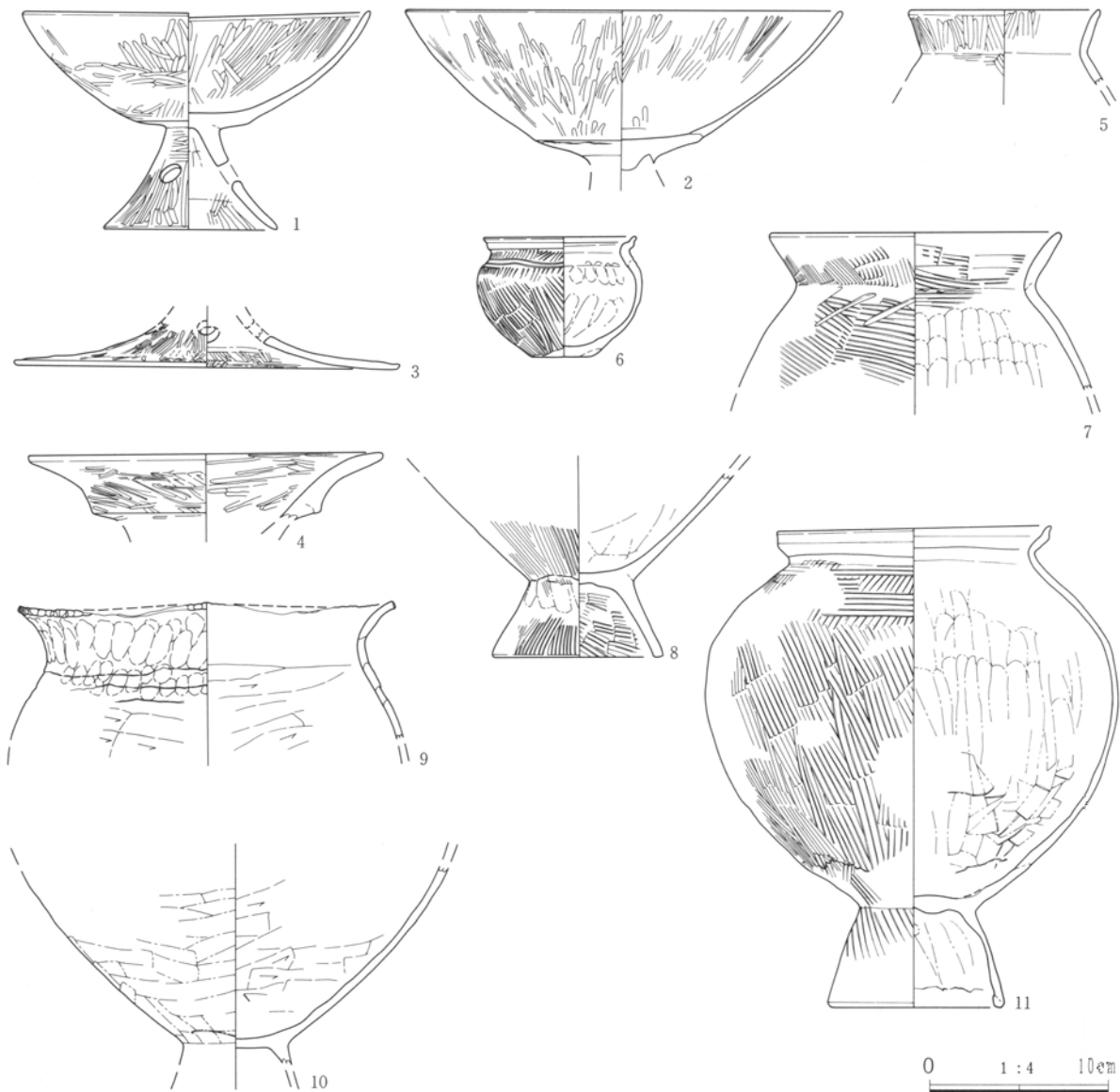


第22図 6号住居遺物出土状況、掘り方

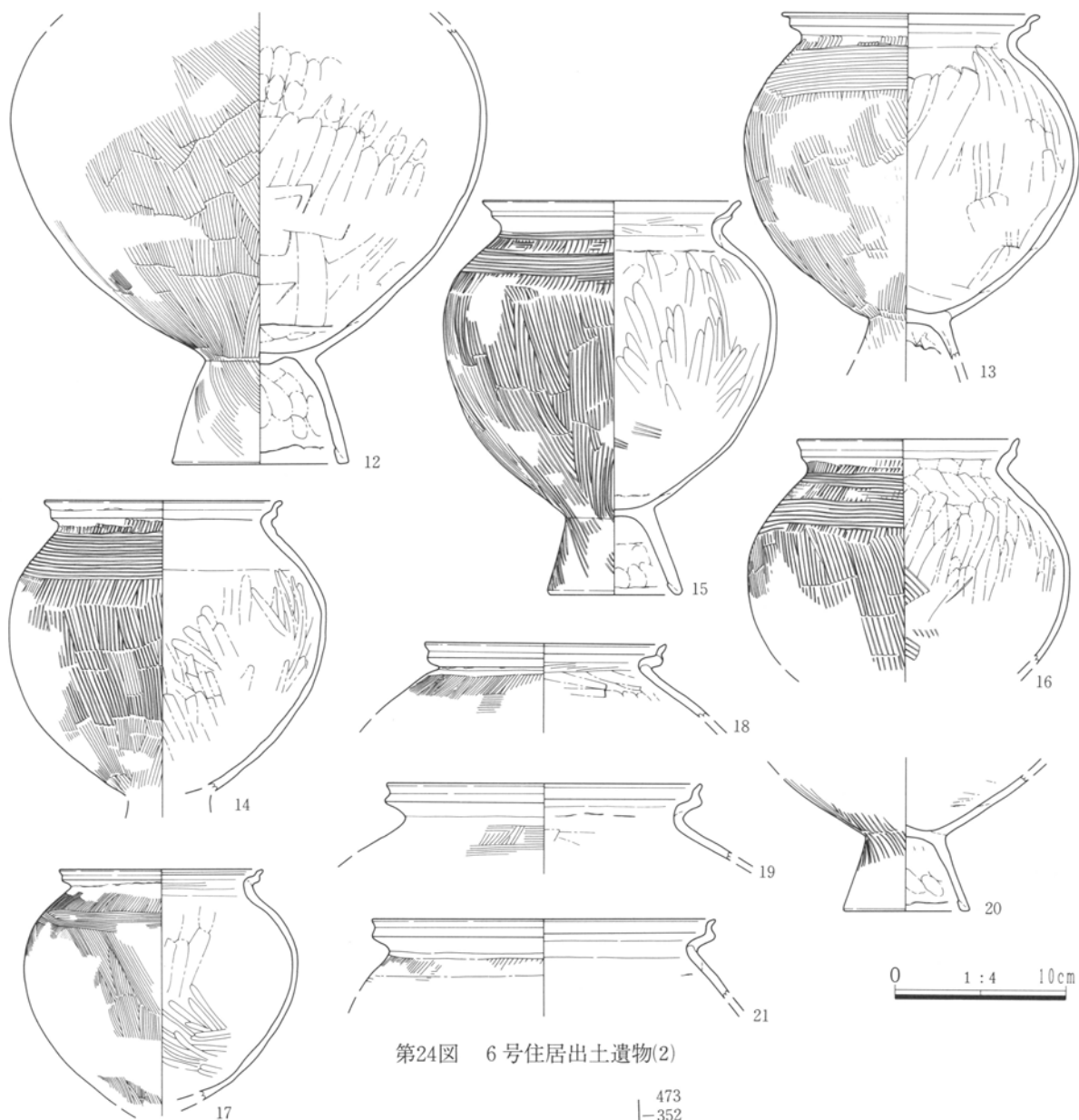
居のほぼ対角線上に床面から掘り込まれた柱穴3個を確認した。北東隅で柱穴は確認できなかった。3個の柱穴は床面から約19cmの深さ。 **貯蔵穴** 住居の南西隅に設置。長軸98cm、短軸60cm、深さ35cmの楕円形を呈する。 **炉** 住居西壁中央部付近で確認された。長軸90cm、短軸66cm、深さ8cmの楕円状の範囲に、多量の焼土ブロックが検出された。

遺物 遺物片の大部分は住居西側のAs-C層中、或いはその上下層からまとまって検出された。床直上から検出された遺物片は少ない。土器片はAs-C上層、中層、下層とに分けて取り上げたが、上層から出土した遺物と下層から出土した遺物が接合するな

ど層位に関係ない接合関係を示した。S字状口縁台付甕、高坏、器台、小型壺、鉢、南関東系の甕の口縁等が出土した。As-C下層の床面に近いところからは炭化材が出土した。 **所見** 住居内西側の土器片は、出土状況からAs-C軽石と同時に廃棄された可能性が高いと考えられる。出土遺物は実測可能なだけで22点を数える好資料である。S字状口縁台付甕を主体とする土器組成であるが、頸部に輪積み痕を残し、口縁部に刺突文を施す土器などが共伴して出土した。床面上から出土した炭化材は住居の垂木材の可能性が高い。



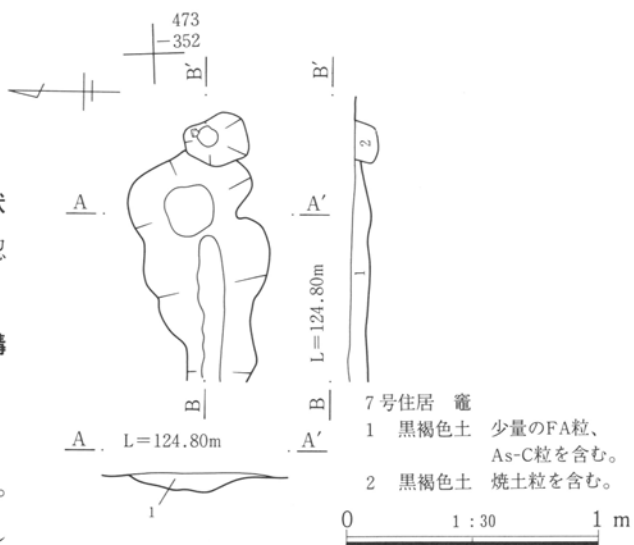
第23図 6号住居出土遺物(1)



第24図 6号住居出土遺物(2)

7号住居 (第25図、PL10)

位置 X=350,Y=470 方位 測定不可能。形状 竈のみの確認。面積 測定不可能。壁高 確認できなかった。重複 なし 覆土 Hr-FA、As-Cを含む。床面 確認できなかった。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁に設置。遺物 須恵器の甕片が出土。所見 竈のみの検出。竈の検出状況から東壁に設置されたものと判断した。出土した遺物は、小片のため時期不明。



第25図 7号住居竈

8号住居 (第26・27・28図、PL10・11・34)

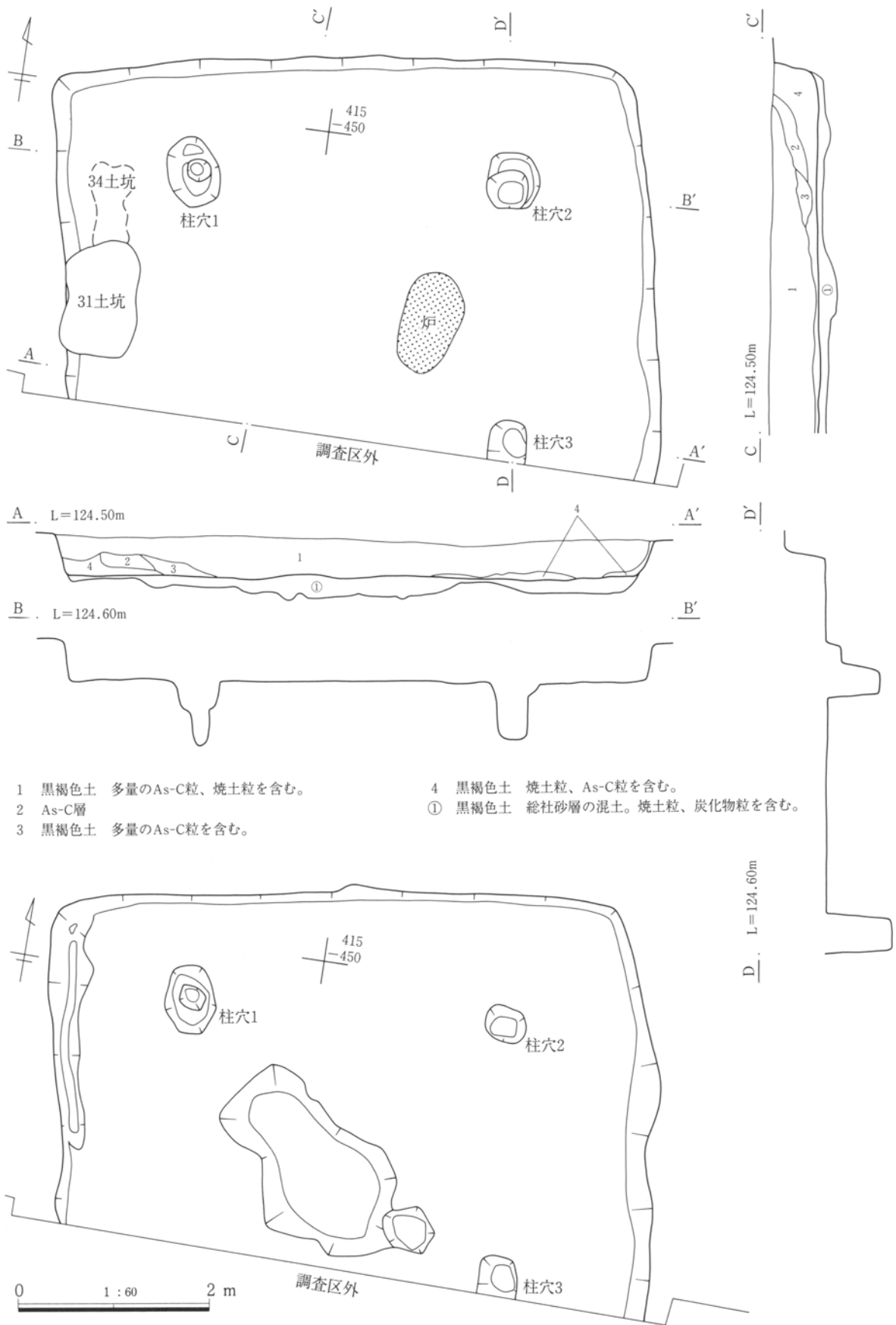
位置 X=410~415, Y=445~450 **方位** 特定が難しい。 **形状** 住居の南部は調査区域外になるため全形は確認できない。東西軸6.2mを測る。 **面積** 測定不可能。 **壁高** 44cm **重複** なし **覆土** 覆土中にAs-C起源の純度の高い軽石層がブロック状に認められる(2層)。住居東部では、その層の直上に多量の炭化材が確認された。炭化材は形状などから垂木材の可能性があると調査所見を得た。また自然科学分析で、最下位の土層中(4層)にもAs-Cに由来する軽石が含まれていることが明らかになった。 **床面** 掘り方面から厚さ約11cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面は、中央部が土坑状に掘り込まれている。 **壁溝** なし **柱穴**

住居の対角線上に3個を確認した。直径40cm、深さ55cm前後の円形を呈す。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **炉** 住居中央部、東壁近くで確認された。長軸106cm、短軸60cmの楕円状の範囲に、焼土粒が検出された。 **遺物** 土師器の高坏片、小型丸底壺の口辺部から頸部、S字状口縁台付甕の口縁部片が出土。 **所見** 2層より下位の4層の土層中にもAs-C軽石が含まれていたことからAs-C降下後の所産の可能性が高いと考えられるが、2層には、As-C起源の純度の高い軽石層がブロック状に認められるため、As-C降下前の所産である可能性も否定できない。



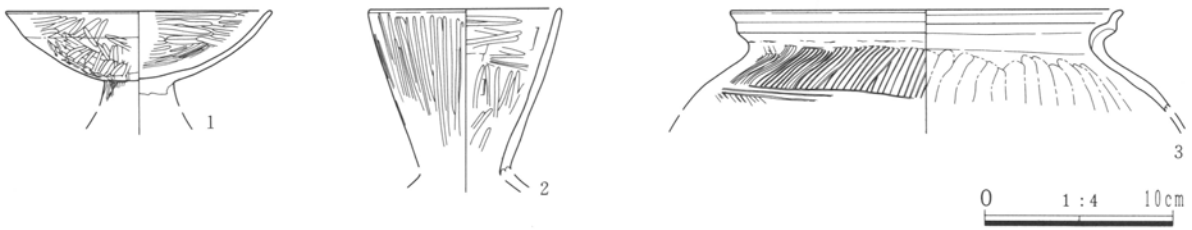
第26図 8号住居遺物出土状況

第3章 検出された遺構・遺物



第27図 8号住居、掘り方

[1] 竪穴住居



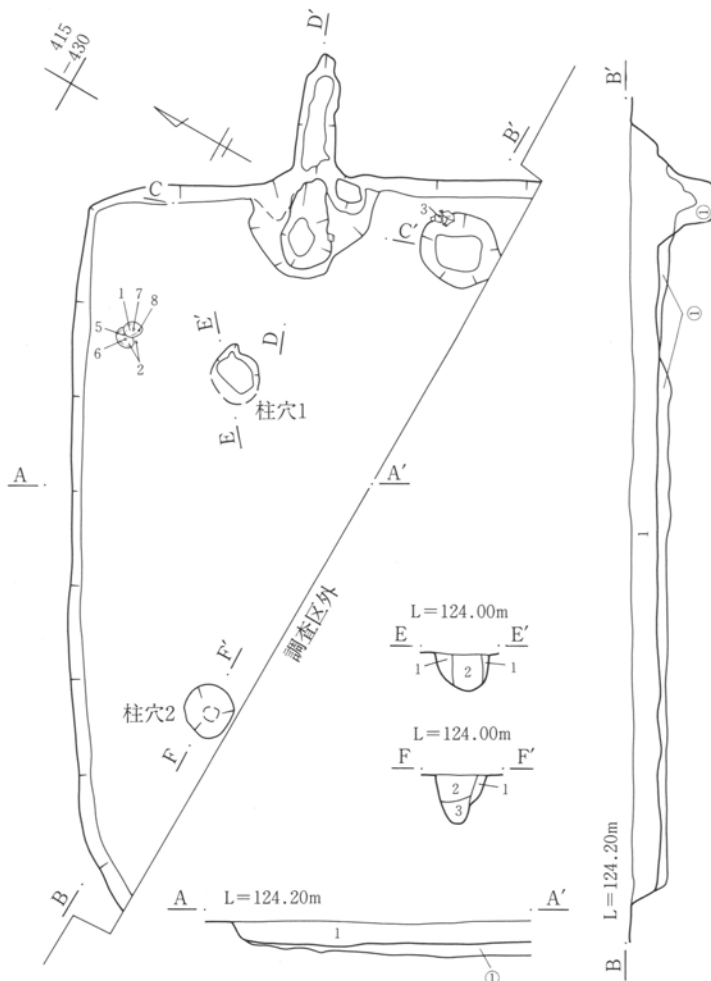
第28図 8号住居出土遺物

9号住居 (第29・30図、PL12・13・34)

位置 X=410, Y=425~430 **方位** N-59°-E **形状** 住居の南部は調査区域外になるため全形は確認できない。東西軸5.7mを測る。 **面積** 測定不可能。 **壁高** 21cm **重複** なし **覆土** Hr-FA、As-Cを含む。 **床面** 掘り方面から厚さ約10cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面は、貯蔵穴の西側と北東隅の柱穴周辺が土坑状に掘り込まれる以外は、ほぼ平坦である。竈前の床面は堅く締まっている。 **壁溝** なし **柱穴** 床面上では不鮮明で確認

できなかったが掘り方調査時に、床面から掘り込んだ柱穴を2個確認した。2個とも床面から約35cmの深さ。

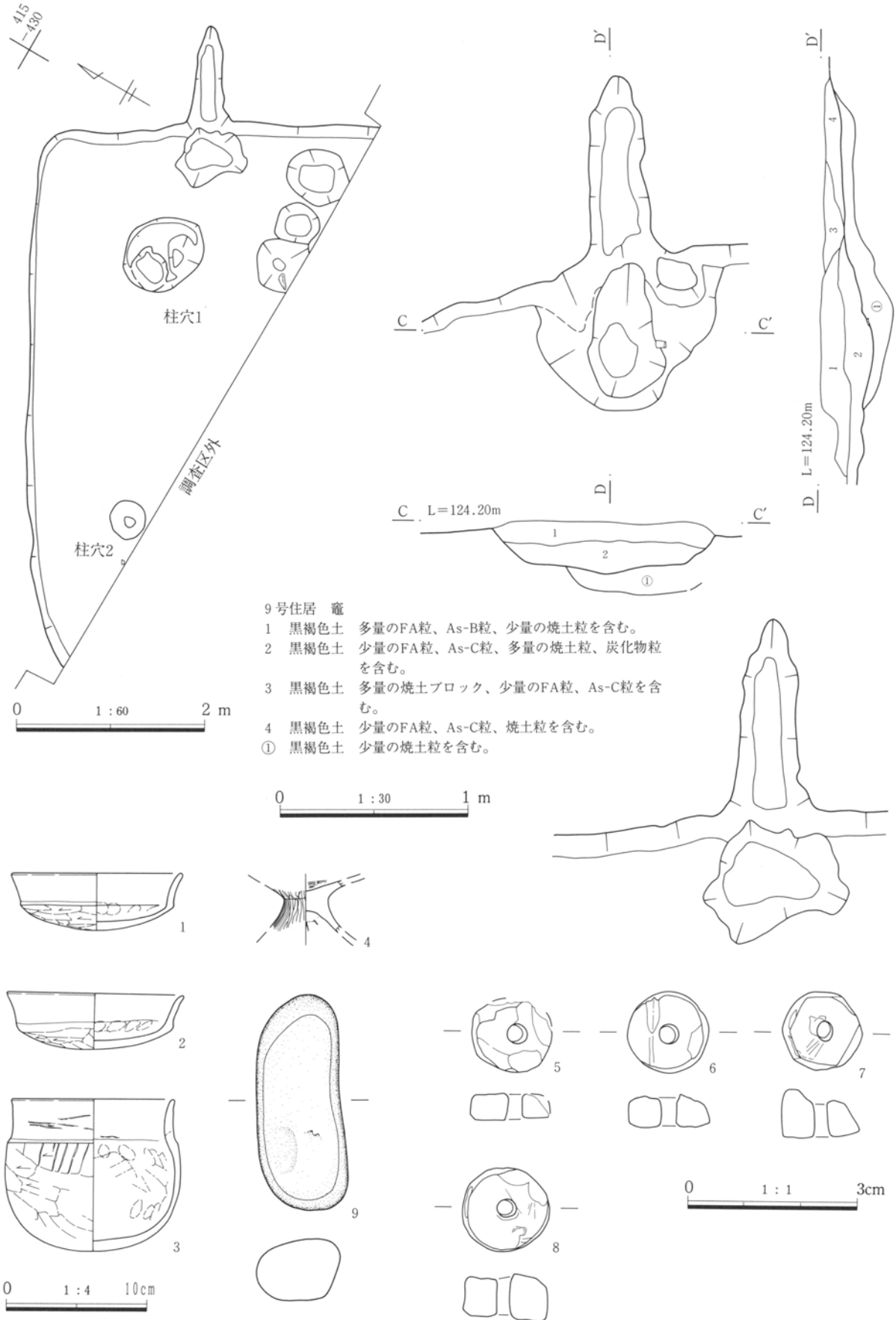
貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ40cm・長径63cm・短径56cmの楕円形を呈す。 **竈** 東壁に設置。燃燒部は幅62cm、奥行き45cmで、灰層が確認された。煙道は幅30cm、奥行き88cmで検出された。立ち上がりは非常に緩やかでほぼ水平に見える。煙道内部の覆土から焼土ブロックが多量に検出された。袖部には粘質土を使用していたが、残存状況がよくない。 **遺物** 土師器の坏、椀、高坏、滑石製の白玉が坏(No.1、2)の上から4点出土。 **所見** 出土遺物から6世紀後半から7世紀と考えられる。



第29図 9号住居

- 1 黒褐色土 少量のFA粒、多量のAs-C粒、焼土粒を含む。
- ① 黒褐色土 少量のAs-C粒、焼土粒、総社砂層地山ブロックを含む。(貯蔵穴)

- 柱穴
- 1 暗褐色土 少量の淡黄灰色粒を含む。(埋土)
 - 2 暗褐色土 少量のFA粒、淡黄灰色ブロックを含む。(柱痕)
 - 3 暗褐色土 少量のFA粒を含む。(柱痕)

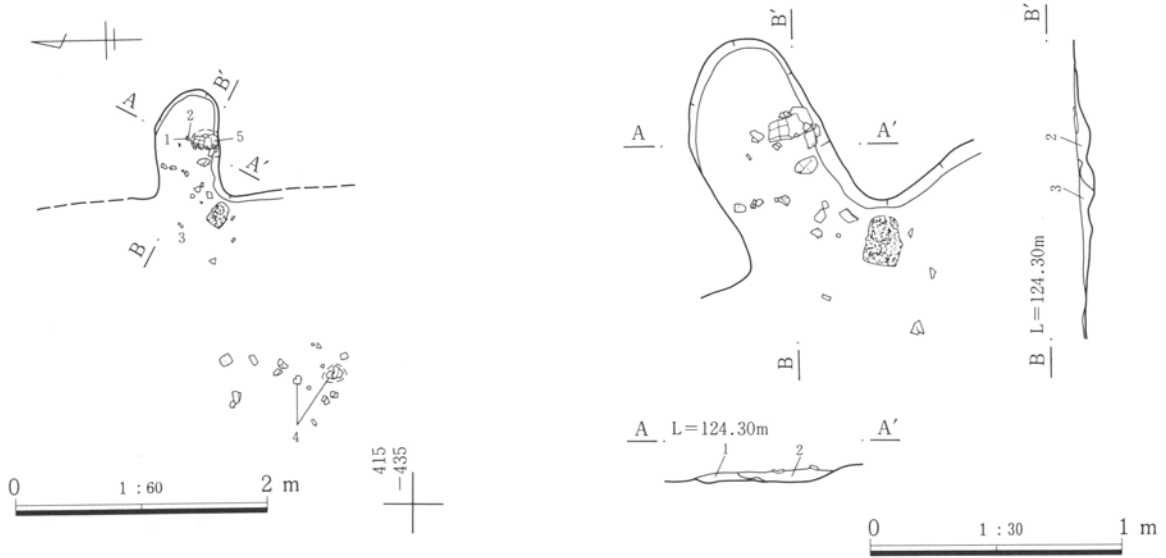


第30図 9号住居掘り方、竈、出土遺物

10号住居 (第31図、PL13・34)

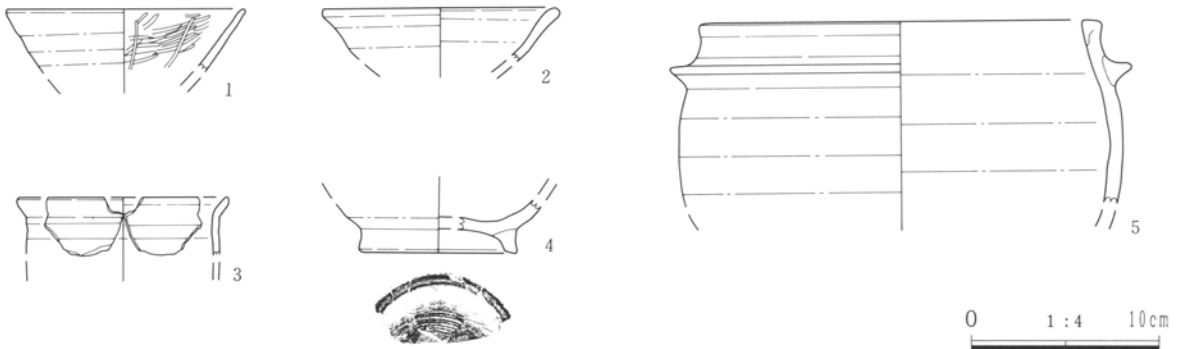
位置 X=415, Y=430 **方位** 測定不可能。 **形状** 竈のみの検出。 **面積** 測定不可能。 **重複** なし
覆土 Hr-FA、As-Cを含む。 **床面** 確認できなかった。 **壁溝** 確認できなかった。 **柱穴** 確認できなかった。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **竈** 東壁に設置。燃焼部は幅50cm、奥行き80cm。覆土から焼土粒、炭化物粒が多量に検出された。 **遺物**

須恵器の坏、椀、羽釜が出土。 **所見** 竈覆土に含まれる焼土粒の平面プランから住居と判断した。床面や掘り方面は不鮮明で検出できなかった。遺物出土レベルなどから竈西側の遺物は住居に関わるものと考えられる。出土遺物から10世紀中葉と考えられる。



10号住居 竈

- 1 暗褐色土 白色粒を含む。
- 2 暗褐色土 多量の焼土ブロックを含む。炭化物、As-C粒、白色粒を含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒、大きめの焼土ブロックを含む。



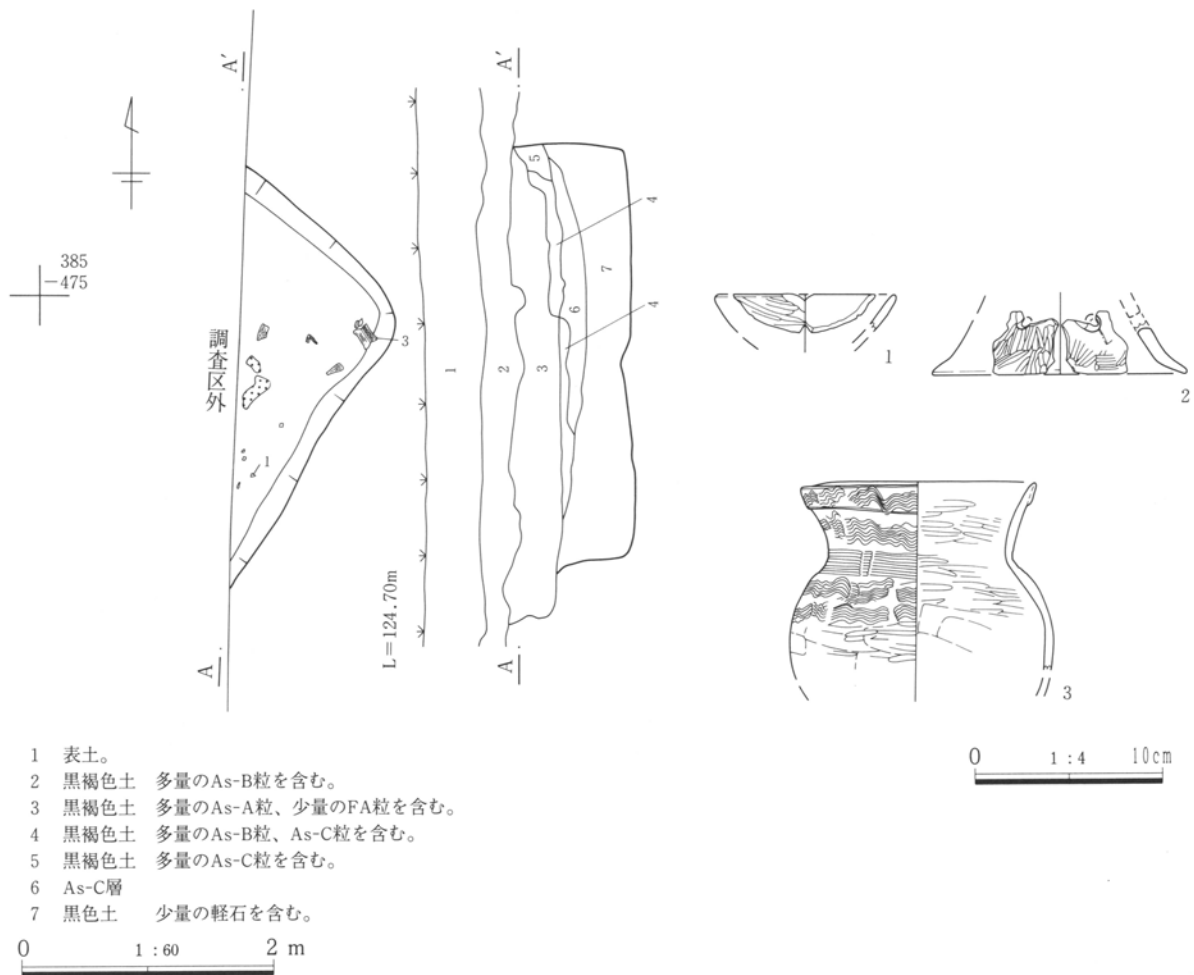
第31図 10号住居、竈、出土遺物

11号住居 (第32図、PL13・14・34)

位置 X=380~385, Y=470 **方位** 測定不可能。

形状 住居の大部分が調査区域外になるため、全形は確認できなかった。北東隅部のみを検出。 **面積** 測定不可能。 **壁高** 94cm **重複** なし **覆土** 床面より35cmの覆土中に純度の高いAs-C軽石層が確認された(6層)。自然科学分析によると本遺構のAs-C軽石層は、一次堆積の可能性が高いことが判明した。黒色土の下層、床面に接して炭化材が検出された。 **床面** 掘り方面は不明瞭。床面は堅く締まっていた。 **壁溝** なし **柱穴** 確認できなかった。

貯蔵穴 確認できなかった。 **炉** 確認できなかった。 **遺物** 樽式土器の甕、土師器の高坏片、鉢片が出土。 **所見** 土師器の高坏片は、S字状口縁台付甕と同じ土器組成の高坏の特徴を持つ。高坏片と樽式土器はほぼ同レベルの床面付近から出土しており、本遺構は古墳時代初頭の所産と考えられる。自然科学分析より遺構は、As-C軽石より下位にあることが判明した。覆土の様子から住居廃棄後、黒色土が堆積する時間差の後、As-C軽石が降下したと思われる。



- 1 表土。
- 2 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。
- 3 黒褐色土 多量のAs-A粒、少量のFA粒を含む。
- 4 黒褐色土 多量のAs-B粒、As-C粒を含む。
- 5 黒褐色土 多量のAs-C粒を含む。
- 6 As-C層
- 7 黒色土 少量の軽石を含む。

第32図 11号住居、出土遺物

12号住居 (第33・34図、PL14・34・35)

位置 X=390~395, Y=455~460 方位 N-35°-E

形状 長軸(5.3m)・短軸4.6mの長方形。面積

19.8㎡ 壁高 12cm 重複 4溝と重複。4溝が、

12号住居を切って構築する平面精査の所見を得た。

覆土 As-Cを多く含む。床面 不明瞭。壁溝

なし 柱穴 床面調査時では確認できなかったが、

掘り方面調査時に床面から掘り込まれた柱穴を住居

のほぼ対角線上に4基を確認した。4基とも床面か

ら約28cmの深さ。貯蔵穴 なし 炉 確認できな

かった。遺物 土師器の高坏、小型甕、S字状口

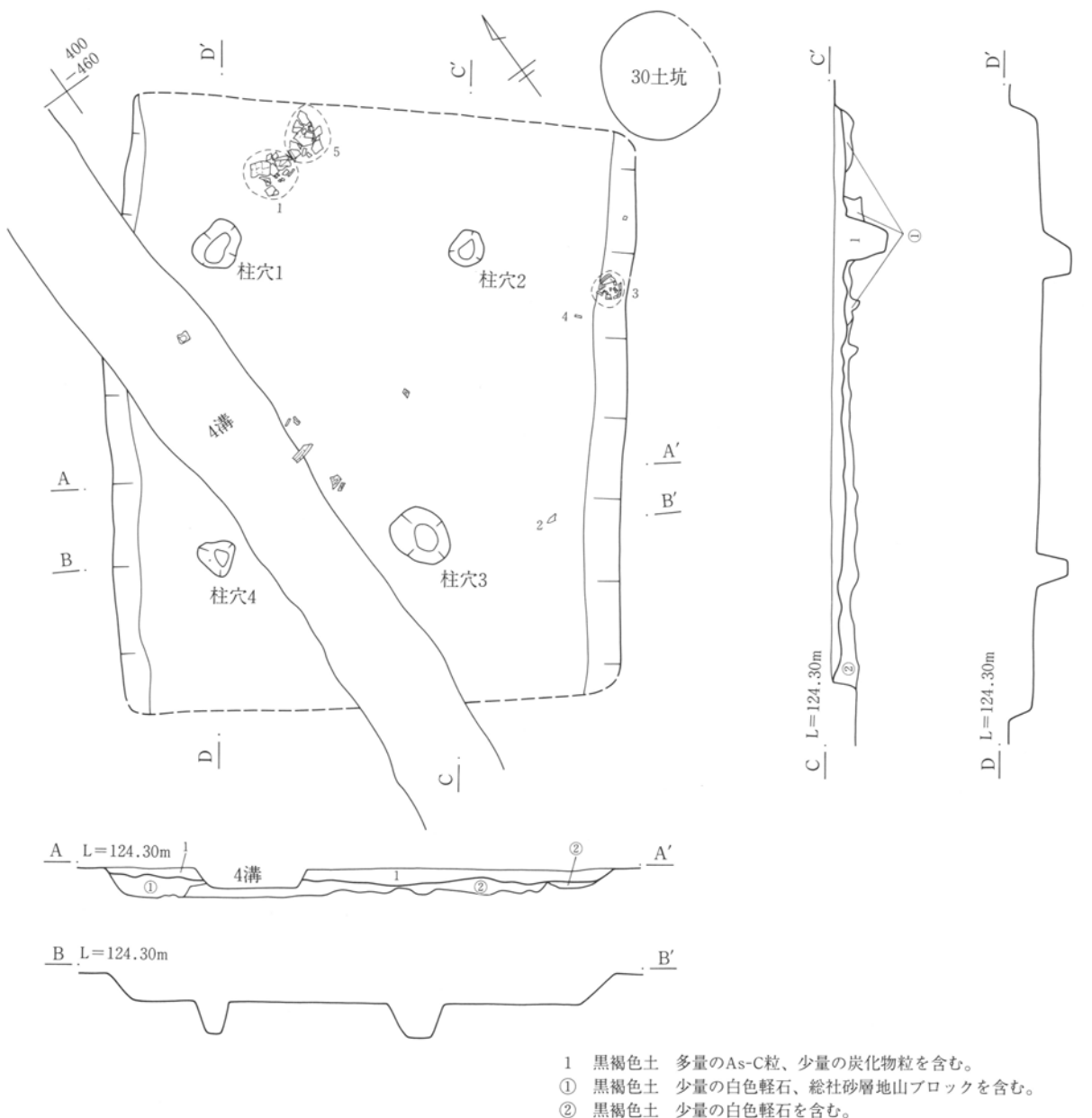
縁台付甕、樽式土器の甕が出土。床面は不明瞭であ

ったが遺物の出土レベルはほぼ同じであった。

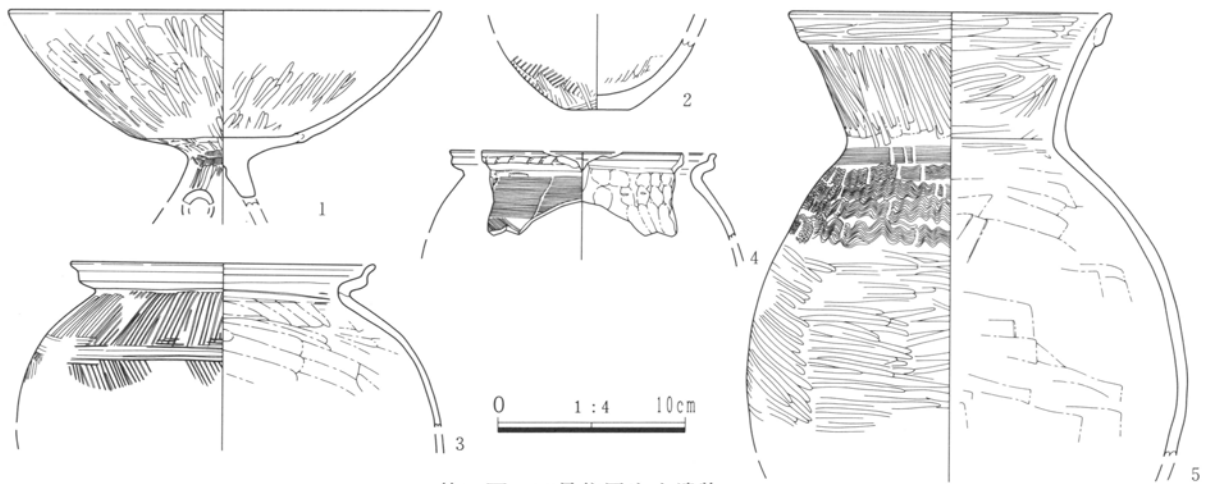
所見 床面、北・南壁は、不明瞭であったが、土層

断面、遺物出土状況から遺物は床面に接していたと

判断した。出土遺物から古墳時代初頭と考えられる。



第33図 12号住居

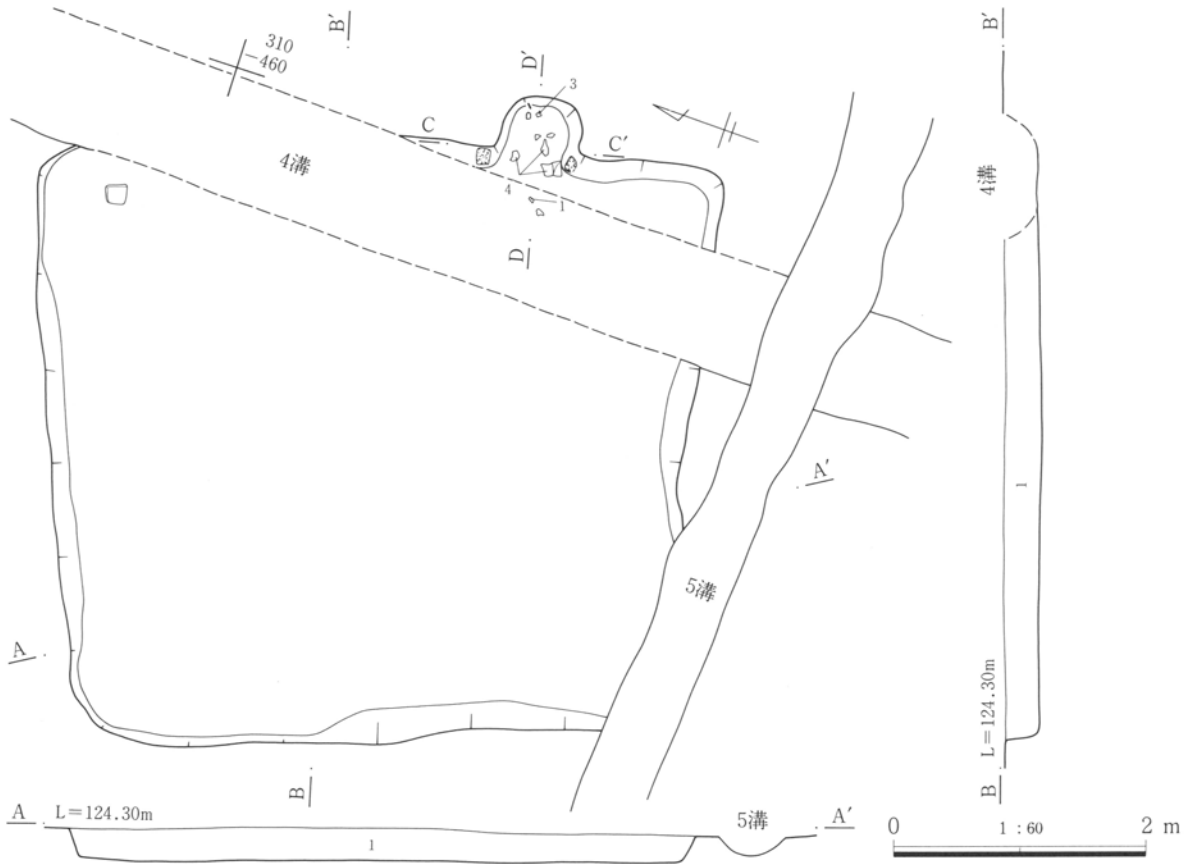


第34図 12号住居出土遺物

13号住居 (第35・36図、PL15・35)

位置 X=305~310, Y=460 **方位** N-75°-E **形状** 長軸5.2m・短軸4.8mで長軸を南北にもつ長方形。
面積 20.8m² **壁高** 27cm **重複** 4溝、5溝と重複。平面精査や出土遺物から4溝、5溝が13号住居を切る所見を得た。
覆土 Hr-FA、As-Cを含む。

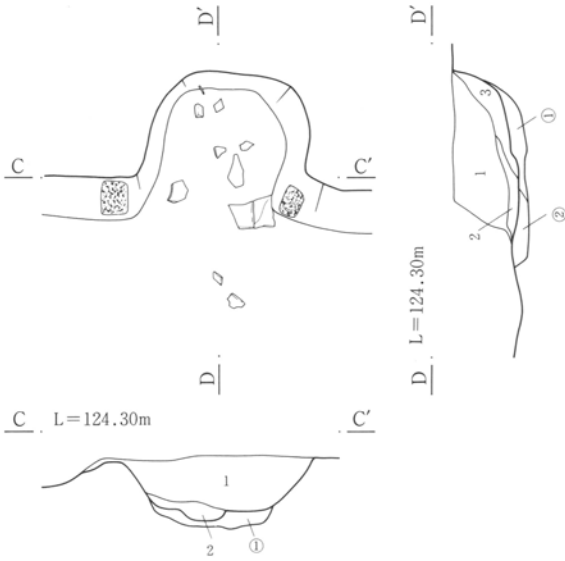
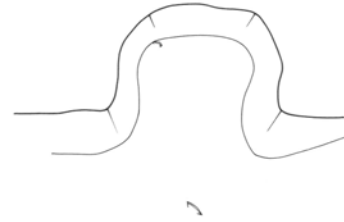
床面 全体に地山を床面とする。床面レベルはほぼ水平で整っている。全体的に硬質である。
壁溝 なし **柱穴** なし **貯蔵穴** なし **竈** 東壁の南側に設置。燃烧部は幅56cm、奥行き50cm。袖部は補強用の直方体に切り出された凝灰岩が検出された。



1 黒褐色土 多量のFA粒、As-C粒、少量の焼土粒を含む。

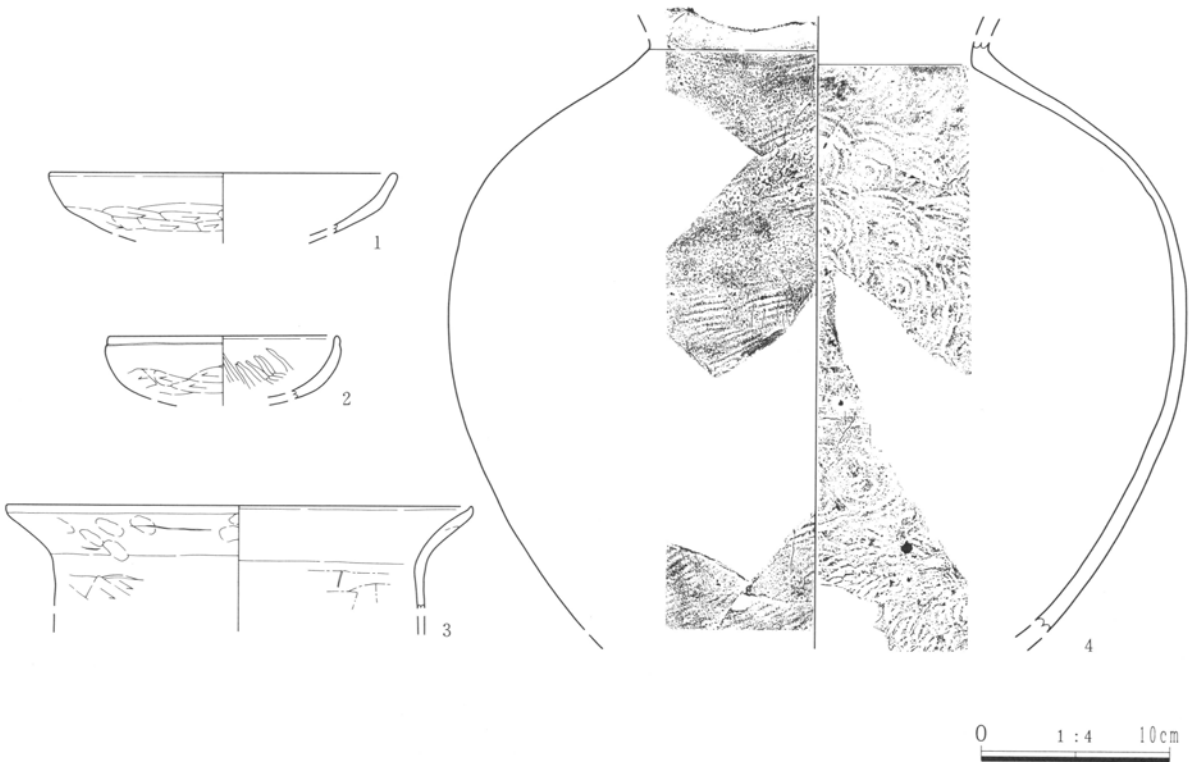
第35図 13号住居

遺物 土師器の坏、甕、須恵器の大甕、棒状礫が出土。
所見 本遺構は出土遺物から7世紀後半から8世紀前半の所産と考えられる。4号溝には8世紀後半前後の遺物が含まれており、4号溝が13号住居を掘り込んだことが判明した。



13号住居 竈

- 1 暗褐色土 多量のFA粒、As-C粒、少量の焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 多量の焼土ブロック、焼土粒、少量のFA粒、As-C粒を含む。
- 3 暗褐色土 多量の焼土粒、少量のFA粒、As-C粒、を含む。
- ① 黒褐色土 少量のFA粒、As-C粒、焼土粒、焼土ブロックを含む。
- ② 黒褐色土 多量の焼土粒、少量のFA粒、As-C粒を含む。

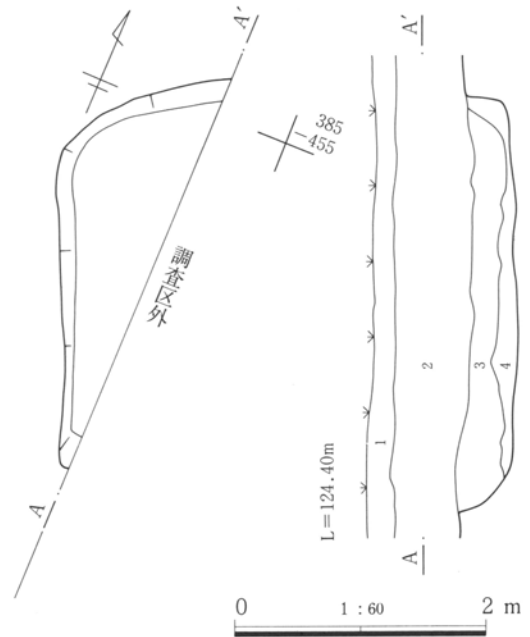


第36図 13号住居竈、出土遺物

14号住居 (第37図、PL15)

位置 X=380~385, Y=455 **方位** 測定不可能。
貯蔵穴 なし **形状** 住居の大部分が調査区域外になるため、全形は確認できなかった。北西隅部のみの検出。
面積 測定不可能。 **壁高** 35cm **重複** なし **覆土** As-Cを含む。 **床面** 掘り方面を床面とする。床面は堅く締まっていた。 **壁溝** なし **柱穴** 確認できなかった。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **竈(炉)** 確認できなかった。 **遺物** なし **所見** 遺物なく、時期不明。形状、床面から住居と判断した。

- 1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。
- 2 黒褐色土 多量のFA粒、As-C粒を含む。
- 3 黒褐色土 多量のAs-C粒、炭化物粒、焼土粒を含む。
- 4 黒褐色土 多量のAs-C粒、炭化物粒、焼土粒を含む。

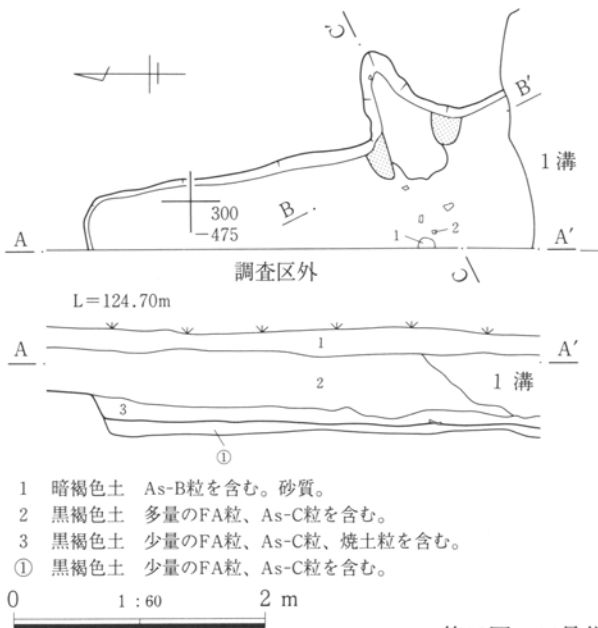


第37図 14号住居

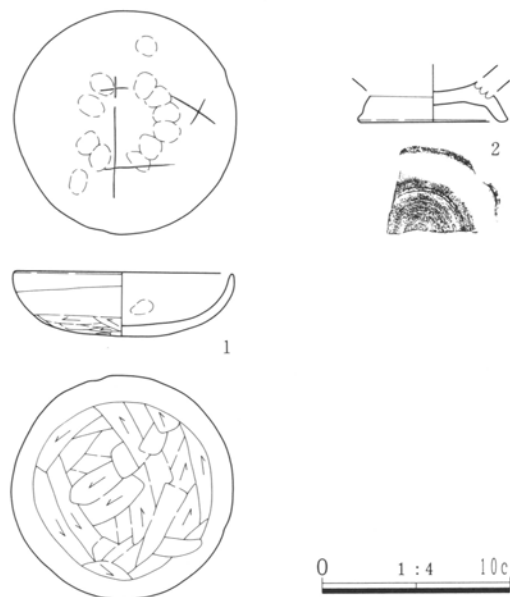
16号住居 (第38・39図、PL16・35)

位置 X=295, Y=470 **方位** N-76°-E **形状** 住居の西部分が調査区域外、南部分が1号溝に切られるため、全形は確認できなかった。 **面積** 測定不可能。 **壁高** 15cm **重複** 1溝と重複。1溝が、16号住居を切って構築する平面精査の所見を得た。 **覆土** Hr-FA、As-Cを含む。 **床面** 掘り方面から厚さ約8cmの埋め土を施して平坦な床面を造る。

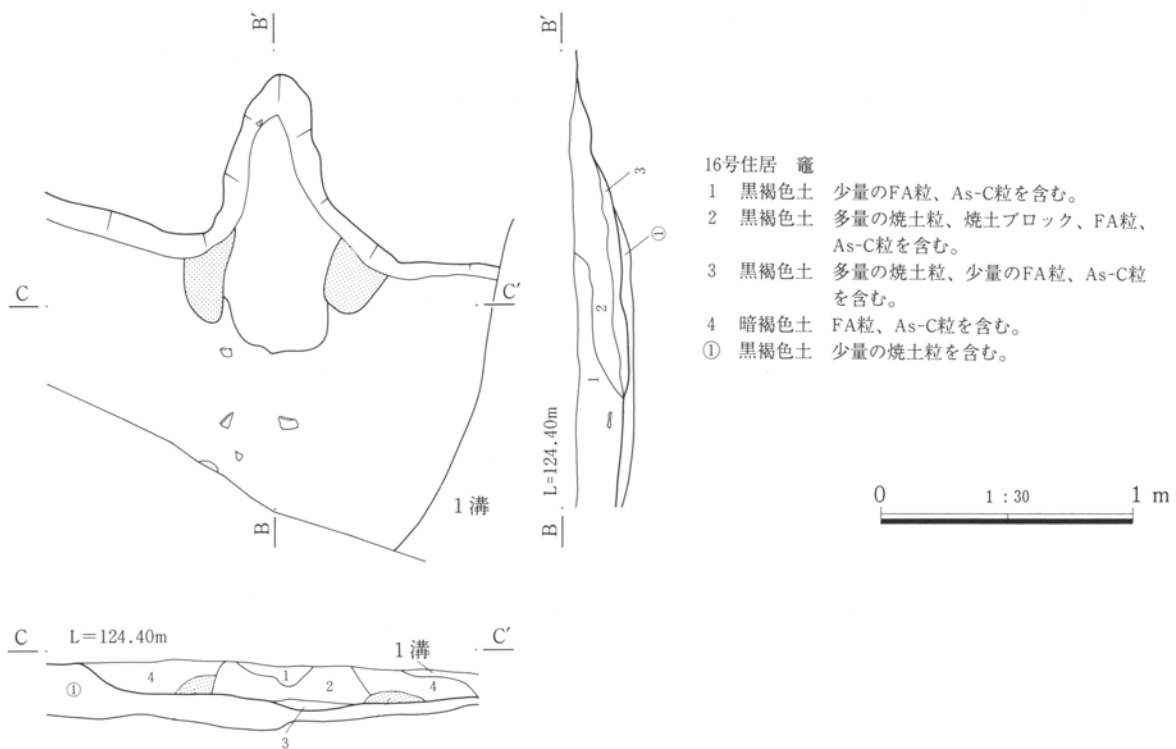
掘り方面は、ほぼ平坦である。 **壁溝** なし **柱穴** 確認できなかった。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **竈** 東壁に設置。燃烧部は幅46cm、奥行き68cmで検出された。 **遺物** 土師器の坏、須恵器の高台付坏が出土。 **所見** 出土遺物から8世紀中葉と考えられる。



- 1 暗褐色土 As-B粒を含む。砂質。
- 2 黒褐色土 多量のFA粒、As-C粒を含む。
- 3 黒褐色土 少量のFA粒、As-C粒、焼土粒を含む。
- ① 黒褐色土 少量のFA粒、As-C粒を含む。



第38図 16号住居、出土遺物



第39図 16号住居竈

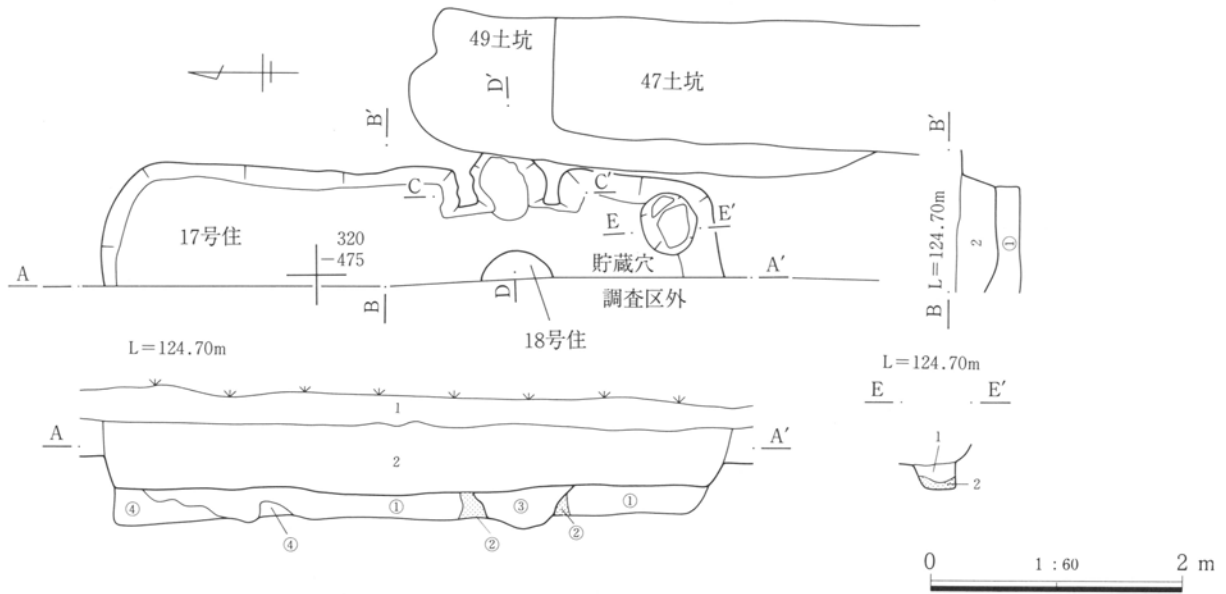
17号住居 (第40図、PL16・17・35)

位置 X=315~320, Y=470 **方位** N-93°-E **形状** 西側の大部分が調査区域外であったため、全形は確認できなかった。南北軸は4.9mである。 **面積** 測定不可能。 **壁高** 50cm **重複** 17号住居と18号住居が重複。18号住居が、17号住居を切って構築する平面精査の所見を得た。 **覆土** Hr-FA、As-Cを含む。 **床面** 掘り方面から厚さ約20cmの貼床を施して平坦な面を造る。掘り方面は、ほぼ平坦である。 **壁溝** なし **柱穴** なし **貯蔵穴** 住居の南部に設置。長軸100cm、短軸42cm、深さ20cmのほぼ円形を呈する。 **竈** 東壁に設置。燃焼部は幅30cm、奥行き44cmで、使用面では灰層が確認された。覆土から焼土ブロックが多量に検出された。 **遺物** 土師器の坏片が出土。 **所見** 出土遺物から8世紀中葉と考えられる。

18号住居 (第40図、PL16)

位置 X=315, Y=470 **方位** 測定不可能。 **形状** 西側の大部分が調査区域外であったため、全形は確認できなかった。竈のみの検出。 **面積** 測定不可能。 **壁高** 確認できなかった。 **重複** 17号住居と18号住居が重複。18号住居が、17号住居を切って構築する平面精査の所見を得た。 **覆土** Hr-FA、As-Cを含む。 **床面** 確認できなかった。 **壁溝** 確認できなかった。 **柱穴** 確認できなかった。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **竈** 東壁に設置。覆土から焼土ブロックが多量に検出された。 **遺物** なし **所見** 竈のみの検出。竈の検出状況から東壁に設置されたものと判断した。

第3章 検出された遺構・遺物

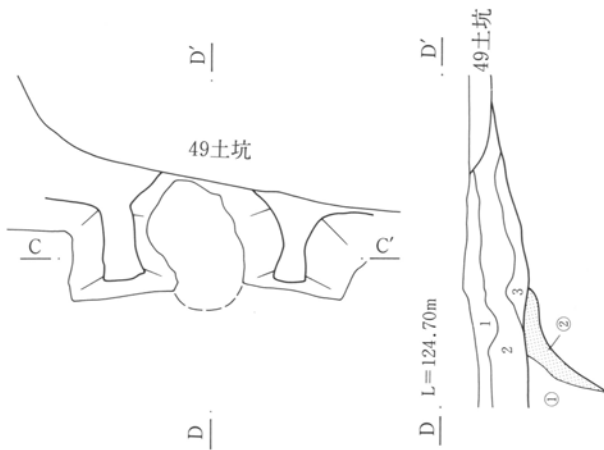


17・18号住居

- 1 黒褐色土 As-B粒、少量のFA粒、As-C粒を含む。
- 2 黒褐色土 多量のFA粒、As-C粒、少量の焼土粒、灰粒を含む。
- ① 暗褐色土 少量のAs-C粒、黒褐色土を含む。
- ② 暗褐色土 粘質土。少量の焼土粒を含む。(18号住居の竈に貼った土)
- ③ 黒褐色土 多量の焼土粒、焼土ブロック、少量のFA粒、As-C粒を含む。(18号住居竈覆土)
- ④ 黒褐色土 多量のAs-C粒を含む。

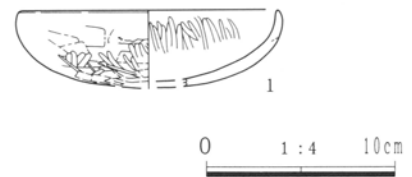
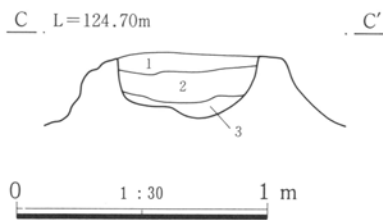
17号住居 貯蔵穴

- 1 黒褐色土 少量のAs-C粒、焼土粒を含む。
- 2 黒褐色土 粘質土。



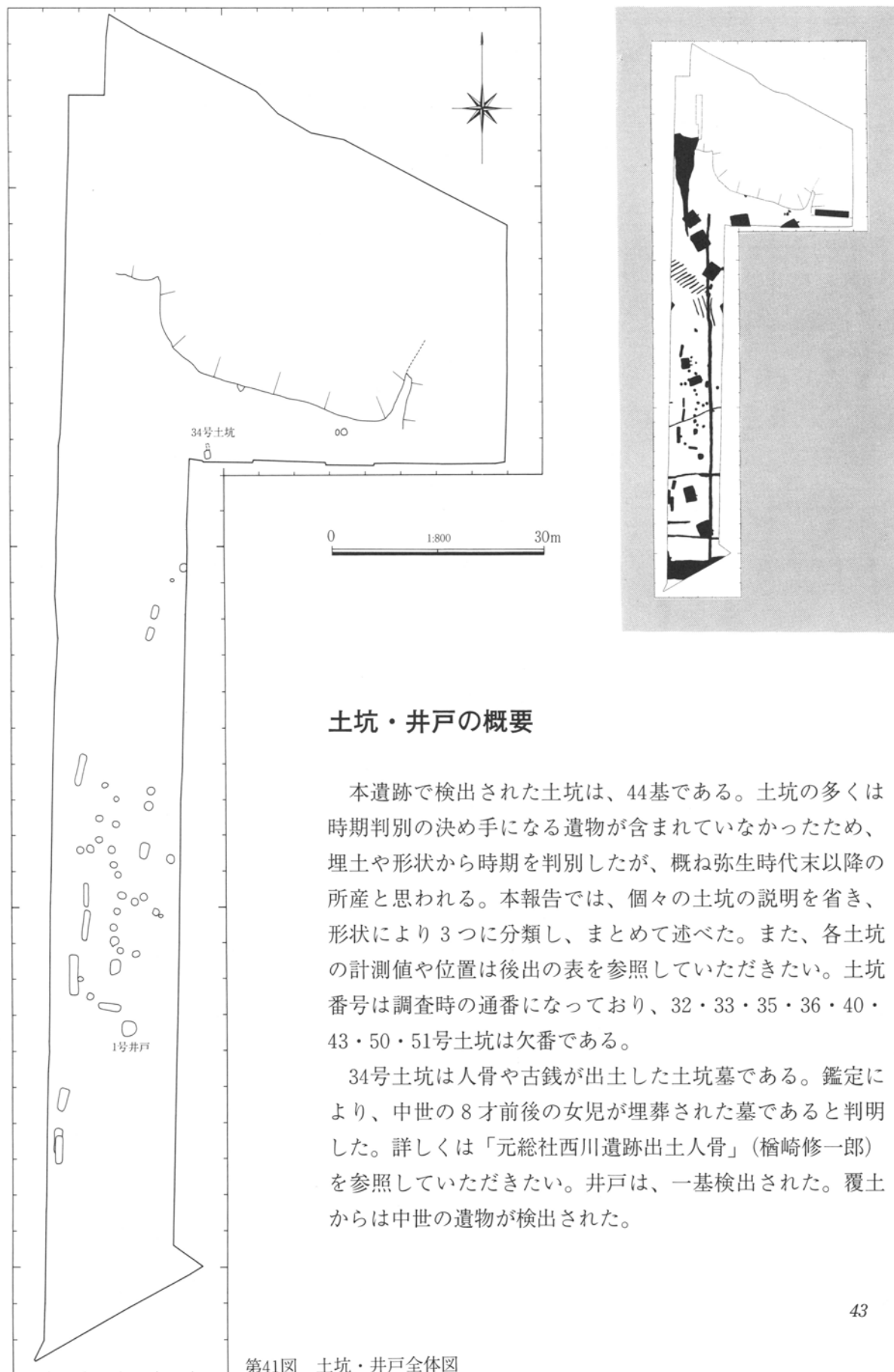
17号住居 竈

- 1 黒褐色土 赤色焼土粒、FA粒、As-C粒を含む。
- 2 黒褐色土 多量の赤色焼土ブロック、FA粒、As-C粒を含む。
- 3 黒褐色土 黄褐色ブロック、少量のFA粒、As-C粒を含む。下に灰層あり。
- ① 暗褐色土 多量の焼土粒、焼土ブロックを含む。(18号住居竈覆土)
- ② 暗褐色土 粘質土。(18号住居竈の貼り土か?)



第40図 17・18号住居、竈、出土遺物

[2] 土坑・井戸



土坑・井戸の概要

本遺跡で検出された土坑は、44基である。土坑の多くは時期判別の決め手になる遺物が含まれていなかったため、埋土や形状から時期を判別したが、概ね弥生時代末以降の所産と思われる。本報告では、個々の土坑の説明を省き、形状により3つに分類し、まとめて述べた。また、各土坑の計測値や位置は後出の表を参照していただきたい。土坑番号は調査時の通番になっており、32・33・35・36・40・43・50・51号土坑は欠番である。

34号土坑は人骨や古銭が出土した土坑墓である。鑑定により、中世の8才前後の女兒が埋葬された墓であると判明した。詳しくは「元総社西川遺跡出土人骨」(檜崎修一郎)を参照していただきたい。井戸は、一基検出された。覆土からは中世の遺物が検出された。

土坑・井戸 遺構・遺物

形状

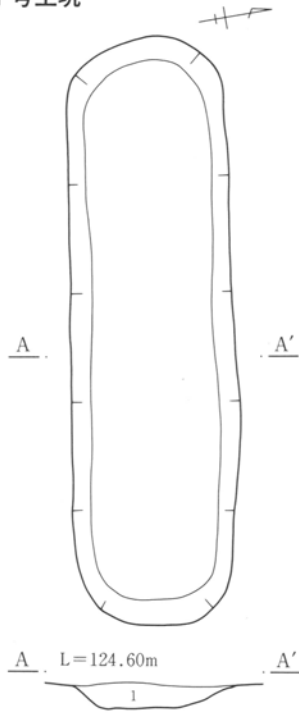
本遺跡の土坑はその形状から①長軸の長い長方形型と、②円形型、③その他の3つに分類できる。①長軸の長い長方形型に分類できる土坑は、1・5・6・8・28・47・48・49号土坑である。以上の土坑はAs-B軽石を覆土に含み、1108年の浅間の噴火以降の所産である。また28・48号土坑がそれぞれN-15°-E、N-12°-Eと傾き、1号土坑が東西が長軸方向を向く以外は、すべて南北方向に長軸を持つ。底部は平坦である。形状・覆土などから芋穴の可能性が考えられる。

②円形型に分類できる土坑は3・4・7・9・10～25・29・30・37～39・44～46号土坑である。その内25・38・39・44号土坑以外は底部がほぼ平らである。

覆土

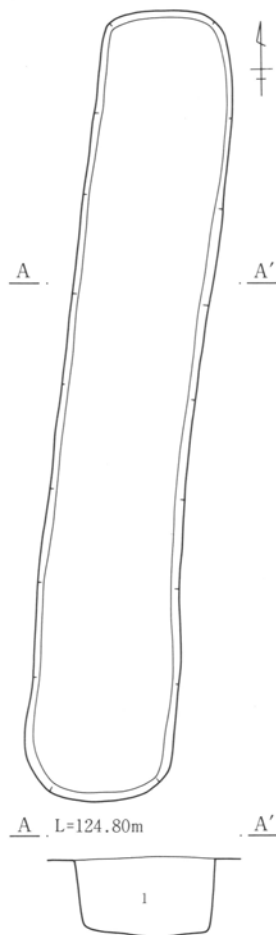
41・44・45・46・52号土坑は、覆土にAs-C軽石、Hr-FAを含み、As-B軽石を含まない。26・27号土坑は分層した覆土の上層にはAs-B軽石を含むが、下層は、Hr-FAを含み、As-B軽石を含まない。それ以外の38基の土坑はAs-B軽石を覆土に含み、1108年の浅間の噴火以降の所産である。

1号土坑



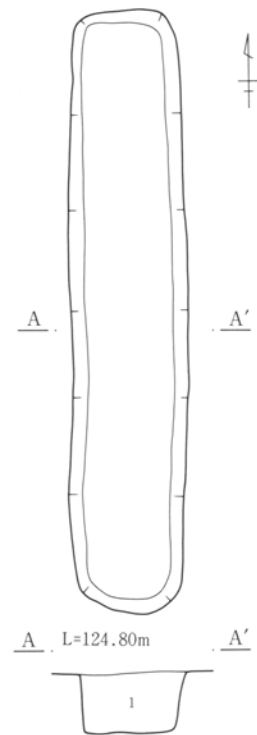
1号土坑
1 暗褐色土 As-B粒、
総社層ブロックを含む。

5号土坑



5号土坑
1 黒褐色土 As-B粒、褐色粘質土
ブロックを含む。

6号土坑



6号土坑
1 黒褐色土 黒色粘質土、
As-B粒を含む。

0 1 : 40 1 m

第42図 1・5・6号土坑

注目すべき土坑

本遺跡の土坑で遺物を含み、その遺物から時期判定できたものは、8・34・52号土坑である。

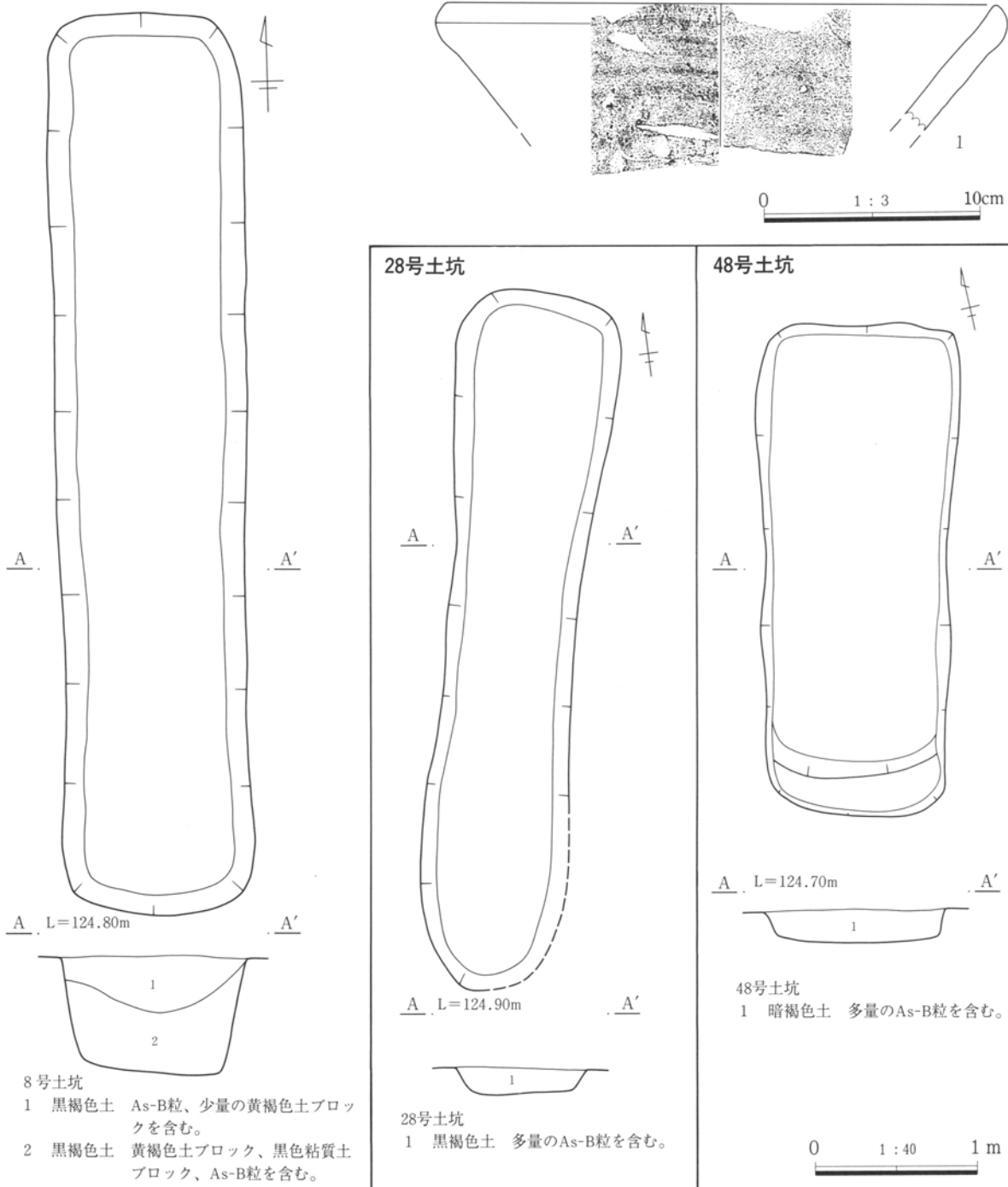
8号土坑は、①長軸型である。遺物は、中世の軟質陶器のすり鉢の口縁部片が伴う。

34号土坑は、人歯・骨、銅銭（永楽通宝・洪武通宝・元祐通宝の3種4枚）、川原石の遺物を伴う土

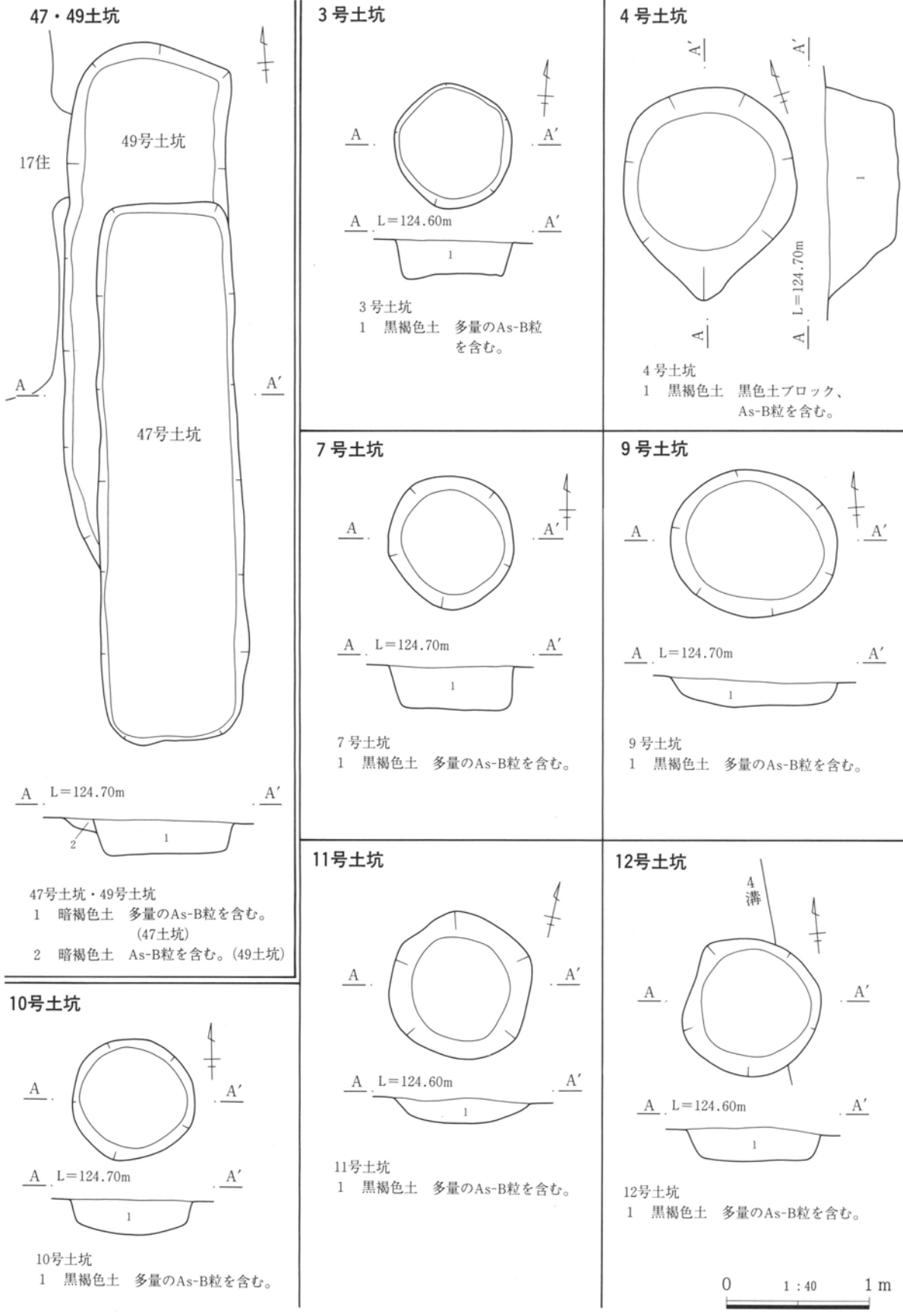
8号土坑

坑墓である。人歯・骨は橋崎修一郎氏による自然科学分析（第4章 [3]）を参照していただきたい。

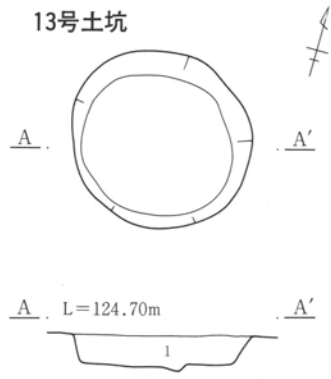
52号土坑は覆土にAs-C軽石、Hr-FAを含み、遺物としては、赤井戸・吉ヶ谷式土器の甕、樽式土器の甕が伴って出土した。土坑内に甕が据えられるように検出されており、土器棺の可能性を考えたい。



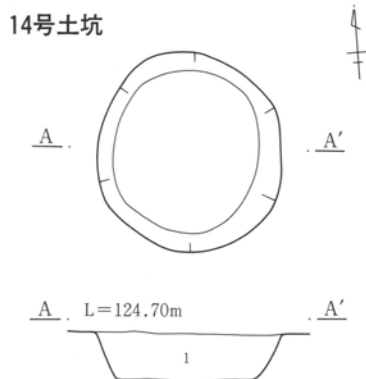
第43図 8・28・48号土坑、8号土坑出土遺物



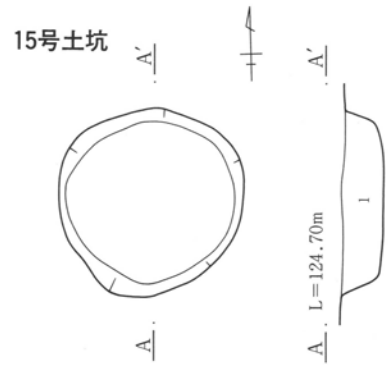
第44図 47・49・3・4・7・9～12号土坑



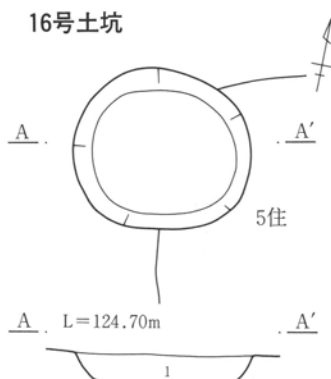
13号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。



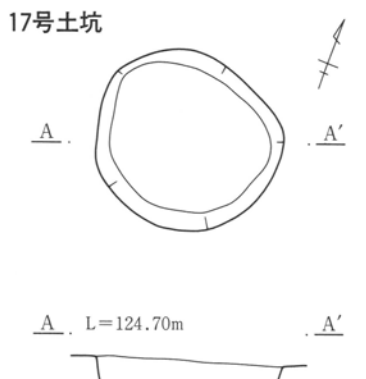
14号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。



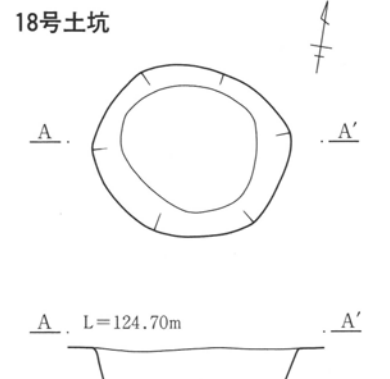
15号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。



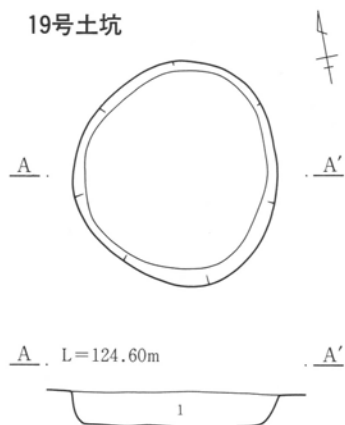
16号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。



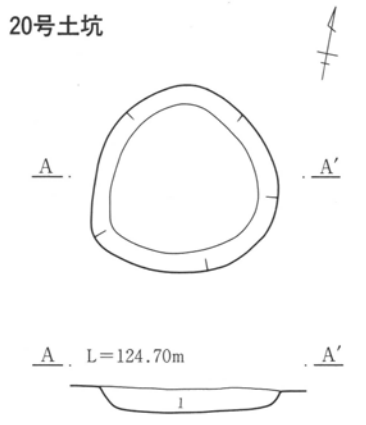
17号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。



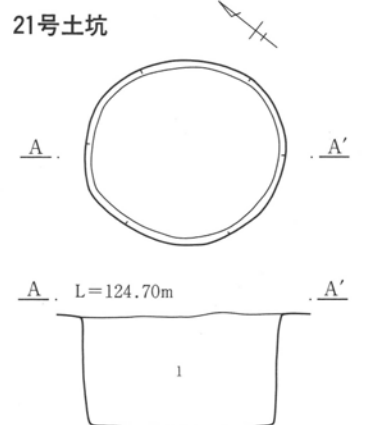
18号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。



19号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。



20号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。



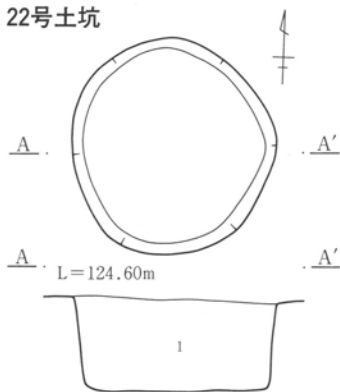
21号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。



第45図 13~21号土坑

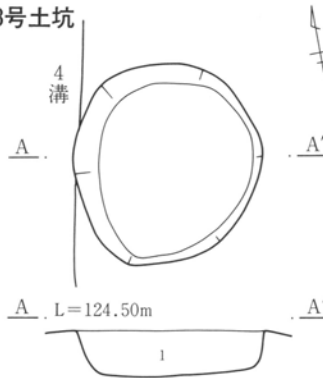
第3章 検出された遺構・遺物

22号土坑



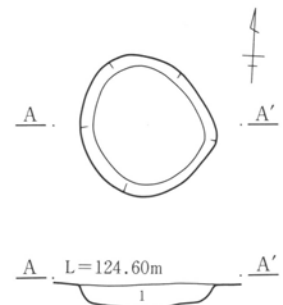
22号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。

23号土坑



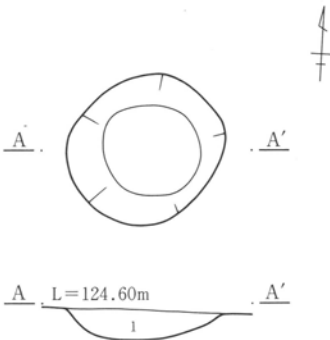
23号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。

24号土坑



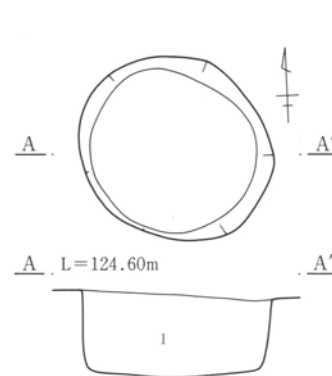
24号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。

25号土坑



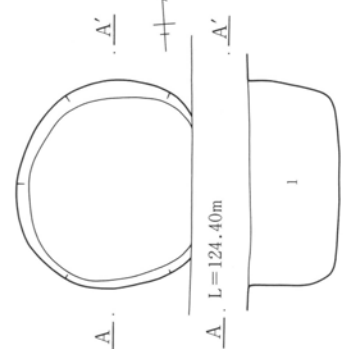
25号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。

29号土坑



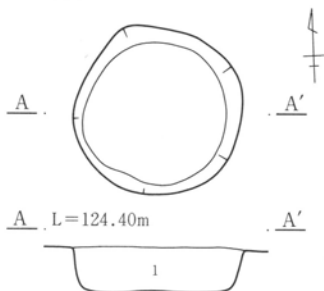
29号土坑
1 暗褐色土 As-B粒、黒色土ブロックを含む。

30号土坑



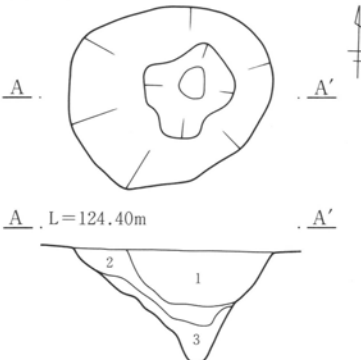
30号土坑
1 暗褐色土 As-B粒、黒色土ブロックを含む。

37号土坑



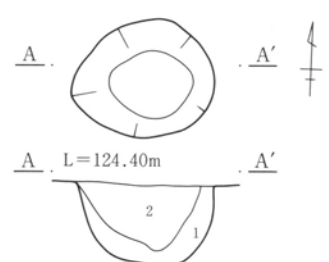
37号土坑
1 黒褐色土 As-B粒を含む。

38号土坑



38号土坑
1 黒褐色土 As-B粒、褐色土ブロックを含む。
2 黒褐色土 As-B粒を含む。
3 黒褐色土 多量のAs-B粒、褐色土ブロックを含む。

39号土坑

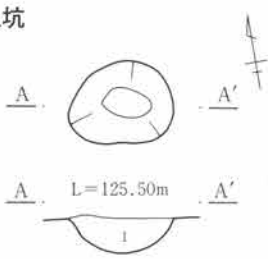


39号土坑
1 黒褐色土 多量の黄色地山ブロックを含む。
2 黒褐色土 As-B粒を含む。

0 1 : 40 1 m

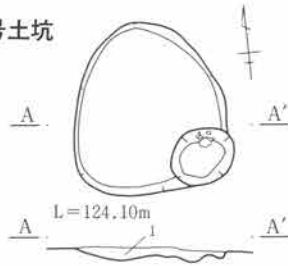
第46図 22～25・29・30・37～39号土坑

44号土坑



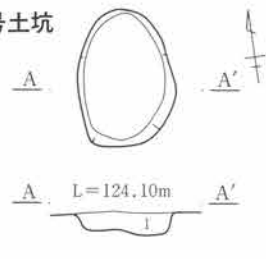
44号土坑
1 黒褐色土 多量の焼土粒、As-C粒、FA粒を含む。

45号土坑



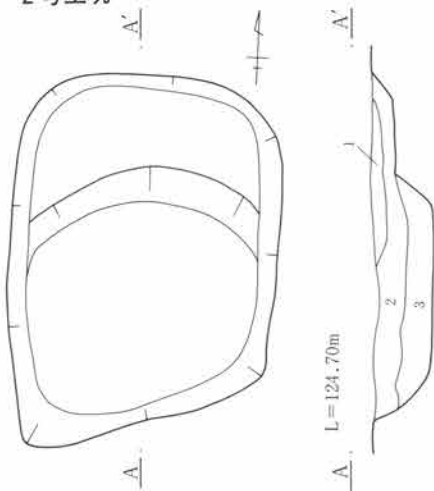
45号土坑
1 黒褐色土 As-C粒、FA粒を含む。

46号土坑



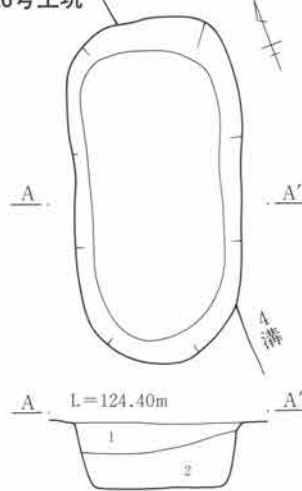
46号土坑
1 黒褐色土 As-C粒、FA粒を含む。

2号土坑



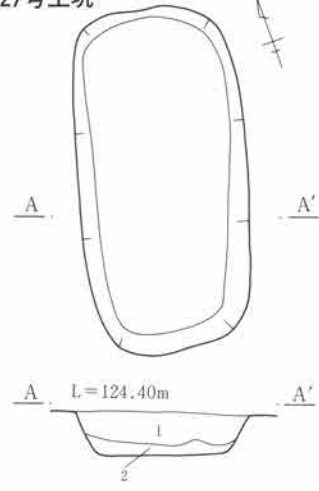
2号土坑
1 にびい黄褐色土 多量のAs-B粒を含む。
2 黒褐色土 多量のAs-B粒、焼土粒を含む。
3 黒褐色土 少量の総社層ブロックを含む。

26号土坑



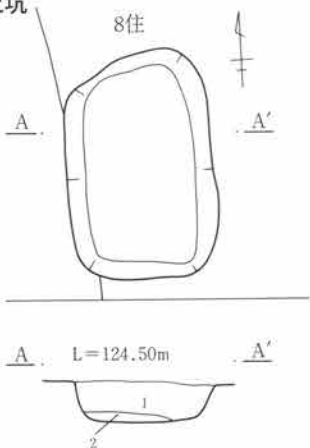
26号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒、少量のFA粒を含む。
2 黒色土 Hr-FA粒を含む。

27号土坑



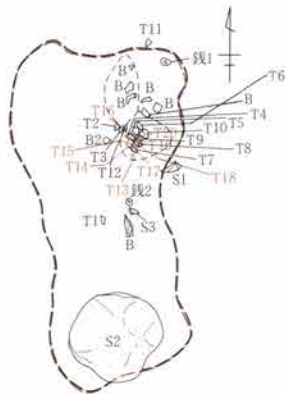
27号土坑
1 黒褐色土 多量のAs-B粒を含む。
2 黒色土 Hr-FA粒を含む。

31号土坑



31号土坑
1 暗褐色土 As-B粒を含む。
2 黒褐色土 Hr-FA粒、As-C粒、多量のAs-B粒を含む。

34号土坑

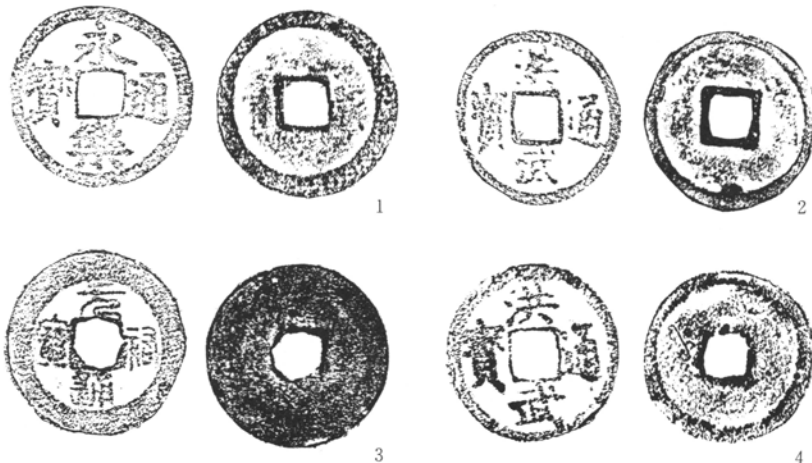


南北を軸に持つ土坑墓。出土した人骨より、頭位は北向きで、顔面部を西に向けていることが判明。永楽通寶・公武通寶・元祐通寶の3種4枚の銭貨が出土した。出土位置はほぼ底部に接する。土坑墓は、8号住居を掘り込み、覆土中からは直径約50cmの礫が検出された。

覆土や出土遺物から中世に比定される。

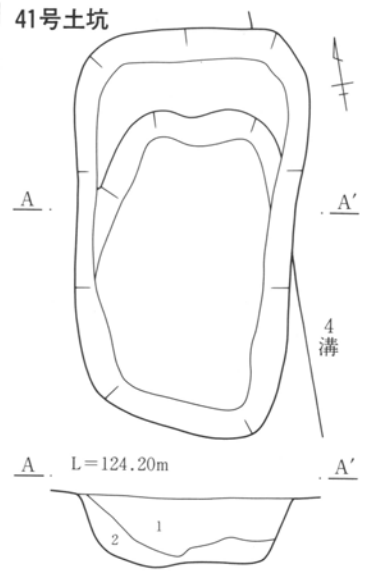
0 1:40 1 m

第47図 44~46・2・26・27・31・34号土坑



0 1:1 3cm

41号土坑

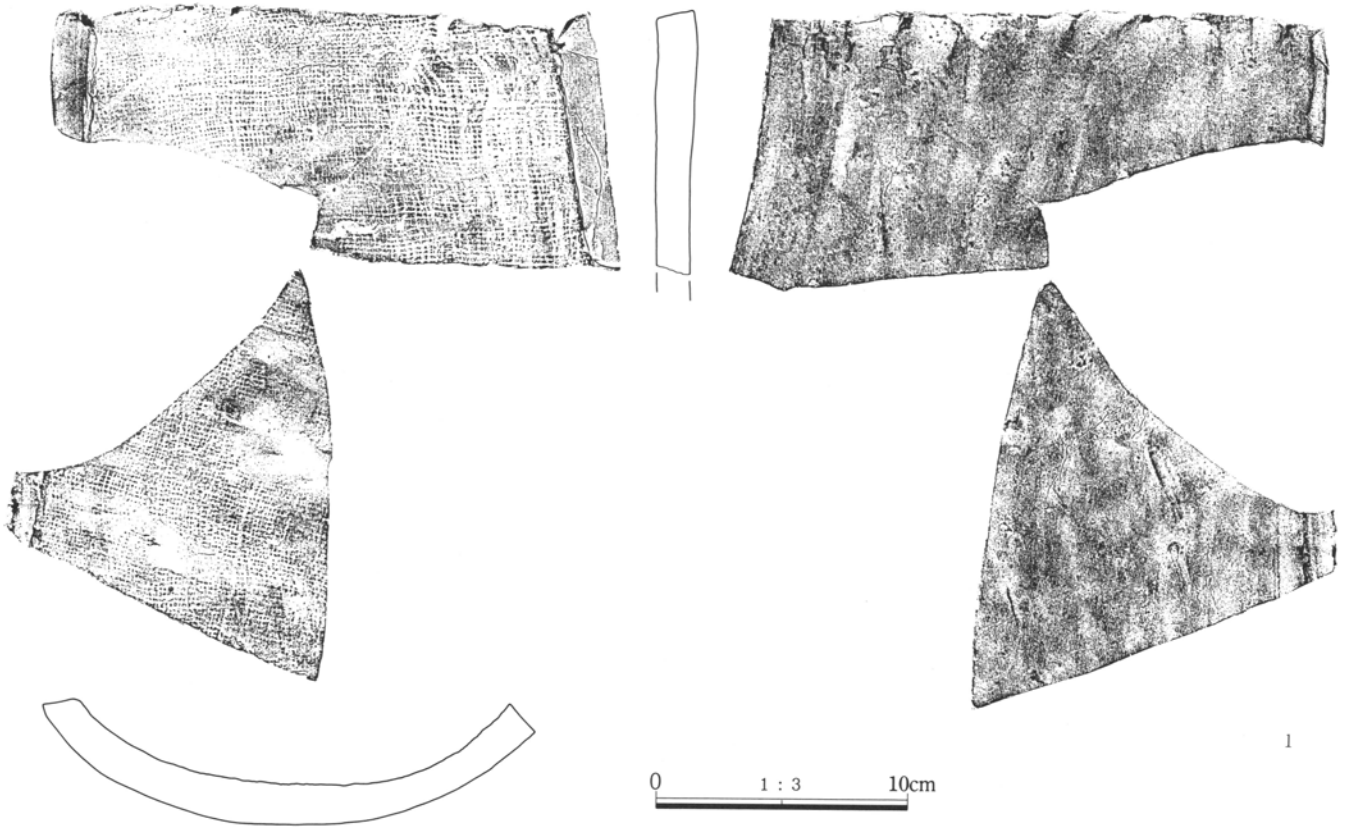


41号土坑

- 1 黒色土 As-C粒、FA粒を含む。
- 2 明黄褐色土 少量の黒色土ブロックを含む。

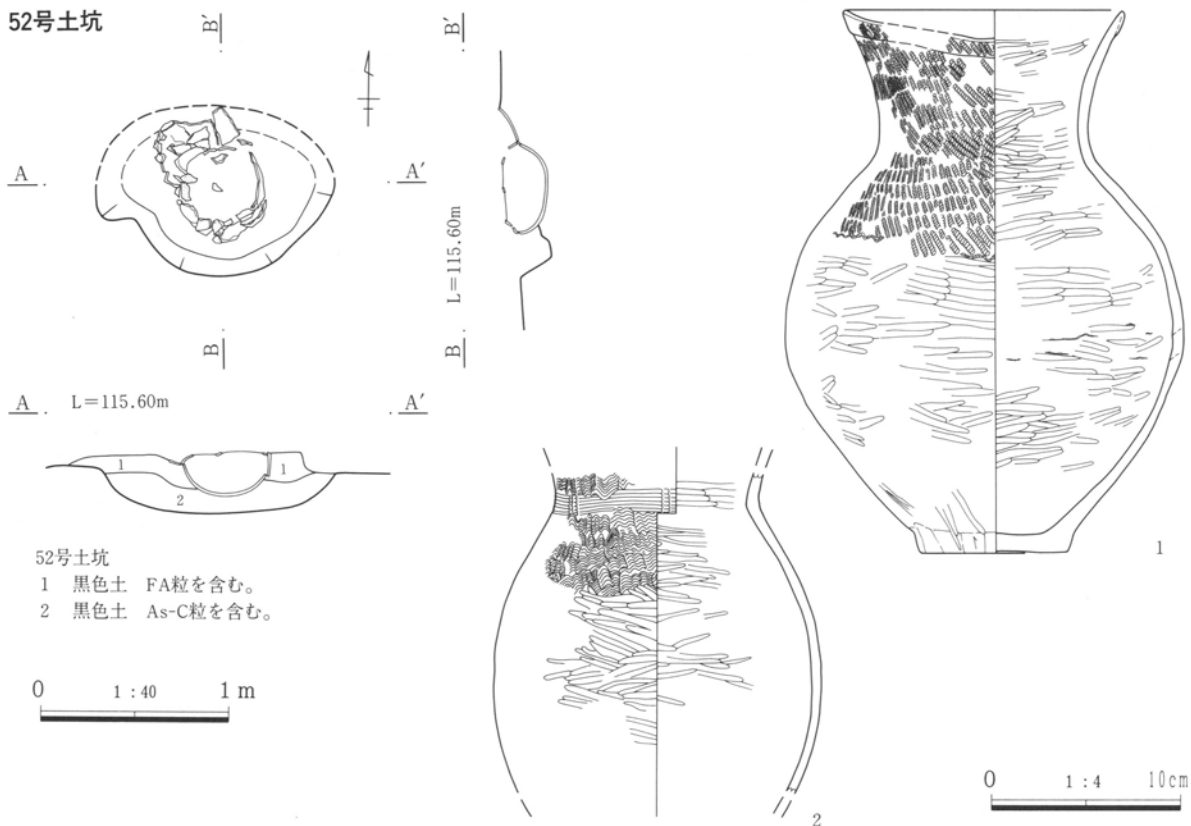
0 1:40 1m

42号土坑



第48図 41・42号土坑、34・42土坑出土遺物

52号土坑



52号土坑

- 1 黒色土 FA粒を含む。
- 2 黒色土 As-C粒を含む。

0 1:40 1 m

0 1:4 10cm

第49図 52号土坑、出土遺物

第2表 土坑一覧表

遺構名称	位置	平面形状	主軸方向	規模(m)			備考
				長さ	幅	深さ	
1号土坑	X=335, Y=465	①	N-81°-W	3.13	0.88	0.14	
2号土坑	X=340, Y=465	③	N-88°-W	1.85	1.43	0.33	
3号土坑	X=340, Y=460~465	②	-	0.88	0.82	0.27	
4号土坑	X=340~345, Y=465	②	-	1.50	1.21	0.50	
5号土坑	X=345, Y=465~470	①	N-5°-E	4.16	0.72	0.40	
6号土坑	X=350, Y=465	①	N-0°	3.21	0.63	0.32	
7号土坑	X=345, Y=460~465	②	-	0.93	0.88	0.30	
8号土坑	X=335~340, Y=470	①	N-0°	5.60	1.21	0.85	軟質陶器のすり鉢出土
9号土坑	X=350, Y=460	②	-	1.16	1.04	0.20	
10号土坑	X=350, Y=460~465	②	-	0.85	0.85	0.25	
11号土坑	X=350, Y=460	②	-	1.02	0.96	0.18	
12号土坑	X=345, Y=455~460	②	-	1.00	0.97	0.20	
13号土坑	X=355, Y=465	②	-	0.95	0.95	0.20	
14号土坑	X=355, Y=465	②	-	1.07	0.97	0.25	
15号土坑	X=355, Y=470	②	-	1.01	0.98	0.23	
16号土坑	X=355, Y=465	②	-	0.94	0.85	0.17	
17号土坑	X=360, Y=460~465	②	-	1.01	0.97	0.39	
18号土坑	X=360, Y=465	②	-	1.05	0.90	0.47	
19号土坑	X=360, Y=460	②	-	1.20	1.10	0.19	
20号土坑	X=355, Y=465	②	-	1.00	0.97	0.12	
21号土坑	X=345, Y=465	②	-	1.07	1.00	0.61	
22号土坑	X=355, Y=455	②	-	1.15	1.10	0.50	

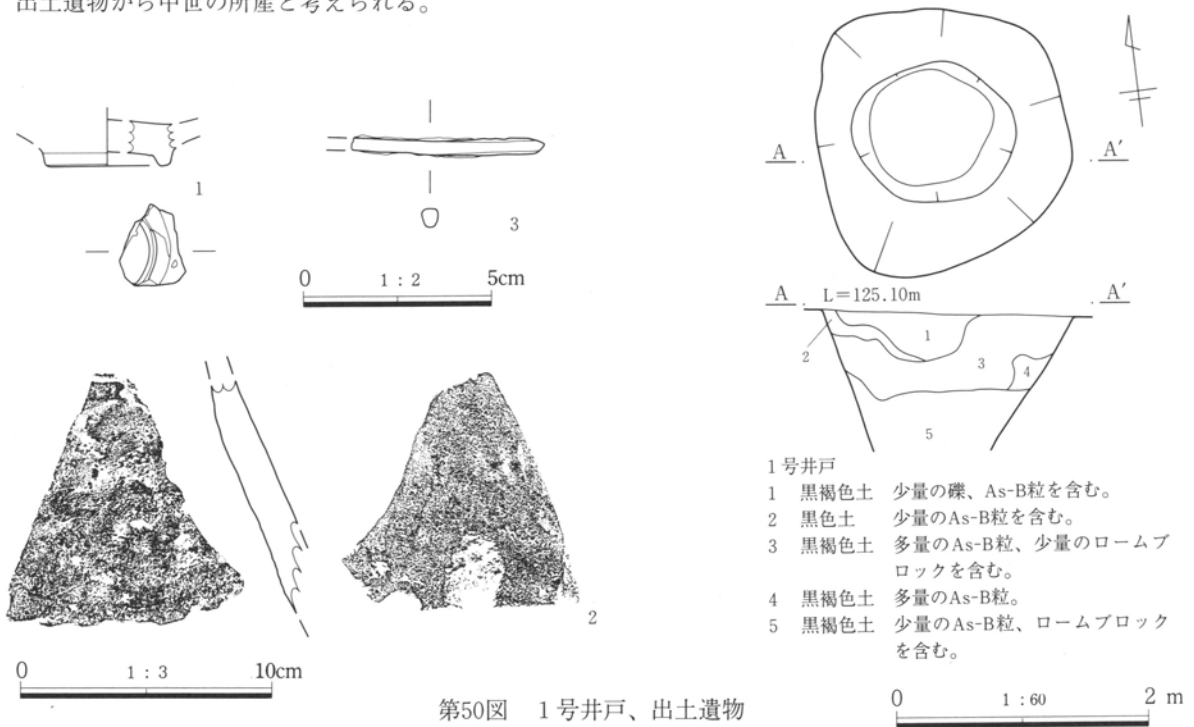
第3章 検出された遺構・遺物

第2表 土坑一覧表

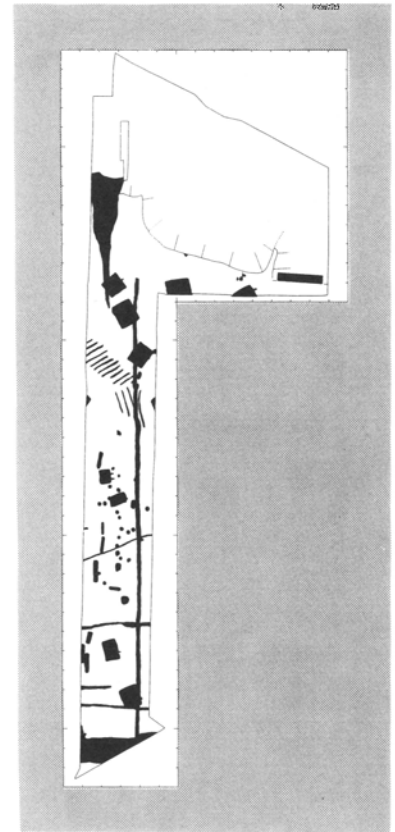
遺構名称	位置	平面形状	主軸方向	規模(m)			備考
				長さ	幅	深さ	
23号土坑	X=365, Y=460	②	—	1.05	1.01	0.25	
24号土坑	X=365, Y=465	②	—	0.75	0.72	0.13	
25号土坑	X=365, Y=465	②	—	0.83	0.74	0.15	
26号土坑	X=385, Y=460	③	N-19°-E	1.82	0.90	0.35	
27号土坑	X=390, Y=455~460	③	N-13°-E	1.80	0.89	0.23	
28号土坑	X=365~370, Y=465~470	①	N-15°-E	4.34	0.81	0.16	
29号土坑	X=350, Y=460	②	—	1.05	0.96	0.44	
30号土坑	X=395, Y=455	②	—	1.09	—	0.50	
31号土坑	X=410, Y=450	③	N-0°	1.17	0.78	0.21	
34号土坑	X=410, Y=450	③	N-0°	(1.76)	(0.63)	—	土坑墓
37号土坑	X=335, Y=465	②	—	0.90	0.88	0.23	
38号土坑	X=340, Y=460	②	—	1.08	0.94	0.70	
39号土坑	X=335~340, Y=470	②	—	0.77	0.63	0.43	
41号土坑	X=355, Y=460	③	N-8°-E	2.14	1.16	0.38	
42号土坑	X=420, Y=445	③	—	0.98	—	—	
44号土坑	X=395, Y=455	②	—	0.55	0.43	0.19	
45号土坑	X=415, Y=430	②	—	0.92	0.80	0.06	
46号土坑	X=415, Y=430	②	—	0.73	0.51	0.12	
47号土坑	X=310, Y=470	①	N-3°-E	3.74	1.01	0.26	
48号土坑	X=320, Y=470	①	N-12°-E	3.03	1.10	0.11	
49号土坑	X=310, Y=470	①	N-3°-E	(3.78)	1.11	0.07	
52号土坑	X=345, Y=455	③	—	1.28	(0.90)	0.23	土器棺の可能性

1号井戸 (第50図、PL23・36)

1区南で検出された。径約2mの規模を持つ。断面形状は、上端の広がるロート状を呈する。覆土、出土遺物から中世の所産と考えられる。



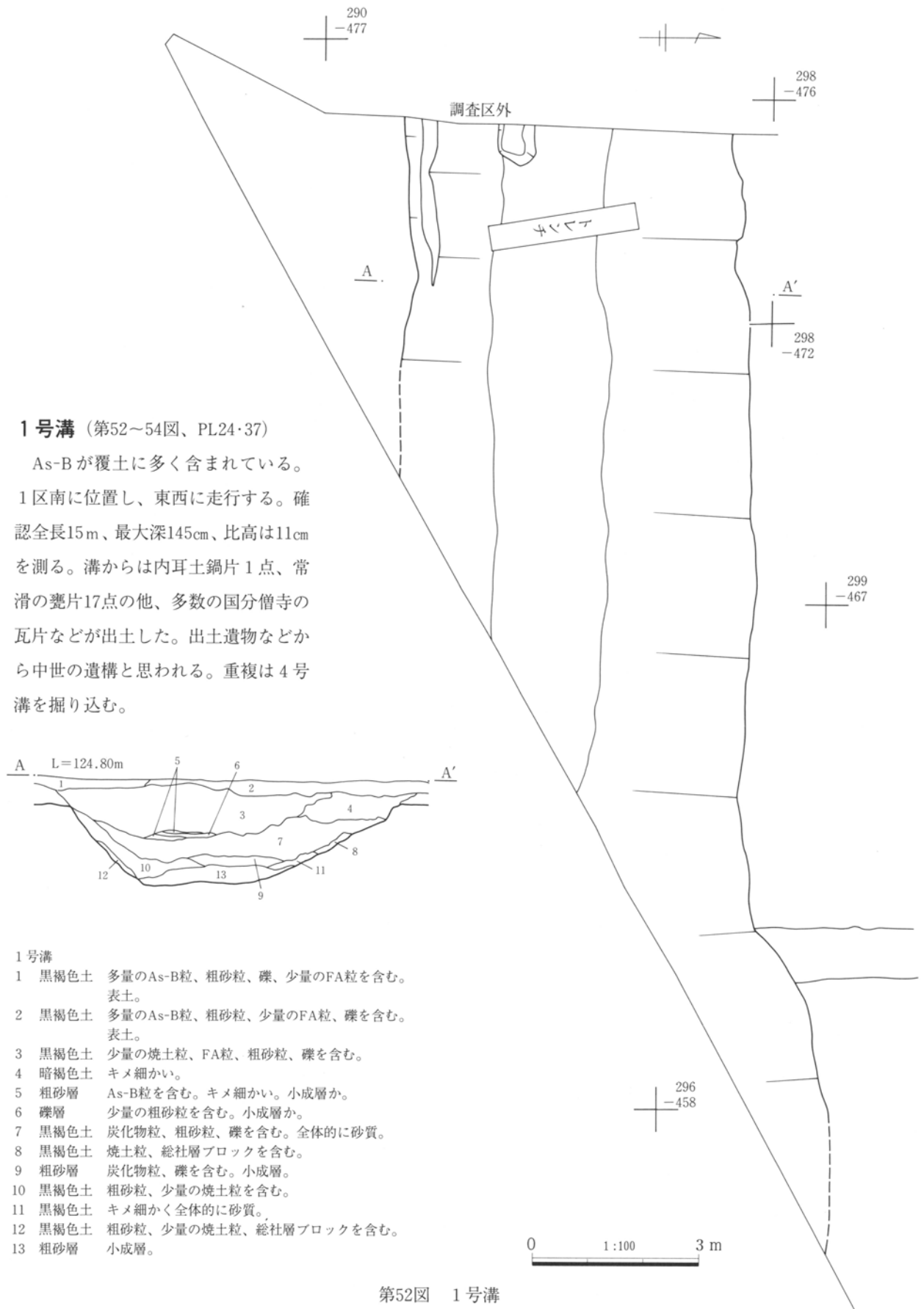
[3] 溝・畠



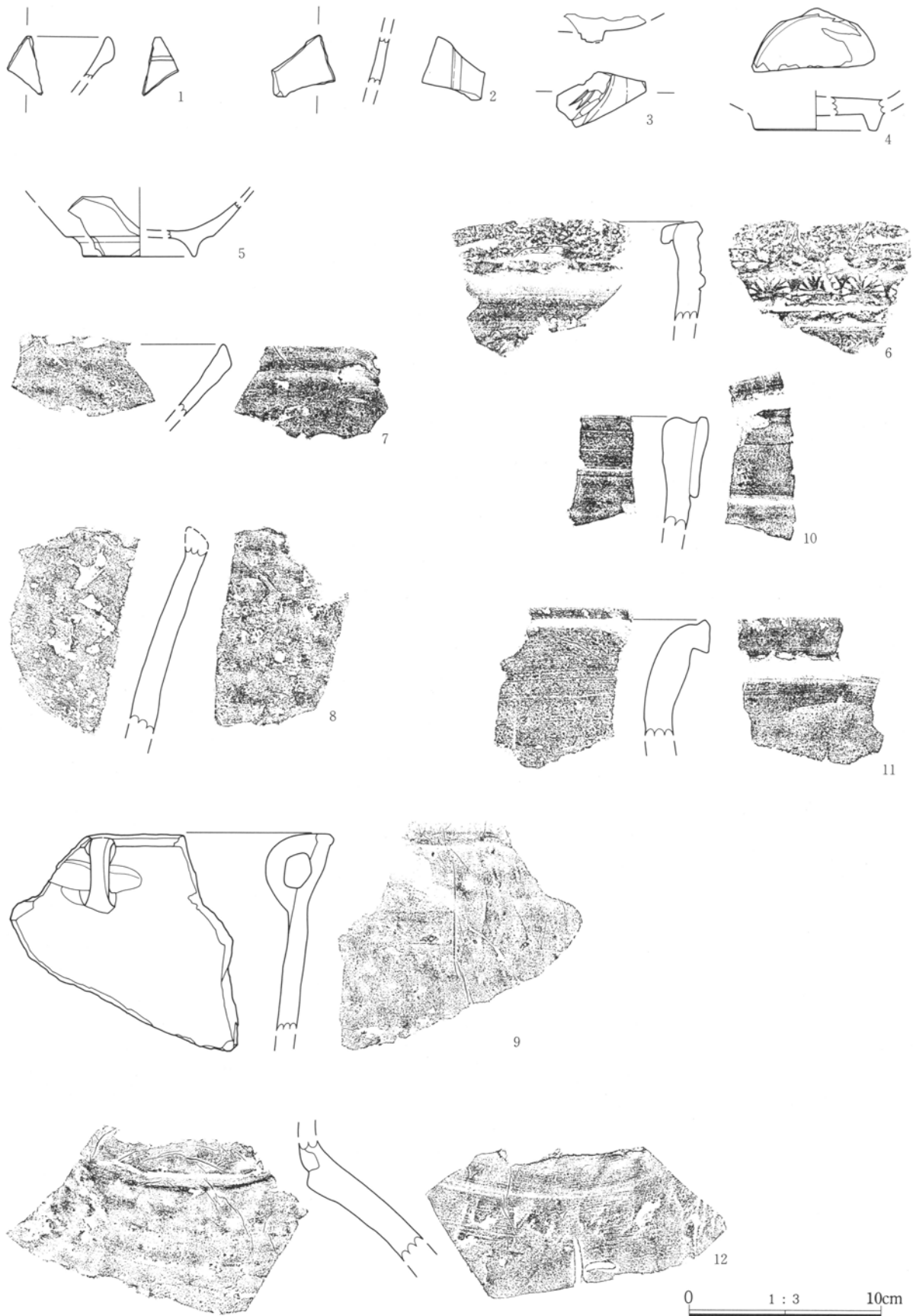
溝・畠の概要

本遺跡で検出された溝は、8条である。1号溝は、上幅約6m、深さ約2mの中世に位置づけられる溝である。非常に大規模なことからこの地域の該期の歴史的環境において存在を無視できない遺構である。4号溝は南北に走行する直線の溝である。走行方向を北に追うと、上野国分僧寺南大門付近にあたる。本調査では、国分僧寺が繁栄していた時期と重なる唯一の遺構である。9号溝は、『群馬県遺跡台帳』に国分寺参道と登録されている区割りから検出された溝である。1号溝と同じく大規模な中世の溝であることが判明した。以上3条の性格については、まとめ「国分寺参道について」を参照していただきたい。

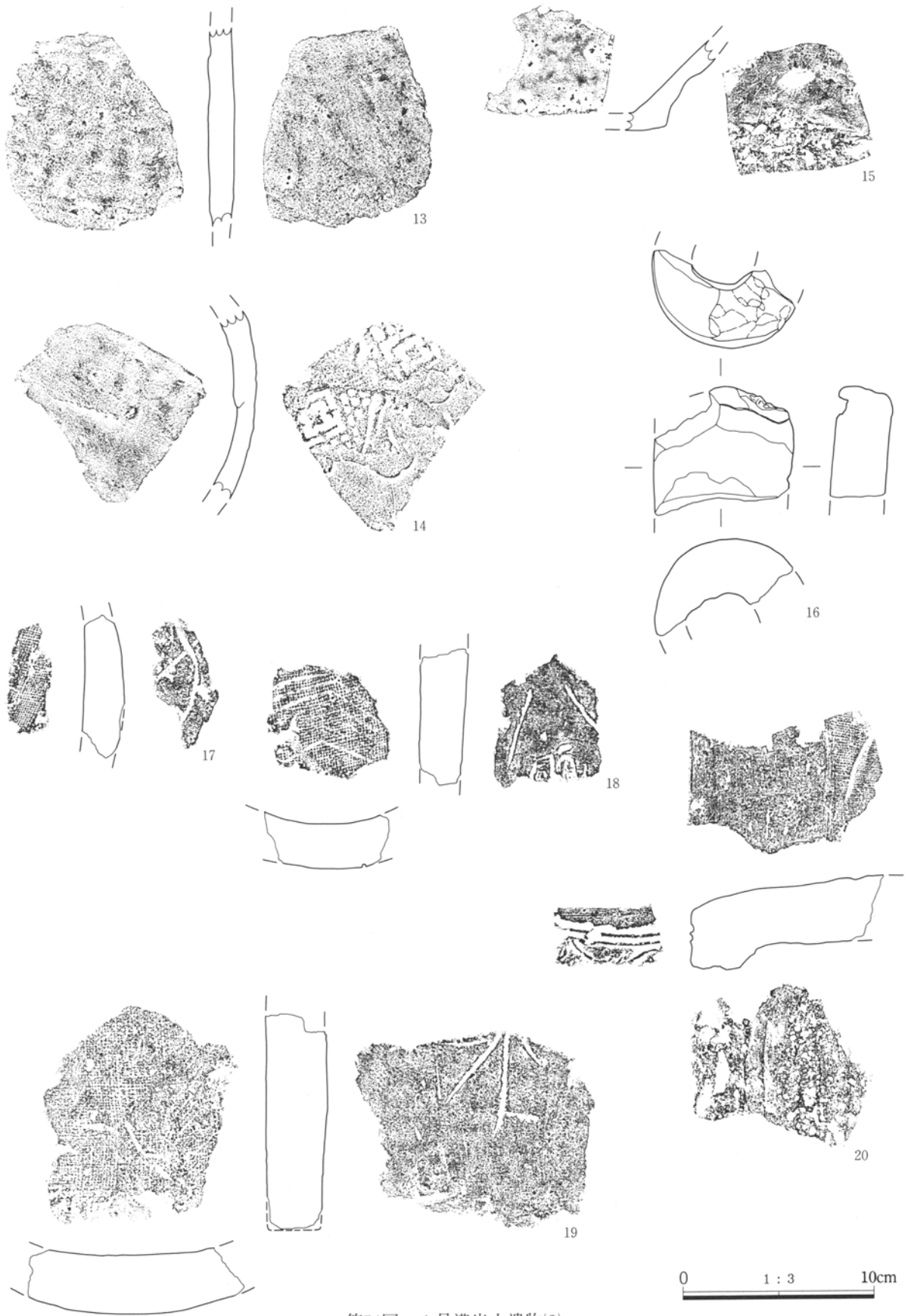
本遺跡で検出された2号畠は、As-C直下の層位をもつ、ヒエが栽培されていた可能性がある畠である。遺構は、周辺の古墳時代初頭の竪穴住居跡に伴うものと考えられる。詳しくは、自然科学分析「土層とテフラの分析・植物珪酸体分析（2号畠）」を参照していただきたい。



第52図 1号溝



第53图 1号溝出土遺物(1)



第54図 1号溝出土遺物(2)

2号溝 (第55図、PL24)

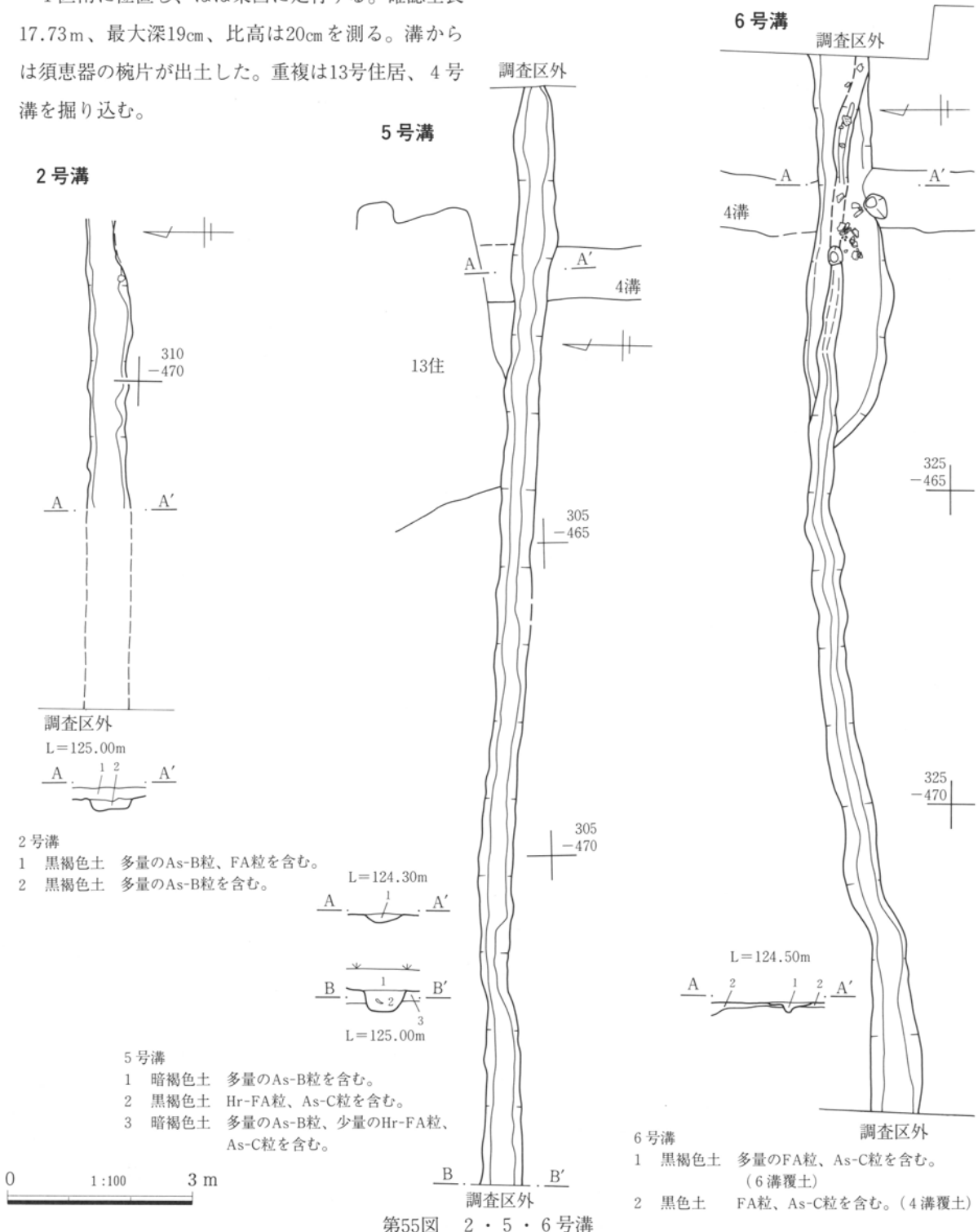
1区南に位置し、東西に走行する。確認全長4.60m、最大深7cm、比高は6cmを測る。覆土にAs-Bを多く含む。遺物はない。

5号溝 (第55・58図、PL25・38)

1区南に位置し、ほぼ東西に走行する。確認全長17.73m、最大深19cm、比高は20cmを測る。溝からは須恵器の椀片が出土した。重複は13号住居、4号溝を掘り込む。

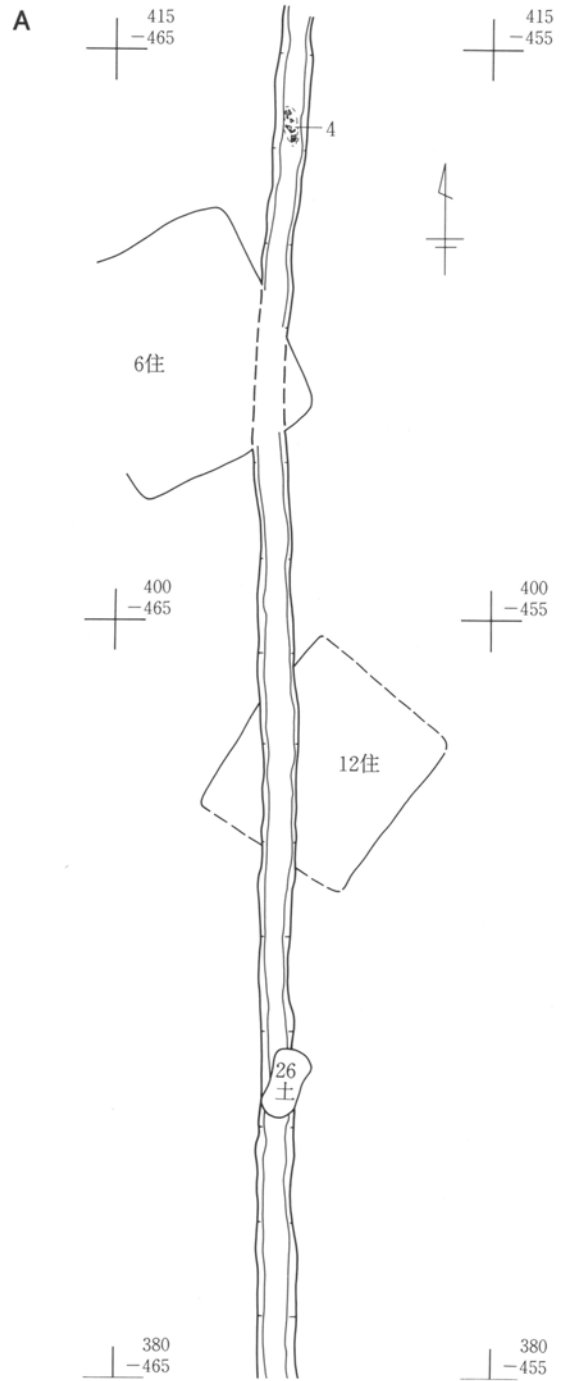
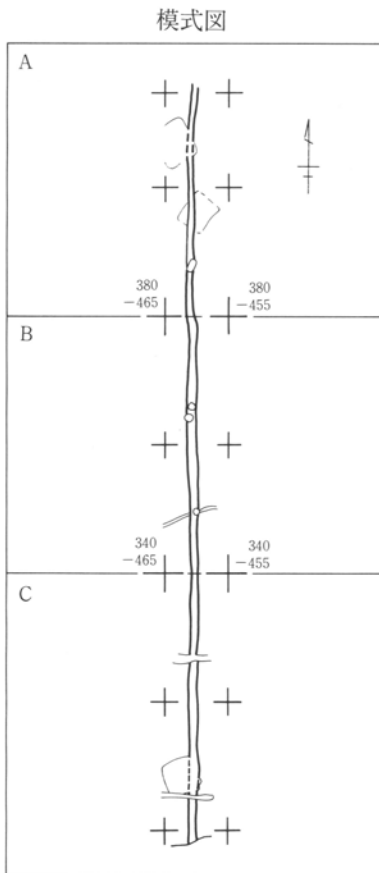
6号溝 (第55・58図、PL26・38)

1区南に位置し、ほぼ東西に走行する。確認全長17.12m、最大深27cm、比高9cmを測る。溝からは土師器の坏片、須恵器の甕片が出土した。重複は、4号溝を掘り込む。



4号溝 (第56・57・58図、PL25・37・38)

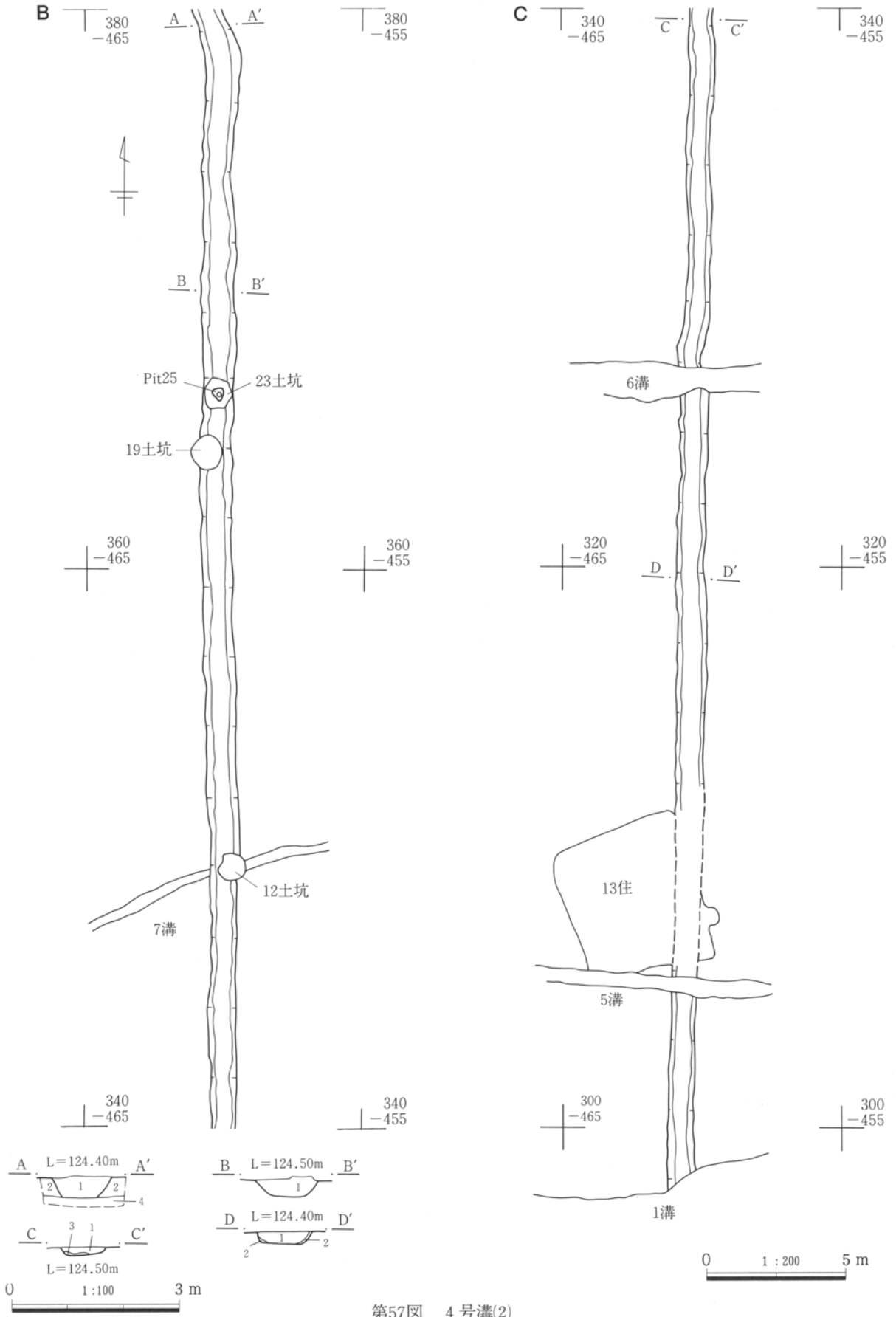
1区東に位置し、南北に一直線に走行する。南端は1号溝に切れ、北端は明確に確認できなかった。遺物は少なく、時期判定可能な遺物は6点で、他は小破片数点が検出されたのみである。確認全長120m、最大深37cm、比高は42cmを測る。覆土にAs-B軽石は含まれず、1108年以前の埋没である。Hr-FA、As-Cを含む。出土遺物に8世紀後半から9世紀の所産と思われる須恵器の坏と甕の口縁部が含まれており、その時期までは遺構が存在していたと考えられる。溝を北に延長すると、国分僧寺の南大門付近にあたる。重複は、6、12号住居、7号溝を掘り込み、12、19、23、26号土坑、1、6、5号溝に掘り込まれている。13号住居との重複関係は平面プランや土層断面などから判断することはできなかった。出土遺物から、4号溝が13号住居を掘り込んだと考えられる。



- 4号溝
- 1 黒褐色土 多量のHr-FA粒、As-C粒を含む。
 - 2 黒褐色土 少量のAs-C粒を含む。
 - 3 黄褐色土 砂質土。
 - 4 褐色土 多量の白色軽石を含む。黄褐色土ブロックを含む。

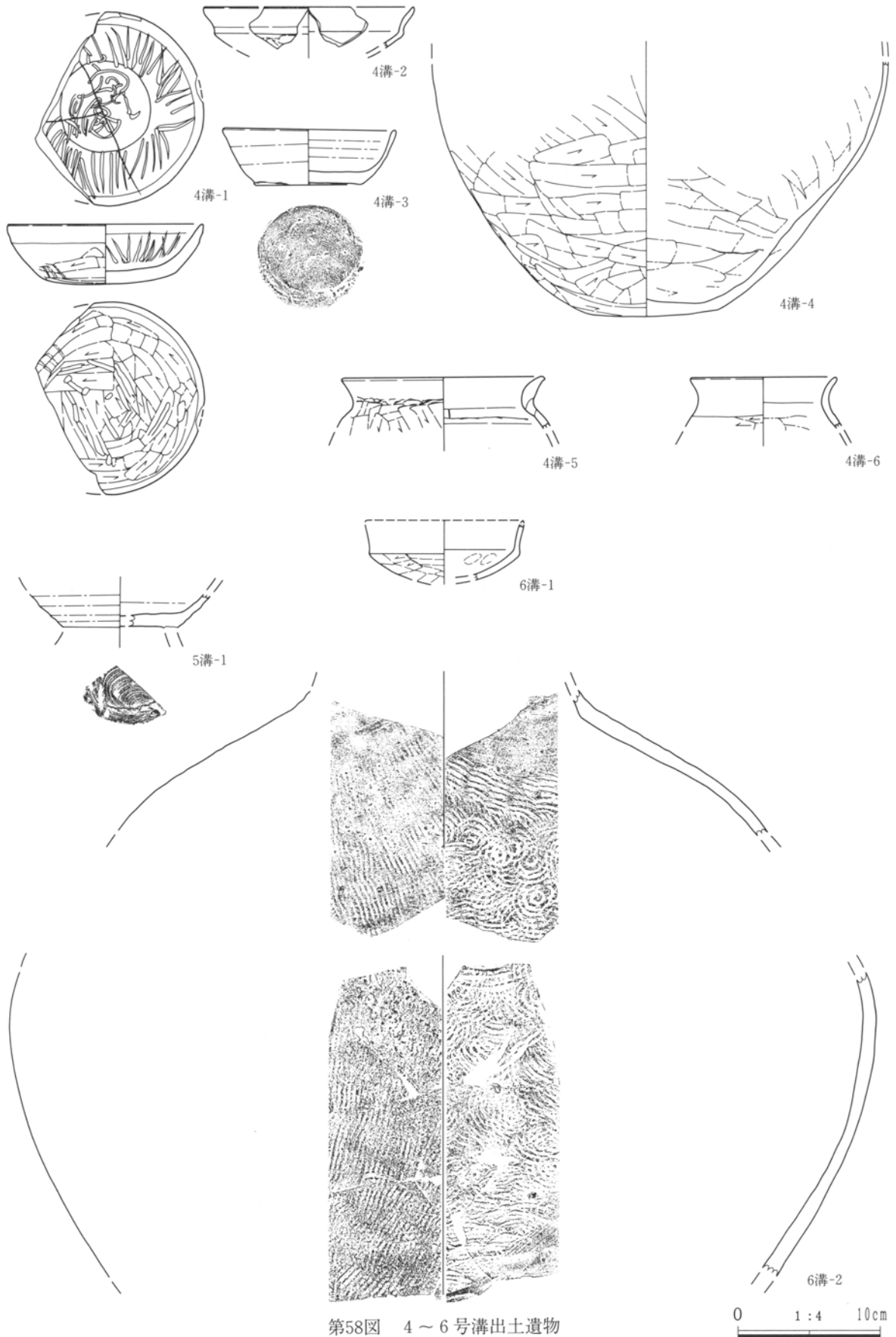
0 1 : 200 5 m

第56図 4号溝(1)



第57図 4号溝(2)

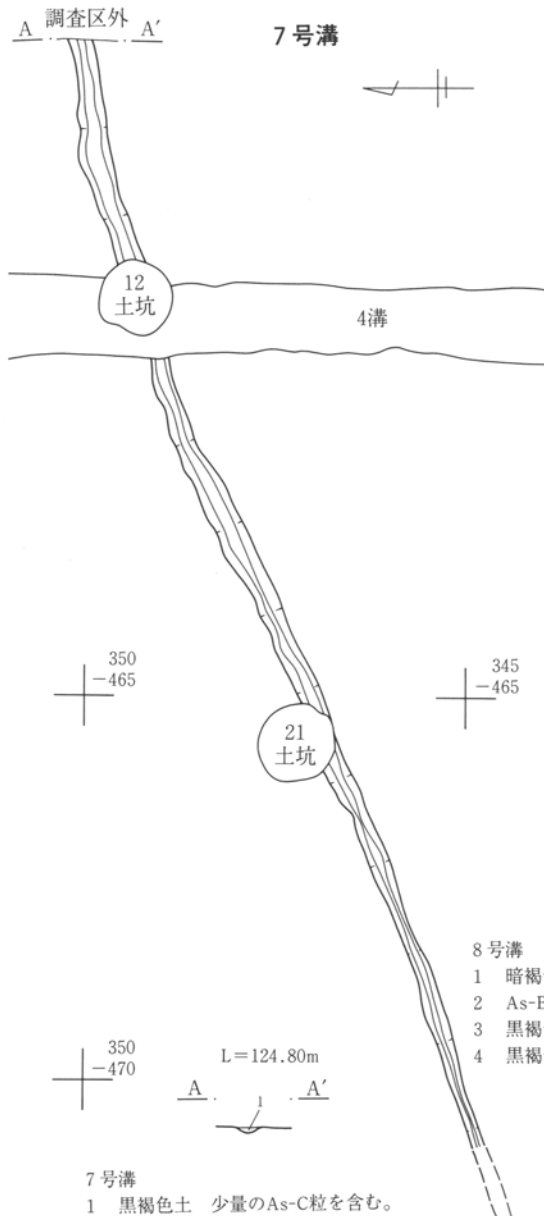
第3章 検出された遺構・遺物



第58図 4～6号溝出土遺物

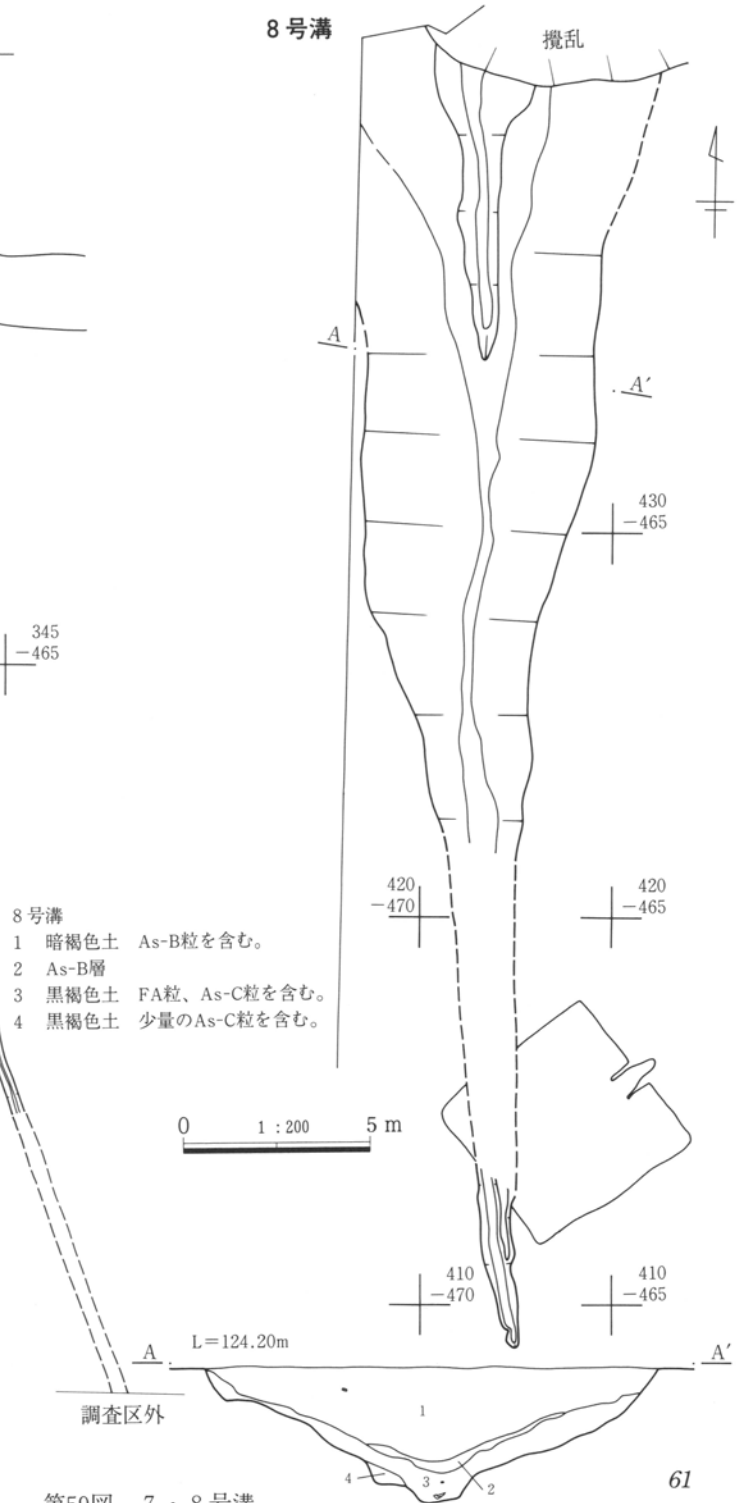
7号溝 (第59図、PL26)

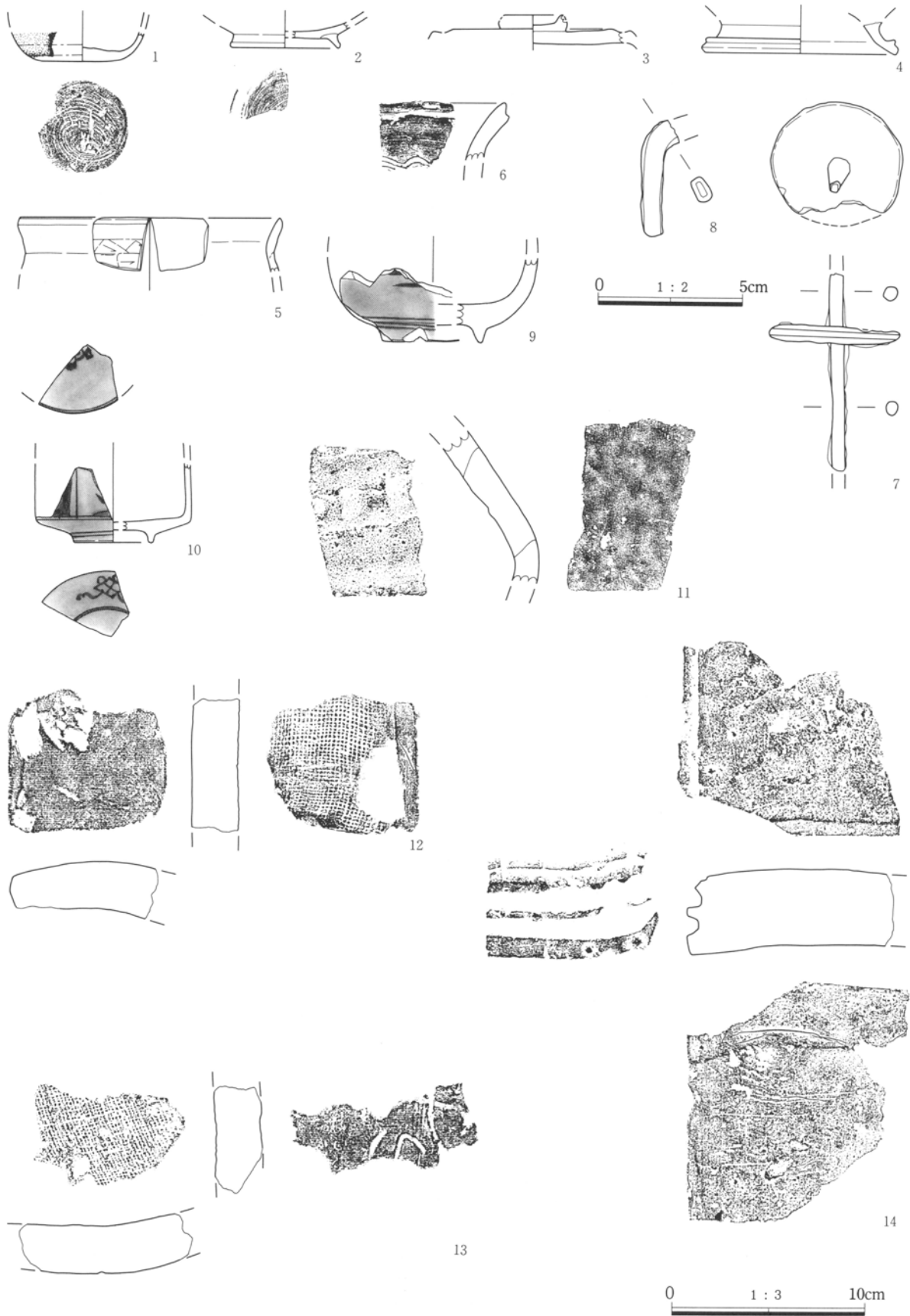
1区中央に位置し、ほぼ東西に走行する。確認全長15.60m、最大深10cm、比高は22cmを測る。遺物はない。覆土にHr-FA以降のテフラは含まない。重複は、4号溝、21号土坑、12号土坑に掘り込まれる。



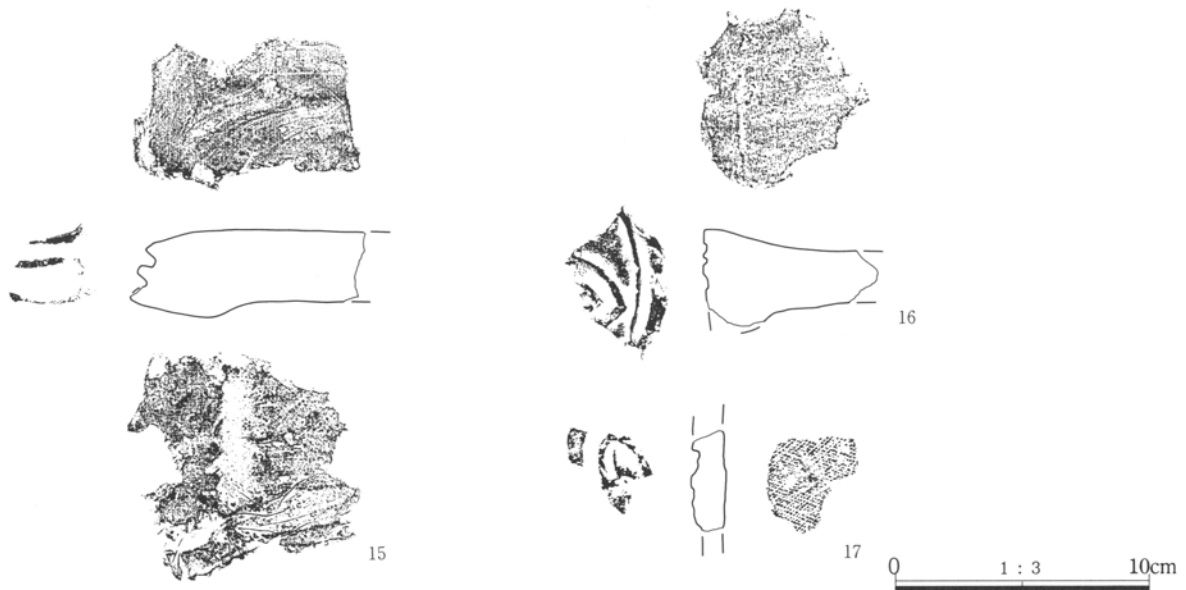
8号溝 (第59～61図、PL24・26・38)

2区西に位置し、ほぼ南北に走行する。確認全長33.30m、最大深179cm、比高は265cmを測る。間層にAs-B軽石があり、それ以前の所産であることがわかる。覆土、遺物などから近世以降に埋没した自然流路と考えられる。遺構からは馬歯が出土した。詳しくは自然科学分析を参照していただきたい。





第60図 8号溝出土遺物(1)



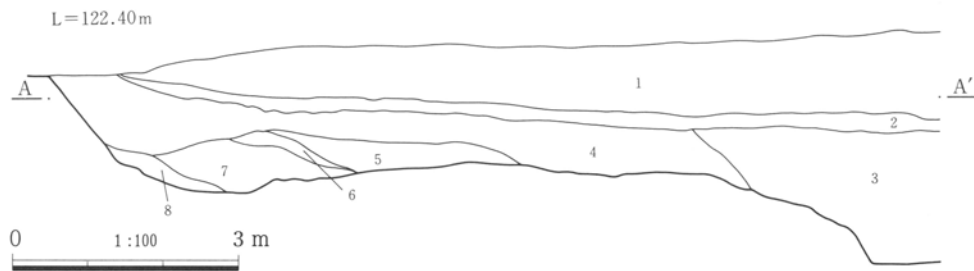
第61図 8号溝出土遺物(2)

9号溝 (第62図、PL27)

As-Bが覆土に多く含まれている。2区東に位置し、南北に走行する。最大深300cmを測る。土層断面のみのトレンチ調査である。溝からは遺物は検出されなかった。遺構は「群馬県遺跡台帳」に(伝)国分寺参道として登録されている短冊状の区画から検出された。

9号溝

- 1 褐色土 (やや粒子が粗い) As-B粒を含む。
- 2 褐色土 (やや灰色) 多量のAs-B粒を含む。
- 3 褐色土 As-B粒を含む。
- 4 黄褐色土 シルト。水成堆積。As-B粒を含む。
- 5 褐色土 As-B粒を含む。水成堆積。
- 6 褐色土 多量の礫を含む。
- 7 シルト層
- 8 黒褐色土 シルト層。水成堆積。

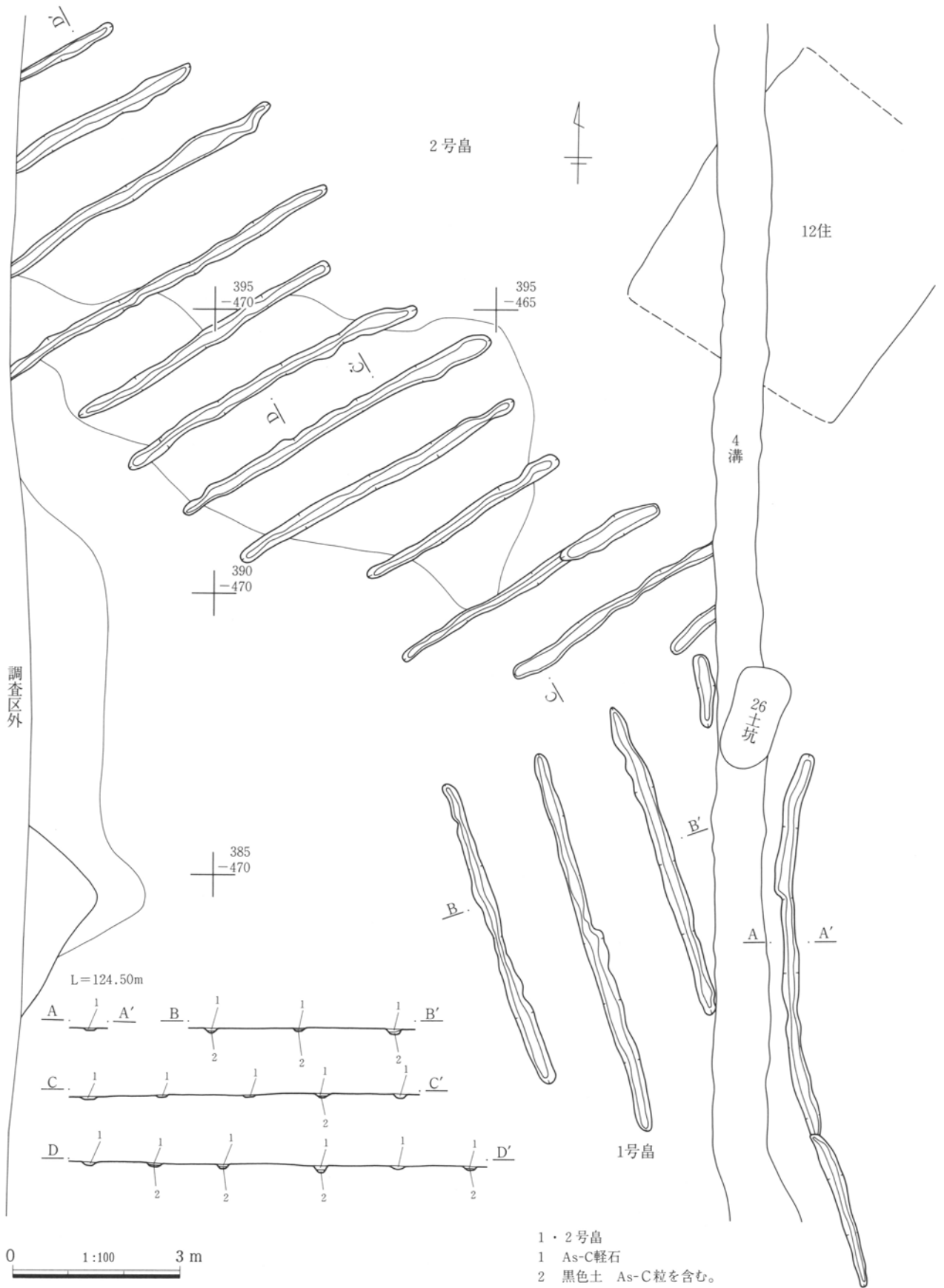


第62図 9号溝

1・2号畠 (第63図、PL27・28)

1区北に位置する。1号畠の畝間は、溝状に並行して4条、1m前後の間隔で検出された。畠は北から西へ約20°傾いている。2号畠の畝間は、溝状に並行して12条、同じく1m前後の間隔で検出された。畠は北から東へ60°傾いている。畝間にはAs-C軽石が堆積。テフラ分析からAs-C直下の遺構であることが判明した。またプラントオパール分析では、

ヒエが栽培されていた可能性が認められた(分析は2号畠)。周囲で検出された6・8・11・12号住居の厳密な構築と廃絶の時期は不明であるが、①出土土器に大きな時間差がないことや、②As-C軽石が比較的純度が高い状態で廃絶時に堆積していることから1・2号畠と4棟の古墳時代初頭の竪穴住居跡は、ほぼ同時期である可能性が高いと考えられる。

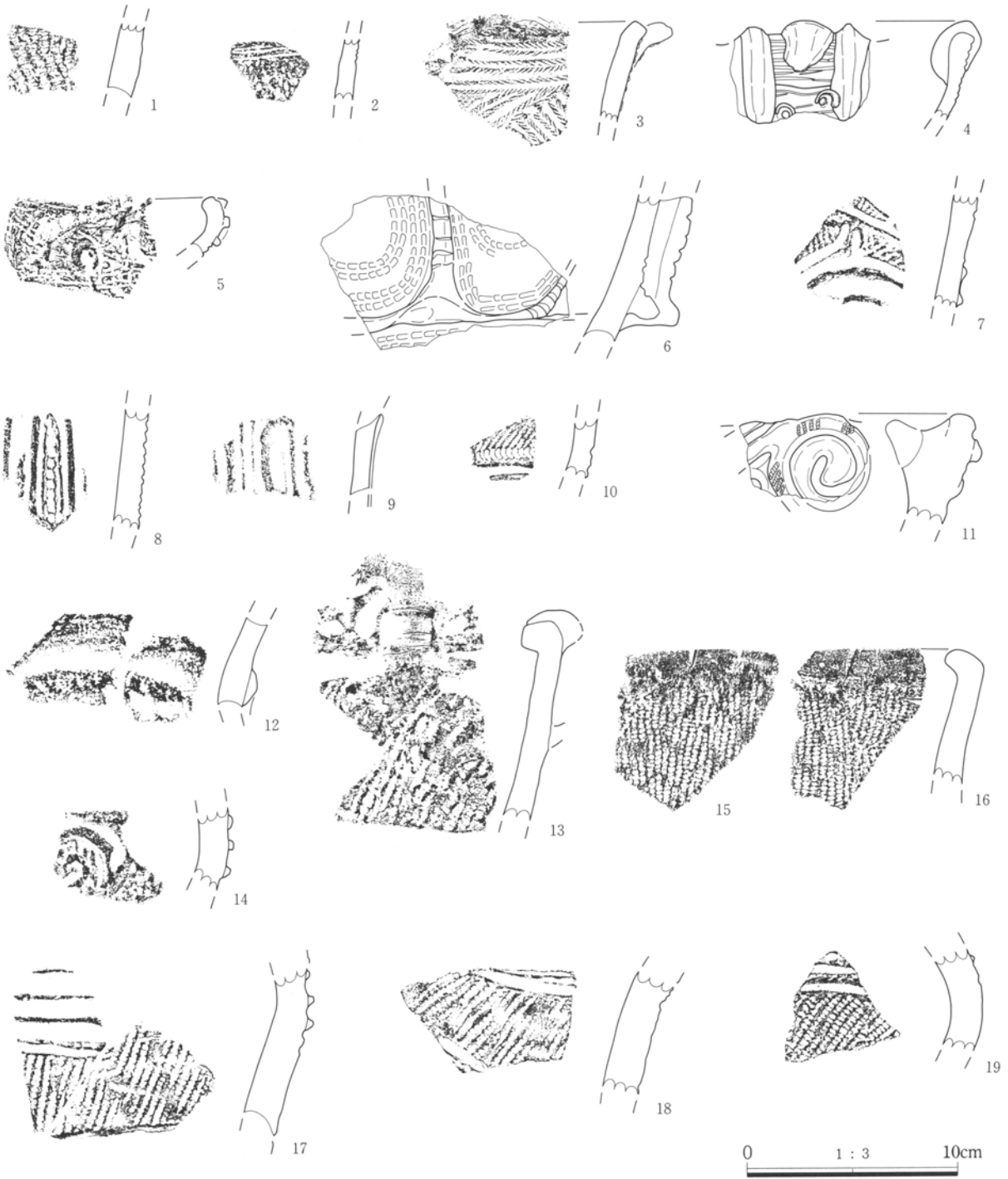


第63図 1・2号畠

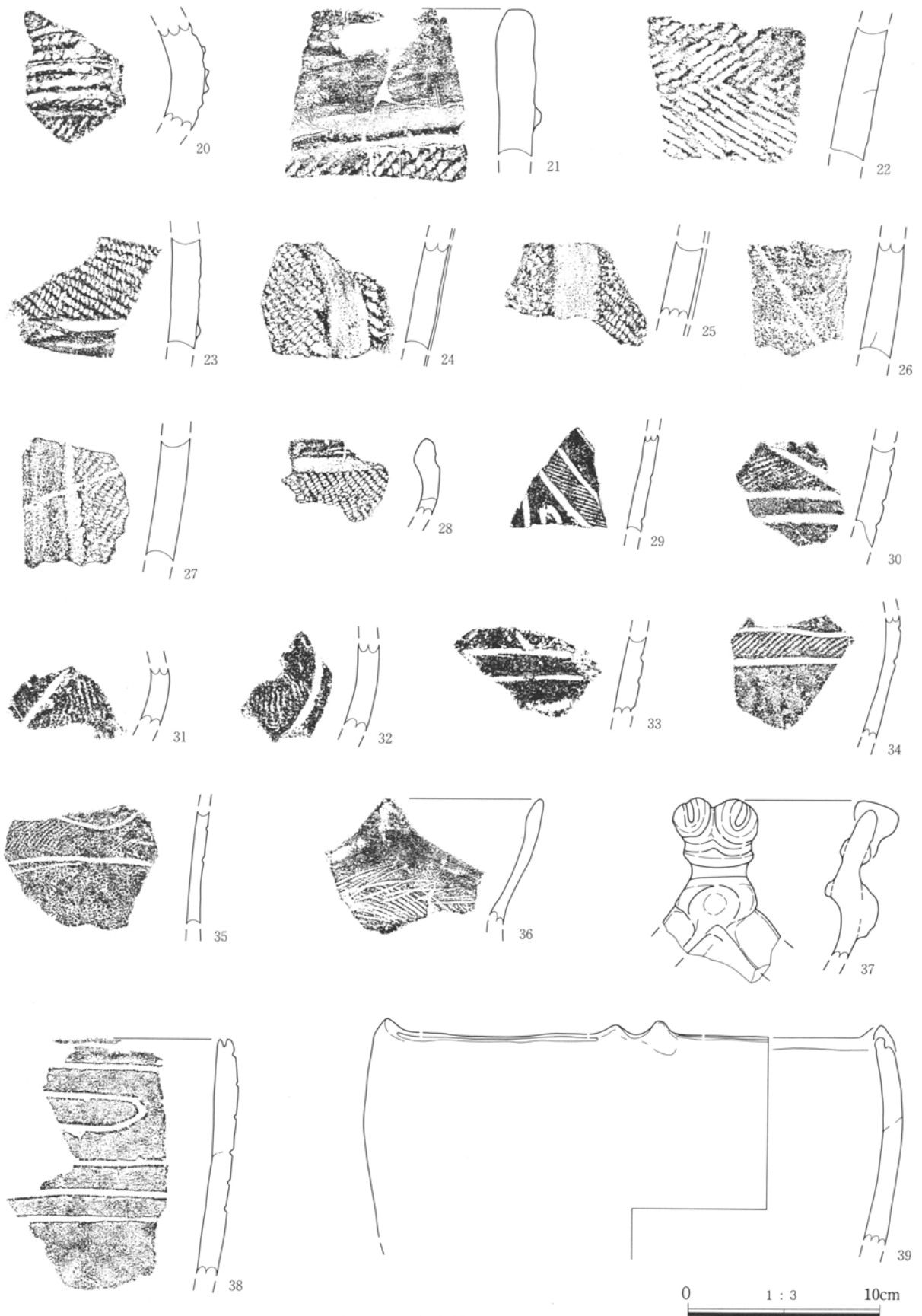
[4] 遺構外出土遺物

本節では、住居跡・溝・土坑等の遺構出土以外の遺物を扱う。表土掘削時出土のものや、遺構出土ながら帰属の不詳なものを、取り上げたものである。

縄文時代の土器から中世以降の陶磁器まで幅広い時期の遺物が出土した。

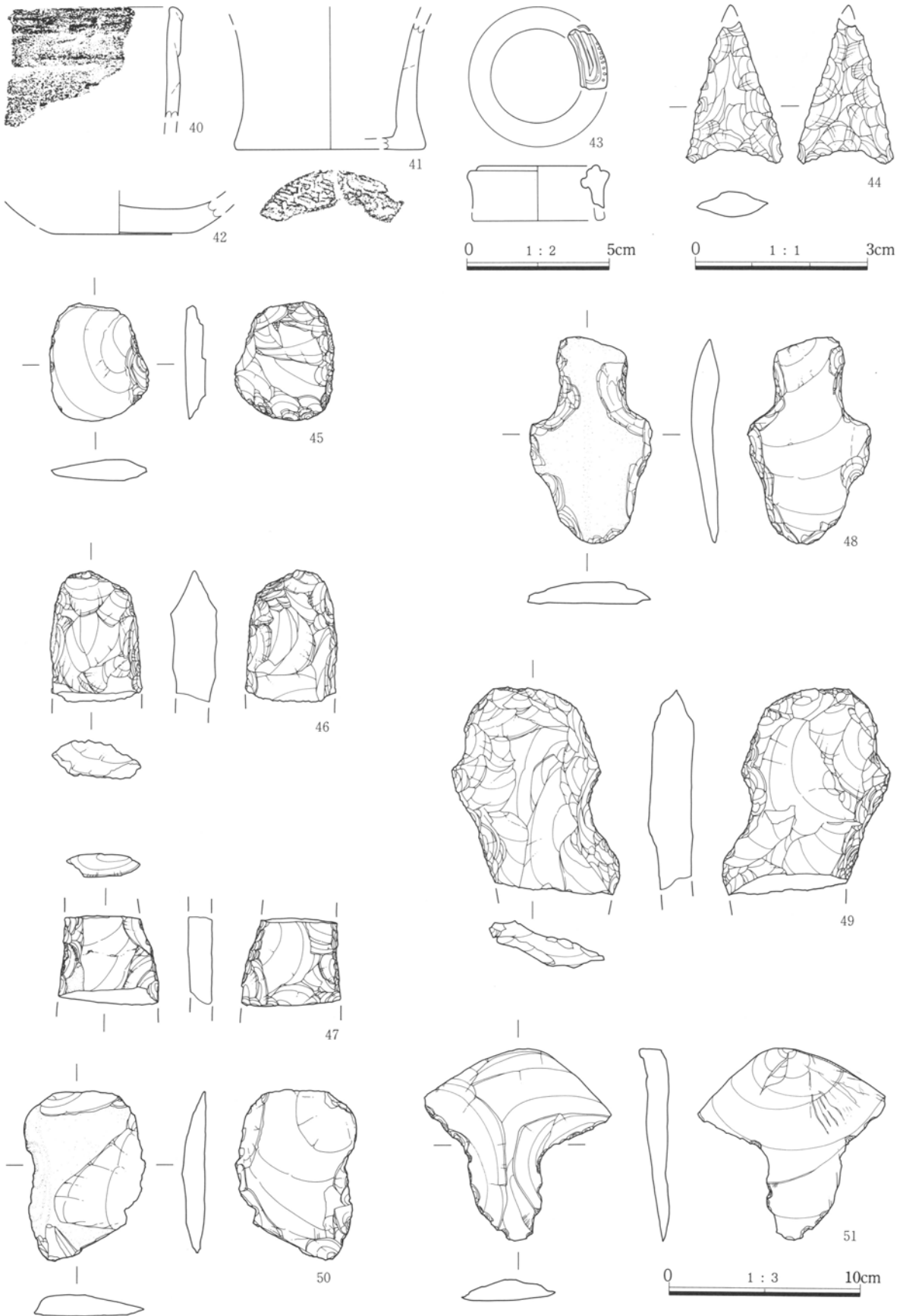


第64図 遺構外出土遺物(1)

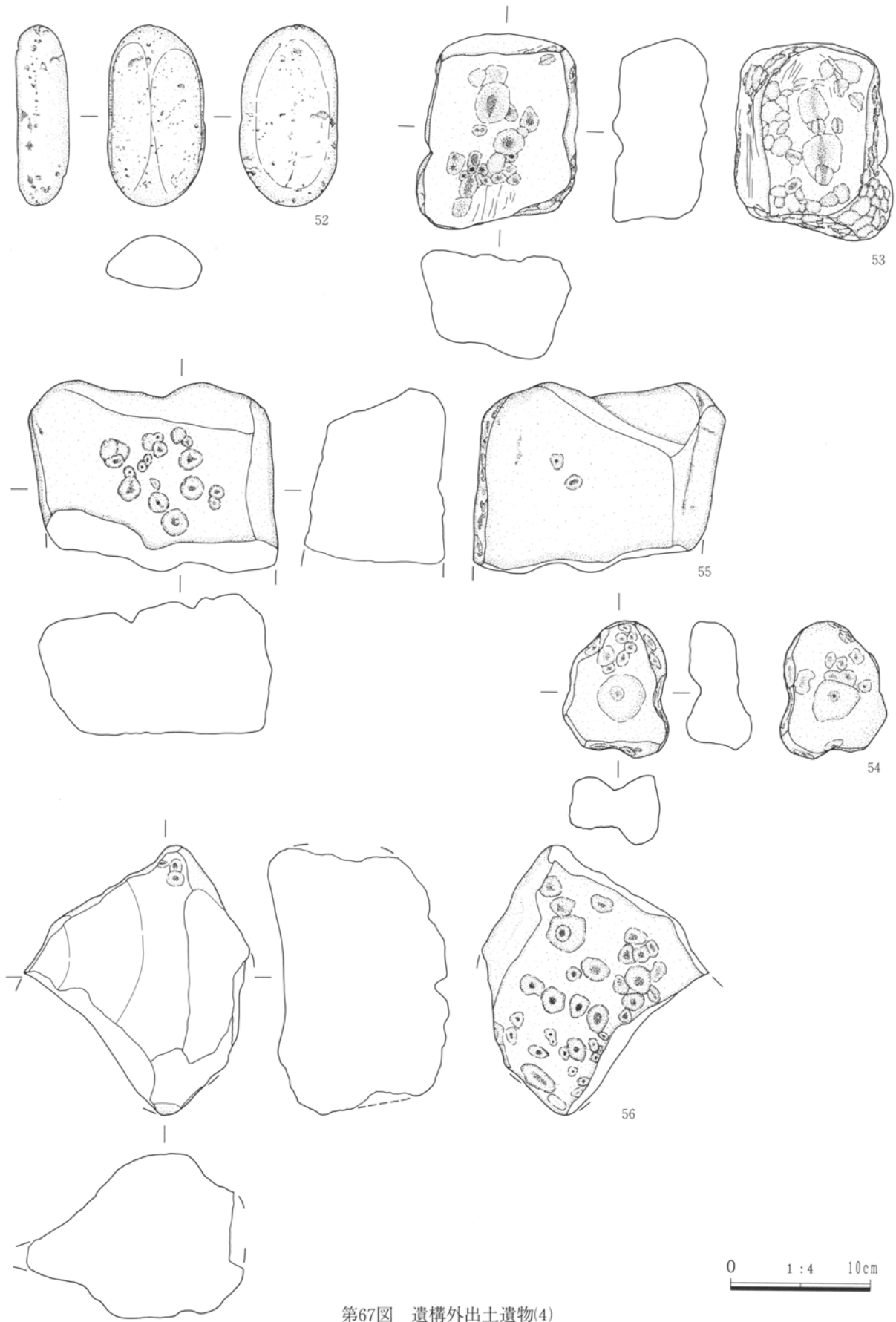


第65図 遺構外出土遺物(2)

[4] 遺構外出土遺物

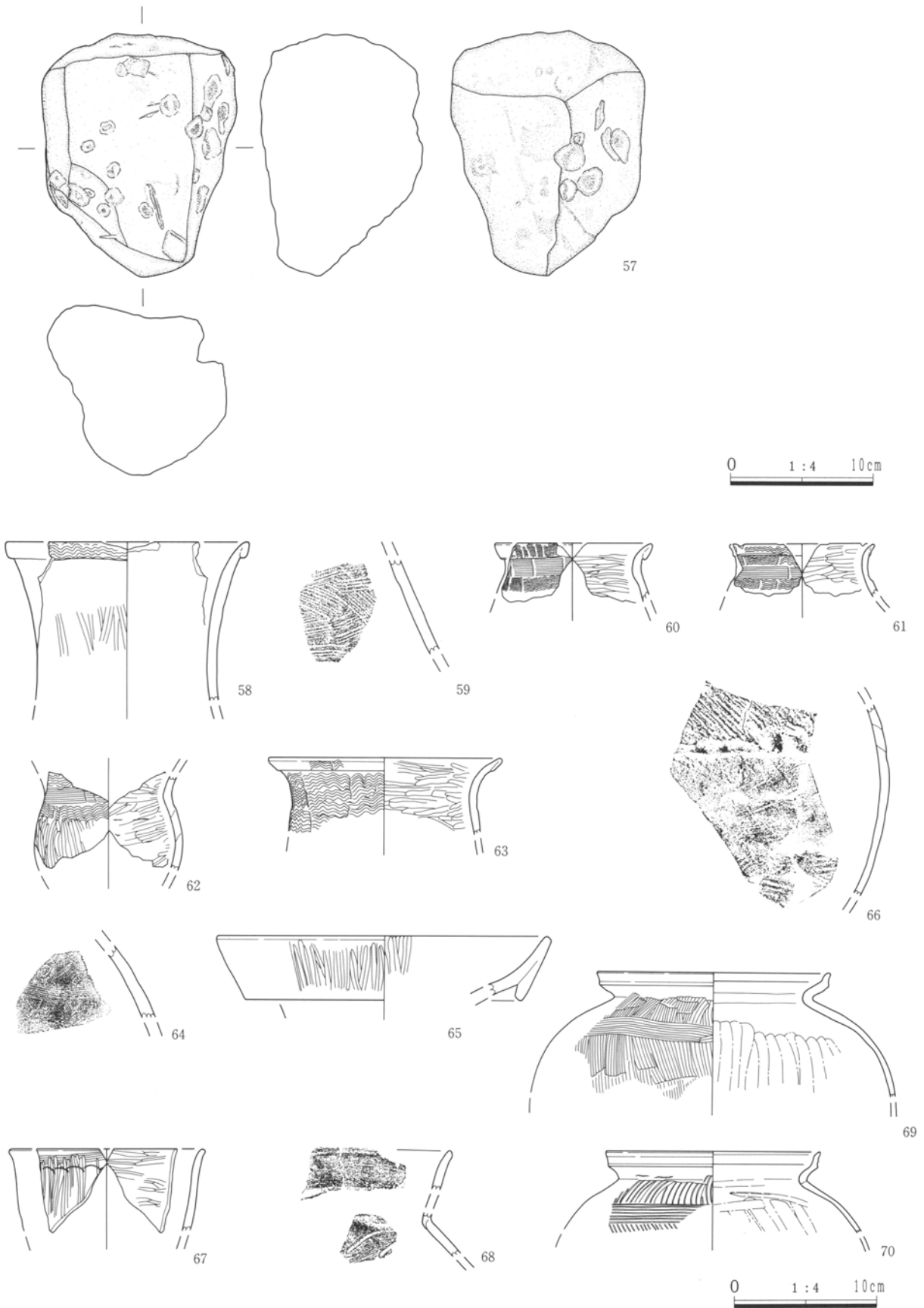


第66図 遺構外出土遺物(3)



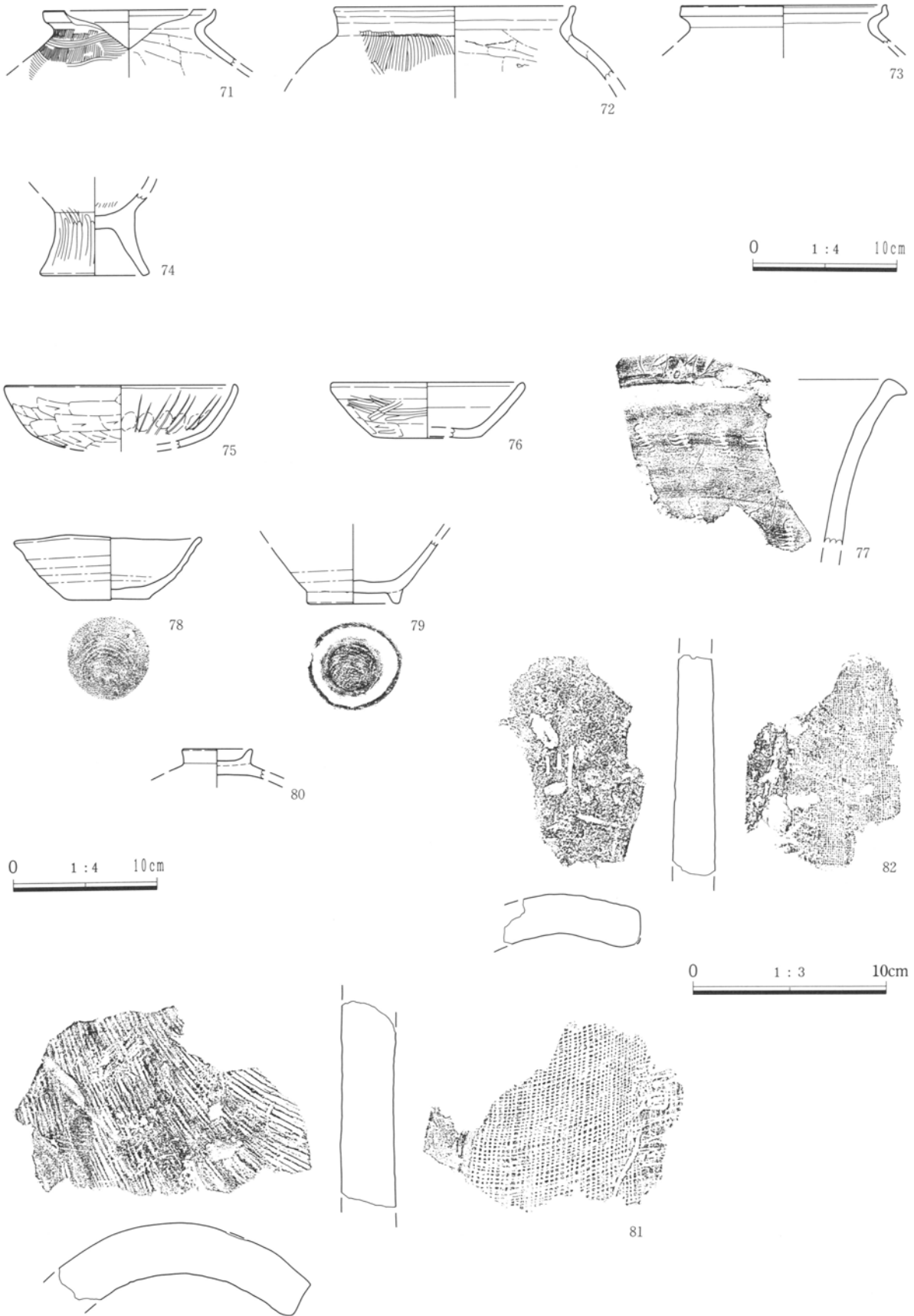
0 1 : 4 10cm

第67図 遺構外出土遺物(4)

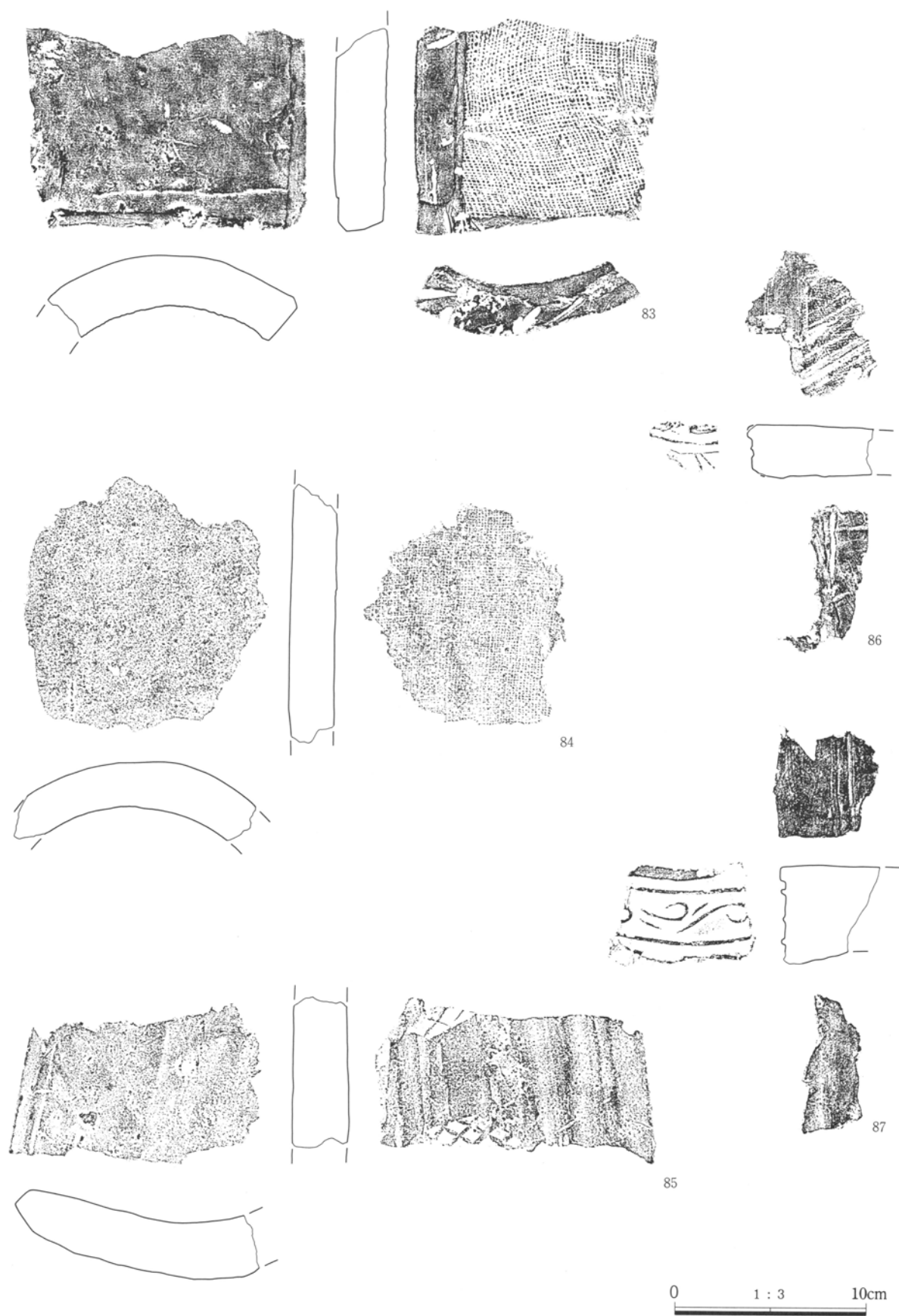


第68図 遺構外出土遺物(5)

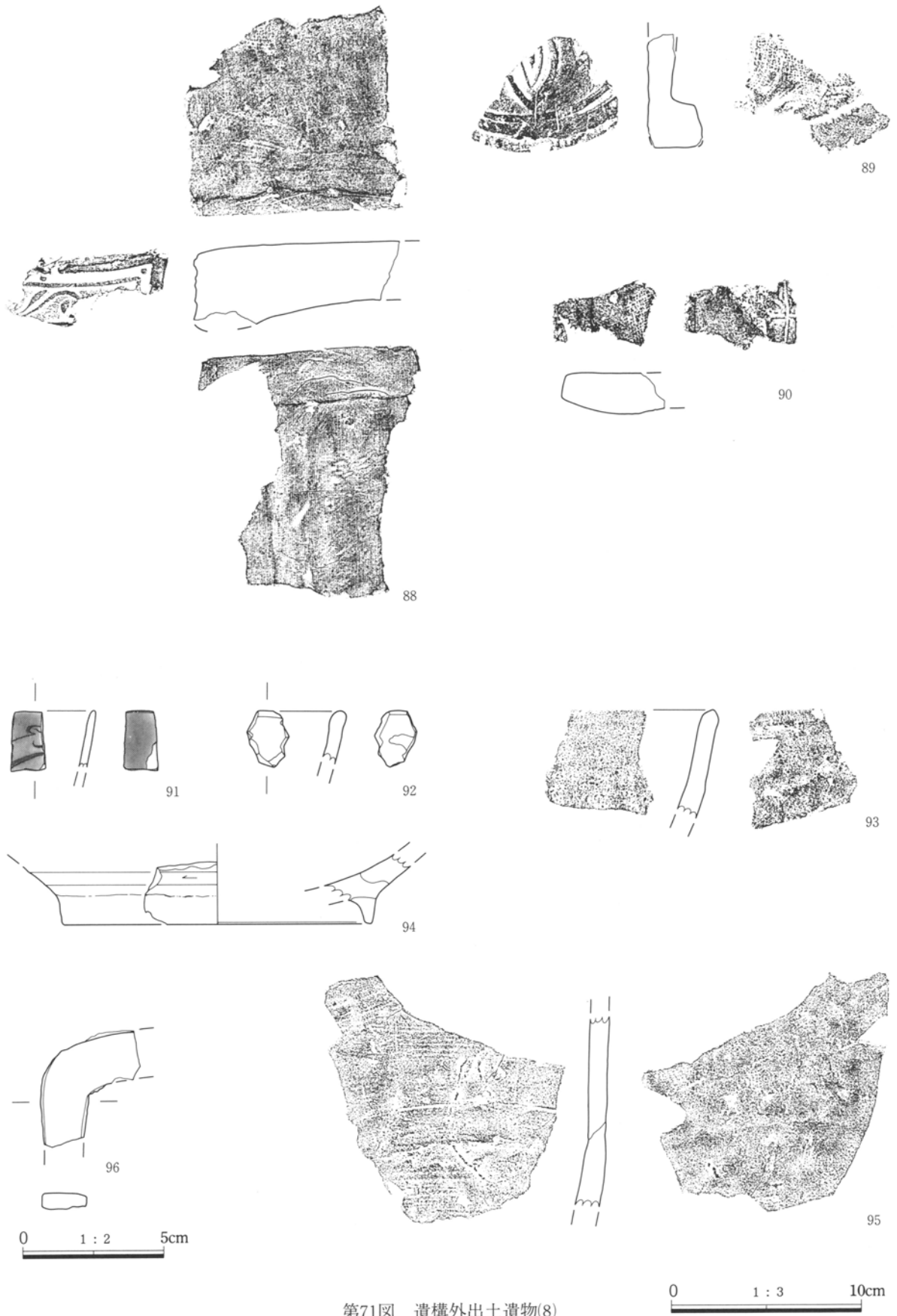
第3章 検出された遺構・遺物



第69図 遺構外出土遺物(6)

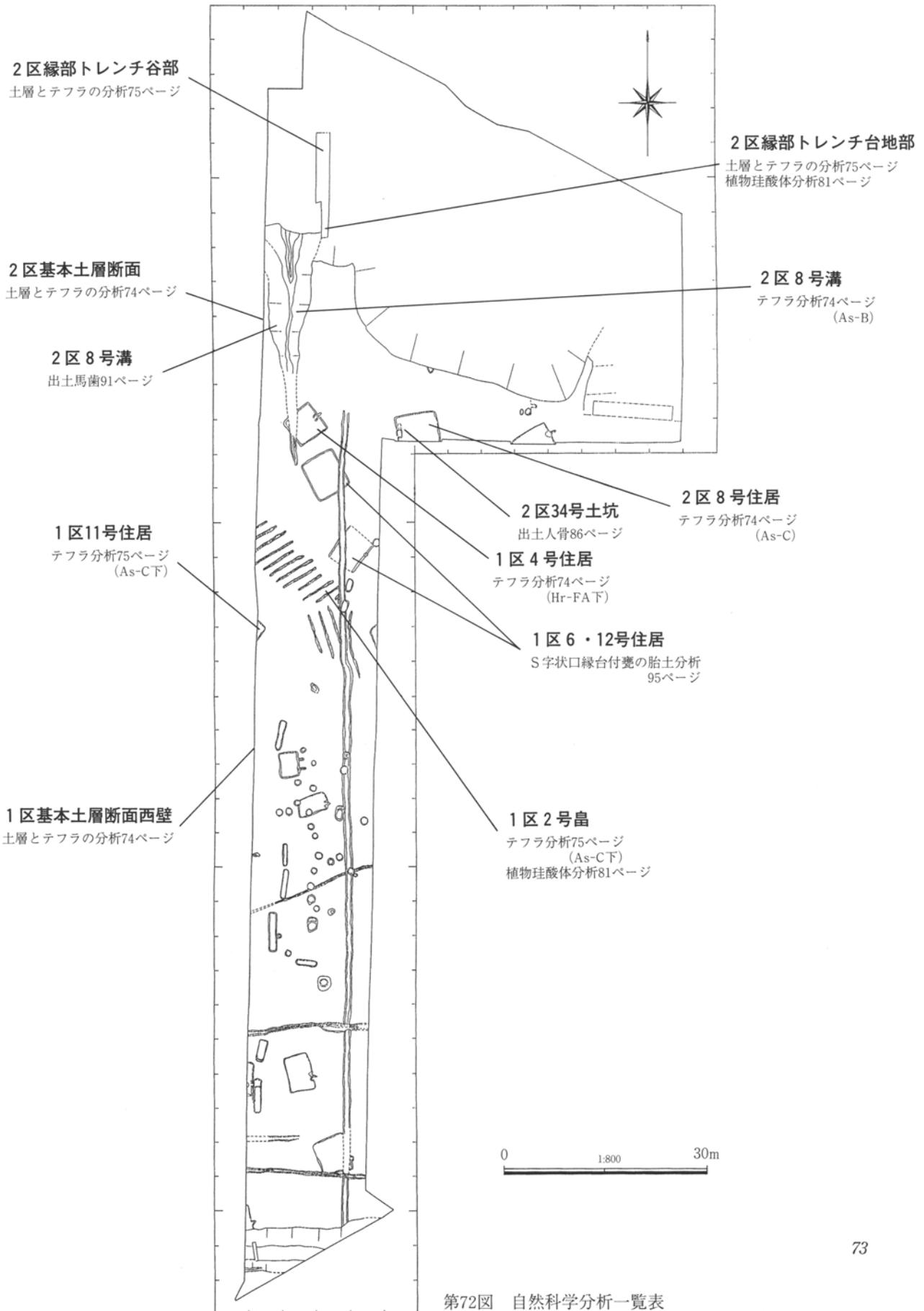


第70図 遺構外出土遺物(7)



第71図 遺構外出土遺物(8)

第4章 自然科学分析 — 自然科学分析一覧



第72図 自然科学分析一覧表

[1] 土層とテフラの分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層や遺構が検出された元総社西川遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って、示標テフラの層位を把握し、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、1区基本土層断面西壁、2区基本土層断面、2区8号住居址、2区8号溝、1区4号住居址、1区11号住居址、1区2号島、2区縁部トレンチ台地部、2区縁部トレンチ谷部の9地点である。

2. 土層の層序

(1) 1区基本土層断面西壁

1区基本土層断面西壁では、下位より褐色砂層（層厚3cm以上）、褐色砂質土（層厚11cm）、暗褐色土（層厚15cm）、黒褐色土（層厚18cm）、暗灰褐色土（層厚13cm）、暗灰色砂質土（層厚17cm）、灰褐色土（層厚25cm）が認められる（第73図）。

(2) 2区基本土層断面

2区基本土層断面では、下位より黄灰色砂質土（層厚3cm以上）、灰色軽石を多く含む暗灰色土（層厚21cm、軽石の最大径9mm）、黒褐色土（層厚3cm）、黄白色軽石混じり灰色泥流堆積物（層厚27cm、軽石の最大径18mm、石質岩片の最大径5mm）、黄白色シルト層（層厚8cm）、灰褐色泥層（層厚7cm）、黒泥

層（層厚2cm）、灰白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色泥層（層厚1cm）、黒泥層（層厚1cm）、黄色シルト層（層厚2cm）、黒灰色土（層厚1cm）、粒径がよくそろった灰色砂層（層厚17cm）、黄色軽石に富む灰色砂層（層厚12cm、軽石の最大径3mm）、黄灰色シルト層（層厚18cm）、暗灰褐色土（層厚16cm）が認められる（第74図）。

(3) 2区8号住居址

2区8号住居址の覆土は、下位より暗灰褐色土（層厚9cm）、灰白色軽石混じり褐色土（層厚4cm）、褐色土（層厚5cm）、土壤混じり灰白色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径9mm）、かすかに成層した灰白色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径8mm）、暗灰褐色土（層厚12cm）からなる（第75図）。灰褐色軽石混じり褐色土のあたりには、ブロック状に灰白色軽石層が認められることもある。

(4) 2区8号溝

2区8号溝の覆土は、下位より暗灰褐色土（層厚10cm）、成層したテフラ層（層厚5cm）、灰褐色砂質土（層厚3cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚1cm）、暗灰褐色土（層厚88cm）からなる（第77図）。これらのうち、成層したテフラ層は、下部の基底部に粗粒の褐色軽石（最大径11mm）を含み、かすかに成層した黄灰色粗粒火山灰層（層厚4cm）と上部の桃色細粒火山灰層（層厚1cm）からなる。このテフラ層は、その層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、荒牧、1968、新井、1979）に同定される。またその上位の青灰色細粒火山灰層は、その層位や層相などから、1128（大治3）年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間粕川テフラ（As-Kk、早田、1991、1996）に同定される。

(5) 1区4号住居址

1区4号住居址の覆土は、下位より成層したテフラ層（層厚5.8cm）、若干黄色がかかった灰褐色砂質土

(層厚 8 cm)、暗灰褐色土 (層厚 20 cm)、かすかに成層した黄灰色粗粒火山灰層 (層厚 1 cm)、暗灰褐色土 (層厚 6 cm) からなる (第 76 図)。これらのうち成層したテフラ層は、下位より最上部に白色軽石 (最大径 31 mm) や灰色石質岩片 (最大径 33 mm) を含む灰褐色細粒火山灰層 (層厚 2 cm)、黄灰色細粒火山灰層 (層厚 0.8 cm)、成層した黄灰色砂質細粒火山灰層 (層厚 3 cm) からなる。この成層したテフラ層は、その層相から 6 世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) に同定される。

(6) 1 区 11 号住居址

1 区 11 号住居址の覆土は、下位より暗灰褐色土 (層厚 3 cm)、黄灰色軽石層 (層厚 15 cm, 軽石の最大径 24 mm, 石質岩片の最大径 3 mm)、暗灰褐色土 (層厚 11 cm)、灰褐色砂質土 (層厚 23 cm)、暗灰褐色土 (層厚 26 cm)、灰褐色土 (層厚 46 cm) からなる (第 78 図)。

(7) 1 区 2 号畠

1 区 2 号畠は暗褐色土を作土としており、覆土は下位より黄灰色軽石層 (層厚 6 cm, 軽石の最大径 22 mm, 石質岩片の最大径 2 mm) と暗灰褐色土 (層厚 12 cm) からなる (第 79 図)。

(8) 2 区縁部トレンチ台地部

2 区縁部トレンチ台地部では、下部に厚い水成堆積物が認められた。下部の水成堆積物は、下位より成層した灰色シルト層 (層厚 20 cm 以上)、灰色砂層 (層厚 8 cm)、桃灰白色シルト層 (層厚 7 cm)、亜角礫混じりで葉理が発達した灰色砂層 (層厚 76 cm, 礫の最大径 13 mm)、桃灰白色シルト層 (層厚 3 cm)、葉理が発達した灰色砂層 (層厚 35 cm)、黄灰色シルト層 (層厚 5 cm)、葉理が発達した灰色細砂層 (層厚 71 cm)、葉理が発達した灰色砂層 (層厚 20 cm)、下部に黄色シルト層 (層厚 31 cm) をもつ灰色泥流堆積物 (層厚 31 cm, 礫の最大径 8 mm)、葉理が発達した灰色砂層 (層

厚 10 cm)、灰色泥流堆積物 (層厚 13 cm, 礫の最大径 5 mm)、灰色砂層 (層厚 7 cm) から構成される (第 80 図)。

下部の水成堆積物の上位には、さらに下位より灰色砂質土 (層厚 18 cm)、黄灰色粘質土 (層厚 20 cm)、成層したテフラ層 (層厚 26 cm)、灰色砂質土 (層厚 6 cm)、黄灰色砂層 (層厚 9 cm)、暗灰色砂質土 (層厚 15 cm)、灰色軽石を多く含む黒灰色土 (層厚 9 cm, 軽石の最大径 4 mm, 石質岩片の最大径 2 mm)、黒色土 (層厚 11 cm)、亜角礫混じり灰色砂層 (層厚 25 cm, 礫の最大径 6 mm) が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下部の灰色粗粒火山灰層 (層厚 22 cm) と、上部の細かく成層した桃灰色細粒火山灰層 (層厚 4 cm) からなる。

(9) 2 区縁部トレンチ谷部

2 区縁部トレンチ谷部では、下位より灰色砂層 (層厚 4 cm 以上)、成層した灰色シルト層 (層厚 6 cm)、灰色砂層 (層厚 4 cm)、成層した桃灰色シルト層 (層厚 11 cm)、灰色砂層 (層厚 13 cm)、桃灰白色シルト層 (層厚 6 cm)、葉理が発達した灰色砂層 (層厚 18 cm)、軽石質亜円礫を含み葉理が発達した灰色砂層 (層厚 31 cm, 礫の最大径 11 mm)、暗灰色砂質土 (層厚 14 cm)、砂混じり暗灰褐色土 (層厚 31 cm)、灰色土 (層厚 13 cm) が認められる (第 81 図)。

これらのうち、軽石質亜円礫を含み葉理が発達した灰色砂層以下の地層は、2 区縁部トレンチ台地部の下部の水成堆積物に対比される。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラの特徴とその降灰層準を把握するために、1 区基本土層断面西壁、2 区基本土層断面、2 区 8 号住居址、1 区 11 号住居址の 4 地点において採取された 14 試料を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料 15 g を秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。

- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第5表に示す。1区基本土層断面西壁では、いずれの試料にも軽石や火山ガラスが認められる。軽石では、試料16や14に比較的良好に発泡した細粒の灰白色や灰色の軽石（最大径1.1mm）が、少量含まれている。試料12や10には、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石（最大径3.4mm）が比較的多く含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料8や6には、あまり発泡の良くない白色軽石（最大径3.7mm）が比較的多く含まれている。軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。試料6より上位の試料には、比較的良好に発泡した淡褐色軽石（最大径3.2mm）が認められる。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。とくに試料4や2に多く含まれている。一方火山ガラスとしては、いずれの試料にも透明や白色の軽石型ガラスが含まれている。

2区基本土層断面では、試料2に発泡があまり良くない灰白色軽石（最大径31mm）が少量含まれている。試料1には、灰色の岩片（最大径1.5mm）が比較的多く含まれている。2区8号住居址では、いずれの試料にも、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石（最大径7.0mm）が含まれている。とくに、試料1に多く含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。火山ガラスとしては、透明な軽石型が認められる。

1区11号住居址では、試料1にスポンジ状によく発泡した灰白色軽石（最大径7.1mm）が、とくに多く含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。火山ガラスとしては、透明な軽石型が比較的多く含まれている。

2区縁部トレンチ台地部では、試料1にさほど発泡が良くない灰白色軽石（最大径2.1mm）が少量含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石と単斜輝石

が含まれている。一方、2区縁部トレンチ谷部では、いずれの試料にも淡褐色軽石（最大径3.3mm）が比較的多く含まれている。また、試料8から4にかけては、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石（最大径2.9mm）が含まれている。これらの軽石の斑晶にも、斜方輝石と単斜輝石が含まれている。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

示標テフラとの同定精度を向上させるために、テフラの降灰層準の可能性が考えられた試料のうち、2区基本土層断面から採取された2試料について、温度一定型屈折率測定法（新井、1972、1993）により屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第6表に示す。2区基本土層断面の試料2に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.498-1.502である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.707-1.711である。一方、2区基本土層断面の試料1には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.706-1.710である。

2区縁部トレンチ台地部の試料1に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.502-1.504である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.706-1.711である。2区縁部トレンチ谷部の試料8に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.527-1.532である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（ γ ）の屈折率は、1.707-1.711である。

5. 考察

—示標テフラとの同定と遺構の層位について

元総社西川遺跡において、もっとも下位に認められた2区基本土層断面の試料2に含まれるテフラは、その岩相や重鉱物の組み合わせ、さらに火山ガ

ラスや斜方輝石の屈折率などから、約1.1万年前^{*1}に浅間火山から噴出した浅間総社軽石 (As-Sj, 早田, 1990) と考えられる。またその上位にある灰白色岩片で特徴づけられるテフラは、その特徴から水蒸気爆発に由来する可能性が考えられる。重鉱物の組み合わせや斜方輝石の屈折率などから、榛名火山や草津白根火山を給源とする可能性が考えられる。榛名火山起源の同様のテフラについては、従来特徴の記載例に乏しい。草津白根火山起源のテフラとしては、約5,000年前^{*1}に草津白根火山から噴出した草津白根熊倉軽石 (KS-Ku, 早田ほか, 1988) がある。しかし、今回検出されたテフラに含まれる斜方輝石の屈折率は、従来記載されている KS-Ku の値 (γ : 1.711-1.715) より低い。そうすると、榛名火山起源のテフラである可能性の方が高いのかも知れない。ここでは、このテフラを仮に元総社西川テフラ (Ns) と呼ぶことにしておく。As-Sj の上位にあり、Ns を挟む水成堆積物については、その層位から前橋台地の総社一帯に厚く堆積する総社砂層 (早田, 1990) に連続する可能性が高いと推定される。

1区11号住居地の試料1および1区2号畠を覆うテフラ層、1区基本土層断面西壁の試料12付近に降灰層準があるテフラについては、層相や含まれる軽石の特徴などから、4世紀中葉^{*2}に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 新井, 1979) と考えられる。また2区8号住居地で検出された軽石も、その特徴から As-C に由来すると考えられる。1区基本土層断面西壁の試料8付近と試料4付近に降灰層準があると考えられるテフラについては、それぞれ Hr-FA と As-B に由来すると考えられる。

以上のことから、1区11号住居地については As-C の下位、1区2号畠については As-C 直下、1区4号住居地については Hr-FA 直下付近、2区8号溝は As-B の下位におおの層位があると考えられる。なお2区8号住居地については、分析地点において最下位の土層中にも As-C に由来する軽石が含まれていることが明らかになったことから、一

般的には堆積後に何らかの攪乱を受けていないかぎり、As-C より上位に層位があると考えられる。しかしながら、この遺構では、覆土中に As-C 起源の軽石が非常に多く含まれる軽石層のブロックが認められたことから、As-C 降灰時に上屋など構築物が存在していた可能性も完全に否定することはできない。

2区縁部トレンチ台地部の成層したテフラ層は、その層相から約1.3~1.4万年前^{*1}に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992) に同定される。その上位のテフラ (試料1) は、層位、重鉱物の組み合わせ、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、As-Sj に同定される。このことから、下部の水成堆積物は、相馬ヶ原扇状地堆積物 (早田, 1990)、As-Sj の上位の砂層は総社砂層 (早田, 1990) に各々対比される可能性が高い。

2区縁部トレンチ谷部の試料8に含まれるテフラのうち、淡褐色軽石は、岩相、重鉱物の組み合わせ、火山ガラスの屈折率などから、As-B に由来すると考えられる。また、灰白色軽石は、岩相や重鉱物の組み合わせなどから、As-C に由来すると考えられる。以上のことから谷の埋没開始時期については、攪乱をひどく受けていないとすると、As-B 降灰以降の可能性も考えられる。

6. 小結

元総社西川遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、1区では下位より浅間総社軽石 (As-Sj, 約1.1万年前^{*1})、元総社西川テフラ (Ns, 仮称)、浅間C軽石 (As-C, 4世紀中葉^{*2})、榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ (As-B, 1108年)、浅間柏川テフラ (As-Kk, 1128年) など、多くの示標テフラを検出することができた。そして、1区11号住居地については As-C の下位、1区2号畠については As-C 直下、1区4号住居地については Hr-FA 直下付近、2区8号溝は As-B の下位にそれぞれ層

第4章 自然科学分析—自然科学分析一覧

位があると考えられた。

2区においては、下位より浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 約1.3~1.4万年前*1)、浅間総社軽石 (As-Sj, 約1.1万年前*1)、浅間C軽石 (As-C, 4世紀中葉*2)、浅間Bテフラ (As-B, 1108年) などの示標テフラを検出することができた。台地部では相馬ヶ原扇状地堆積物や総社砂層に対比される可能性が高い水成層が認められた。

*1 放射性炭素 (¹⁴C) 年代。

*2 現在では4世紀を遡るとする説が有力になっているようである (たとえば、若狭, 2000)。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「3世紀後半」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

文献

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.

新井房夫 (1979) 関東地方西北部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, No.53, p.41-52.

新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.

荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質。地団研専報, No.45, 65p.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.

坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.

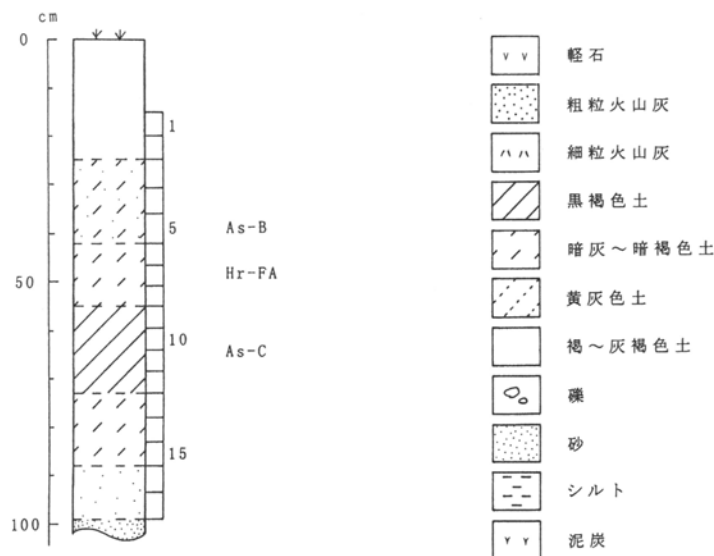
早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土。群馬県史通史編, 1, p.37-129.

早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち。佐久考古通信, No.53, p.2-7.

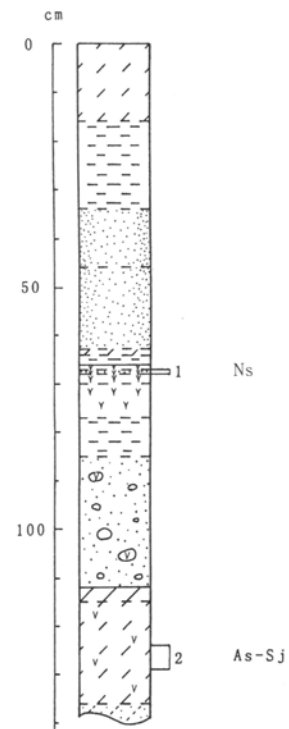
早田 勉 (1996) 関東地方~東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

早田 勉・能登 健・新井房夫 (1988) 草津白根火山起源。熊倉軽石層の噴出年代。東北地理, 40, p.272-275.

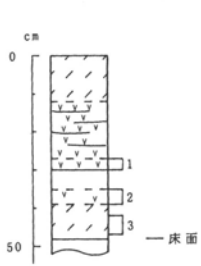
若狭 徹 (2000) 群馬の弥生土器が終わるとき。かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.



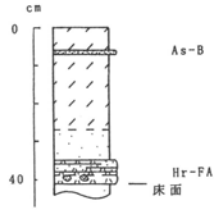
第73図 1区基本土層断面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



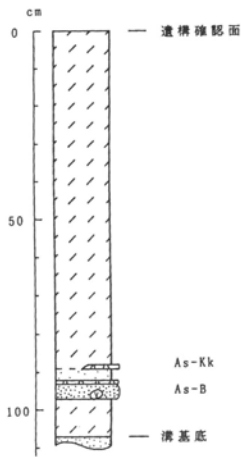
第74図 2区基本土層断面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



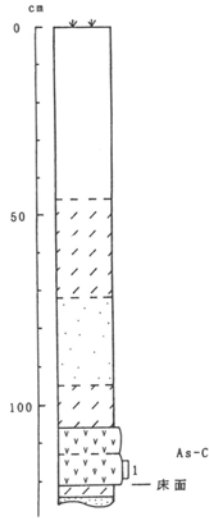
第75図 2区8号住居址覆土の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



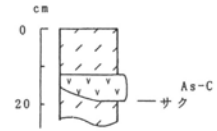
第76図 1区4号住居址覆土の土層柱状図



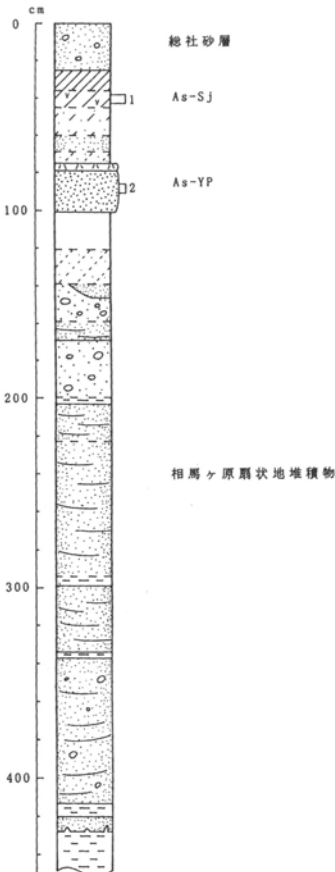
第77図 2区8号溝覆土の土層柱状図



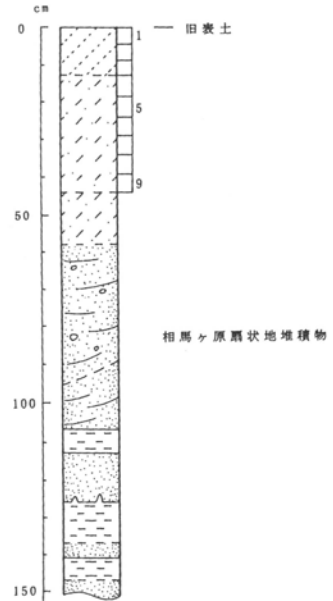
第78図 1区11号住居址覆土の土層柱状図



第79図 1区2号島の土層柱状図



第80図 縁部トレンチ2区台地部の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第81図 縁部トレンチ2区谷部の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

第3表 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
台地部	1	+	灰白	2.1
	2	-	-	-
	3	-	-	-
谷部	2	++	淡褐	3.3
	4	++	淡褐, 灰白	3.1, 2.7
	6	++	淡褐, 灰白	3.2, 2.9
	8	++	淡褐, 灰白	3.1, 2.8

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位は, mm.

第4表 屈折率測定結果 (2区基本土層)

地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 (γ)
台地部	1	1.502-1.504	opx > cpx	1.706-1.711
谷部	8	1.527-1.532	opx > cpx	1.707-1.711

屈折率の測定は, 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) による. opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石.

第5表 テフラ検出分析結果 (2区縁部トレンチ)

地点	試料	軽石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
1区 基本土層 西壁	2	+++	淡褐	3.1	+	pm	透明
	4	+++	淡褐	3.2	+	pm	透明
	6	++	白>淡褐	3.7, 3.9	+	pm	透明, 白
	8	+	灰白, 白	3.1, 2.9	+	pm	透明, 白
	10	++	灰白	3.4	+	pm	透明
	12	+	灰白	2.1	+	pm	透明
	14	+	灰	1.1	+	pm	透明
	16	+	灰白	1.1	+	pm	透明
2区 基本土層	1	-	-	-	-	-	-
	2	+	灰白	3.1	+	pm	透明
2区 8号住居址	1	++++	灰白	7.0	++	pm	透明
	2	++	灰白	3.6	+	pm	透明
	3	+	灰白	1.7	+	pm	透明
1区 11号住居址	1	++++	灰白	7.1	++	pm	透明

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位は, mm.

第6表 屈折率測定結果 (2区縁部トレンチ)

地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 (γ)
2区基本土層	1	-	opx > cpx, (ho)	1.706-1.710
2区基本土層	2	1.498-1.502	opx > cpx	1.707-1.711

屈折率の測定は, 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) による. opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石.

[2] 植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

2. 試料

1区の分析試料は、1区2号畠 (As-C直下) の畝間部から採取された試料1と試料2の2点である。2区の分析試料は、2区縁部トレンチ台地部から採取された1点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になる

まで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヒエ属 (ヒエ) の換算係数は8.40、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

(1) 1区2号畠

[イネ科]

ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族A (チガヤ属など)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

(2) 2区縁部トレンチ台地部

[イネ科-タケ亜科]

クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザ

サ節)、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

5. 考察

(1) イネ科栽培植物の検討(1区2号畠)

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめ(イネ以外にも)オオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属型(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型が検出された。

ヒエ属型は、1区2号畠(As-C直下)の畝間部(試料1)から検出された。密度は2,000個/gと比較的低い値であるが、ヒエ属は葉身中における植物珪酸体の密度が低いことから、植物体量としては過大に評価する必要がある。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを識別することは困難である(杉山ほか, 1988)。ただし、ここでは畠跡の試料から検出されていることから、ここで検出されたものは栽培種に由来するものである可能性が高いと考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

(2) 植物珪酸体の検出状況

(2区縁部トレンチ台地部)

As-YP直下層(試料1)について分析を行った。その結果、クマザサ属型が多量に検出され、ミヤコ

ザサ節型も少量検出された。おもな分類群の推定生産量によると、クマザサ属型が卓越していることが分かる。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

(1区2号畠)

上記以外の分類群では、ネザサ節型が多く検出され、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属およびネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、当時の調査区周辺はネザサ節をはじめススキ属やチガヤ属なども生育する比較的开かれた環境であったと考えられ、周辺にはヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

(4) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

(2区縁部トレンチ台地部)

浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3-1.4万年前)直下層の堆積当時は、クマザサ属(チシマザサ節やチマキザサ節)を主体としたイネ科植生であったと推定される。

タケ亜科のうちメダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、ネザサ率(両者の推定生産量の比率)の変遷は、地球規模の水期-間氷期サイクルの変動とよく一致することが知られている(杉山・早田, 1996)。ここでは、クマザサ属が卓越していることから、当時は比較的寒冷な気候条件であったと推定される。

クマザサ属のうちチシマザサ節やチマキザサ節は積雪に対する適応性が高いとされ、ミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ないところに分布している(室井, 1960)。ここでは前者が優勢であることから、当時は積雪(降水量)が多い比較的湿潤な環境であった可能性が考えられる。花粉分析によると約1.2万年前頃からブナ属の増加が認められ、日本海側を中心に多雪化したことが指摘されている(安田,

1992)。今回の結果もこのような多雪化に対応した可能性が考えられる。

6. 1区2号畠まとめ

植物珪酸体分析の結果、浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）直下の1区2号畠からは、ヒエ属（ヒエが含まれる）が検出され、ヒエが栽培されていた可能性が認められた。当時の調査区周辺は、ネザサ節をはじめススキ属やチガヤ属なども生育する比較的開かれた環境であったと考えられ、周辺にはヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—。考古学と自然科学、20、p.81-92.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学、同成社、p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学、9、p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学、17、p.73-85.

杉山真二・早田勉（1996）植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定—中期更新世以降の氷期—間氷期サイクルの検討—。日本第四紀学会講演要旨集、26、p.68-69.

杉山真二（1999）過去約3万年間におけるササ類の植生変遷と積雪量の変動—植物珪酸体分析からみた過去のミヤコザサ線—。日本植生学会大会発表要旨集、p.29-30.

室井綽（1960）竹笹の生態を中心とした分布。富士竹類植物園報告、5、p.103-121.

第7表

1区2号畠（As-C直下）における植物珪酸体分析結果
検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	
		1区2号畠	
		1	2
イネ科	Gramineae (Grasses)		
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type	20	
キビ族型	Panicaceae type	54	13
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	27	20
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	7	20
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	80	86
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	27	13
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	294	257
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)		7
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	13	7
未分類等	Others	67	165
その他のイネ科	Others		
表皮毛起源	Husk hair origin	7	
棒状珪酸体	Rod-shaped	435	692
茎部起源	Stem origin		13
未分類等	Others	415	541
植物珪酸体総数	Total	1445	1833

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type	1.69	
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	1.69	1.25
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.08	0.25
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	0.31	0.15
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	1.41	1.23
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)		0.05
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.04	0.02

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	18	11
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	80	85
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)		3
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	2	1

第8表

2区縁部トレンチにおける植物珪酸体分析結果
検出密度（単位：×100個/g）

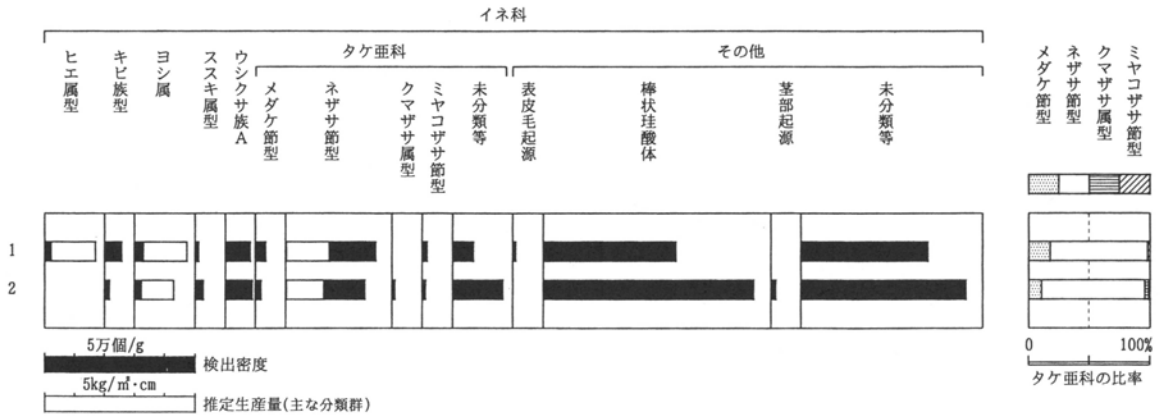
分類群	学名	地点・試料	
		2区台地部	
		1	
イネ科	Gramineae (Grasses)		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)		158
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>		18
未分類等	Others		61
その他のイネ科	Others		
表皮毛起源	Husk hair origin		12
棒状珪酸体	Rod-shaped		121
未分類等	Others		358
植物珪酸体総数	Total		727

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

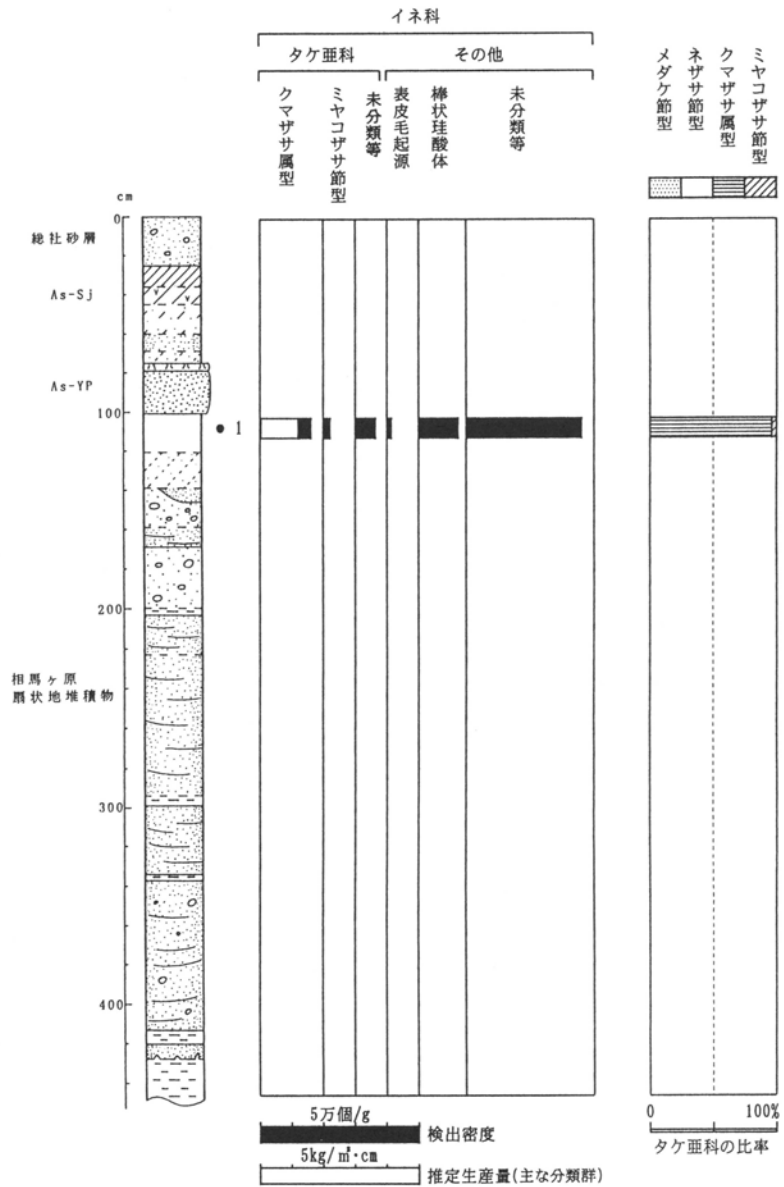
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	1.18
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.05

タケ亜科の比率（%）

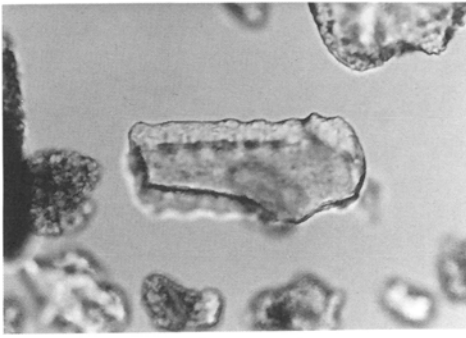
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	96
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	4



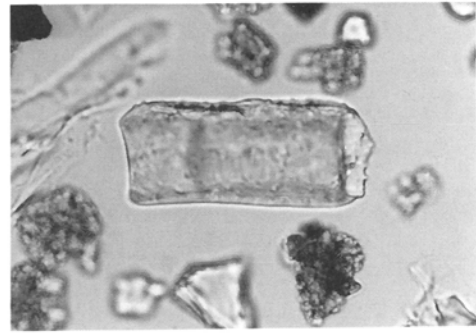
第82図 元総社西川遺跡1区2号島 (As-C直下) における植物珪酸体分析結果



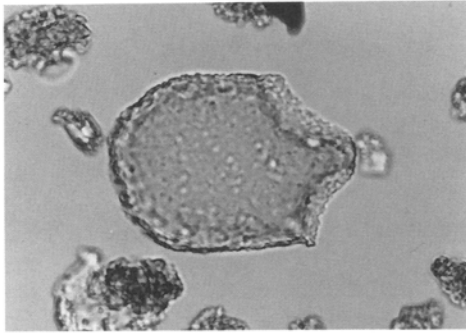
第83図 元総社西川遺跡 2区縁部トレンチにおける植物珪酸体分析結果



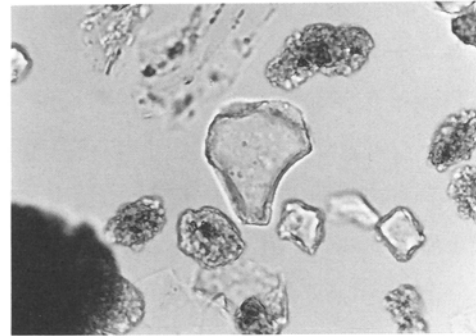
1



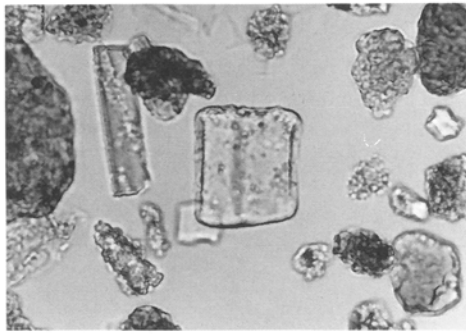
2



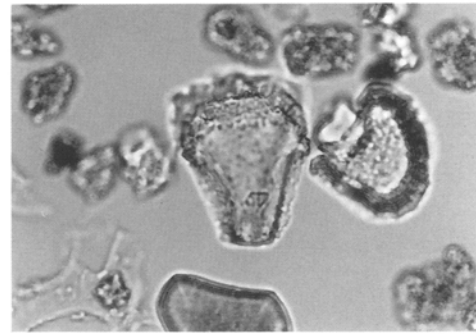
3



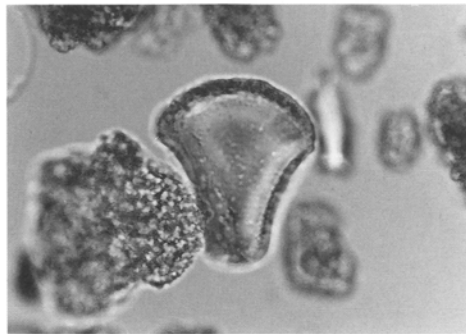
4



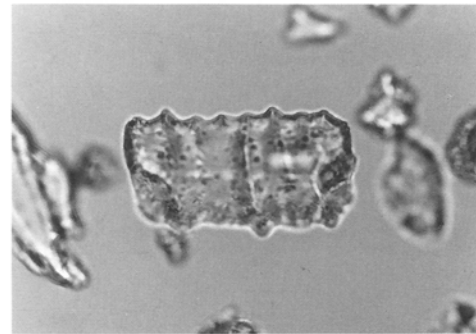
5



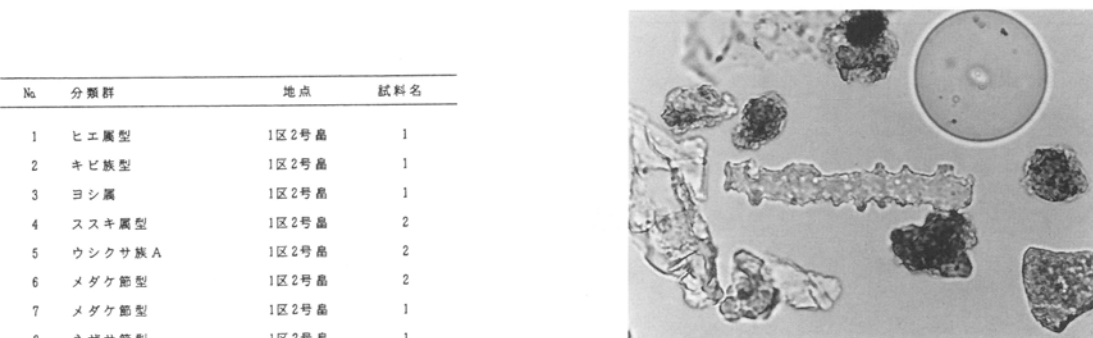
6



7



8



9

No.	分類群	地点	試料名
1	ヒエ属型	1区2号品	1
2	キビ族型	1区2号品	1
3	ヨシ属	1区2号品	1
4	ススキ属型	1区2号品	2
5	ウシクサ族A	1区2号品	2
6	メダケ節型	1区2号品	2
7	メダケ節型	1区2号品	1
8	ネザサ節型	1区2号品	1
9	棒状珪酸体	1区2号品	1

0 50 100 μm

[3] 元総社西川遺跡出土人骨

梶崎 修一郎

はじめに

元総社西川遺跡は、群馬県前橋市元総社町に位置する。発掘調査は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により、平成12(2000)年1月より同年6月まで行われた。この遺跡からは土坑が52基発見されているが、その内、34号土坑より人骨が出土したので以下に報告する。時代は、出土遺物より中世に比定されている。人骨は、歯のみが出土している。以下にこの出土歯について報告する。

なお、歯の計測方法は、藤田(1949b)に従った。また、歯の計測値の比較データは、古代人のものはMATSUMURA(1995)を用い、現代人のものは権田(1959)を用いた。

1. 人骨の出土状況

人骨は、長径1.76m、幅63cmの34号土坑墓より出土している。この34号土坑墓は、古墳時代の8号住居の中に掘りこまれて発見されている。

2. 出土歯の残存状態

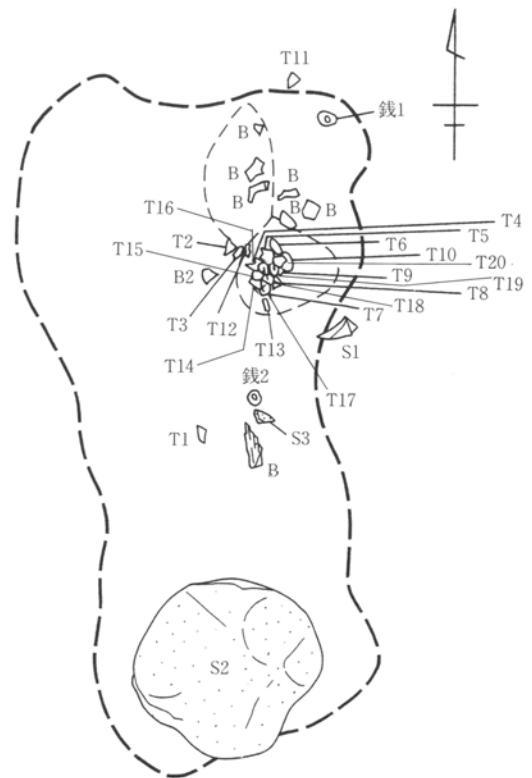
歯は、全部で23本出土しているが、そのほとんどが歯冠部のみであり、歯根も含めた完全な歯は残存していない。この内訳は、乳歯が5本で永久歯が18本である。以下に、歯の残存表及び残存図を示した。

3. 被葬者の頭位及び埋葬形態

頭位は、歯の出土状況より、北向きである。また、顔面部を西に向けている。歯しか出土していないが、埋葬形態は土坑の形状及び大きさより伸展葬であったと推定される。さらに、歯には火を受けた痕跡が見られないことから、火葬ではなく土葬であったと推定される。このことは、歯がまとまった箇所から出土したことから裏付けられる。



人骨の出土状況



第84図 人骨の出土状況

4. 被葬者の個体数

歯は、乳歯と永久歯との混合歯列であるが、出土歯に重複部位は無く、また、出土状況からも個体数は1個体と推定される。

5. 被葬者の性別

歯の歯冠部計測値の比較より、歯の大きさが比較的小さいため、女性（女兒）であると推定される。

6. 被葬者の死亡年齢

通常、歯の萌出状態から死亡年齢を推定する場合には、歯根の形成過程が良い指標となるが、本出土人骨の場合、歯根の保存状態が悪いため、確かな死亡年齢の推定は困難である。但し、歯の咬耗度を見ると、今回発見された5本の乳歯すべては象牙質が露出しているブローカ（BROCA）の2度であるのに対し、永久歯では上下顎の第1大臼歯はエナメル質のみ咬耗しているブローカの1度の状態である。また、それ以外の永久歯は咬耗が無い状態の0度であるので、まだ未萌出であったことが推定される。従って、その萌出状態から、死亡年齢は約8歳と推定される。

7. 身長

今回、身長を推定することのできる四肢骨が出土していないため、身長の推定は不可能である。現代日本人でのデータを見ると、1975年の統計では、8歳の男子平均身長129.3cmであり女子平均身長は125.1cmである（鈴木、1996）。中世であれば、もう少し身長は低かったことが予測される。本人骨が出土した34号土坑の長径は1.76mもあり、もし、人骨が出土しなかった場合、あるいは性別や死亡年齢が正しく推定されない場合には成人男性あるいは女性が伸展葬で埋葬されていたと推定されるところである。注意を喚起されたい。

8. 歯の病変

齲蝕（虫歯）は、23本の歯には1本も認められな

かった。また、歯石も1本も認められなかった。一方、下顎犬歯の歯冠部下部には、3本の線状のエナメル質減形成が観察された。エナメル質減形成は、歯の形成時期である乳幼児期に栄養不良や病気（麻疹・水痘・風疹・猩紅熱・ジフテリア・肺炎・結核等）が原因でエナメル質の石灰化不全がおこり、それが線状・小窩状・溝状に痕跡を残す状態である（山本、1988）。このエナメル質減形成が良く観察される下顎右犬歯で、そのストレスを受けた時期を推定すると、約4歳・約5歳・約6歳の3時期であることが判明した。

まとめ

元総社西川遺跡から、23本の歯が出土した。出土人骨は、中世の34号土坑墓より発見されたが、頭位を北向きにして顔面部を西に向けた伸展葬で土葬により埋葬されたと推定される。被葬者の死亡年齢は約8歳で、性別は女性（女兒）である。歯には、齲蝕や歯石は認められなかったが、エナメル質減形成が観察され、この個体は、生前約4歳・5歳・6歳の時期に栄養不良や病気によるストレスを受けたことが推定された。

謝辞

本出土人骨を報告する機会を与えていただき、出土人骨に関する考古学的情報をいただいた、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の笹沢泰史氏と井川達雄氏に感謝いたします。

引用文献及び参考文献（ABC順）

- 藤田恒太郎 1949a 『歯の解剖学』、金原出版
- 藤田恒太郎 1949b 歯の計測基準について、『人類学雑誌』、61:1-6.
- 藤田恒太郎 1965 『歯の話』、岩波書店
- 権田和良 1959 歯の大きさの性差について、『人類学雑誌』、67:151-163.
- 上條雍彦 1962 『日本人永久歯解剖学』、アナトーム社
- MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from morphology, National Science Museum Monographs No. 9, National Science Museum
- 白水美輝雄・中村正雄・古橋九平 1970 『歯の形態学』、医歯薬出版
- 鈴木隆雄 1996 『日本人のからだ』、朝倉書店
- 山本美代子 1988 日本古人骨永久歯のエナメル質減形成、『人類学雑誌』、96:417-433.

第9表 元総社西川遺跡出土永久歯歯冠計測値及び比較表

元総社西川			鎌倉時代人*				江戸時代人*				現代日本人**					
			♂		♀		♂		♀		♂		♀			
歯種	左右	MD	BL	MD	BL	MD	BL	MD	BL	MD	BL	MD	BL	MD	BL	
上顎	I 1	右	7.4	6.4	8.48	7.29	8.29	7.00	8.78	7.52	8.38	7.06	8.67	7.35	8.55	7.28
	C	右	7.5	7.4	7.96	8.50	7.43	7.94	8.01	8.66	7.60	8.03	7.94	8.52	7.71	8.13
	P 1	右	7.0	9.1	7.25	9.46	7.02	9.03	7.41	9.67	7.23	9.33	7.38	9.59	7.37	9.43
	P 1	左	6.9	9.2	7.25	9.46	7.02	9.03	7.41	9.67	7.23	9.33	7.38	9.59	7.37	9.43
	P 2	右	6.8	9.0	6.87	9.39	6.69	8.88	7.00	9.55	6.82	9.29	7.02	9.41	6.94	9.23
	M 1	右	9.9	11.1	10.45	11.81	10.09	11.30	10.61	11.87	10.18	11.39	10.68	11.75	10.47	11.40
	M 1	左	9.5	10.9	10.45	11.81	10.09	11.30	10.61	11.87	10.18	11.39	10.68	11.75	10.47	11.40
	M 2	右	9.0	10.8	9.65	11.72	9.42	11.19	9.88	12.00	9.48	11.52	9.91	11.85	9.74	11.31
下顎	C	右	6.7	6.9	6.88	7.82	6.55	7.33	7.06	8.04	6.69	7.39	7.07	8.14	6.68	7.50
	C	左	6.9	6.6	6.88	7.82	6.55	7.33	7.06	8.04	6.69	7.39	7.07	8.14	6.68	7.50
	P 1	右	7.2	7.3	7.07	8.10	6.96	7.72	7.32	8.34	7.05	7.89	7.31	8.06	7.19	7.77
	P 1	左	7.2	7.2	7.07	8.10	6.96	7.72	7.32	8.34	7.05	7.89	7.31	8.06	7.19	7.77
	P 2	右	7.3	7.7	7.12	8.49	7.00	8.06	7.45	8.68	7.12	8.30	7.42	8.53	7.29	8.26
	P 2	左	7.2	7.9	7.12	8.49	7.00	8.06	7.45	8.68	7.12	8.30	7.42	8.53	7.29	8.26
	M 1	右	10.6	9.9	11.56	11.00	11.06	10.49	11.72	11.15	11.14	10.62	11.72	10.89	11.32	10.55
	M 1	左	10.5	9.9	11.56	11.00	11.06	10.49	11.72	11.15	11.14	10.62	11.72	10.89	11.32	10.55
M 2	右	11.2	9.9	11.06	10.55	10.65	9.97	11.39	10.75	10.78	10.21	11.30	10.53	10.89	10.20	
M 2	左	10.8	10.1	11.06	10.55	10.65	9.97	11.39	10.75	10.78	10.21	11.30	10.53	10.89	10.20	

註1：計測値の単位は、すべて、「mm」である。

註2：歯種は、I 1（第1切歯）・C（犬歯）・P 1（第1小臼歯）・P 2（第2小臼歯）・M 1（第1大臼歯）・M 2（第2大臼歯）を意味する。

註3：MD（歯冠近遠心径）・BL（歯冠唇舌径）を意味する。

註4：*はMATSUMURA(1995)より、**は権田(1955)より引用

第10表 元総社西川遺跡出土乳歯歯冠計測値及び比較表

元総社西川遺跡出土乳歯			現代日本人乳歯*			
歯種	左右	MD	BL	MD	BL	
上顎	m1	右	7.3	8.2	7.2	9.1
	m1	右	8.9	9.9	9.3	10.6
	m2	左	9.0	9.9	9.3	10.6
下顎	m2	右	10.3	8.8	10.6	9.0
	m2	左	10.3	8.8	10.6	9.0

註1：計測値の単位は、すべて、「mm」である。

註2：歯種は、m1（第1乳臼歯）・m2（第2乳臼歯）を意味する。

註3：MD（歯冠近遠心径）・BL（歯冠唇舌径）を意味する。

註4：*現代人のデータは、藤田（1949）による

第11表 出土永久歯の非計測的形質

上下	歯種	観察項目	観察結果		備考
			右	左	
上	I 1	シャベル型	有り	—	註：左は出土していない
		棘突起	無し	—	註：左は出土していない
		盲孔	無し	—	註：左は出土していない
	C	犬歯結節	無し	—	註：左は出土していない
	P 1	中心結節	無し	有り	
		介在結節	無し	無し	
	P 2	中心結節	無し	—	註：左は出土していない
		介在結節	無し	—	註：左は出土していない
	M 1	カラベリ結節	無し	無し	
	M 2	臼房結節	無し	—	註：左は出土していない
下	M 1	第6咬頭	無し	無し	
		第7咬頭	無し	無し	
		原錘茎状突起	無し	無し	
		屈曲隆線	有り	有り	
	M 2	咬合面の溝型X	無し	無し	
		4咬頭	無し	無し	

註：I 1（第1切歯）・C（犬歯）・P 1（第1小白歯）・P 2（第2小白歯）・M 1（第1大白歯）・M 2（第2大白歯）を意味する。

[4] 元総社西川遺跡出土馬歯

檜崎 修一郎

はじめに

元総社西川遺跡は、群馬県前橋市元総社町に位置し、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が平成12(2000)年1月より同年6月まで行われた。この遺跡より、1号溝と8号溝から馬歯が出土したので以下に報告する。

なお、馬歯の計測方法は、von den Driesch (1976)に従った。

1. 出土状況

本馬歯は、1号溝と8号溝から出土している。1号溝は、全長15mで深さ145cmであり、出土遺物より近世に近い中世に比定されている。また、8号溝は、全長33.3mで深さ179cmであり、時代は1108年以前より近世に比定されている。今回、馬歯のみ発見されており、他の骨は発見されていない。

2. 馬の残存状態

(1) 1号溝出土馬歯

上顎右側第4小臼歯(P4)が1本出土している。

(2) 8号溝出土馬歯

全部で7本出土しているが、その内、2本は破片しか残存しておらず同定不能である。但し、この2本とも馬歯であることは間違いない。その他の5本はすべて下顎左側の馬歯であり、内訳は第2小臼歯が1本・第3小臼歯が1本・第4小臼歯が2本・第3大臼歯が1本である。

3. 個体数

(1) 1号溝出土馬歯

上顎右側第4小臼歯が1本だけ出土しているので、個体数は、1体と推定される。

(2) 8号溝出土馬歯

同じ8号溝でも、それぞれ異なる3ヶ所で発見さ

れている。重複する部位は、下顎左側第4小臼歯に認められるが、馬歯の色調や保存状態等から別の場所で3個体が出土したと推定される。

4. 性別

馬の場合、性別は上下顎にある犬歯の有無、あるいは寛骨により推定できる。しかし、今回、1号溝並びに8号溝出土馬歯のどちらも、すべての歯が残存して出土しているわけではなく、犬歯の有無が確認できない上、寛骨も出土していないため、性別の推定は難しい。また、馬の歯の計測値による推定も、馬の場合、性差が少ないため推定は難しい。

5. 死亡年齢

馬の場合、その個体の死亡年齢が一番良く推定できるのは切歯(門歯)である。しかし、今回、1号溝並びに8号溝出土馬歯のどちらもその切歯は出土していないので死亡年齢を推定するのは難しい。しかし、馬歯の歯根中心部と咬合面中心部との距離から推定してみると、3体の死亡年齢は、1号溝出土馬歯は約11歳・8号溝出土馬歯は約7～8歳と約7歳という結果が出た。

6. 馬歯の病変

今回、1号溝並びに8号溝から出土した馬歯に、歯石の付着があるものは1本も認められなかった。

7. 馬の体高

今回、1号溝並びに8号溝からは馬歯のみが出土しており、馬の生前の体高を推定するのに必要な頭骨・下顎骨・肩甲骨・上腕骨・撓骨・中手骨・大腿骨・脛骨・中足骨等が出土していないため、体高の推定は不可能である。

8. 馬の殉殺

遺跡から出土する馬骨は、目的をもって殉殺した犠牲馬と廃馬を投棄した斃馬との2つに大別されるという。本報告の馬歯の場合、溝から出土しているため、犠牲馬の可能性が高い。この殉殺した犠牲馬の目的としては、水神に捧げる・葬送の道連れに殉葬する・土木工事や戦いに際して神に捧げる等が考えられるという。本馬歯の場合、溝から出土しており、祈雨祭祀に伴い水神に捧げるために殉殺した可能性が高い。例えば、『日本書紀』には642年6月に群臣が集まって、旱魃に際して雨を祈るために牛馬を殺し河伯（漢神）に祈った記事が見られ、『続日本紀』には791年9月に「殺牛用祭漢神」を禁じた記事があるという（久保・松井、1999）。

まとめ

元総社西川遺跡の1号溝より1本、8号溝より7本の合計8本の馬歯が出土した。1号溝の時代は近世に近い中世に比定されている。この1号溝からは、上顎右側第4小白歯が1本出土しているが、死亡年齢約11歳と推定された。また、8号溝の時代は1108年以前から近世までと比定されている。この8号溝からは、7本出土しているが、その内2本は破片であり同定や形態観察が不能である。同定可能な5本の内、4本がまとめて出土したものは恐らく同一個体のもので下顎左側第2から第4小白歯と同第3大白歯であるが、死亡年齢は約7～8歳と推定された。また、別の場所からは、下顎左側第4小白歯が出土しており、この個体の死亡年齢は約7歳と推定された。いずれも、溝から出土しており、祈雨祭祀に関連して殉殺された可能性が高い。

謝辞

本出土馬歯を報告する機会を与えていただき、出土馬歯に関する考古学的情報をいただいた、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の笹澤泰史氏に感謝いたします。

参考文献

- [和文] (あいうえお順)
 鋳方貞亮 1993 『改訂 日本古代家畜史』、有明書房
 大泰司紀之 1993 『十二歯考』、医歯薬出版
 大泰司紀之 1998 『哺乳類の生物学：2. 形態』、東京大学出版会
 加藤嘉太郎 1993 『家畜比較解剖図説・上巻』、養賢堂
 加茂儀一 1973 『家畜文化史』、法政大学出版局
 久保和士・松井 章 1999 「家畜その2：ウマ・ウシ」、『考古学と動物学』（西本豊弘・松井章編）、同成社
 クラットン=ブロック, J. (増井光子監修・増井久代訳) 1989 『図説動物文化史事典』、原書房
 クラットン=ブロック, J. (桜井清彦監訳・清水雄次郎訳) 1997 『馬と人の文化史』、東洋書林
 後藤仁敏・大泰司紀之編 1986 『歯の比較解剖学』、医歯薬出版
 近藤誠司 2001 『ウマの動物学』、東京大学出版会
 佐原 真 1993 『騎馬民族は来なかった』、日本放送出版会
 芝田清吾 1969 『日本古代家畜史の研究』、学術書出版会
 正田陽一 1983 『家畜という名の動物たち』、中央公論社
 正田陽一編著 1987 『人間がつくった動物たち』、東京書籍
 シンプソン, G. G. (長谷川善和監修、原田俊治訳) 1989 『馬と進化』、どうぶつ社
 田名部雄一 1995 「家畜と人間の歴史」、『講座文明と環境：8. 動物と文明』（河合雅雄・埴原和郎編）、朝倉書店、p.186-204.
 榎野博幸 1986 『けもの歯』、大阪市立自然史博物館
 直良信夫 1984 『日本馬の考古学的研究』、校倉書房
 日本中央競馬界競走馬総合研究所編 1986 『馬の科学』、講談社
 日高敏隆監修 1996 『日本動物大百科：2. 哺乳類Ⅱ』、平凡社
 ラッカム, ジェイムズ 1997 『動物の考古学』（本郷一美訳）、学藝書林
 [英文] (ABC順)
 CHAPLIN, R.E. 1971 "The Study of Animal Bones from Archaeological Sites", Seminar Press
 GILBERT, B. Miles 1980 "Mammalian Osteology", Modern Printing
 HESSE, Brian & WAPNISH, Paula 1985 "Animal Bone Archaeology", Taraxacum
 HILLSON, Simon 1986 "Teeth", Cambridge University Press
 OLSEN, Stanley J. 1973 "Mammal Remains from Archaeological Sites", Harvard University Press
 PEYER, Bernhard 1968 "Comparative Odontology", The University of Chicago Press
 REITZ, Elizabeth J. & WING, Elizabeth S. 1999 "Zooarchaeology", Cambridge University Press
 SCHMID, Elisabeth 1972 "Atlas of Animal Bones", Elsevier Publishing
 Von Den DRIESCH, Angela 1976 "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites", Harvard University

第12表 元総社西川遺跡馬歯出土表

区名	溝番号	出土点数	出土部位	取り上げ月日
1区	1号溝	1点	上顎右P4 (第4小白歯)	5月29日
2区	8号溝	1点	同定不能 (馬歯であることは間違いない)	3月9日
2区	8号溝	4点	下顎左P2 (第2小白歯)	3月15日
			下顎左P3 (第3小白歯)	
			下顎左P4 (第4小白歯)	
			下顎左M3 (第3大白歯)	
2区	8号溝	2点	下顎左P4 (第4小白歯)	4月14日
			同定不能 (馬歯であることは間違いない)	

註：取り上げ年は、すべて、平成12 (2000) 年である。

第13表 元総社西川遺跡出土馬歯計測値

出土地点	歯種	歯冠長	歯冠幅	頬側歯冠高	取り上げ月日
1区1号溝出土	上顎右側P4	24.0mm	26.0mm	31.0mm	5月29日
2区8号溝出土	同定不能	計測不能	計測不能	計測不能	3月9日
2区8号溝出土	下顎左側P2	30.0mm	12.0mm	46.0mm	3月15日
	下顎左側P3	25.0mm	14.0mm	42.5mm	
	下顎左側P4	25.5mm	15.0mm	42.5mm	
	下顎左側M3	31.0mm	14.0mm	29.5mm	
2区8号溝出土	下顎左側P4	約24mm	13.0mm	45.5mm	4月14日
	同定不能	計測不能	計測不能	計測不能	

註：取り上げ年は、すべて、平成12 (2000) 年である。

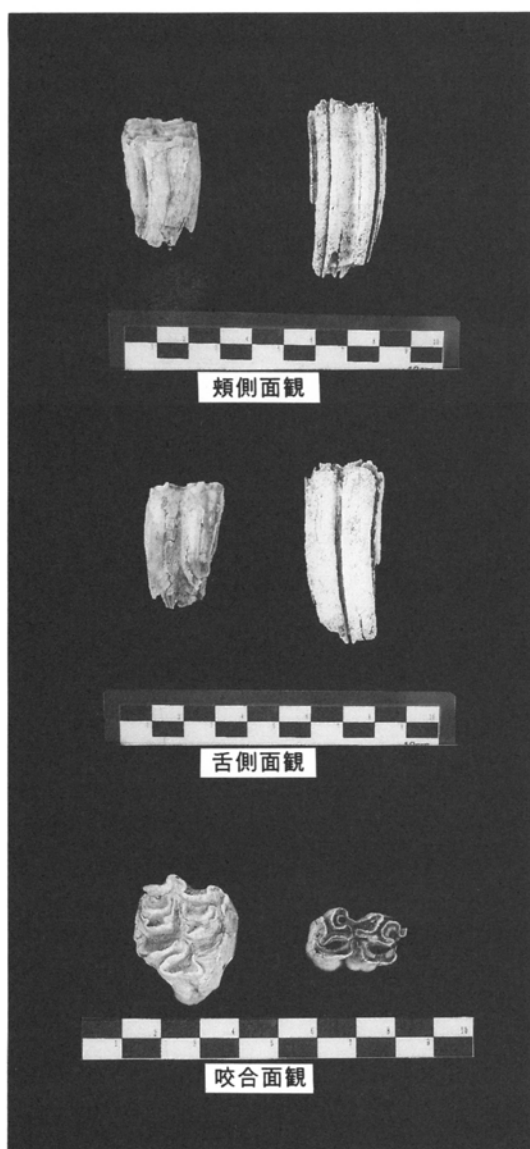
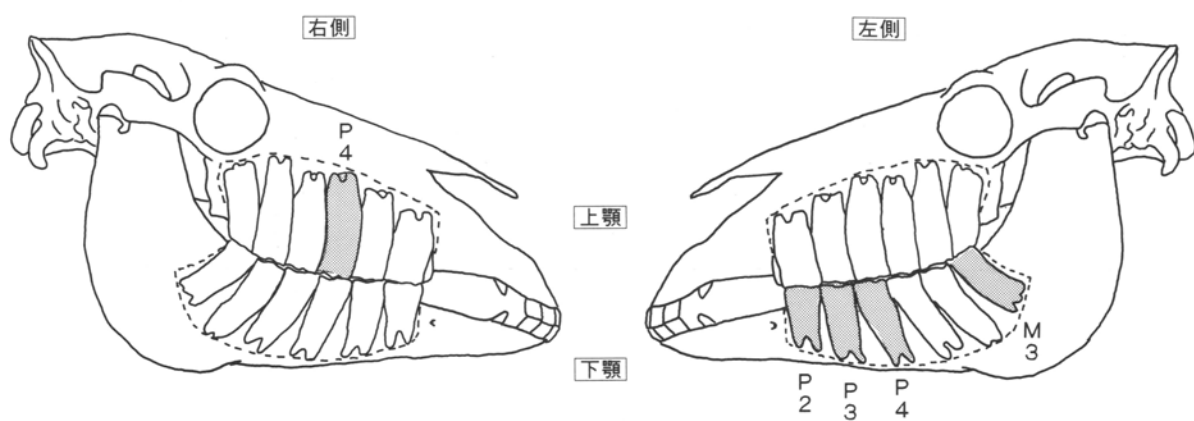


写真1：元総社西川遺跡出土馬齒
[左：1号溝出土馬齒、右：8号溝出土馬齒(2000年4月14日出土)]



写真2：元総社西川遺跡出土馬齒
8号溝出土馬齒(2000年3月15日出土)



第86図 元総社西川遺跡出土馬齒残存図

[5] S字状口縁台付甕の胎土材料

藤根 久・今村美智子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

土器胎土は、粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、その様子は肉眼観察によりある程度識別されるものの、粘土の種類やミクロ的な構成物は顕微鏡観察によらなければならない。最近では、胎土中に含まれる珪藻化石や骨針化石などの記載により、粘土の種類について知ることができ、混和材の種類も砂粒のほか火山灰や灰質物などが混入されていることが分かってきた(車崎ほか、1996)。こうした土器胎土の材料を調べることは、土器の形態や文様などととも土器の構成要素として重要であり、土器材料の種類ほか、材料から見た製作技法や土器の製作地の情報などについても知ることができる。

元総社西川遺跡は、前橋市元総社町・群馬町塚田に所在する遺跡である。調査では、東海系のS字状口縁台付甕を伴った住居址が検出された。ここでは、これらS字状口縁台付甕の胎土材料について粘土および砂粒の特徴について検討した。

2. 方法と記載

ここでは、土器の薄片を作成し偏光顕微鏡を用いた観察を行った。試料は、元総社西川遺跡住居址から出土したS字状口縁台付甕13試料、比較試料として新保遺跡出土S字状口縁台付甕1試料である(第1表)。土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片(プレパラート)を作成した。

(1)試料は、始めに岩石カッターなどで整形し(面積約6cm²程度(2×3cm))、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着した後、精密岩石薄片作製機を用いて平面を作成し、同様にその平面の固化処理を行った。

(2)さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。

(3)その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片

を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で分類群ごとに同定・計数した。同定・計数は、100μm格子目盛を用いて任意の位置における約50μm(0.05mm)以上の鉱物や複合鉱物類(岩石片)あるいは微化石類(50μm前後)を対象とし、微化石類と石英・長石類以外の粒子が約100個以上になるまで行った。また、この計数とは別に薄片全面について、微化石類(放散虫化石、珪藻化石、骨針化石、孢子化石)や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。

3. 分類群の記載

細礫~砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類した(菱田ほか、1993)。なお、胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子(微化石類)も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

[放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊性珪藻化石とともに外洋性堆積物によく見られる。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10

第4章 自然科学分析—自然科学分析一覧

～数百 μm 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉(1988)や安藤(1990)によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石(海水種)・珪藻化石(汽水種)・珪藻化石(淡水種)と分類し、同定できないものは珪藻化石(?)とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や皿鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[胞子化石]

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30 μm 程度の小型の無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類(雲母)は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造という)である。累帯構造

を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石(主に紫蘇輝石)は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。 $\text{SiO}_2\%$ が少ない深成岩、 $\text{SiO}_2\%$ が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主として $\text{SiO}_2\%$ が中間から少ない火山岩によく見られ、 $\text{SiO}_2\%$ の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような $\text{SiO}_2\%$ が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[ガラス・軽石型ガラス]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス(バブル・ウォール型)や小さな泡をたくさんもつガラス(軽石型ガラス)などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物

と考える。

[発泡斑晶質]

発泡斑晶質は、下記の様な斑晶質ではあるが石器状のガラス質の部分が上記の軽石質ガラスのように発泡しているものをいう。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い

[凝灰岩質]

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山碎屑物などから構成され、非晶質でモザイクな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

[複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒から細粒まで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約

0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

4. 各胎土の特徴および計数の結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した（第17表）。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No1：60～500 μm が多い（最大粒径1.1mm）。複合石英類（微細）> 砂岩質 > 石英・長石類 > 斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、角閃石類、複合石英類（中型）、凝灰岩質、単斜輝石、斜方輝石、ジルコン、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No2：80～700 μm が多い（最大粒径1.7mm）。複合石英類（微細）> 斑晶質 > 斜長石（双晶）> 石英・長石類 > 複合石英類、角閃石類、砂岩質、完晶質、単斜輝石、ガラス質（単斜輝石・斜長石（双晶）付着）、凝灰岩質、不透明鉱物、胞子化石、植物珪酸体化石

No3：70～700 μm が多い（最大粒径2.0mm）。斑晶質 > 複合石英類（微細）> 単斜輝石 > 斜長石（双晶）、砂岩質、泥岩質、ガラス質（単斜輝石・斜長石（双晶）付着）、胞子化石、植物珪酸体化石、ジルコン、微化石類を含む粘土塊（海水種 *Actinocyclus* 属、放散虫化石、骨針化石など）

No4：90～800 μm が多い（最大粒径1.5mm）。斑晶質 > 単斜輝石 > 複合石英類（微細）> 斜長石（双晶）、砂岩質、ガラス質（単斜輝石・斜長石（双晶）付着）、凝灰岩質、ジルコン、植物珪酸体化石、微化石類を含む粘土塊（内湾種 *Cyclotella stylorum*? 多産）

No5：150～900 μm が多い（最大粒径1.7mm）。斑晶質 > 単斜輝石 > 複合石英類（微細）> 斜長石（双晶）、凝

灰岩質、ガラス質(単斜輝石・斜長石(双晶) 附着)、植物珪酸体化石

No6: 60 μm ~1.2mmが多い(最大粒径3.1mm)。斑晶質>>単斜輝石> 複合石英類(微細)> 砂岩質、斜長石(累帯)、斜長石(双晶)、ガラス質(単斜輝石・斜長石(双晶) 附着)、凝灰岩質、珪藻化石(淡水種 *Cocconeis placentula*)

No7: 70~600 μm が多い(最大粒径1.1mm)。複合石英類(微細)> 石英・長石類> 砂岩質> 斑晶質、複合石英類、完晶質、凝灰岩質、斜長石(双晶)、単斜輝石

No8: 90~700 μm が多い(最大粒径1.1mm)。複合石英類(微細)> 石英・長石類> 砂岩質> 複合石英類、単斜輝石、斑晶質、雲母類、ガラス質(斜長石(累帯) 附着)、斜長石(双晶)、凝灰岩質、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia ob scura?*)、ジルコン、孢子化石、植物珪酸体化石

No9: 80~900 μm が多い(最大粒径1.3mm)。斑晶質> 単斜輝石> 複合石英類(微細)、斜長石(双晶)、ガラス質(斜長石(累帯) 附着)、軽石型ガラス質、角閃石類、凝灰岩質

No10: 70~800 μm が多い(最大粒径2.4mm)。斑晶質> 単斜輝石> 複合石英類(微細)> 石英・長石類、斜長石(累帯)、斜長石(双晶)、砂岩質、ガラス質(単斜輝石附着)、珪藻化石(中~下流性河川指標種群 *Cymbella turgidula*)、植物珪酸体化石

No11: 70~800 μm が多い(最大粒径1.6mm)。砂岩質> 複合石英類(微細)> 単斜輝石> 斑晶質> カリ長石(パーサイト)、斜長石(双晶)、角閃石類、ガラス質、ジルコン、珪藻化石(淡水種 *Synedra ulna*, *Pinnularia* 属)、植物珪酸体化石

No12: 70 μm ~1.2mmが多い(最大粒径1.5mm)。斑晶質> 複合石英類(微細)> 石英・長石類> 単斜輝石> 斜長石(双晶)、ガラス質、ジルコン、凝灰岩質、珪藻化石(淡水種 *Synedra ulna*)、植物珪酸体化石

No13: 60~600 μm が多い(最大粒径950 μm)。複合石英類(微細)> 石英・長石類> 砂岩質、ガラス質(単斜輝石附着)、単斜輝石、[複合石英類、斑晶質]、

植物珪酸体化石

No14: 70~700 μm が多い(最大粒径1.7mm)。斑晶質> 複合石英類(微細)> 単斜輝石> 石英・長石類、斜長石(双晶)、ガラス質(斜長石(双晶) 附着)、角閃石類、植物珪酸体化石

5. 微化石による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10~数100 μm (実際観察される珪藻化石は大きいもので150 μm 程度)、放散虫化石が数百 μm 、骨針化石が10~100 μm 前後である(植物珪酸体化石が10~50 μm 前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm 以下、シルトが約3.9~62.5 μm 、砂が62.5 μm ~2 mmである(地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は、胎土材料の粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した土器胎土は、微化石類により1) 淡水成粘土を用いた胎土、2) 水成粘土を用いた胎土、3) その他粘土を用いた胎土、などであることが分かった(第16表)。

1) 淡水成粘土を用いた胎土 (No6, 10~12; 4胎土)

これら胎土中には、少ないものの淡水種珪藻化石の *Synedra ulna* や *Pinnularia* 属などを含んでいた。

2) 水成粘土を用いた胎土 (No1)

この胎土中には、少ないものの海綿動物の骨格をなす骨針化石が含まれていた。

3) その他粘土を用いた胎土 (No2~5, 7~9, 13~14; 9胎土)

これらの胎土中には、水成を指標するような骨針化石あるいは珪藻化石などは含まれていなかった。

なお、No 3 の胎土中には、放散虫化石や海水種珪藻化石 *Actinocyclus* 属を多く含む粘土塊が含まれていた。また、No 4 の胎土においても内湾種珪藻化石の *Cyclotella stylorum* を多く含む粘土塊が含まれていた。

6. 砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った。起源岩石の推定は、砂岩質や複合石英類（微細）が堆積岩類、斑晶質や完晶質が火山岩類、ガラス質がテフラ（火山噴出物）、複合石英類（大型）や複合鉱物類（含雲母類など）が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類である。

砂粒組成の分類は、最も多く出現する分類群（第1出現群）と次いで多く出現する分類群（第2出現群）の組合せに従った（第15表）。

その結果、火山岩類が特徴的に多く堆積岩類や凝灰岩類などを伴う Dc 群が 8 胎土、堆積岩類が特徴的に多く火山岩類などを伴う Cd 群が 4 胎土、堆積岩類が特徴的である C 群が 2 胎土であった（第16表）。

7. 考察

検討した S 字状口縁台付甕胎土の粘土は、淡水種珪藻化石を僅かに含む淡水成粘土や水成粘土あるいは水成要素を持たないその他粘土であった。

一方、胎土中の砂粒組成では、火山岩類が特徴的に多く堆積岩類を伴う Dc 群が 8 胎土、堆積岩類が特徴的に多く火山岩類を伴う Cd 群が 4 胎土、堆積岩類が特徴的な C 群が 2 胎土であった。なお、この Dc 群と Cd 群は、火山岩類と堆積岩類の出現頻度の違いであり、大きな違いはないものとする。しかし、No 1（6住11）と No 13（12住4）の S 字状口縁台付甕胎土は、堆積岩類を特徴的に多く含む C 群で

あることから、他の S 字状口縁台付甕胎土の砂粒組成と異なる。

これまでの県内における S 字状口縁台付甕の胎土材料の調査は、波志江中宿遺跡粘土採掘坑に伴って出土した S 字状口縁台付甕、この波志江中宿遺跡に関連して荒砥二之堰遺跡・舞台遺跡・五日牛清水田遺跡、波志江中野面遺跡、横手早稲田遺跡などで行っている。

このうち波志江中宿遺跡、荒砥二之堰遺跡、舞台遺跡、五日牛清水田遺跡の S 字状口縁台付甕は、沼沢湿地に生育する珪藻化石を特徴的に多く含む粘土であり、テフラとしての火山岩類や堆積岩類を主体とした砂粒組成から構成される胎土からなる（引用文献、波志江中宿遺跡）。なお、波志江中野面遺跡においては11個体中6個体に同様の特徴の胎土を示す S 字状口縁台付甕が見られた（藤根・古橋、2001）。

一方、横手早稲田遺跡や波志江中野面遺跡12号・17号住居址から出土した S 字状口縁台付甕では、放散虫化石などの海成粘土要素を示し、片岩類を特徴的に含む砂粒組成を示す胎土が検出された（パレオ・ラボ、2001；藤根・古橋、前出）。

ここで検討した S 字状口縁台付甕は、水成要素の低い粘土であり、火山岩類や堆積岩類を特徴的に含む砂粒組成を示す胎土が多い。また、比較検討した新保遺跡の141号住居址から出土した S 字状口縁台付甕も同様の特徴を示している。なお、No 1（6号住居址11）と No 13（12号住居址4）の S 字状口縁台付甕は、堆積岩類を特徴的に多く含む砂粒組成を示すが、同様の胎土は舞台遺跡5号住居址から出土した S 字状口縁台付甕に見られた（引用文献、波志江中宿遺跡）。

こうした土器胎土材料の違いは、土器製作地の地質環境の違いを反映しているが、採取した粘土層の成因やその上下に分布する砂層が関係していることが考えられる。波志江中宿遺跡から出土した S 字状口縁台付甕胎土の特徴は、沼沢地環境で堆積した粘土層とテフラを主体とした砂粒組成を示すことから、粘土採掘坑内の堆積物の特徴とほぼ一致してい

ることが判明した。このことは、土器の材料として粘土および砂粒物をこの採掘坑において同時に採取したことを示しており、これら粘土採掘坑が土器の材料採掘坑であったことが理解された(引用文献、波志江中宿遺跡)。このように、土器作りは、基本材料である粘土を採取すると同時に、混和材としての砂粒物も採取している場合が多いものと予想される。こうしたことから、土器材料の検討は、利用可能な粘土層とその上下の砂層の特徴を調べることが有効であると考ええる。

横手早稲田遺跡などから出土したS字状口縁台付甕の胎土は、放散虫化石を含むような海成層に隣接して分布する粘土層と片岩類起源の砂粒を含むと言った特徴を示す。こうした特徴をもつ地域は、前期～中期中新統の富岡層群と変成岩類が隣接して分布する地域である藤岡から富岡にかけての地域が想定される(第89図)。

元総社西川遺跡から出土したS字状口縁台付甕の胎土は、微化石類が貧弱かまたは含まない粘土であるが、火山岩類や堆積岩類起源の砂粒を含む組成と堆積岩類の砂粒を特徴的に多く含む組成である。こうした特徴は、波志江中宿遺跡や横手早稲田遺跡から出土したS字状口縁台付甕の胎土とは異なった特徴であり、材料的にも有意に区別されるものと考えられる。

ここで示された水成指標をする微化石類が乏しく、火山岩類と堆積岩類からなる砂粒組成を示す特徴は、箕郷町に所在する和田山古墳群の室町時代瓦窯から出土した瓦の胎土に類似している(引用文献、和田山古墳群)。この和田山古墳群の瓦窯の存在は、榛名火山麓において瓦の材料として利用可能な粘土が産出することを示唆しており、瓦以外の土器類も製作された可能性を示している。

なお、No1とNo13のS字状口縁台付甕は、堆積岩類を特徴的に多く含む砂粒組成を示す胎土であるが、火山岩類やテフラが広く分布する群馬県としては特異な砂粒組成と考えられるが、現段階では明らかでない。

8. おわりに

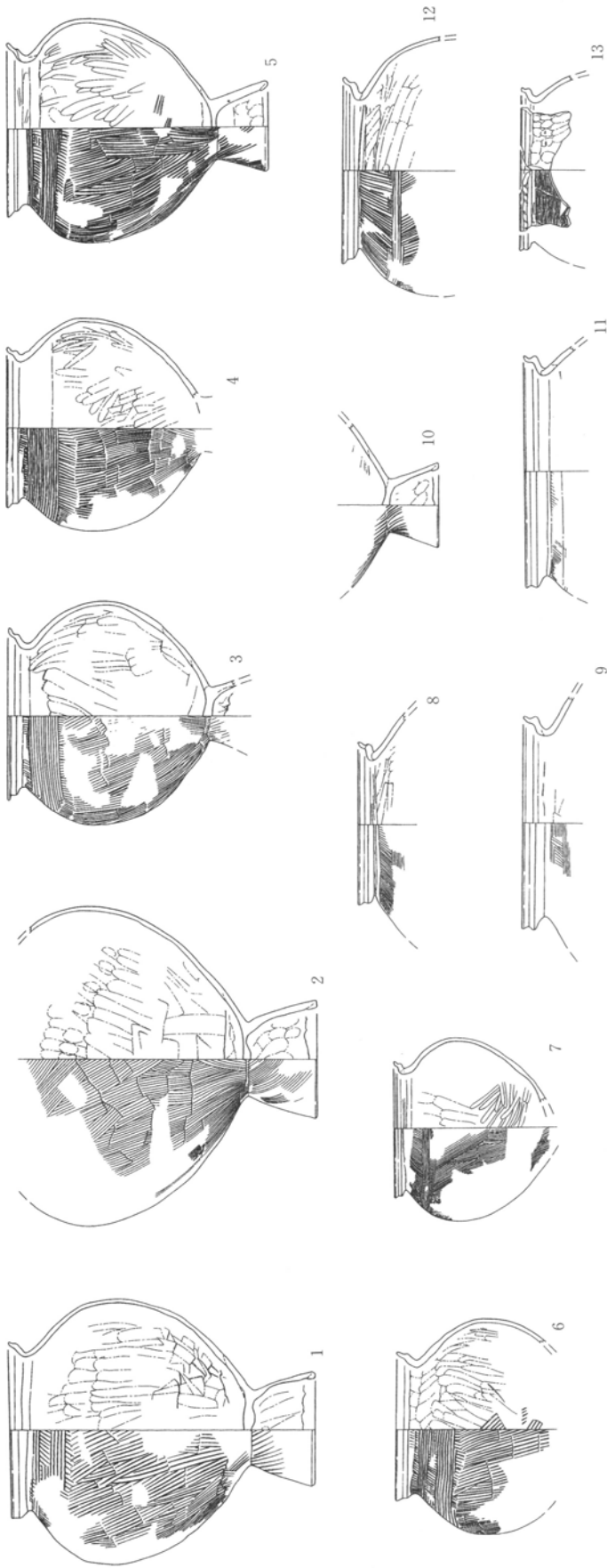
元総社西川遺跡の住居址から出土したS字状口縁台付甕の胎土は、微化石類が貧弱かまたは含まない粘土であるが、火山岩類や堆積岩類の砂粒を含む組成と堆積岩類の砂粒を特徴的に多く含む組成であることが判明した。これらの胎土の特徴は、波志江中宿遺跡などで出土したS字状口縁台付甕や横手早稲田遺跡などで出土したS字状口縁台付甕とは明らかに異なった特徴であることが分かった。これらS字状口縁台付甕胎土中の砂粒組成から、榛名火山麓において製作された可能性が考えられた。

S字状口縁台付甕の胎土材料の特徴は、これまでの胎土材料の調査により次第に明らかになってきたが、より具体的な状況については、今後の課題として検討していきたい。

土器材料に利用される粘土は、比較的良質の粘土であることが予想されるが、こうした利用できる粘土(層)は、採取できる条件を考慮するとかなり限定されるものと考ええる。歴史的には、須恵器や瓦あるいは埴輪生産地などは、その他の土器類の材料産地としても有力と考えられる。こうした歴史的に焼き物の産地である地域の地層を調べる事により、材料としての粘土や砂の特徴についてより詳細に把握できるものと考えている。

引用文献

- 新井房夫(1964)群馬県の地下と地下資源、20万分の1群馬県地質図説明書。内外地図株式会社
 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, 2, 73-88.
 地学団体研究会・地学事典編集委員会編(1981)『増補改訂地学事典』, 平凡社, 1612p.
 藤根久・古橋美智子(2001)6. 波志江中野面遺跡出土土器および粘土類の材料分析。波志江中野面遺跡(1)―古墳時代以降編一、日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団, 355-365.
 菱田量・車崎正彦・松本完・藤根久(1993)岩石学的方法に基づく胎土分析について―弥生時代後期の土器を例にして―。日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集, 34-35.
 小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究, 27, 1-20.
 車崎正彦・松本完・藤根久・菱田量・古橋美智子(1996)(39)土器胎土の材料―粘土の起源を中心に―。日本考古学協会第62回大会研究発表要旨, 153-156.
 パレオ・ラボ(2001)3. 早稲田遺跡の土器胎土分析。亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡、群馬県埋蔵文化財調査事業団, 361-372.



第87図 胎土分析資料

第14表 S字状口縁台付甕と胎土の肉眼的特徴

分析No.	遺跡	住居No.	色相 明度/彩度	色	中黒層の有無	肉眼的な胎土および粒子の特徴
1	元 社 西 川 遺 跡	6号住居11	7.5YR6/6	橙	なし	肉眼的な胎土および粒子の特徴 きめ細かい。
2		6号住居12	2.5Y8/2	灰白	なし	輝石・角閃石類、黒色粒子が目立つ。
3		6号住居13	10YR5/2	灰黄褐	有	輝石・角閃石類、黒色粒子が目立つ。
4		6号住居14	7.5YR4/1	褐灰	なし	輝石・角閃石類含む
5		6号住居15	7/5YR6/2	灰褐	なし	輝石・角閃石類含む、黒色粒子・赤色粒子が目立つ。 1mm以下の粒子多い。
6		6号住居16	7.5YR7/2	明褐灰	なし	きめ細かい。
7		6号住居17	5YR3/2	暗赤褐	なし	きめ細かい。
8		6号住居18	2.5Y7/2	灰黄	なし	きめ細かい。
9		6号住居19	2.5Y8/3	淡黄	有	1mm以下の粒子多い。
10		6号住居20	10YR7/2	にぶい黄橙	なし	輝石・角閃石類含む、黒色粒子(1mm以下)が目立つ。
11		6号住居21	10YR8/2	灰白	有	灰色粒子・赤色粒子(1mm以下)が目立つ。
12		12号住居3	10YR7/2	にぶい黄橙	なし	輝石・角閃石類目立つ。
13		12号住居4	10YR6/3	にぶい黄橙	なし	きめ細かい。
14		新保遺跡	141号住居	10YR6/2	灰黄褐	なし

第15表. 土器胎土中の砂粒分類

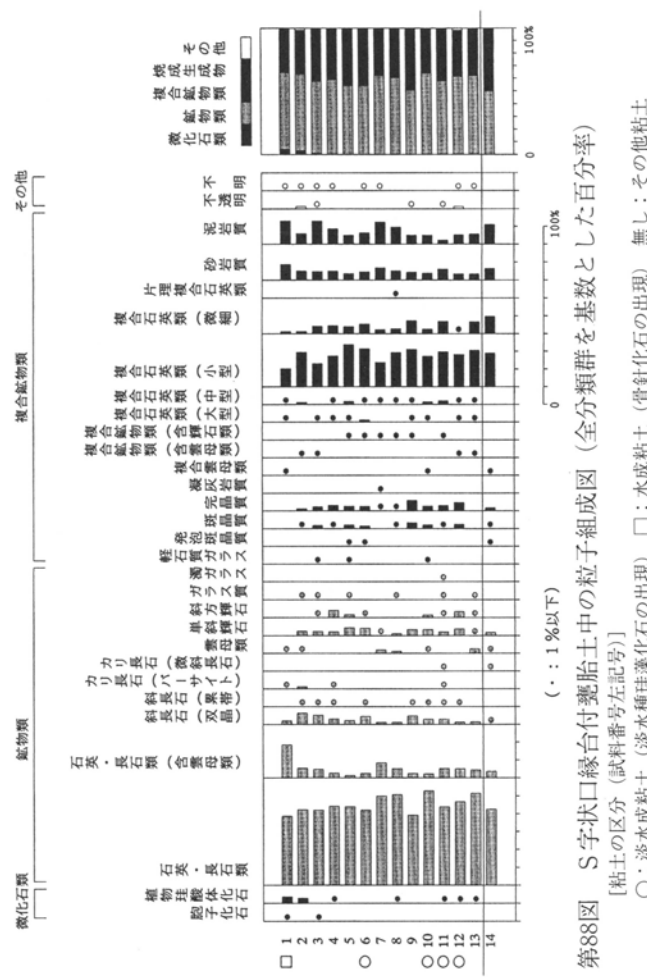
第2出群	第1出現群					
	A	B	C	D	E	F
a 片岩類	—	—	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	テフラ
b 深成岩類	Ab	Ba	Ca	Da	Ea	Fa
c 堆積岩類	Ac	—	Cb	Db	Eb	Fb
d 火山岩類	Ad	Bc	—	Dc	Ec	Fc
e 凝灰岩類	Ae	Bd	Cd	—	Ed	Fd
f テフラ	Af	Be	Ce	De	—	Fe
		Bf	Cf	Df	Ef	—

第16表 S字状口縁台付甕胎土の砂土および砂粒の特徴 (粘土の種類の数 () 付は珪藻化石が少ないことを示す)

分析No.	遺跡	住居址No.	粘土の特徴			特徴	砂粒の特徴		
			分類	種類	分類		頻度順 (> は極端な場合、[] は稀)	分類	頻度順 (> は極端な場合、[] は稀)
1		6号住居11	□	水成		C	堆積岩類 > [深成岩類、凝灰岩質]		
2		6号住居12	-	その他		Cd	堆積岩類 > 火山岩類 > 凝灰岩類、テフラ		
3		6号住居13	-	その他	外洋成粘土塊	Dc	火山岩類 > 堆積岩類 > 深成岩類、テフラ		
4	元	6号住居14	-	その他	内湾成粘土塊	Dc	火山岩類 > 堆積岩類 > 凝灰岩類、テフラ		
5	総	6号住居15	-	その他		Dc	火山岩類 > 堆積岩類 > 凝灰岩類、テフラ		
6	社	6号住居16	○	(淡水成)	淡水種珪藻化石	Dc	火山岩類 > 堆積岩類 > 凝灰岩類、テフラ		
7	西	6号住居17	-	その他		Cd	堆積岩類 > 火山岩類 > 凝灰岩質		
8	川	6号住居18	□	水成	不明種珪藻化石	Cd	堆積岩類 > 火山岩類 > 凝灰岩質		
9	遺	6号住居19	-	その他		Dc	火山岩類 > 堆積岩類 > 凝灰岩類、テフラ		
10	跡	6号住居20	○	(淡水成)	淡水種珪藻化石	Dc	火山岩類 > 堆積岩類 > テフラ		
11		6号住居21	○	(淡水成)	淡水種珪藻化石	Cd	堆積岩類 > 火山岩類 > テフラ		
12		12号住居3	○	(淡水成)	淡水種珪藻化石	Dc	火山岩類 > 堆積岩類 > 凝灰岩類、テフラ		
13		12号住居4	-	その他		C	堆積岩類 > テフラ、[深成岩類、火山岩類]		
14	新保遺跡	141号住居	-	その他		Dc	火山岩類 > 堆積岩類 > テフラ		

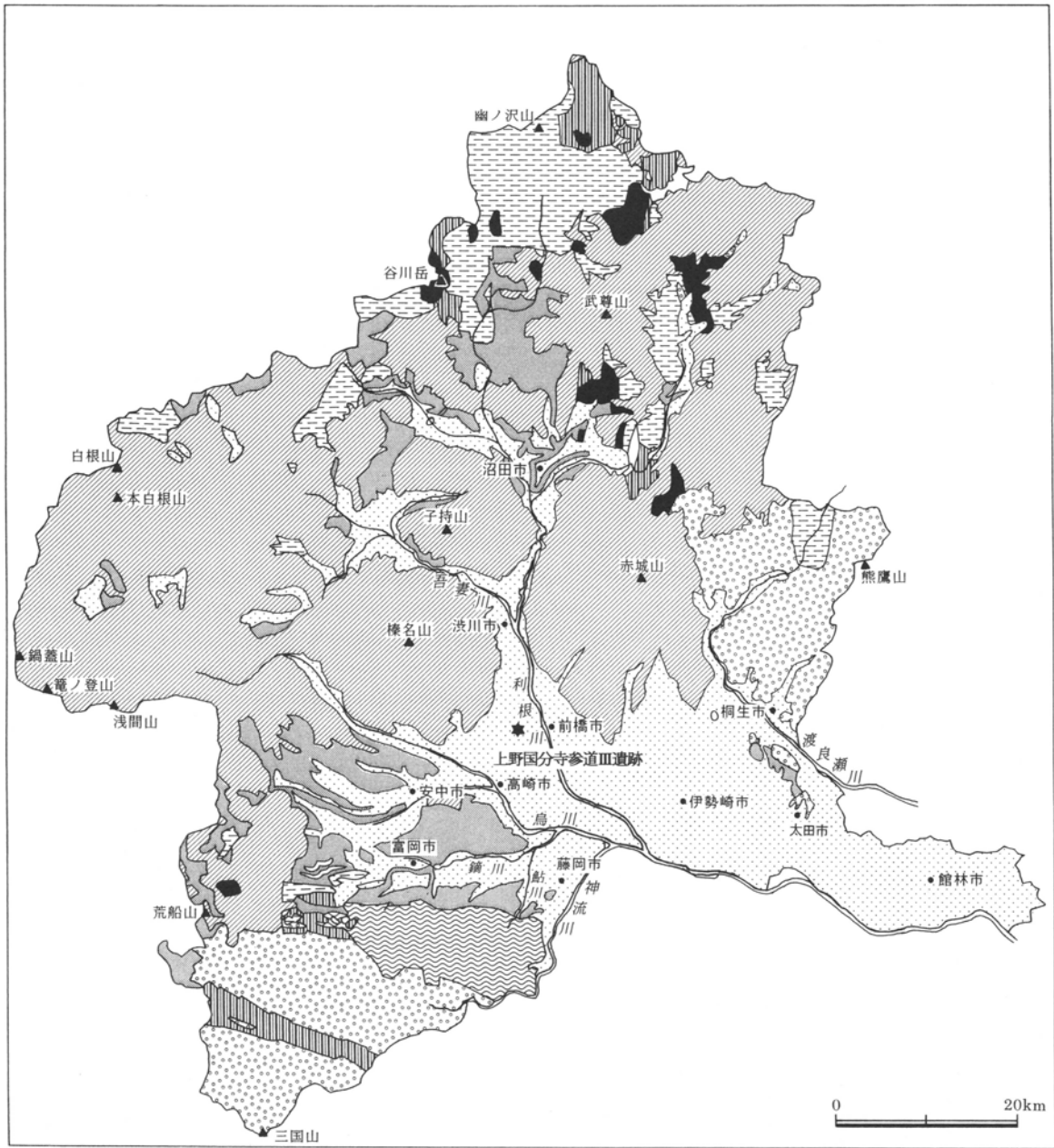
第17表 土器胎土中の粒子組成一覽表

分類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
微化石類	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
胎土化石	0	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
植物珪藻化石	94	100	87	97	98	100	124	127	80	139	100	108	138	92
鉱物類	45	13	10	6	3	6	21	13	5	6	12	12	12	8
石英・長石類	5	15	11	7	5	11	3	3	10	8	7	3	4	1
石英・長石類(含雲母類)	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
斜長石(双晶)	1	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
斜長石(葉帯)	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
カリ長石(微斜長石)	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
雲母類	6	5	5	10	10	1	3	7	9	5	9	1	4	4
黒鉛	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
斜方石	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
斜方石質	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
濁ガラス	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
複合鉱物類	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
軽石質ガラス	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
赤池珪晶質	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
珪晶質	3	5	7	6	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
完晶質	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
凝灰岩類	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
複合雲母類	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
複合珪物類(含雲母類)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
複合珪物類(含珪石類)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
複合石英類(中型)	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
複合石英類(小型)	25	46	27	38	53	51	34	48	43	45	45	42	55	41
複合石英類(大型)	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
複合石英類(微細)	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
片理複合石英類	21	12	10	11	8	11	17	13	9	10	14	8	9	14
砂岩質	32	14	27	19	11	15	31	24	10	13	5	12	15	24
泥岩質	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
その他	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
不明	243	236	207	219	223	238	248	250	204	263	228	231	268	216
総ポイント数														



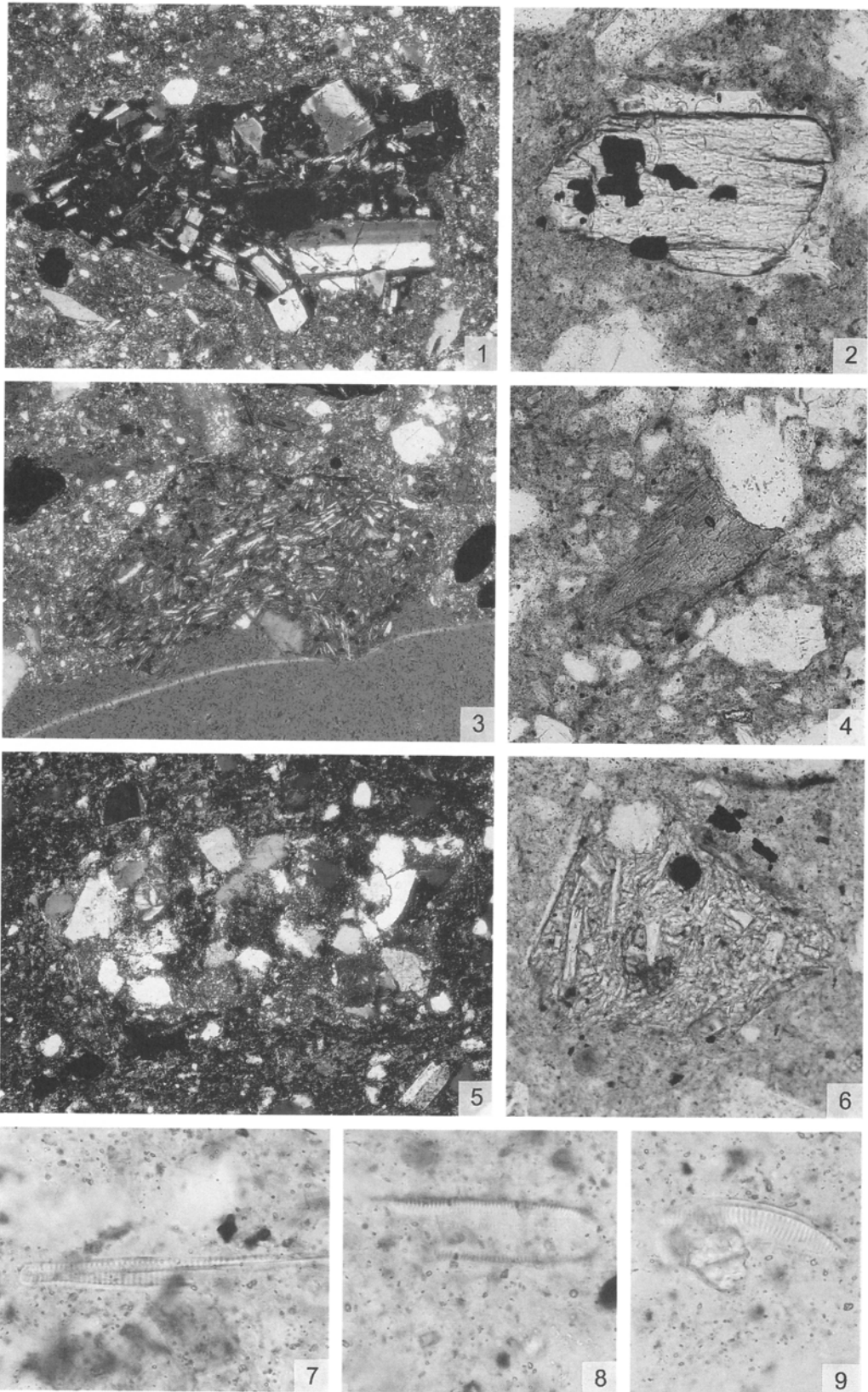
第88図 S字状口縁台付甕胎土中の粒子組成図 (全分類群を基数とした百分率) [粘土の区分 (試料番号左記号)]

○：淡水成粘土 (淡水種珪藻化石の出現) □：水成粘土 (骨針化石の出現) 無し：その他粘土



第89図 群馬県の概要地質図 (新井(1964)を改変)

第4章 自然科学分析—自然科学分析一覽



第90図 土器胎土中の粒子顕微鏡写真 (スケール; No.1・3~5は500 μ m, No.2・6は250 μ m, No.7~9は50 μ m)

- | | | |
|---|--|---|
| 1.斑晶質 (直交ニコル) No.2 | 2.単斜輝石 (ガラス附着) No.4 | 3.斑晶質 (直交ニコル) No.2 |
| 4.角閃石類 No.1 | 5.砂岩質 (直交ニコル) No.1 | 6.斑晶質 No.2 |
| 7.珪藻化石 (淡水種 <i>Synedra ulna</i>) No.11 | 8.珪藻化石 (淡水種 <i>Pinnularia</i> 属) No.11 | 9.珪藻化石 (淡水種 <i>Cymbella turgidula</i>) No.10 |

第5章 まとめ

[1] 元総社西川遺跡出土の古墳時代前期の土器について

大木紳一郎

器種組成

壺5種（瓢・二重口縁・小型・樽式土器・折り返し口縁）、甕4種（S字・樽式土器・赤井戸・吉ヶ谷式土器・単口縁台付甕）、高杯2種（大型・小型）、鉢（S字）が見られる。小型器台がないのが特徴。

壺はバラエティーに富み、在地系樽式・二重口縁・東海系小型壺が混在する。器種組成全体に占める量比は少ない。甕はS字状口縁台付甕が主体で、これに外来系の単口縁台付甕と樽式土器及び赤井戸・吉ヶ谷式土器が加わる。高杯は東海西部系の有稜高杯が主体で、碗形の小型高杯が加わる。鉢はS字状口縁の小型品である。在地の弥生土器として、壺と甕が客体的に存在し、主体は東海系の器種が占める。客体的な単口縁台付甕の系譜については、南関東～東海地方が候補にあげられるが、外反ぎみで背の低い脚部の形状は、東海地方西部の可能性を示唆するものだろう。

型式的特徴

二重口縁壺（6号住-4）は口縁が朝顔形に大きく開き口唇部が丸みをもつ。内面は明瞭な段を持たずにそのまま湾曲するらしい。この形状は、高崎市元島名將軍塚古墳や同市下佐野遺跡等で見られる「伊勢型二重口縁壺」とは別のタイプといえる。また直口壺（8号住-2）、ひさご壺（遺構外-67）は内湾ぎみに立ち上がるやや長めの口頸部で、口唇に面取りは見られない。後者は口縁直下に沈線による連弧文を描く。

甕の主体を占めるS字状口縁台付甕は、形状と器面整形から三細分できる。ここではそれを**a類**、**b1類**、**b2類**と呼ぶ。**a類**（12号住-4）は1点のみの出土で、ややなで肩の器形に口縁外面に板小口

で押し引き刺突文を廻らす。**b1類**（6号住-11・13・14・16）は球形胴で口縁外面は無文。なお**a類**と**b1類**は頸部から肩にかけて幅の広い横ハケメ（楡目）を施す。口縁断面形状は、2段目が直立かやや外上方に立ち上がり1段目よりも長さが短い。**b2類**（6号住-8・15、12号住-3など）は、やや肩の張る球形胴で肩部に横ハケメを残す。口唇部の面取りは**a類**・**b1類**・**b2類**のいずれにも見られ、ややあいまいなつくりであり型式分類の基準にはしがたいが、比較的**b2類**に付随する傾向が伺える。また、胴部以下が判明するのは**b1類**だけだが、胴部のハケメは5～6段ほどに短い単位で縦位に重ねるのが特徴といえる。脚部のハケメは斜位に間隔をあけて左上方に施す手法をとっている。脚部内面の折り返しもすべてについて見られる。

以上の特徴から、既存の分類基準にあてはめれば、**a類**は東海地方廻間編年（註1）におけるA類、**b1・2類**はB類に相当するだろう。また高崎市元島名將軍塚古墳出土土器を主体に編年を示された田口一郎の分類（註2）では、**a類**がI類、**b1・2類**がII類に当たる。ただし、**a類**はハケメと口縁押し刺突文の工具が1mmスパンときわめて細かく、粗いハケメを特徴とする典型的な廻間A類と同一視はできない。模倣品と解すべきであろうか。また、田口氏が指摘する頸部内面の横ハケメはここでは少数派で、図示した17例のうちで4例しかない。胴部内面整形は縦位のナデが主で、6号住-15・16では一部にハケメが残されている。

高杯は有稜の大型（6号住-2、12号住-1）・中型品（6号住-1）と碗形の小型品（8号住-1）がある。有稜高杯は杯部がやや内湾し脚部が円錐形に外反して開く形状で、口唇部内面の面取りは無い

が6号住-1例のようにシャープさに欠ける。椀形高杯は全形が不明だが、杯部が浅く口縁が外反ぎみの形状と同心円状のヘラミガキを施す点から在地弥生土器の樽式土器に連なる系譜の可能性がある。

伴出する樽式土器の特徴

11号住と12号住から上記で見た外来系土器に伴って樽式の壺・甕が出土している。12号住-5は、小振りの薄い折り返し口縁に、「く」字状に屈曲する頸部と球形胴部の形状をもつ。文様は頸部に三連止め簾状文と肩部に4段の櫛描波状文を施す。口縁内面と外面無文部を丁寧なヘラミガキで仕上げ、胴内面は丁寧なヘラナデを施す。器形は甕に近いが、胴内面を平滑な板状具でなでることにより器面を緻密にし、やや光沢を持つ程度にまで仕上げている。文様だけに注目した場合、口縁～頸部に櫛描波状文を施さないのは、高崎市を中心とした榛名山東南麓での後期後半の樽式甕としては異例であり、むしろ西方の富岡市周辺地域の例に近い(「富岡型」註3)が、ここでは壺と考えておく。11号住-3の小型甕はやはり小さな折り返し口縁で、口縁～頸部に櫛描波状文を2段施し、頸部簾状文を2連止めとしている。なお、1号集石からは甕(2)、遺構外出土品にも壺(1・2・7)、甕(3～6)などの樽式土器が見られる。これらは小さな折り返し口縁をもち、櫛描簾状文と波状文の組み合わせで文様が構成される点で共通する。ただし、遺構外出土-2は櫛描羽状文をもつことから、富岡市周辺地域に多く見られる特徴といえる(註4)。以上の樽式土器は、器形、文様、整形とも後期後半の典型的なものと考えられ、若狭徹の編年によるV-3期(註5)に含まれるとみていい。少なくとも器形や文様の約束事を逸脱し、樽様式の崩壊(註6)といえるような特徴は見られない。なお、1号集石からは樽式の甕とともに口縁～肩部に縄文の横帯を施文する赤井戸・吉ヶ谷式土器(註7)が出土している。

編年上の位置づけ

上述した器種組成と型式の特徴から、本資料が弥生土器から土師器へ変換する時期のものであることは疑いがない。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年について、細分の方法と画期の設定について意見の相違はあるが、変遷過程については概ね研究者間で見解が一意するといつてよい。いうまでもなく、二重口縁壺やS字状口縁台付甕、有稜高杯、器台などの土器群は外来系であり、在地弥生土器群のなかにこれらが次第に定着し、やがて群馬県における古墳時代前期における一方の主流(註8)となっていくことが知られている。その土器変遷のなかで本遺跡出土土器は東海地方西部系土器群の定着を示す最初の例だと考える。問題は、在地弥生土器を主体とする土器群との新旧関係だろう。その場合、在地弥生土器と外来系土器の組成上の量的比率のみで新旧を想定するのは正しくない。外部から土器が流入し定着が始まる過渡的段階では、土器群の様相に地域的偏差が想定されるべきであり、それらとの接触度(集団間の交流度と言い換えても良い)によって、その比率は大きく左右されることが予想される。また、「集団の移住」があったとすれば、その遺跡では外来系土器のみで構成される可能性も十分に考えられる。短絡的に土器型式と集団の性格を結びつけることは慎まなくてはならないが、本遺跡例のように外来系土器だけで器種組成がほぼそろっているのは、外来系集団そのものかきわめて近縁の集団が使ったと考えるか、あるいはすでに安定した土器様式として広範囲に定着した段階のものと考えられるかだ。ここでは、本遺跡のS字状口縁台付甕が県内例のなかでもきわめて古相を示すことから、前者の考え方をとる。そしてこの場合、V-3期の樽式土器と共伴する事実から、樽式土器を主流としていた集団との同時存在も考えられる。これを単系的な集団による土器様式の転換であって、共伴した樽式土器はその残存だとの解釈もできようが、ここでは全く過渡的様相を示す型式の特徴が見られないことから否定的といえる。従って、本遺跡の土器群は

樽式土器がまだ主体的であった段階に、東海地方西部を基点として流入した土器群だと考えたい。しかもそれは主要組成器種をそろえていることから、規模や性格の問題はともかく、集団移住をも示唆する例と考えてみたい。やや矛盾するようであるが、単系列の土器編年上でこれらは土師器の先駆けとして在地弥生土器の後に位置づけられるだろうが、実際には在地弥生土器との同時存在の可能性が高い。同様の例は高崎市新保遺跡141号住（註9）などが考えられ、一方で本遺跡土器群と同じ榛名山東南麓地域にあって在地系弥生土器で組成される保渡田荒神前遺跡（註10）などもほぼ同じ頃に存在していたと考えたい。

さて、それでは本遺跡の土器群は既存の編年観でいかなる位置に置くべきなのか。それについて述べる前にあらためてS字状口縁台付甕の編年観を整理してみたい。

S字状口縁台付甕形土器の編年的位置

S字状口縁台付甕の変遷過程についてはすでに昭和40年代から考察が進められていた（註11）。現時点では、群馬県内において井野川流域の土器を扱った田口一郎の論考（註12）、東海地方西部を網羅した赤塚次郎の廻間編年（註13）、山梨県での編年を試みた小林健二の論考（註14）などが代表的なものとしてあげられる。ここでは主に田口氏の編年（以下「田口編年」と呼ぶ）に対比させ、若干の問題点を指摘してみたい。

田口編年ではS字状口縁台付甕を7類に型式分類し、これを主にしてS字状口縁台付甕をもつ土器群を7期区分した。田口氏は口縁に押引刺突文を廻らすⅠ類（廻間A類）と器形や整形手法はそのまま刺突文を略したⅡa類（廻間B類古）の組み合わせをⅠ期、Ⅱb類（廻間B類中）のみの場合をⅡ期とした。本遺跡の主体となるS字状口縁台付甕b1類・b2類は、脚部内面に折り返しがあり、頸部内面ハケメを略するものがあることから田口分類のⅡb類～Ⅲa類に相当しよう。これらは田口編年でⅡ～

Ⅲ期に位置づけられる。ここで問題としたいのは、Ⅰ期の存在と、Ⅱ類において新旧判別の一要素である脚部内面の折り返しの有無、そしてⅡ期とⅢ期を分ける頸部内面ハケメの有無に対する疑問である。Ⅰ期の指標はⅠ類（廻間A類）とⅡa類（廻間B類古）だが、いずれも群馬県内では僅少な断片的資料に限られ、普遍的に使われていたわけではない。これらは、東海地方西部との初期的な交流を解き明かす重要な証拠であり、広域編年網を編むうえで鍵となる資料ではあるが、一定の時間と空間を規定するための指標としては現時点では不適であろう。編年の指標としては、やはり限定された時空間の中で安定した存在を示す型式が望ましい。井野川流域周辺でⅠ類の分布が知られるが、あくまでも樽式土器や、より新しい段階のS字状口縁台付甕などに客体として伴うのであり、主要甕形式として製作・使用された時空間は確認できない。従って、田口編年Ⅰ期とされていた資料は、弥生土器編年のⅤ-3期（註15）か、より新しいⅡ期のどちらかに収束されよう。

本遺跡出土のS字状口縁台付甕が関わる田口編年Ⅱ期の指標はⅡb類である。これは「口縁がシャープで内面に平坦面をつくり、肩が大きく張って脚部内面に折り返しをもつ」器形で、「頸部内面にハケメ、頸部外面下に横線（横位ハケメ）をめぐらす」整形（文様）をその特徴とされている。本遺跡b1・2類との違いは、頸部内面に廻らす横位ないし斜位ハケメの有無と胴部形状だ。前述のように、本遺跡例はハケメのないものが過半を占める。6号住-15のようにわずかに残る痕跡から、これは省略というよりハケメ整形後のナデを丁寧にした結果と考えられる。胴部形状は本遺跡b1・2類が球形に近いのに対して、田口分類のⅡb類は大きく肩が張るのを特徴とする。廻間0類を基点とするS字状口縁台付甕の器形変遷を考えた場合、肩張りの弱い「倒卵」形→球形→肩張りの強い「イチジク」形→下半を主とした長胴化の傾向が看取できる。加えて頸部～肩部の横ハケメのあり方と、頸部～肩部形状も無視できない関係にあると思われる。すなわち、肩張りが弱

く全体に緩い曲面の場合は頸部～肩部に幅の広い横ハケメが描けるが、肩が張るとともに頸部直下はわずかに外反ぎみになり、ここに幅広の櫛歯状具（おそらく木目を刻んで鋭くした板小口を使う）を当てて引いた場合、くぼんだ部分には工具の歯先が届かず、逆に肩の膨らんだ部分に強く横線を残す結果となる。6号住-15の横ハケメ上半がかすれているのがその好例である。ハケメ工具は微妙な曲面に適應するように加工したものではなく、幅の広い直線的に歯が並ぶものだったらしい。新相の特徴とされる横ハケメの「頸部からの離脱」は、弥生後期に文様効果を発揮した「横線」の形骸化であるが、形骸化の要因には装飾効果よりも器形を優先させたことがあげられ、最終的に肩部張り出し部のみ施される結果となったものだろう。器形変遷に関する以上のような考え方から、本遺跡b1・b2類は球形胴部をもつという点で田口分類Ⅱb類よりも古相に位置付けられ、より田口Ⅰ類（廻間A類）に近い。さらにわずかな相違だがb1類→b2類という組列も想定できる。従って、田口氏が掲げた頸部内面のハケメはたしかに古相のS字状口縁台付甕に見られるが、時期区分の決定的な指標とはなりにくいと考えられる。

それでは、田口編年のⅡ期をどう捉えなおせばよいのか。また、本遺跡b1・b2類をもってその前に一時期を設定すべきなのか。結論的にいえば、田口Ⅱb類と本遺跡b1・b2類を一括して一時期とし、型式の特徴として「2段目以上が短く鋭く立ち上がるか外反する」口縁に、胴部は「球形から肩張り形状への移行段階」、「頸部内面ハケメ」は以後の段階よりも多いと捉えればよい。これらは組列上での先後関係は指摘できても、本遺跡6号住一括遺物の相伴関係からも明らかなように、現段階では一定の時間幅のなかで共存すると考えられるからだ。それぞれが単独で構成される事例が現れるまでは、時期分割はあずけておきたい。

さて、本遺跡資料から田口編年の見直しを行い田口編年のⅠ期を削除してⅡ期に（古い方に）幅を持

たせた訳だが、本遺跡b1・b2類と田口Ⅱb類を代表とするこのⅡ期をもって、群馬県におけるS字状口縁台付甕の普及初段階と考える。さらにこれらを東海地方西部の編年に対比すれば、本遺跡b1・b2類は廻間B類（古～中）に最も近似することから、廻間Ⅱ期古～中段階に相当すると考えておく。

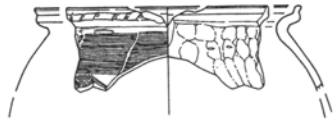
なお、弥生時代末～古墳時代前期の群馬県内における土器変遷を整理した深澤敦仁の編年（註16）によれば、樽様式が崩壊し始め田口Ⅰ類のS字状口縁台付甕と器台の登場を指標とする「1段階」、外来土器が主体となり田口Ⅱ類のS字状口縁台付甕の登場を指標とする「2段階」が本遺跡出土土器の時期に該当しよう。ただし、上記したように「1段階」と「2段階」は同時期における遺跡毎の偏差と捉えておき、現状では一つの時期でくくるべきと考える。

S字状口縁台付甕の製作技法について

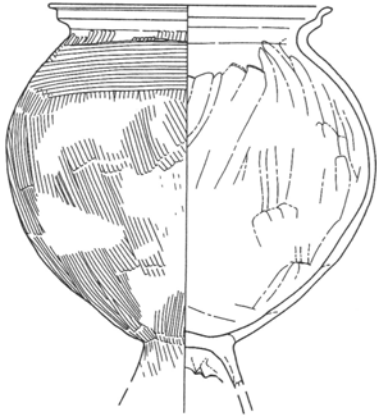
本遺跡出土のS字状口縁台付甕について、推測される製作技法をまとめておく。

材料—素材となる粘土及び混入する砂粒については本報告所収の「胎土分析」の項を参照されたい。色調はほとんどが明るい橙から白っぽいもので、焼成方法にもよるだろうが、粘土選択の段階から仕上りの発色を意識していたと思われる。新しい段階のS字状口縁台付甕がほぼ暗褐色を呈することと対照的であり、故地である東海地方西部のものに非常に近い色調といえよう。

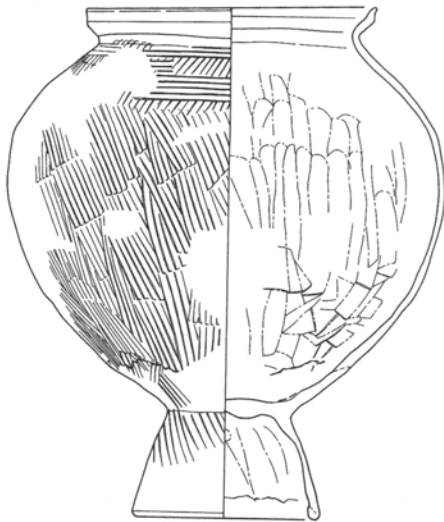
成形—口縁は一段目と二段目以上の輪積みと思われるが、密着させて外上方に引き延ばしているため、接合痕は明らかでないものが多い。「S字」部分の整形には篋をあててなでたと想定されるが、工具の木目痕跡は残さない。胴部の膨らみは、内面に残る指頭圧痕と最大径部分の器厚が最も薄いという傾向から、外面に当て具をそえて内側から薄く押し延ばすようにして成形したと考えられる。脚部はすでに指摘されているように、胴部底面と脚部天井面に砂粒の多い粘土を貼り付けて補強する。なお、脚部内面に残る指頭圧痕は、胴部と連動してやや内湾ぎみ



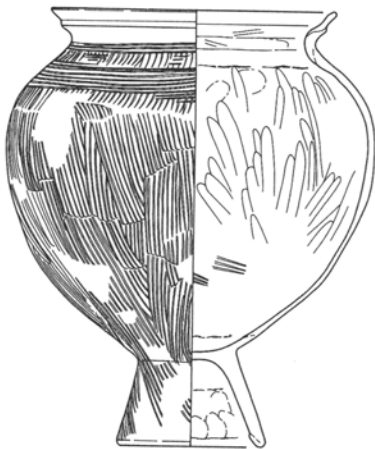
a類(12号住-4)



b1類(6号住-13)

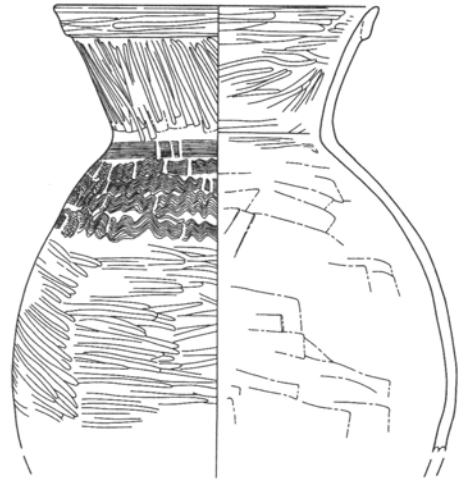


(6号住-11)

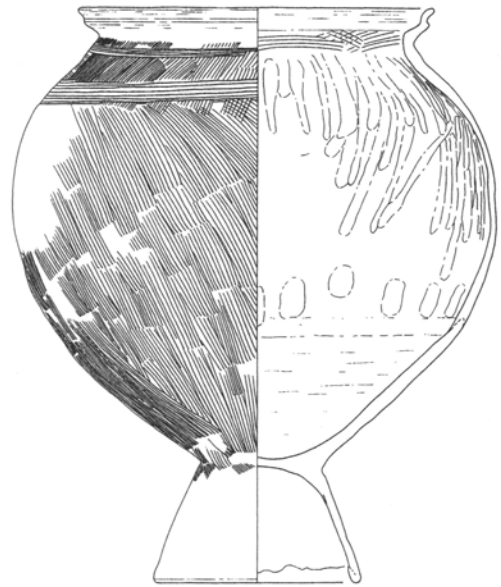


b2類(6号住-15)

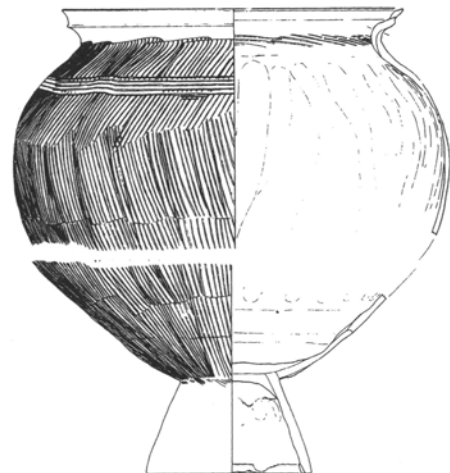
第91図 S字状口縁台付甕の分類



共伴した樽式土器(12号住-5)



新保141号住居址



元島名將軍塚4号溝

第92図 b2類相当の参考資料

第5章 まとめ

の形状を作り出すための技法の結果だろう。

整形—外面ハケメは、頸部～肩部は下方へ一回、胴～脚部は上方へ6～7回ほどに細かく分けて施す。この場合単位が細かいのは作業が丁寧であることと同義で、胴下半を一気に掻き上げる新しい段階のものと同義である。肩部の横ハケメは時計回りで描き継ぎなしに施す。なお、脚部の間をあけた斜ハケメは、幅広の板状具を曲面にあてた結果であって、間をなで消したものではない。ハケメ工具は肩部横線で確認する限り、最低でも3.8cm以上の幅をもち、木目端部を鋭く削りだした櫛歯状の板と推定される。目の間隔は2～3mmで、粗い印象を与える。内面整形は篋、あるいはなめし皮のような平滑な道具をあてて、横位つづいて縦位と丁寧になでており、明確な擦痕を残さない。下半にハケメを加える例(6号住-15・16)もあるがわずかであり、器面を平滑にすることに主眼が置かれている。なお、一部分ではあるが胴部外面にはハケメと異なる横方向の砂粒の動きが見られることから、縦位のハケメ以前に横位のヘラケズリが行われたらしい。頸部内面の横ハケメは頸部接合部を整形するためのものであり、丁寧な例では完全になで消されている。

以上が本遺跡出土のS字状口縁台付甕に関する製作技法の特徴である。ここに見られる頸部内面のハケメをなで消す手法は整形技法の消長からすれば新しい要素である。ただし製作に関わる手間を考慮すれば、むしろ胴部内面全体を「ハケメ」から「ナデ」に転換することの方が画期としての意味合いが大きい。頸部内面ハケメはかつての内面全体ハケメ整形の名残と捉えるべきだろう。これが本論で組列上に位置付けるにあたって、器形や外面整形の特徴を優先した所以である。

すでに多くの先学が言及されていることでもあるが、S字状口縁台付甕の製作技法は在地弥生土器とは全く異なる技術基盤に基づく。弥生土器は器形や文様が他様式の影響を受けて変化することもあったが、基本的な製作技法は保守的だった。その点でS字状口縁台付甕の出現は、当地における東海西部モ

デルの模倣や影響による変化では全く理解できない。換言すれば、土器づくりの技術体系そのものが移入されたのであり、そこには在地弥生土器の技術伝統は微塵もみられない。このことから当地でのS字状口縁台付甕の誕生に在地の集団は何ら関わりを持たなかったといっても過言ではないだろう。加えて高い規格性や胎土・色調の共通性から、ホームメイドではなく専門集団による専業生産品と捉えることもあながち不可能ではあるまい。

〈註〉

- 註1 赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 註2 田口一郎 1981「S字状口縁台付甕の分類と編年」『元鳥名將軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 註3 大木紳一郎 1997「弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井増光寺遺跡V』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 註4 註3と同じ
- 註5 若狭 徹 1996「編年群馬県地域」『YAY!』弥生土器を語る会
- 註6 「土器様式の崩壊」とは具体的に何を指すのか。赤彩や文様表現の乱れ・省略、施文や整形の手抜き、無文化などの様相を捉えて呼ぶことが多いが、それは必ずしも一律の変化ではなく、どこでも見られる普遍的な現象とも思えない。弥生文化の終末～古墳文化の開始における伝統的規範の解体を説明する上で重要な指標ではあるが、それはあえていえば社会現象であり、「編年」という時間軸上の基準とするには「型式」として概念化する必要がある。
- 註7 埼玉県北～中部の吉ヶ谷式土器の成立が間違いなく後期中葉以前に遡り、群馬県への移動を証明する証拠がそろうまでは、とりあえずひとつの様式名として『赤井戸・吉ヶ谷式土器』のまま呼称したい。
- 註8 近年の発掘調査により、赤城山南麓地域では古墳時代前期を通してS字状口縁台付甕を客体的にしか受容しないことが判明しつつある。
- 註9 1988『新保遺跡II』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 註10 1988『保渡田・荒神前遺跡 皿掛遺跡』群馬町教育委員会
- 註11 友廣哲也 1998「石田川式土器考」『古代』104に詳しい。
- 註12 註2と同じ
- 註13 註1と同じ
- 註14 小林健二 1993「外来系から在来系へ」『研究紀要10周年記念論文集』山梨県埋蔵文化財センター
- 註15 註5と同じ
- 註16 深澤敦仁 1998「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』XVI
- 註17 田口一郎 1999「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会資料

[2] 上野国分僧寺参道について

笹澤 泰史

はじめに

元総社西川遺跡は、平成12年1月から調査を開始した。本遺跡は上野国分僧寺南200mに位置し、本遺跡地には「群馬県遺跡台帳」に国分寺参道と登録されている細長い短冊状の区割り（第93図参照）があたる。

本遺跡に隣接する「国府南部遺跡群」（群馬町教育委員会）や、「上野国分寺参道遺跡」（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）において、「群馬県遺跡台帳」に国分寺参道と登録されている細長い短冊状の区割りから道路遺構が検出されなかったことはすでに報告されていたが、本遺跡が上野国分僧寺の南正面に

位置することから、道路状遺構の確認を主眼として調査を開始した。

4号溝

4号溝は南北直線に走行する溝である。走行方向を北に追うと、上野国分寺の南大門に当たる。上野国分僧寺南辺築垣は東西軸より3°50′北東に振れる。4号溝も南辺築垣に直交するようにわずかに西に振れる（第93図参照）。

4号溝が、南大門から直線に延びる参道の側溝である可能性もあるのではないかと検討したが、硬化



4号溝

調査区南端より撮影。国分僧寺築地塀に向かって直線に延びる。4号溝の先には国分僧寺築地塀が見える。

面は検出されず、道路遺構に伴う側溝として認定するには至らなかった。

4号溝の時期

4号溝は遺物が少なく、時期判定可能な遺物は6点で、他は小破片が数点出土するのみであった。出土遺物は8世紀後半～9世紀の所産である。

確認全長120m、最大深37cm、比高は42cmを測り、明らかに人為的に掘られた溝であると考えられる。覆土には、As-B軽石は含まれず、1108年以前には埋没していたと推定される。

4号溝は、平面プランや土層断面から6・12号住居、7号溝を掘り込み、12・19・23・26土坑、1・6・5号溝に掘り込まれていることが確認された。

13号住居との重複関係は、4号溝が13号住居を掘り込んだことが、確認された。



本遺跡地から上野国分僧寺を臨む

本遺跡からは、復元された国分僧寺の南築地塀が臨める。中央の築地塀がとぎれた空間が南大門の推定地である。本遺跡地は国分僧寺から200mに位置するが、その間には染谷川を挟む。



第93図 元総社西川遺跡周辺図①

重複関係や、覆土から4号溝は8世紀中頃以降に掘られ、1108年以前には埋没していたことが判明した。

上野国分僧寺

『史跡上野国分寺跡』には、上野国分僧寺の造営期・衰退期について、「①国分寺の建造物の中で最も早い建造物である七重塔が建立され始めるのは、8世紀の前葉ないし中葉、②11世紀の前葉から中葉には国分僧寺の築垣は完全に崩壊していた。」とある。

造営期の根拠となるのが史跡上野国分寺のSJ24（堅穴住居遺構）である。SJ24は、七重塔造営のために建てられたとされる掘立柱建物SB12を建造する際、整地のため埋め立てられたとされている。SJ24の遺物は、8世紀前半でも古い様相がある。SJ24を埋め立てた後にSB12の建設があり、その後七重塔建立といった時間経過等から、建立時期を8世紀の前葉ないし中葉としている。これは『続日本紀』天平感宝元年の記事からの想定とも矛盾しない。

一方、衰退期の根拠になるのが、南辺築垣の調査で、その基部を掘り込むようにして検出された2棟の堅穴住居SJ21・22である。調査では、南辺築垣の本体の部分は完全に崩壊して無くなっており、基部も上面が削られた状態であったが、住居はこれを掘り込んで造られていた。この住居は11世紀前葉から中葉のもので、これらの覆土の上には、天仁元(1108)年の浅間山の噴火の際に堆積したAs-B軽石層があった。東大門推定地の近くでもこれと同じ様に堅穴式住居が造られていた状況が確認されている。こうしたことから築垣は11世紀初頭には既に全壊の状態となっており、その上に一般の住居が造られるようになっていたことが明らかとなった。さらにそれらの覆土の上にAs-B軽石層が堆積していることからみて、築垣はその後も再建されなかったものと判断できる。

まとめ

4号溝と上野国分僧寺

4号溝は、①南辺築垣にはほぼ直交するように走行し、②北延長線が南大門付近にぶつかり、③時期が重なる可能性があることから、上野国分僧寺の参道に伴う側溝とも考えられるが、硬化面がないことなどから道の側溝とは判断しがたい。

「4号溝は、国分寺を意識した溝の可能性が高い。」とした表現に留めたい。

登録されている区割り

以前から、上野国分寺参道として「群馬県遺跡台帳」に登録され、参道と呼称されていた短冊状の区画からは、平成5年度国府南部遺跡群として群馬町教育委員会、平成9年度上野国分寺参道遺跡として前橋市埋蔵文化財発掘調査団によって調査報告されたように、今回の調査でも中世の大溝が検出された(9号溝)。参道の区割りが踏襲されて溝が掘られたといった考え方もあるが、一方で、上野国分僧寺と上野国府が同じ台地上にあり、染谷川を渡った南側に参道を設けるといった事に疑問を感じる考え方もある。いずれにしろ区割りそのものは中世の溝を示すものであるので、誤解をさけるため「群馬県遺跡台帳」に(伝)国分寺参道と登録されている名称の再検討も視野に入れるべきであると考えられる。

また9号溝は、非常に大規模で、中世に位置づけられることなどから、この地域の該期の歴史的環境においてその存在を無視できない重要な遺構であると思われ、今後、検討しなければならないと思われる。

主な引用・参考文献

- 1986～1992『上野国分僧寺・尼寺中間地域』(財群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 1988『史跡上野国分寺跡』(群馬県教育委員会)
- 1994『町内遺跡』(群馬町教育委員会)
- 1997『上野国分寺参道遺跡』(前橋市埋蔵文化財発掘調査団)
- 1998『群馬町誌 資料編1』 2001『群馬町誌 通史編上』

[3] 上野国分僧寺南正面の集落変遷

笹澤 泰史

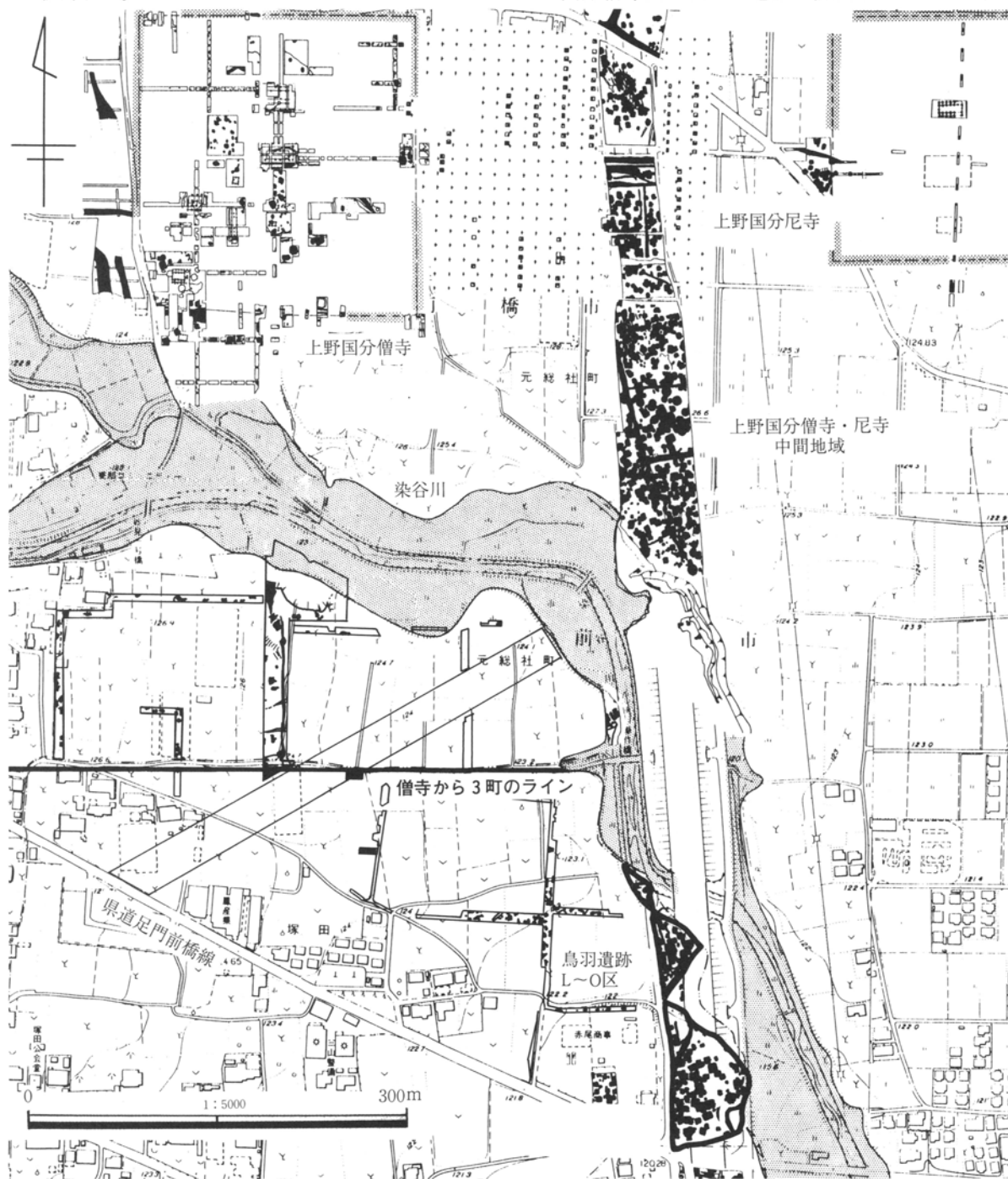
はじめに

本遺跡は上野国分僧寺を北約200mに臨む地である。国分寺南正面で検出された本遺跡周辺の堅穴住居跡の変遷を追いながら、上野国分僧寺南面の様相を検討する。

上野国分僧寺南面の集落

上野国分僧寺南正面には本遺跡の他に上野国分寺参道遺跡がある。ここでは、南大門から3町までの地割りを便宜的に南正面として扱う。

国分僧寺南正面の2遺跡で調査された6～11世



第94図 元総社西川遺跡周辺図②

紀前半までの総数44軒の竪穴住居跡を半世紀ごとに分類し、表にすると以下（第18表）の通りになる。

僧寺南正面の竪穴住居跡の変遷

時 代	棟 数
6世紀前半	1
6世紀後半	1
7世紀前半	1
7世紀後半	1
8世紀前半	6
8世紀後半	0
9世紀前半	0
9世紀後半	12
10世紀前半	9
10世紀後半	8
11世紀前半	5

（第18表）

第18表から、以下の2点に気づく。

国分僧寺南正面の竪穴住居跡の変遷の特徴

- ① 8世紀後半から9世紀前半までの竪穴住居跡が検出されていない。
- ② 9世紀後半以降に急激に竪穴住居跡が増加する。

上野国分寺南東の集落

本遺跡と同じ染谷川右岸の台地上に位置し、本遺跡から400m南東に離れたところに鳥羽遺跡がある。鳥羽遺跡ではA～O区の延長約1200mの区間で、調査が行われていたが、ここでは本遺跡から近いL～O区、つまり県道足門・前橋線北～染谷川までを対象として、便宜的に国分寺南東の集落とする。対象地は、おなじ染谷川右岸であるが国分僧寺南正面ではない地域である。同様な表を作成すると右（第19表）の通りになる。第19表から、以下に気づく。

国分僧寺南東の竪穴住居跡の変遷の特徴

- ① 8世紀後半から9世紀前半までの竪穴住居跡が消滅（減少）する傾向はない。

鳥羽遺跡L～O区の竪穴住居跡の変遷

時 代	棟 数
6世紀前半	9
6世紀後半	5
7世紀前半	1
7世紀後半	1
8世紀前半	4
8世紀後半	10
9世紀前半	5
9世紀後半	8
10世紀前半	11
10世紀後半	23
11世紀前半	30

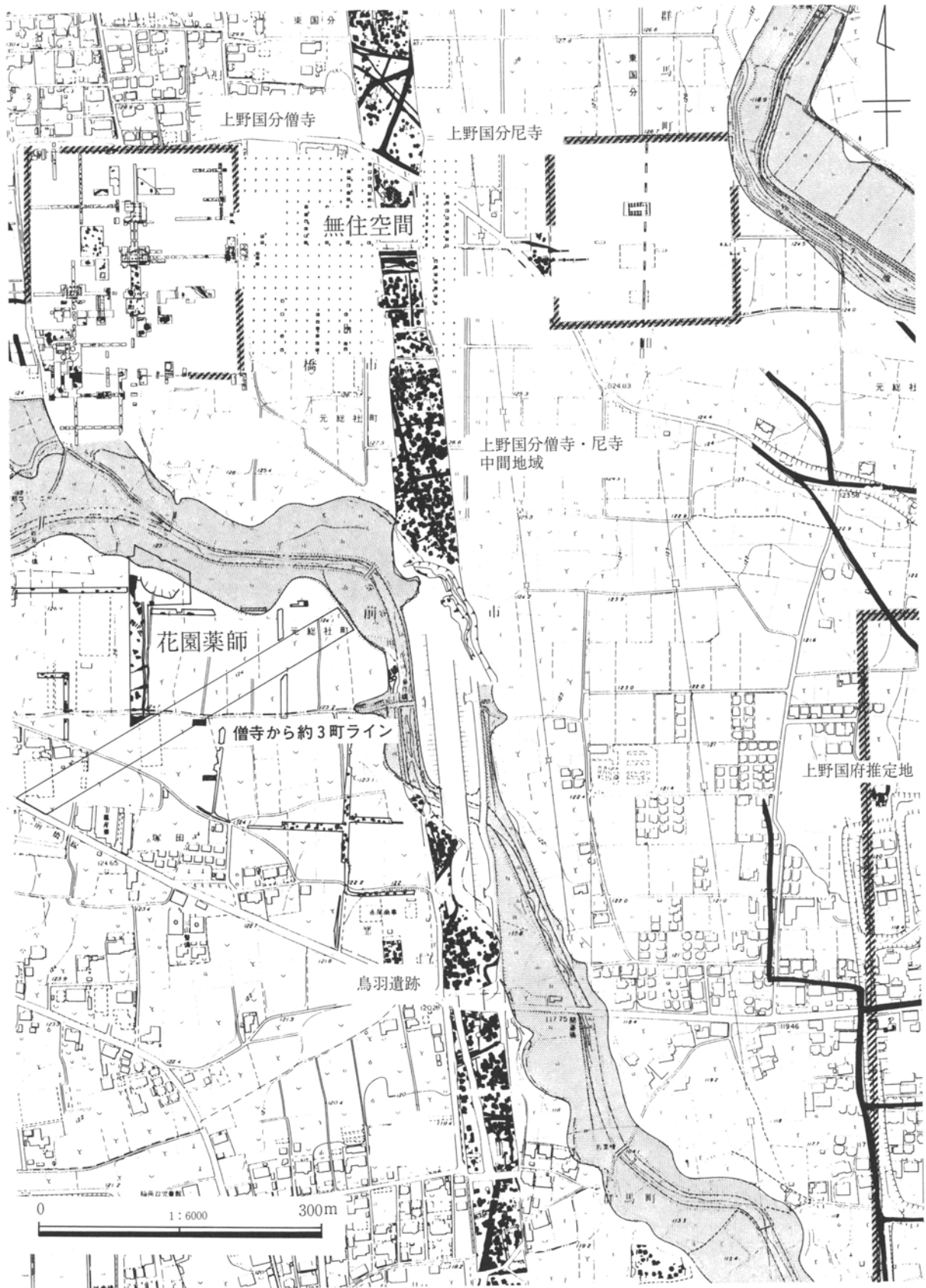
（県道足門・前橋線北～染谷川までの本遺跡に近いL～O区）

（第19表）

第18表・第19表から、8世紀後半から9世紀前半、染谷川の右岸台地において地理的要因によって住居が展開されなかったのでは無く、南正面だけに何らかの理由があって竪穴住居が展開されなかったことがわかる。

国分僧寺東の無住空間

桜岡正信・関口功一は、「古代寺院の付属施設に関する一考察」において、僧寺北辺を東に延長したラインから南に約120mの区画溝までの間に無住空間が、8世紀後半から9世紀代を通して、顕在化していることを指摘している。この空間は、国分寺造営期に形成され、衰退とともに失われていくことや、僧寺と尼寺のそれぞれの推定東門と西門を結んだラインから北側に形成されていることから、「僧寺と尼寺の間に意図的に形成された無住空間」としている。そして、こうした土地利用の仕方は、伝統的な



第95図 元総社西川遺跡周辺図③

土地利用と全く違った一連の動きであるとし、「国分寺造営という国策」がその要因であるとしている。

まとめ

ここでは、国分寺が最も華やかだったと考えられる8世紀後半から9世紀前半の時期に、国分僧寺南面で竪穴住居が検出されなかったことに基づき、その理由のヒントとして考えられる桜岡、関口の説を紹介した。七重の塔をはじめとする国分僧寺の巨大な建造物が、当時の人々の注目を集め、周辺に多くの人々の往来があったことは間違いない。目と鼻の先に、国分僧寺を臨む本遺跡から8世紀後半から9世紀前半にかけての竪穴住居跡が検出されなかったことには何らかの意味があったと考えられる。

木津博明は、『幻の国府を掘る』において、僧寺の南に、花園院・薬院等の施設を推測している。確かに周辺には花園薬師の地名が残り、後世に記された『上毛傳説雜記』には国分寺周辺に花園の薬師があったとの記載がある。木津のいうように施薬院的な施設を想定すれば、この辺りにそれに関連する施設や薬草園を考えたいが、調査結果を踏まえれば推測の域を出ない。

桜岡・関口は、同じく「古代寺院の付属施設に関する一考察」において、①近県では、国分寺の寺域が、小規模な溝でもっと大きな区画で囲まれていることや②上野国分僧寺の予算規模がそれらの国分寺より多かったことなどから、上野国分僧寺も現在推定されているより大区画であった可能性があるとも指摘している。染谷川を挟んだこの地域まで溝で囲まれた大区画であったとは考えにくい。国分僧寺に関わる施設、あるいは生産域があったと考えれば竪穴住居が検出されない理由にはなるが、やはり推測の域を出ない。現時点では、「国分寺造営という国策」が「伝統的な土地利用と全く違った一連の動き」をもたらしたと考え、「無住空間であった可能性が高い。」という表現に留めたい。

本報告「上野国分寺参道について」で述べたとおり、4号溝だけが国分僧寺と時期が重なる可能性が

高い国分僧寺南面の唯一の遺構である。僧寺南面の性格を解明する重要な手がかりであるので、今後の周辺遺跡の調査結果とあわせて再度検討したい。

また、国分僧寺南面は、9世紀後半から住居が急激に増加する。神谷佳明は緑釉陶器を出土する集落の広がりから、「上野国では国府に近い地域に倭馬の党の拠点が存在し、10世紀代には国家機能が衰退していた。」ことを指摘している。律令制度が崩壊していく中で私的権力による大規模な開発が行われたのは周知の事実であるが、この地域に9世紀後半になって竪穴住居跡が進出していったことを私的勢力の開発が及んだととらえるならば、先述の国家機能の衰退がこうした時期にはすでに始まっていたことを示している可能性が高い。上野国分寺南面が国分寺造営とともに集落規制を受けていたとする説が成立した上での仮説であるが、今後の研究課題としたい。幸い本遺跡南側では西毛幹線関連の大規模な調査がおこなわれている。国分寺南正面の地域に新たな知見が加えられると思われるが、検討が加えられる機会を待ちたい。

主な引用・参考文献

- 1986～1992 『上野国分僧寺・尼寺中間地域』(財群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 1986・1988・1990・1992 『鳥羽遺跡』(財群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 1988 『史跡上野国分寺跡』(群馬県教育委員会)
- 1990 『群馬県史通史編1』
- 1994 『町内遺跡』(群馬町教育委員会)
- 1994 シンポジウム『関東の国分寺』(関東古瓦研究会)
- 1997 『国府南部遺跡群発掘調査概報』(群馬町教育委員会)
- 1997 『上野国分寺参道遺跡』(前橋市埋蔵文化財発掘調査団)
- 1998 『国分境IV遺跡』(群馬町教育委員会)
- 1998 『群馬町誌資料編1』
- 1999 『幻の国府を掘る』(雄山閣)
- 2001 『群馬町誌 通史編上』
- 桜岡正信・関口功一(2001)「古代寺院の付属施設に関する一考察」(『群馬考古学手帳11』)
- 神谷佳明(2001)「緑釉陶器にみる古代上野国」(財群馬県埋蔵文化財調査事業団紀要19)

[4] 古式土師器産地推定の検討

笹澤 泰史

本遺跡の胎土分析の経緯

北関東自動車道建設に伴う調査において、多くの古墳時代前期の遺跡が発見される中で、このところ急激にS字状口縁台付甕についての資料が蓄積されてきている。こうした現状の中で、土器の胎土を自然科学的に分析することによって土器の生産地に迫ろうという試みがなされてきた。⁽¹⁾

今回の分析では、今まで行われたことのない井野川流域⁽²⁾のS字状口縁台付甕の構成粒子の特徴を明らかにし、過去の分析データに新たな知見を加えるべく自然科学分析を実施した。

古式土師器の産地推定

古式土師器の産地推定を行う場合、胎土成分と、原材料となる粘土成分とを比較する必要がある。窯の存在しない野焼きによってつくられたとされる古式土師器を産地推定する場合、粘土材料は、粘土採掘坑周辺の粘土や、地域の土層を対象とせざるを得ない。これが、窯跡のある須恵器などの産地推定と最も異なる点である。

定量的分析と定性的分析

県内の胎土分析は主に産地推定を目的に行われてきた。⁽³⁾分析方法は鉱物・岩石片・微化石を同定し、定量化するといった方法も行われている（藤根久2001など）。古式土師器の制作方法は未解明な部分が多いが、土器の製作過程において、粘土以外に砂粒を混入したり、多種の土を混合する可能性がある。つまり、古式土師器は一定地域のある地層から粘土を採掘し、そのまま材料として製作するのではなく、その上下層や粘土以外の砂粒を混ぜ込むことが充分考えられる。土層の粒子構成と粘土胎土の構成粒子を定量的とはいえ、単純に比較して、必ずしも一義的な対応関係にあるか疑問である。つまり、ある地

域にAといった定量的特徴をもった土層があるとする、その上下層にはBやCといった定量的特徴を持った土層がある。土器を製作するに当たってA層の土のみを使って製作しない限り、Aといった定量的特徴は直ちにはその土器に反映されない。AにBが混じれば、胎土の定量的性質としては新たにA+Bといったものを想定しなければならない。その粒子組成は、AとBの混合比率によって複雑な定量パターンになり得る。仮にこれにCが加わるとなると胎土の組成はより一層複雑になろう。

従来、胎土分析には、出土する地域によって胎土に特徴があるのではないかといた予想から、それぞれの地域から産出される粘土と土器の胎土を比較することによって、その生産地を推定したいとの期待があった。さらに、古式土師器の生産や流通が解明できるのではないかといた目論見もあった。しかし、上述の観点から、ある地域から産出された粘土層の粒子組成と、土器の胎土の粒子組成を単純に定量的な比較をすることはできない。むしろ、分析によって得られた定性的特性をより詳しく検討する必要があると思われる。

本報告の胎土分析から

前述を踏まえて本遺跡で実施した「S字状口縁台付甕の胎土材料」（2001 藤根・今村）〔以下本報告の胎土分析〕を定性的分析結果から検討してみたい。

本報告の胎土分析では、第88図や第17表が第16表にどのように対応するのか詳しくは示されていないが、第16表から①「分析した14点の胎土にはすべて堆積岩を含む。」、98頁から②「試料No. 3の胎土には放散虫化石・*Actinocyclus*属、試料No. 4の胎土には、*Cyclotella stylorum*を含む。」ことが理解できる。

藤根らは本報告の胎土分析の考察において、水成指標をする微化石類が乏しく、火山岩類と堆積岩類

からなる砂粒組成を示す特徴は、箕郷町に所在する和田山古墳群の室町時代瓦窯から出土した瓦の胎土に類似しているとし、本遺跡出土のS字状口縁台付甕を榛名山麓で作成された可能性があると指摘している。

胎土の産出地の検討

「群馬県10万分の1地質図」によれば、榛名山麓は火山であり、堆積岩類の産出は期待されない。また、定形（1982）の分析によると本遺跡地周辺及び染谷川の上流地域の表土では堆積岩は検出されていない。定形（1982）は箕郷近傍の吉岡町上野田の表土を分析しているが、組成はほとんど安山岩類で、わずかに脈岩類、石英、珪化変質岩を伴うものの、堆積岩は含まれていない。「群馬県10万分の1地質図」、定形（1982）による表土の分析結果などから、榛名山麓では、染谷川をはじめとする河川流域や人の手の及ぶ深さの土層から堆積岩が検出される可能性は考えにくい。

①で示した試料No. 3及び試料No. 4に、放散虫ならびに、海生珪藻が含まれている点については、次のように考えられる。これらの微生物遺骸が海成属に由来することは明らかで、藤根ら（2001）が指摘した⁽³⁾ように、県内では鐮川流域地域に分布する富岡層群に関連した可能性が大きい。実際、この地域から珪藻や放散虫化石が産出している（田中ほか1983、群馬県高等学校教育研究会地学部会資料1998など）。したがって、本遺跡から出土したS字状口縁台付甕の胎土の少なくとも一部は、富岡層群または、それが侵食・再堆積した粘土もしくは砂粒などを用いている可能性が考えられる。

藤根らが考察で指摘した本遺跡から出土したS字状口縁台付甕を榛名山麓で作成された可能性があるとしている点は胎土に堆積岩が含まれているという事実と矛盾があると見ねばなるまい。さもなければ富岡層群分布地域周辺から原土を持ち込んで作成したことになる。榛名山麓には堆積岩類も海生微化石を含む胎土も分布しないのであるから。

また、藤根ら（本報告書）によれば内湾性を示すという *Cyclotella stylorum* も含まれるが、この種に関しては以下の疑問が残る。この地域の珪藻化石を研究している田中宏之氏（私信 2001）によれば、海生珪藻化石は藤岡付近にも産出するが、*Actinocyclus* 属の珪藻が比較的広く分布するのに対して、*Cyclotella stylorum* は今まで産出例がないとのことである。富岡層群の堆積環境は外洋性であり、海退期の板鼻層からは珪藻化石がほとんど産出しないので、*Cyclotella stylorum* を含む粘土はさらに別の場所で採取された可能性もある（同氏）。

今後の展望

定性的な胎土分析結果と地質図を照合することにより、原土採取地についておおよその地理的範囲を推定することができた。

県内表土および河川の土砂の性状が地域によって異なることが定形（1982）の先駆的研究により明らかにされているが、これは単に地質図から読みとって、土砂の性状を推定するという不確定な要素をとり除いたものである。網の目が粗く、応用面でまだ充分なものとは言えない感があるが、しかし砂粒の岩石（および鉱物）種を同定することによって、地質図との対応がよりつけやすいという利点がある。藤根らは胎土分析において、砂粒を詳細に分類しているが、それらと岩石種との対応は示していない。ごく微細な粒子は岩石の同定には耐えないものであろう。

定性的なことがらを明確にするのであれば、ごく微細で特徴をとらえきれないものよりも、たとえば径0.5mm以上といった粗い粒子だけでも確実に観察・記載したほうが性状が明らかになるかも知れない。一例として波志江中野面遺跡の胎土分析例をみると、同所は地形的には大間々扇状地の末端にあたり、かつ赤城山の山麓的な位置にある。地質図から読みとれる同所の土砂の性状は、渡良瀬川上流域からもたらされる岩石類および赤城山に由来する安山岩類、さらに表層のローム層を構成する火山灰

第4章 自然科学分析—自然科学分析一覧

類が含まれる可能性がある。定形(1982)の表土採取地点でこれに近いのは笠懸町阿差美があり、同所試料は火山灰・安山岩類を多く含むほか、堆積岩類、花崗岩類、石英を伴うものと分析されており、おおむね後背地の地質と対応している。ここで花崗岩類は渡良瀬川上流の沢入花崗岩体などから、堆積岩類は足尾山地の古期岩層に由来するもので、砂岩、頁岩(泥岩)、チャートなどであろう。

藤根らの胎土分析レポートには、砂岩、泥岩を除いて岩石種名の記述がなく、これらの胎土が、どのように地質状況と対応するのか判断できない。今後はより積極的に岩石種の同定をしてゆくことが望まれる。

おわりに

以上は、筆者の浅見によるものであり、先学諸氏の御教示、御指導をいただければ幸甚である。今後、検討が加えられる機会を待ちたい。また論考は飯島静男氏(群馬地質研究会)の御教示を受けた。記して感謝の意を表したい。

- (1) これまでの県内におけるS字状口縁台付甕の胎土材料の調査は、波志江中宿遺跡・荒砥二之堰遺跡・舞台遺跡・五日牛清水田遺跡・波志江中野面遺跡・横手早稲田遺跡などで行っている。
- (2) 本遺跡に接する染谷川は井野川の支流である。
- (3) 『波志江中野面遺跡(1)―古墳時代以降編―』、伊勢崎市・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団。『横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団。など

引用・参考文献

地学団体研究会・地学事典編集委員会編(1981)『増補改訂 地学事典』、平凡社、1612p.

定方之義(1982)『群馬県内の土壌及び主要河川の砂の性状について』『警察大学校研究学生研究報告集』39-63P

田中宏之・中島啓治・金古稔・吉田武雄(1983)『群馬県、碓氷峠南方に分布する中新統の珪藻・放散虫化石』『地球科学37巻6号』53-64P

日本第四紀学会(1993)『第四紀分析法』、東京大学出版。46-135P

菱田量・車崎正彦・松本完・藤根久(1993)『岩石学的方法に基づく胎土分析について―弥生時代後期の土器を例にして―』『日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集』、34-35P

群馬県高等学校教育研究会(1998)『地学部会の資料』

群馬県地質図作成委員会(1999)『群馬県10万分の1地質図』および『解説書』、内外地図株式会社東京。114P

パレオ・ラボ(2001)6.『波志江中野面遺跡出土土器および粘土類の材料分析』、『波志江中野面遺跡(1)―古墳時代以降編―』、伊勢崎市・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団。355-365P

パレオ・ラボ(2001)3.『早稲田遺跡の土師器胎土分析』、『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団。361-372P

藤根・今村(2001)『S字状口縁台付甕の胎土材料』(本報告書)95-104P

遺物觀察表

1号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第10図 1 PL-29	土師器 坏	床直 1/2	口 12.7 底 丸底 高 3.9	①軽石、細砂 ②酸化 ③明赤褐	口縁部～頸部横撫で。器内面横撫で。外面体部～底部は篋削り。
第10図 2 PL-29	土師器 坏	床直 口縁部 1/4	口(13.6) 底 - 高(2.7)	①細砂、黒色鉱物 ②酸化 ③にぶい橙	口縁部～頸部横撫で。器内面横撫で。外面体部～底部は篋削り。
第10図 3 PL-29	須恵器 椀	+23.5 2/3	口 13.1 底 8.2 高 5.0	①緻密 ②還元 ③黄灰	轆轤整形。付高台。左回転篋削り後、撫で。

2号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第12図 1 PL-29	土師器 坏	床直 3/4	口 14.1 底 9.3 高 4.0	①細砂 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部は、横方向の篋削り。内面は横撫で後、篋磨き。
第12図 2 PL-29	土師器 皿状坏	竈覆土 口～体部 1/5	口(14.0) 底 - 高(1.8)	①細砂 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部は、横方向の篋削り。内面は横撫で。
第12図 3 PL-29	土師器 皿状坏	覆土 口～体部 片	口(15.0) 底 - 高(2.1)	①細砂、黒色鉱物 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部は、篋削り。内面は横撫で。
第12図 4 PL-29	須恵器 蓋	覆土 口～体部 1/3	口(15.5) 高 2.9	①緻密 ②還元 ③灰白	轆轤右回転成形。天井部外面右回転篋削り調整。
第12図 5 PL-29	平瓦	覆土 小破片	長(9.0) 幅(7.4) 厚(0.9)	①砂粒が多い ②良好 ③灰	厚さ薄い。桶巻き作り。 凸面 密な縄叩き。 凹面 布目。側板痕。

3号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第13図 1 PL-29	土師器 坏	床直 2/3	口(15.0) 底 8.1 高 4.3	①細砂、軽石 ②酸化 ③にぶい褐	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部は、横方向の篋削り。内面は横撫で。
第13図 2 PL-29	土師器 坏	覆土 1/3	口(14.3) 底 7.8 高 4.3	①白色細粒物、細砂 ②酸化 ③明赤褐	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部は、横方向の篋削り。内面は横撫で後暗文。
第13図 3 PL-29	土師器 坏	床直 口～体部 片	口(16.8) 底 - 高(3.9)	①雲母、粗砂 ②酸化 ③にぶい黄褐	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部は、篋削り。内面は横撫で。
第13図 4 PL-29	須恵器 蓋	覆土 ほぼ完形	口 14.0 高 3.0	①緻密 ②還元 ③灰白	轆轤右回転成形。天井部外面右回転篋削り調整。つまみは貼り付け。

4号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第17図 1 PL-29	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口 13.4 底 丸底 高 5.2	①赤色細粒物、細砂 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は篋磨き。内面に黒色の付着物あり。
第17図 2 PL-29	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口 14.1 底 丸底 高 5.6	①石英、赤・白色細粒物、 細砂 ②酸化③明赤褐	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は篋撫で後篋磨き。内面に黒色の付着物あり。
第17図 3 PL-29	土師器 坏	床直(壁) ほぼ完形	口 13.8 底 丸底 高 5.0	①石英、赤色細粒物、細砂 ②酸化 ③明赤褐	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は篋撫で後篋磨き。内面に黒色の付着物あり。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第17図 4 PL-29	土師器 坏	竈内 ほぼ完形	口 13.5 底 丸底 高 4.8	①赤色細粒物、細砂 ②酸化 ③明赤褐	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は篋撫で後篋磨き。
第17図 5 PL-29	土師器 坏	竈内 4/5	口 13.8 底 丸底 高 5.0	①赤色細粒物、黒色鉾物、 細砂 ②酸化③にぶい橙	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は篋撫で後篋磨き。
第17図 6 PL-29	土師器 坏	竈内 4/5	口 13.4 底 丸底 高 4.9	①細砂、石英、赤色細粒物 ②酸化③明赤褐	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は篋撫で後篋磨き。内面に黒色の付着物あり。
第17図 7 PL-29	土師器 坏	床直 口縁一部 欠	口 13.2 底 丸底 高 5.3	①石英、軽石、黒色鉾物、 細砂 ②酸化③橙	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り。内面は横撫で後放射状に篋磨き。
第17図 8 PL-29	土師器 坏	竈内 2/3	口 13.6 底 丸底 高 5.3	①細砂 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は篋磨き。内面は荒れている。
第17図 9 PL-29	土師器 坏	竈内 2/3	口 14.0 底 丸底 高 5.1	①白・黒色鉾物、赤色細粒 物 ②酸化③明赤褐	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は篋撫で後篋磨き。
第17図 10 PL-29	土師器 坏	床直 1/3	口(14.0) 底 丸底 高 4.8	①石英、赤色細粒物、細砂 ②酸化③明褐	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は篋磨き。内面は荒れている。
第17図 11 PL-29	土師器 坏	床直 1/4	口(13.2) 底 丸底 高(4.0)	①黒色鉾物、軽石、赤色細 粒物 ②酸化③橙	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は横方向の篋撫で後篋磨き。
第17図 12 PL-29	土師器 坏	床直 1/4	口(16.6) 底 丸底 高(5.6)	①石英、軽石、赤色細粒物、 細砂 ②酸化③明赤褐	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は横方向の篋磨き。
第17図 13 PL-30	土師器 坏	竈内 2/3	口 12.4 底 丸底 高 5.3	①石英、赤色細粒物、細砂 ②酸化③橙	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は荒れている。
第17図 14 PL-30	土師器 坏	床直 1/3	口(11.6) 底 丸底 高 5.4	①赤色細粒物、細砂 ②酸化 ③明赤褐	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は荒れている。
第17図 15 PL-30	土師器 坏	貯蔵穴 1/6	口(13.2) 底 - 高(4.0)	①黒色鉾物、赤色細粒物、 細砂 ②酸化③橙	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部～底部は、篋削り後篋磨き。内面は横方向の篋撫で後篋磨き。
第17図 16 PL-30	土師器 小型丸底 甕	竈内 ほぼ完形	口 14.3 底 丸底 高 12.7	①石英、軽石、細砂 ②酸化、硬質 ③にぶい赤褐	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体～底部は、篋削り後篋磨き。内面は篋撫で。外面にはススが付着。
第17図 17 PL-30	土師器 椀	+10 完形	口 14.2 底 丸底 高 7.9	①白・赤色細粒物、石英 ②酸化、硬質③赤褐	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。外面体部は、篋削り後篋磨き。内面は篋撫で後篋磨き。
第17図 18 PL-30	土師器 椀	床直 1/4	口(16.6) 底 丸底 高(9.2)	①細砂、黒色鉾物 ②酸化、硬質 ③暗褐	口縁部～頸部は外面篋による横撫でか。内面は篋による横撫で後放射状篋磨き。外面篋削り後篋磨き。
第17図 19 PL-30	土師器 壺	床直 口～胴部	口(10.3) 底 - 高(14.6)	①細砂、白色細粒物 ②酸化 ③明赤褐	口縁部～頸部は、内外面とも横撫で。頸部外面～胴部外面上半にかけて篋磨き下半篋削り。胴部内面篋撫で。胴部外面中位～下全体にススが付着。胴部下位は意識的に欠いた可能性がある。
第17図 20 PL-30	土師器 壺	床直 口1/3欠	口 13.5 底 5.7 高 18.5	①緻密 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部の外面は篋による横撫でか。頸部～下位の外面は篋削り後篋磨き。内面は篋磨き。底部篋削り後篋磨き。
第17図 21 PL-30	土師器 壺	床直 口～胴部 2/3	口(17.3) 底 - 高(23.6) 最大 26.8	①緻密 ②酸化、硬質 ③橙	口縁部～頸部の外面は篋による(?)横撫で後縦方向の篋磨き。頸部外面～体部上位外面にかけて撫で後篋磨き。中位外面は横方向の篋削り。下位の外面は丁寧な縦方向の篋磨き。口縁部内面～頸部内面にかけて横撫で。頸部内面に指頭圧痕あり。内面頸部より下位は篋撫で。外面胴部にスス・炭化物不着。
第17図 22 PL-30	土師器 壺?	床直 口1/3欠	口 12.0 底 8.1 高 15.8	①軽石、細砂 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部は内外面とも篋による横撫でか。頸部より下位外面は篋削り後篋磨き。底部外面は無調整。頸部より下位内面は篋磨き。

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第17図 23 PL-30	土師器 台付甕?	竈内 口~胴部	口 10.0 底 - 高(10.5)	①軽石、細砂 ②酸化 ③橙	口縁部横撫で。口縁部より下位外面は、篋削り後篋磨き。底部外面篋削り。内面撫で後篋磨き。脚台部欠損。
第17図 24 PL-30	土師器 甕	床直 口1/3欠	口(10.6) 底 丸底 高 13.6	①白色岩片、緻密 ②酸化、硬質 ③灰白	口縁部内外面横撫で。外面胴部ハケメ。内面篋撫でか。指頭痕あり。外面底部は荒れている。
第17図 25 PL-30	土師器 甕	竈内 口1/3欠	口 15.5 底 6.2 高 23.8	①軽石、細砂 ②酸化 ③にぶい赤褐	口縁部~頸部の内外面は篋による横撫でか。頸部外面は篋削り。頸部より下位は篋削り後篋磨き。底部外面は篋削り。頸部より下位の内面は、篋撫で。
第18図 26 PL-31	土師器 甕	床直 ほぼ完形	口 19.2 底 6.4 高 30.1	①軽石、粗砂 ②酸化 ③にぶい橙	口縁部~頸部の内外面は篋による横撫でか。頸部以下の外面は縦方向の篋削り。底部外面篋削り。頸部より下位の内面は、篋撫で。
第18図 27 PL-31	土師器 甕	竈内 2/3	口 18.4 底 6.4 高 30.0	①軽石、粗砂 ②酸化 ③にぶい橙	口縁部~頸部の内外面は横撫。頸部以下の外面は縦方向の篋削り。胴上半部内面篋撫で。胴中央部内面撫で。胴下半部篋撫で。底部外面撫で。
第18図 28 PL-31	土師器 甕	竈内 口~胴上 半	口 17.9 底 - 高(23.2)	①軽石、粗砂 ②酸化 ③明黄褐	口縁部~頸部の内外面は横撫。頸部以下の外面は撫で後篋磨き。頸部より下位の内面は、篋撫で。
第18図 29 PL-31	土師器 甕	床直 口~頸部 2/3	口 17.0 底 - 高(7.5)	①軽石、細砂 ②酸化 ③にぶい橙	口縁部~頸部の内外面は篋による横撫でか。頸部より下位は篋削り後篋磨き。頸部より下位の内面は、篋削り。
第18図 30 PL-31	土師器 甕	竈内 胴下位~ 底部	口 - 底 7.4 高(7.6)	①軽石、細砂 ②酸化、硬質 ③明褐	胴下半部外面篋磨き、内面篋撫で。底部外面無調整か。
第18図 31 PL-31	土師器 甕	竈内 胴下位~ 底部	口 - 底 6.6 高(5.5)	①緻密 ②酸化、硬質 ③にぶい橙	胴下半部外面篋削り後篋磨き。内面篋撫で。底部外面篋削り後篋磨き。
第18図 32 PL-31	土師器 甕	竈内 口~胴上 半	口 18.8 底 - 高(21.0)	①軽石、粗砂 ②酸化 ③黄橙	口縁部~頸部の内外面は横撫。頸部以下の外面は篋撫で。頸部より下位の内面は、篋撫で。
第18図 33 PL-31	土師器 甕(小型)	+13 完形	口 10.6 底 3.8 高 12.2	①軽石、細砂 ②酸化、硬質 ③にぶい橙	口縁部~頸部の内外面は篋による横撫でか。頸部以下の外面は篋撫で後の篋磨き。底部内外面篋削り。頸部より下位の内面は、篋磨き。
第18図 34 PL-31	土師器 甕(小型)	床直 ほぼ完形	口 10.4 底 4.2 高 13.2	①軽石、細砂 ②酸化 ③にぶい黄	口縁部~頸部の内外面は篋による横撫でか。頸部以下の外面は撫で後の篋磨き。胴下半部外面篋削り。頸部より下位の内面は、撫で。
第18図 35 PL-31	土師器 甕	床直 ほぼ完形	口 16.6 底 7.3 高 20.8	①軽石多い、細砂 ②酸化 ③黄褐	口縁部~頸部の内外面は横撫。頸部以下の外面は篋削り。胴中央部下位に篋削りがみられるが、頸部より下位の内面は、篋撫で。
第18図 36 PL-32	土師器 甕	床直 ほぼ完形	口 24.0 底 8.2 高 29.6	①軽石、細砂 ②酸化 ③にぶい黄橙	口縁部~頸部の内外面は篋による横撫でか。頸部以下の外面は篋磨き。胴上半部内面篋撫で。胴中央部から胴下半部篋磨き。
第18図 37 PL-32	土師器 甕	竈内 胴下位~ 底部1/4	口 - 底(8.2) 高(8.4)	①軽石、細砂 ②酸化 ③橙	胴下半部外面篋削り後、篋磨き。内面篋撫で後篋磨き。
第18図 38 PL-32	土師器 甕	床直 口縁部片	口(24.0) 底 - 高(6.9)	①緻密、軽石 ②酸化、硬質 ③灰褐	口縁部~頸部の内外面は篋による横撫でか。頸部以下は、内外面とも篋削り後篋磨き。

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	石材 重量・備考	挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	石材 重量・備考
第18図 39	石	床直 完形	長 12.5 幅 5.0 厚 3.6	粗粒輝石安山岩 重さ:385g すり面あり。	第18図 40	石	床直 一部欠	長 13.4 幅 6.7 厚 3.6	輝石安山岩 重さ:480g すり面あり。

遺物観察表

5号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第20図 1 PL-32	土師器 坏	竈内 ほぼ完形	口 12.9 底 丸底 高 3.8	①軽石、細砂 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部篋削り。内面は篋撫で。
第20図 2 PL-32	土師器 坏	竈左袖 2/3	口(17.4) 底(9.0) 高 4.6	①雲母、細砂 ②酸化、硬質 ③にぶい赤褐	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部篋削り。内面は篋撫で。
第20図 3 PL-32	土師器 皿状坏	竈内 1/6	口(13.4) 底 丸底 高(3.9)	①赤・白色細粒物、雲母、 細砂 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部篋削り。内面横撫で後篋磨き。
第20図 4 PL-32	須恵器 蓋	床直 体～口縁 部片	口(14.2) 底 - 高(1.6)	①緻密 ②還元 ③灰褐	轆轤右回転成形。天井部外面右回転篋削り調整。
第20図 5 PL-32	土師器 鉢?	-6cm 2/3	口(28.2) 底 丸底 高 13.8	①軽石、雲母、細砂 ②酸化 ③にぶい赤褐	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部左斜め上方向に篋削り。体部内面篋撫で。
第20図 6 PL-32	平瓦	竈内 小破片	長(17.3) 幅(11.0) 厚 2.3	①細砂含む ②普通 ③黒灰～灰	桶巻き作り。 凸面密な縄叩き。 凹面糸切り痕。布目。側板痕。

6号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第23図 1 PL-32	土師器 高坏	床直 ほぼ完形	口 19.6 底 9.6 高 13.3	①黒色鈹物、細砂 ②酸化、硬質 ③にぶい橙	坏部は下端で弱い稜を持ち内湾気味に開く。坏底部平坦。 外面 口縁部横撫で。口縁部より下、坏底部まで丁寧な篋磨き。 脚部上半分は、縦篋磨き後、横篋磨き。脚部下半分は縦篋磨き。脚部に円孔3個。 内面 口縁部横撫で後、坏部丁寧な篋磨き。口唇部内側は弱い面取り。脚部篋削り。裾部横撫で後篋磨き。
第23図 2 PL-32	土師器 高坏	床直 坏部	口 24.6 底 - 高(9.0)	①細砂(多い) ②酸化、硬質 ③明褐灰	坏部は内湾気味に開き、坏底部平坦。 外面 口縁部横撫で後、坏部篋磨き。 内面 口縁部横撫で後、坏部篋磨き。
第23図 3 PL-32	土師器 高坏	床直 脚部1/3	口 - 底(21.8) 高(2.3)	①細砂 ②酸化、硬質 ③にぶい橙	脚部は高さを持たず大きく開く。円孔3個か? 外面 ハケメ後篋磨き。裾部横撫で後篋磨き。 内面 撫で後篋磨き。
第23図 4 PL-32	土師器 壺	床直 口縁部 1/4	口(20.0) 底 - 高(3.8)	①細砂 ②酸化 ③明赤褐	口縁部下端で稜を持ち、外反して開く。 外面 横撫で後篋磨き。 内面 横撫で後篋磨き。
第23図 5 PL-32	土師器 小型壺	床直 口縁部 1/3	口(10.6) 底 - 高(4.2)	①緻密 ②酸化 ③にぶい黄橙	口縁部は直線的に外傾。 外面 横撫で後篋磨き。 内面 横撫で後篋磨き。
第23図 6 PL-32	土師器 鉢 (S字)	床直 口縁部1 部欠	口 8.5 底 3.5 高 6.7	①黒色鈹物、細砂 ②酸化、硬質 ③にぶい黄橙	口縁部1段はほぼ水平に開き2段は垂直に立ち、口唇がわずかに外反。胴部は中央やや上に最大径を持ちあまり肩が張らない。 外面 口縁部横撫で。胴部縦ハケメ後横ハケメ。 内面 口縁部上段横撫で。胴部上位指頭圧痕、下位指撫で。
第23図 7 PL-33	土師器 甕	As-C 上 口～胴上 位1/3	口(16.2) 底 - 高(8.2)	①細砂 ②酸化 ③灰黄褐	口縁部は直線的に外傾。あまり肩は張らない。 外面 口縁部縦ハケメ後横撫で。胴部横ハケメ。胴上半部に篋描き斜短線を廻らす。 内面 口縁部横ハケメ後横撫で。(ハケメ後)丁寧な指撫で。
第23図 8 PL-33	土師器 台付甕	As-C 上 胴下位～ 上部	口 - 底 9.6 高(10.1)	①細砂 ②酸化 ③にぶい黄橙	直線的に開き端部に面を持つ台部。 外面 ハケメ。台部上位撫で(ハケメすり消し)。 内面 胴下半部篋撫で。台部ハケメ。
第23図 9 PL-33	土師器 台付?甕	床直 口～胴上 位2/3	口 21.0 底 - 高(7.8)	①細砂(多量)、黒色鈹物 ②酸化 ③橙	口縁部外反して開く。肩は張らない。頸部に明らかな積み上げ痕。 外面 口唇に弱い刻み。口縁～頸部横撫で(指頭圧痕多く残る)。 肩部篋削り。 内面 口縁～頸部横撫で。胴上半部篋削り。6住-10と同一個体か?

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第23図 10 PL-33	土師器 台付甕	床直 胴下半 2/3	口 - 底 - 高(11.6)	①細砂(多量)、黒色鉾物 ②酸化 ③橙	外面 甕撫で。 内面 胴下半部甕削り。台部撫で。 6住-9と同一個体か?
第23図 11 PL-33	土師器 台付甕 (S字)	床直 2/3	口 15.3 底 9.5 高 26.8	①緻密 ②酸化 ③黄橙	口縁部下段は直線的に外斜し、上段は垂直にやや外反して立ち上がる。胴部は中央やや上に最大径を持ちやや肩が張る。裾部折り返し。 外面 口縁部横撫。胴下半部～中央部左上斜めハケメ後、胴上半部左下斜めハケメ後、頸部～肩部横ハケメ。台部右下斜めハケメ。 内面 口縁部横撫。胴上半部指撫で。胴下半部甕撫で。台部指撫。
第23図 12 PL-33	土師器 台付甕 (S字)	床直 胴～台部	口 - 底 10.1 高(25.3)	①細砂(多い) ②酸化、硬質 ③淡黄	胴部は中央やや上に最大径を持つ。裾部折り返し。 外面 胴下半部～中央部左上斜めハケメ後、台部右下斜めハケメ。 内面 胴中央部指撫で(最大径付近に指頭圧痕あり)。胴下半部甕撫で。台部指撫で。
第24図 13 PL-33	土師器 台付甕 (S字)	床直 口～台部 上半	口 14.8 底 - 高(19.9)	①白・赤色細粒物、細砂 ②酸化、硬質 ③褐灰	口縁部1段は直線的に開き2段は垂直に立ち上がり、3段で小さく外反。胴部は中央やや上に最大径を持ちあまり肩が張らない。 外面 口縁部横撫。胴下半部～中央部左上斜めハケメ後、胴上半部左下斜めハケメ後、頸部～肩部横ハケメ。台部右下斜めハケメ。横ハケメ右回り。 内面 口縁部横撫、端部弱い面取り。胴部指撫で。台部撫で。
第24図 14 PL-33	土師器 台付甕 (S字)	床直 口～胴部 2/3	口 14.0 底 - 高(13.1)	①赤色細粒物、細砂(多い) ②酸化、硬質 ③にぶい黄橙	口縁部1段はほぼ水平に開き2段は直に立ち上がり3段で小さく折れる。胴部は中央やや上に最大径を持ちあまり肩が張らない。 外面 口縁部横撫。胴下半部～中央部左上斜めハケメ後、胴上半部左下斜めハケメ後頸部～肩部横ハケメ。横ハケメ右回り。 内面 口縁部横撫、端部面取り。胴部指撫で。
第24図 15 PL-33	土師器 台付甕 (S字)	床直 2/3	口 14.4 底 7.6 高 23.8	①細砂(多量) ②酸化、硬質 ③灰白	口縁部上下段とも外反して開く。胴部は中央やや上に最大径を持ちやや肩が張る。裾部折り返し。 外面 口縁部横撫で。胴下半部～中央部左上斜めハケメ後、胴上半部左下斜めハケメ後、頸部～肩部横ハケメ。台部右下斜めハケメ。 内面 口縁部横撫で。頸部横ハケメ後横ナデ。胴上半部指撫で。胴下半部ハケメ。台部指頭圧痕あり。
第24図 16 PL-34	土師器 台付甕 (S字)	床直 口～胴上 半1/2	口 12.9 底 - 高(13.1)	①細砂(多量)、赤色細粒物 ②酸化、硬質 ③灰白	口縁部上下段とも弱く外反。胴部は中央やや上に最大径を持ちあまり肩が張らない。 外面 口縁部横撫。胴下半部～中央部左上斜めハケメ後、胴上半部左下斜めハケメ後頸部～肩部横ハケメ。横ハケメ右回り。 内面 口縁部横撫で。胴部指撫で、中央部わずかにハケメ。
第24図 17 PL-34	土師器 台付甕 (S字)	+7cm 口～胴部 上半1/2	口 11.9 底 - 高(13.7)	①緻密 ②酸化、硬質 ③にぶい黄橙	口縁部下段はほぼ水平に開き上段は垂直に立ち上がり、端部が小さく外反。胴部は中央やや上に最大径を持ちやや肩が張る。 外面 口縁部横撫。胴下半部～中央部左上斜めハケメ後、胴上半部左下斜めハケメ後、肩部横ハケメ。ハケメ密。 内面 口縁部横撫で。胴部指撫で。
第24図 18 PL-34	土師器 台付甕 (S字)	As-C 上 口～肩部 1/2	口 13.9 底 - 高(4.2)	①細砂(多い) ②酸化、硬質 ③浅黄	口縁部下段はほぼ水平に開き上段は垂直に立ち上がり、端部は小さく外反。 外面 口縁部横撫。胴上半部左下斜めハケメ後肩部横ハケメ。 内面 口縁部横撫で端部弱い面取り。頸部横ハケメ。胴部指撫で。
第24図 19 PL-34	土師器 台付甕 (S字)	+6cm 口～肩部 2/5	口(18.4) 底 - 高(4.5)	①緻密 ②酸化、硬質 ③灰白	口縁部下段は直線的に開き上段は内傾して立ち上がり、端部で小さく外反。 外面 口縁部横撫。胴上半部左下斜めハケメ後肩部横ハケメ。 内面 口縁部横撫で。頸部～胴部撫で。
第24図 20 PL-34	土師器 台付甕 (S字)	+6cm 胴下位～ 台部	口 - 底(7.4) 高(8.0)	①細砂(多い) ②酸化 ③にぶい黄橙	直線的に開き裾部に折り返しを持つ台部。 外面 胴下半部ハケメ。台部ハケメ。 内面 胴下半部甕撫で。台部指撫で。
第24図 21 PL-34	土師器 台付甕 (S字)	+6cm 口～肩部 1/4	口(20.0) 底 - 高(4.5)	①細砂 ②酸化、硬質 ③にぶい黄橙	口縁部下段は直線的に開き上段はほぼ垂直に立ち上がり、端部で小さく外反。 外面 口縁部横撫。胴上半部左下斜めハケメ後頸部～肩部横ハケメ。 内面 口縁部横撫で、端部弱面取り。頸部～胴部撫で。

遺物観察表

8号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第28図 1 PL-34	土師器 高坏	+10cm 坏部1/6	口(14.0) 底 - 高(5.0)	①緻密 ②酸化、硬質 ③灰白	坏部は内湾気味に開く。 外面 口縁部横撫で。坏部斲削り後横斲磨き。 内面 同心円状斲磨き。
第28図 2 PL-34	土師器 直口壺	床直 口縁部	口 10.2 底 - 高(8.7)	①緻密 ②酸化、硬質 ③黄灰	頸部～口縁部にかけてやや内湾ぎみに外傾。 外面 縦斲磨き。 内面 斲削り後斲磨き。
第28図 3 PL-34	土師器 台付甕 (S字)	+6cm 口～肩部 1/4	口(20.6) 底 - 高(5.5)	①雲母、黒色鉱物、粗砂 ②酸化、硬質 ③灰黄	口縁部1段は外反して開き2段は垂直に立ち上がり、3段で小さく外反。 外面 口縁部横撫。胴上半部左下斜めハケメ後肩部横ハケメ 内面 口縁部横撫で、端部面取り。頸部～胴部指撫で。

9号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第30図 1 PL-34	土師器 坏	+10cm ほぼ完形	口 12.0 底 丸底 高 4.1	①緻密 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部は、斲削り。内面は撫で。 体部に指頭圧痕あり。
第30図 2 PL-34	土師器 坏	+14cm 5/6	口 12.4 底 丸底 高 4.0	①緻密 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部横撫で。外面体部～底部は、斲削り。内面は撫で。 体部に指頭圧痕あり。
第30図 3 PL-34	土師器 丸底壺	+22cm 1/2	口 11.4 底 丸底 高 10.7	①緻密 ②酸化 ③橙	口縁部～頸部横撫で。ヘラあて痕あり。外面体部と口辺部に接合痕。 体部外面斲削り。内面撫で、指頭圧痕あり。
第30図 4 PL-34	土師器 高坏	掘り方覆 土 底～脚上 半	口 - 底 - 高(3.7)	①白・赤色細粒物、細砂 ②酸化 ③黄橙	坏底部～脚部外面斲磨き。坏底部内面斲磨き。脚部内面斲撫で。

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	石材 重量	挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	石材 重量
第30図 5 PL-34	白玉	+16cm ほぼ完形	直径 1.5 厚 0.5	滑石。 重さ：2% [?]	第30図 8 PL-34	白玉	+10cm ほぼ完形	直径 1.5 厚 0.9	滑石。 重さ：4% [?]
第30図 6 PL-34	白玉	+14cm ほぼ完形	直径 1.5 厚 0.5	滑石。 重さ：2% [?]	第30図 9	石	覆土 完形	長 15.2 厚 4.4	石英閃緑岩。 重さ：740% [?] 幅6.5
第30図 7 PL-34	白玉	+11cm ほぼ完形	直径 1.4 厚 0.9	滑石。 重さ：3% [?]					

10号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第31図 1 PL-34	須恵器 坏	竈内 口縁部 1/6	口(12.6) 底 - 高(3.3)	①緻密 ②酸化 ③にぶい黄橙	轆轤整形。右回転。内黒斲磨き。
第31図 2 PL-34	須恵器 坏	竈内 口縁部 1/5	口(12.3) 底 - 高(2.8)	①緻密 ②酸化 ③にぶい褐	轆轤整形。
第31図 3 PL-34	須恵器 壺か?	竈前 口縁部片	口(11.0) 底 - 高(3.1)	①緻密 ②還元 ③灰黄	轆轤整形。
第31図 4 PL-34	須恵器 椀	-16.5cm 高台部 1/3	口 - 底(8.0) 高(2.8)	①緻密 ②還元 ③灰	轆轤整形。右回転。付高台。
第31図 5 PL-34	須恵器 羽釜	竈内 口～胴上 位1/5	口(21.0) 底 - 高(9.6)	①細砂 ②還元→酸化 ③灰白	轆轤整形。口唇頂部撫で。

11号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第32図 1 PL-34	土師器 鉢か器台	床直 口縁部片	口(9.4) 底 - 高(2.0)	①細砂 ②酸化 ③にぶい橙	外面 篋磨き。 内面 横撫で。 内外面、赤色塗彩か。
第32図 2 PL-34	土師器 高坏か器 台	掘り方覆 土 脚部片	口 - 底(13.4) 高(3.4)	①緻密 ②酸化 ③黒褐	外面 ハケメ後篋磨き。裾部横撫で。 内面 篋撫で後篋磨き。 円孔あり。
第32図 3 PL-34	樽式 小型甕	床直 口~胴上 半	口 12.4 底 - 高(9.9)	①白色細粒物、粗砂 ②酸化 ③にぶい黄橙	外面 口縁部横撫で後波状文。頸部、簾状文右回り8本2連止め。 胴上半部、2段波状文。胴中央部、篋削り後篋磨き。 内面 口縁部横撫で。篋削り後篋磨き。折り返し口縁。

12号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第34図 1 PL-34	土師器 高坏	床直 坏部	口 23.0 底 - 高(10.3)	①細砂 ②酸化 ③明赤褐	円孔3個。坏部は内湾ぎみに開く。 外面 口縁部横撫で。坏部篋削り後放射状篋磨き。坏底部~脚部 細いハケメ後篋磨き。 内面 口縁部横撫で、坏部篋磨き。坏底部篋削り後篋磨き。
第34図 2 PL-35	土師器 小型甕	床直 胴部下位	口 - 底 3.5 高(3.8)	①黒色鉾物、粗砂、3mm程 の小石 ②酸化 ③浅黄	外面 胴下半部ハケメ後粗い篋磨き。底部篋削り後篋磨き。 内面 篋撫で後篋磨き。
第34図 3 PL-35	土師器 台付甕 (S字)	床直 口~肩部	口 16.0 底 - 高 8.5	①黒色鉾物、軽石、細砂 ②酸化、硬質 ③にぶい黄褐	口縁部下段は水平ぎみに開き、上段は垂直に立ち上がり大きく外 反。胴部はあまり肩が張らないと思われる。 外面 口縁部横撫で。縦ハケメ後肩に横ハケメ。横ハケメ右廻り。 内面 口縁部横撫で、縁部面取り。頸部横ハケメ。胴部ヘラ撫で。
第34図 4 PL-35	土師器 台付甕 (S字)	+19cm 口~肩部 片	口(14.0) 底 - 高(4.6)	①緻密 ②酸化 ③にぶい橙	口縁外面に櫛状工具による押引刺突文。口唇上面に弱い面取り。 外面 目の細かい工具で横ハケメ。描き継ぎあり。 内面 口縁部横撫で。胴部指撫で。
第34図 5 PL-35	樽式 壺	床直 口~胴部 上半	口 17.0 底 - 高(23.2)	①黒色鉾物、細砂 ②酸化 ③明褐	折り返し口縁。器台として転用か。 外面 口縁部横撫で後篋磨き。頸部、簾状文右回り9本3連止め 6分割。胴上半部4段の波状文。胴中央部横篋磨き。 内面 口縁部横撫で後、篋磨き。胴部篋撫で。

13号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第36図 1 PL-35	土師器 坏	竈掘り方 口~体部 1/3	口(18.2) 底 - 高(3.2)	①黒色鉾物、細砂 ②酸化 ③橙	口縁部~頸部横撫で。 外面体部 横方向の篋削り。 内面 体部横撫で。
第36図 2 PL-35	土師器 坏	竈 口~体部 1/4	口(12.0) 底 - 高(3.3)	①黒色鉾物、細砂 ②酸化 ③にぶい橙	口縁部~頸部横撫で。 外面 体部篋削り。 内面 横撫で後篋磨き。
第36図 3 PL-35	土師器 甕	竈内 口縁部片	口(24.6) 底 - 高(5.4)	①雲母、黒色鉾物、細砂(多 い) ②酸化 ③にぶい橙	口縁部~頸部横撫で、指頭圧痕あり。 頸部~胴部外面篋削り。 内面 篋撫で。
第36図 4 PL-35	須恵器 甕	竈内 頸~胴部 1/5	口 - 底 - 高(31.1)	①黒色細粒物多い ②還元 ③灰	外面 叩き文。胴部上半自然釉。 内面 青海波文。

16号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第38図 1 PL-35	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口 11.6 底 丸底 高 3.4	①白色細粒物、黒色鉾物、 細砂 ②酸化③橙	外面 口縁部~頸部上半横撫で、下半無調整か。底部篋削り。 内面 横撫で。線刻あり。
第38図 2 PL-35	須恵器 高台付坏	+14cm 高台部 1/4	口 - 底(8.0) 高(2.1)	①緻密 ②還元 ③灰	高台外面自然釉。

遺物観察表

17号住居出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第40図 1 PL-35	土師器 坏	竈覆土 1/4	口(13.6) 底 丸底 高(4.0)	①細砂 ②酸化 ③橙	外面 口縁部横撫で。体部縦撫で。底部篋削り後篋磨き。 内面 横撫で後篋磨き。底部縦撫で後篋磨き。

8号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第43図 1 PL-35	軟質陶器 すり鉢	口縁部片	口(25.5) 高(5.9)	①赤色細粒物 ②酸化 ③黒褐	中世。

34号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	出土銭貨 遺存状態	計測値				
第48図 1 PL-35	永楽通寶 完形	外縁銭径	25.10mm~25.30mm	外縁内径	20.70mm~21.30mm	銭厚 1.10mm~1.50mm 量目3.53g
第48図 2 PL-35	洪武通寶 完形	外縁銭径	23.20mm~23.40mm	外縁内径	20.30mm~20.45mm	銭厚 1.45mm~1.65mm 量目3.43g
第48図 3 PL-36	元祐通寶 完形	外縁銭径	24.35mm~24.65mm	外縁内径	17.90mm~18.10mm	銭厚 1.15mm~1.25mm 量目 3.18g
第48図 4 PL-36	洪武通寶 完形	外縁銭径	23.20mm~23.70mm	外縁内径	19.30mm~19.95mm	銭厚 1.30mm~1.65mm 量目2.87g

42号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第48図 1 PL-36	平瓦		長(10.4) 幅 19.5 厚 1.5	①細砂含む。 ②良好 ③灰	一枚作り。 凸面 縦撫で。 凹面 布目。

52号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第49図 1 PL-36	弥生 甕	1/2	口(14.7) 底 7.8 高 28.6	①石英、黒色鉱物、細砂 ②酸化 ③にぶい黄橙	外面 口縁部横撫で後縄文。口縁部~胴上半部縄文RL横転。 胴下半部篋磨き。底部篋削り後篋磨き。 内面 篋磨き。折り返し口縁。
第49図 2 PL-36	弥生 甕	頸~胴上 半1/5	口 - 底 - 高(16.7)	①白色細粒物、細砂 ②酸化 ③にぶい黄褐	外面 頸部簾状文、右廻り2連止め7本。胴上半部波状文。胴下 半部篋磨き。 内面 篋磨き。

1号井戸出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	備考		
第50図 1 PL-36	青磁 碗	底部片	龍泉窯系。13世紀代。		
第50図 2 PL-36	陶器 甕	肩部片	常滑。中世。		
第50図 3 PL-36	棒状 鉄製品	破片	棒状。サビの付着顕著。		

1号溝出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	備考	挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	備考
第53図 1 PL-37	白磁 碗	体部片	中国。12世紀。	第53図 9 PL-37	軟質陶器 内耳鍋	口縁部片	中世。
第53図 2 PL-37	白磁 碗	体部片	中国。12世紀？	第53図 10 PL-37	陶器 甕	口縁部片	16世紀の常滑。
第53図 3 PL-37	青磁 碗	体～底部 片	龍泉窯系。焼成不良。	第53図 11 PL-37	陶器 甕	口縁部片	13世紀の常滑系。
第53図 4 PL-37	磁器 碗	底部1/3	不明。中国？焼成不良。	第53図 12 PL-37	陶器 甕	肩部片	渥美？12世紀。 文字か。
第53図 5 PL-37	磁器 碗	体下半～ 底部1/5	不明。上ぐすり。	第54図 13 PL-37	陶器 甕	胴部片	常滑。
第53図 6 PL-37	軟質陶器 火鉢	口縁部片	丸型。中世。	第54図 14 PL-37	陶器 甕	肩部片	中世。常滑。
第53図 7 PL-37	軟質陶器 すり鉢	口縁部片	在地。	第54図 15 PL-37	陶器 片口鉢？	底部片	中世。
第53図 8 PL-37	軟質陶器 すり鉢	口縁部片	中世。15世紀。片口。				

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第54図 16 PL-37	羽口	先端部	厚 2.9	①土が粗い	径大。中世？
第54図 17 PL-37	瓦	小破片	長(7.5) 幅(3.4) 厚 2.1	①砂粒・白色粒子多い ②普通 ③灰	文字瓦 篋書き 「大」か 凸面。 凸面 撫で。 凹面 布目。
第54図 18 PL-37	平瓦	小破片	長(7.1) 幅(6.5) 厚(2.5)	①砂粒含む ②普通 ③褐灰 断面にぶい赤褐	文字瓦 篋書き 「八口」か 凸面。 凸面 撫で。 凹面 布目。
第54図 19 PL-37	平瓦	小破片	長(11.1) 幅(10.8) 厚 3.1	①砂粒含む ②やや軟質 ③にぶい褐	文字瓦 篋書き 文字不明。 凸面 縦撫で。 凹面 布目。
第54図 20 PL-37	軒平瓦	小破片	長(10.3) 幅(7.0) 厚 3.9	①砂粒・白色粒子含む ②普通 ③灰	国分寺分類番号不明。 凸面 撫で。 凹面 布目。瓦当側横撫で。

4号溝出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第58図 1 PL-37	土師器 坏	2/3	口 13.6 底 9.0 高 4.2	①緻密 ②酸化、硬質 ③にぶい黄橙	外面 口縁部横撫で（ヘラ状工具）。外面体部上半無調整。下半～底部篋削り。底部篋削り後磨き。 内面 横撫で後暗文。
第58図 2 PL-37	土師器 坏	口縁部片	口(14.6) 底 - 高(2.8)	①緻密 ②酸化 ③にぶい赤褐	内外面とも横撫で。 外面 体部篋削り。
第58図 3 PL-37	須恵器 坏	2/3	口 12.2 底 7.4 高 3.9	①緻密 ②還元 ③褐灰	轆轤整形。右回転系切り。
第58図 4 PL-38	土師器 甕	胴下半～ 底部	口 - 底 9.1 高(17.7)	①粗砂 ②酸化 ③橙	外面 篋削り。 内面 篋撫で。
第58図 5 PL-38	土師器 甕	口縁部 1/4	口(14.0) 底 - 高(4.0)	①細砂、黒色鉍物 ②酸化 ③鈍い褐	外面 口縁～頸部横撫で。頸部～胴部篋削り。 内面 横撫で。胴部篋撫で。
第58図 6 PL-38	土師器 甕	口縁部片	口(10.0) 底 - 高(3.5)	①細砂 ②酸化 ③明赤褐	外面 口縁～頸部横撫で。頸部～胴部篋削り。 内面 口縁～頸部横撫で。頸部～胴部篋撫で。

遺物観察表

5号溝出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第58図 1 PL-38	須恵器 椀	体下半～ 底部1/4	高(2.3)	①緻密 ②還元 ③淡黄	轆轤整形。右回転糸切り。付高台。

6号溝出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第58図 1 PL-38	土師器 坏	口～底部 片	高(3.9)	①赤色細粒物、細砂 ②酸化 ③橙	外面 口縁部～頸部横撫で。底部篋削り。 内面 横撫で。
第58図 2 PL-38	須恵器 甕	頸～胴部 片		①白色細粒物、細砂 ②還元、硬質 ③灰	外面 叩き目文。 内面 青海波文。

8号溝出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第60図 1 PL-38	須恵器 坏	体下位～ 底部	底 5.5 高(2.1)	①軽石、細砂 ②還元、やや軟質 ③灰黄	轆轤整形、右回転糸切り。丸底に近い。 内外面 底部～体部にかけてスス附着。
第60図 2 PL-38	須恵器 高台付坏	底～高台 部1/4	底(7.2) 高(1.7)	①黒色細粒物 ②還元、硬質 ③黄灰	轆轤整形、左回転か? 付高台。
第60図 3 PL-38	須恵器 蓋	天井部～ つまみ部	高(2.0)	①白色細粒物 ②還元 ③灰	轆轤整形。つまみ貼付。
第60図 4 PL-38	須恵器 長頸壺	高台部 1/3	底(12.0) 高(2.2)	①黒色細粒物 ②還元 ③黄灰	轆轤整形。
第60図 5 PL-38	土師器 甕	口縁部片	口(9.0) 高(3.7)	①細砂 ②酸化 ③にぶい褐	外面 口縁部横撫で、頸部篋削り。 内面 横撫で。
第60図 6 PL-38	須恵器 甕	口縁部片		①緻密 ②還元 ③灰褐	頸部外面 波状文。

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	備考	挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	備考
第60図 7 PL-38	鉄製品 紡錘車	棒部分 1/2欠	軸棒の中心に径4.6cmの鉄製円盤 が取り付く。 軸の断面は円形で、両端が欠損 している。厚さ0.5cm。	第60図 9 PL-38	陶器 碗	体～高台 部1/3	肥前。陶胎染付。18世紀前～中世。
第60図 8 PL-38	鉄製品 釘?	一部	釘か?断面は角形。厚さ0.5cm。	第60図 10 PL-38	磁器 つつ型碗	体～高台 部1/4	肥前。18世紀中～後半。
				第60図 11 PL-38	陶器 甕	肩部片	中世常滑。自然釉。

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第60図 12 PL-38	丸瓦	小破片	長(6.8) 幅(7.7) 厚 2.4	①砂粒含む ②普通 ③表面灰褐 断面褐灰	文字瓦 押印「佐」C類。 凸面 撫で。側端面取り。 凹面 布目。
第60図 13 PL-38	平瓦	小破片	長(5.5) 幅(9.0) 厚 2.4	①砂粒含む ②普通 ③灰	文字瓦 篋書き 文字不明 凸面。 凸面 撫で。 凹面 布目。
第60図 14 PL-38	軒平瓦	小破片	長(10.7) 幅(8.3) 厚 3.9	①砂粒多い ②良好 ③灰	国分寺NH301 顎付近に朱附着 創建期。 凸面 縄叩きのち縦削り。 凹面 布目。瓦当側横撫で。側縁縦撫で。側端面取り。
第61図 15 PL-38	軒平瓦	小破片	長(9.3) 幅(5.5) 厚 3.4	①砂粒含む ②良好 ③灰	国分寺NH302。 凸面 顎面横削り。その他縦削り。 凹面 撫で。瓦当側横削り。側縁縦削り。
第61図 16 PL-38	軒丸瓦	小破片	長(7.0) 幅 - 厚 2.3	①砂粒含む ②良好 ③灰	国分寺B201 創建期。 凸面 撫で。 凹面 撫で。
第61図 17 PL-38	軒丸瓦	小破片	長(3.6) 幅(3.8) 厚 1.6	①砂粒含む ②普通 ③灰	国分寺A107か。 瓦当裏面 無しほり布目。

遺構外出土遺物（縄文）

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
第64図 1 PL-39	深鉢	体部下半 破片	①繊維・白色粒 ②良好 ③褐	縄文は0段多条LRの縦位・斜位施文。器厚は厚く、内面は比較的平滑。	早期末～ 前期初頭
第64図 2 PL-39	深鉢	体部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい橙	横位平行沈線以下RL横位施文。器厚薄い。	前期後葉 諸磯a式
第64図 3 PL-39	深鉢	口縁部破 片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい橙	双波状口縁。波頂部はやや外反する。矢羽状の刻みを付した浮線文。波頂下意匠は菱形か。	前期後葉 諸磯b式
第64図 4 PL-39	深鉢	口縁部破 片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい黄褐	2種類の口縁部棒状貼付文が内面にまで及ぶ。下端にボタン状貼付文を付す。地文は横位平行沈線文。	前期後葉 諸磯c式
第64図 5 PL-39	深鉢	口縁部破 片	①細砂粒・石英 ②良好 ③にぶい褐	内湾する口縁部に棒状貼付文と弧状貼付文を付す。中にボタン状貼付文を配し口縁部装飾をなす。地文は横位平行沈線文。尚、弧状貼付文は剥落痕から判断した。	前期後葉 諸磯c式
第64図 6 PL-39	深鉢	頸部破片	①粗砂粒・雲母・石英 ②良好 ③暗褐	波頂部より垂下した高隆線による区画。頸部隆線との接点は波状突起を配す。垂下隆線及び区画隆線には刻みを施す。隆線側線は複列同時施文の結節沈線が施される。	中期中葉 阿玉台II 式
第64図 7 PL-39	深鉢	体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい黄褐	2条一組の弧状隆帯に1・2条の沈線側線が沿う。短沈線が加わり斜位沈線も施される。縄文はRL充填施文。	中期中葉 「新巻類 型」
第64図 8 PL-39	深鉢	体部下半 破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③褐	微隆線と沈線による懸垂文構成。中に刺突文を縦位に施す。沈線は内皮使用で施文深度は深い。	中期中葉
第64図 9 PL-39	深鉢	体部破片	①細砂粒 ②やや軟質 ③にぶい褐	細隆線・弧状隆線と平行沈線による懸垂文構成。弧状隆線は縦位に連続する傾向を見せる。平行沈線は内皮使用で重複施文。	中期中葉
第64図 10 PL-39	深鉢	体部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③暗褐	横位沈線上位に三角連続刺突文を側線とする。上位には横位LR細縄文を施す。	中期中葉 末
第64図 11 PL-39	深鉢	口縁部破 片	①細砂粒・石英 ②良好 ③橙	口縁上に配された渦巻状突起。突起を中核に隆帯が斜位に派生する。突起にはRL縄文が施される。内面は剥落するも大型の内縁が付される。	中期後葉 勝坂系
第64図 12 PL-39	深鉢	頸部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③暗褐	外反する頸部下端に横位隆帯を設け、体部隆帯を派生する。頸部は無文、横位隆帯には横位RL縄文を加える。	中期後葉 勝坂系
第64図 13 PL-39	深鉢	口縁部破 片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③暗褐	口唇部は内面隆帯による内折形状を示す。欠損・剥落するが、口唇部より隆帯による中空状・立体的な突起が配されるようである。体部は縦位RL縄文が施される。	中期後葉 加曾利E I式古
第64図 14 PL-39	深鉢	口縁部下 破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい橙	口唇部欠損。内湾する口縁部に細隆線による渦巻状・円環状意匠を配す。地文は燃糸文Lを縦位に施す。	中期後葉 勝坂系
第64図 15・16 PL-39	深鉢	口縁部破 片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③暗褐	同一個体。内折する口唇部。口縁部は緩やかに外反し、頸部屈曲の兆しを見せる。器面は縦位RL縄文が覆う。	中期後葉 加曾利E I式古
第64図 17～19 PL-39	深鉢	体部破片	①粗砂粒・石英・白色粒 ②良好 ③褐	3片が同一個体か。3条の横位隆線以下横位沈線とLR斜位施文(17)。弧状沈線(18)、横位沈線(19)。19は内湾形状から口縁部下か。3片とも内面横位研磨著しい。	中期後葉 加曾利E I式古
第65図 20 PL-39	深鉢	口頸部破 片?	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい橙	内湾形状から部位を判断した。3条の横位隆線を分帯線と見た。2条の沈線を側線とし、横位LR縄文を地文としている。	中期後葉 加曾利E I式古
第65図 21・22 PL-39	深鉢	口縁部破 片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい褐	同一個体か。平縁の大型深鉢。無文口縁下に隆線が巡り、隆線直下は横位LR(0段多条)と縦位LRによる羽状縄文構成をとる。	中期後葉 加曾利E III式
第65図 23 PL-39	深鉢	口縁部下 破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③黄橙	隆帯による口縁部楕円状区画文下端。隆帯は凹線を側線とし横位RL縄文を充填する。	中期後葉 加曾利E III式

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
第65図 24 PL-39	深鉢	体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい褐	2条の弧状細隆線とL R縄文縦位充填施文。隆線は渦巻き状の意匠か。	中期後葉 加曾利E Ⅲ式
第65図 25 PL-39	深鉢	体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい橙	2条の弧状細隆線とL R縄文縦位充填施文。隆線間は撫でが加わる。	中期後葉 加曾利E Ⅲ式
第65図 26 PL-39	深鉢	体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②やや軟質 ③黄橙	斜位細沈線による懸垂文構成か。器面摩滅する。	中期後葉 加曾利E Ⅲ式
第65図 27 PL-39	深鉢	体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい褐	沈線により画された磨消部と縄文施文部の交互懸垂文構成。縄文はR L縦位充填施文。	中期後葉 加曾利E Ⅲ式
第65図 28 PL-39	深鉢	口縁部破片	①細砂粒 ②良好 ③にぶい褐	口唇部肥厚し薄い内稜を持つ。口唇下に凹線を巡らし、弧状凹線が垂下する。縄文は横位R L充填施文。	中期後葉 加曾利E Ⅳ式
第65図 29 PL-39	深鉢	体部破片	①細砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③にぶい褐	細沈線で画された縄文施文部と磨消部。磨消部中位の沈線は蕨手状の意匠か。縄文は縦位R L充填施文。	中期後葉 加曾利E Ⅳ式
第65図 30 PL-39	深鉢	体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい橙	2条沈線で画された三角形状区画。区画内は横位細縄文L Rが充填される。	後期前葉 堀之内1 式
第65図 31 PL-39	深鉢	体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②やや軟質 ③にぶい黄橙	2条の沈線で画された三角形状区画か。縄文は斜位L R充填施文器面摩滅。	後期前葉 堀之内1 式
第65図 32 PL-39	深鉢	体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②やや軟質 ③黄橙	2条の弧状沈線と縄文施文部。縄文は細縄文R L充填施文。	後期前葉 堀之内1 式
第65図 33 PL-39	深鉢	体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②やや軟質 ③にぶい黄褐	3条の横位沈線上位に弧線が加わる。弧線内縁は縄文が施文されるが判然としなない。	後期前葉 堀之内式 ?
第65図 34 PL-39	深鉢	体部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③黒褐	2条の横位沈線間を横位L R細縄文が充填される。上位の沈線は緩やかな波状を描く。器厚薄手。	後期前葉 堀之内2 式
第65図 35 PL-39	深鉢	体部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい黄橙	下半に横位沈線を巡らし上位に弧線区画沈線が施される。沈線間はL R細縄文が横位充填施文される。	後期中葉 加曾利B
第65図 36 PL-39	深鉢	口縁部破片	①細砂粒・黒色粒 ②良好 ③黒褐	やや小型の深鉢。波状口縁を呈し頭部は緩やかな屈曲を見せる。口唇部内面は緩やかな内稜を持つ。口縁部下に横位矢羽状沈線が施される。	後期中葉 加曾利B
第65図 37 PL-39	深鉢	口縁部突起片	①小礫・粗砂粒・石英 ②良好 ③暗褐	小突起を2ヶ頂部に配し、隆帯を2条横位に付し、下端に瘤状突起を設けた大波状口縁波頂部突起。口縁部文様帯は無文か。	後期後葉 高井東式
第65図 38 PL-39	深鉢	口縁～体部上破片	①粗砂粒・片岩・黒色粒 ②良好 ③褐	平縁で直線的な器形を呈す。口唇端部に深い沈線を施す。口縁部1条・体部上半に3条の沈線を巡らし文様帯を画す。文様帯内は横位長楕円状意匠が沈線で描かれる。	晩期前葉 ?
第65図 39 PL-39	深鉢	口縁～体部上1/5	①小礫・粗砂粒・石英 ②やや軟質 ③褐	平縁。口唇端部に深い沈線を施しB突起を付す。体部外面は撫でを加えるのみで無文。内面も平滑な撫で調整を施す。	晩期前葉 ?
第66図 40 PL-39	深鉢	口縁部破片	①細砂粒黒色粒 ②良好 ③にぶい黄褐	口唇部は角頭状で、直線的な器形を呈す。体部外面には輪積痕を残す。内面撫で。	晩期前葉 ?
第66図 41 PL-39	深鉢	底部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③にぶい褐	張り出し底部。底面器壁は薄く、体部下半は緩やかに外反する。無文で底面に網代痕が看取される。	後期中葉 ?
第66図 42 PL-39	深鉢	底部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③褐	底面は厚く、体部下半は強く開き気味に立ち上がる。無文。	後期前葉 ?
第66図 43 PL-39	耳飾	破片	①白色粒 ②良好 ③にぶい橙	直径約5cm程のやや小型の耳飾。残存状況は不良で全体像は不明だが、環状滑車形を呈すると思われ沈線文を主体とする。外縁を沈線と浅い刻みで縁取り、中位は楕円状に途切れる意匠を配す。	晩期前葉 ?

遺構外出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	石材 重量	挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	石材 重量
第66図 44 PL-39	石器 石鏃	完形	長(2.5) 幅 1.7 厚 4.5	チャート 重27g	第66図 51 PL-39	石器 加工痕の ある剥片	完形	長 10.0 幅 9.8 厚 1.2	細粒輝石安山岩 重89g
第66図 45 PL-39	石器 スクレイ パー	完形	長 6.1 幅 5.2 厚 1.1	珪質頁岩 重43g	第67図 52 PL-39	石器 敲石	完形	長 12.9 幅 6.9 厚 3.9	デイサイト 重505g
第66図 46 PL-39	石器 打製石斧	1/2	長(6.8) 幅 4.8 厚 2.4	黒色頁岩 重106g	第67図 53 PL-39	石 多孔石	完形	長 14.0 幅 11.5 厚 7.7	細粒輝石安山岩 重1285g
第66図 47 PL-39	石器 打製石斧	1/3	長(4.5) 幅(5.2) 厚 1.2	変質玄武岩 重50g	第67図 54 PL-40	石 多孔石	完形	長 9.7 幅 7.5 厚 4.9	細粒輝石安山岩 重350g
第66図 48 PL-39	石器	完形	長 10.7 幅 6.4 厚 1.3	黒色頁岩 重91g	第67図 55 PL-40	石 多孔石	欠損あり	長 18.0 幅 13.6 厚 10.0	細粒輝石安山岩 重2920g
第66図 49 PL-39	石器 石斧未製 品	完形	長(10.4) 幅 7.8 厚 2.2	黒色安山岩 重226g	第67図 56 PL-40	石 多孔石	一部欠損	長 19.3 幅 15.2 厚 13.0	細粒輝石安山岩 重3000g
第66図 50 PL-39	石器 加工痕の ある剥片	完形	長 8.8 幅 6.3 厚 1.2	黒色安山岩 重84g	第68図 57 PL-40	石 多孔石	完形	長 16.8 幅 13.5 厚 11.1	細粒輝石安山岩 重2050g

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第68図 58 PL-40	樽式 壺	口縁部 1/3	口(17.0) 底 - 高(11.0)	①2～3mmの細礫、細砂 ②酸化 ③橙	断面隅丸形状の小さな折り返し口縁。 外面 口縁部横撫で後櫛描波状文。口縁部～頸部縦磨き。 内面 口縁部横撫で。
第68図 59 PL-40	樽式 壺	肩部片	口 - 底 - 高 -	①細砂 ②酸化 ③にぶい黄橙	外面 横櫛描羽状文。 内面 撫で。
第68図 60 PL-40	樽式 小型甕 (台付)	口縁部片	口(11.0) 底 - 高 4.1	①緻密 ②酸化、硬質 ③浅黄	断面かまぼこ形の小さな折り返し口縁。 外面 口縁部横撫で後波状文。頸部簾状文等間隔止めか。右廻り 12本。頸部～胴部波状文。 内面 横磨き。
第68図 61 PL-40	樽式 小型甕 (台付)	口縁部片	口(10.0) 底 - 高(3.6)	①黒色鉱物、細砂 ②酸化 ③明黄褐	うすい折り返し口縁。 外面 口縁～頸部波状文。頸部簾状文7本右廻り。頸部～胴部波 状文。 内面 磨き。
第68図 62 PL-40	樽式 小型甕	頸～胴上 半1/4	口 - 底 - 高(6.9)	①細砂 ②酸化 ③にぶい橙	外面 口縁部～頸部波状文。頸部簾状文、右廻り8本。頸部～胴 上半部波状文。胴中央部磨き。 内面 磨き。
第68図 63 PL-40	樽式 甕	口縁部 1/4	口(16.2) 底 - 高(5.3)	①細砂 ②酸化 ③にぶい赤褐	小ぶりの折り返し口縁。 外面 口縁部横撫で後波状文。 内面 口縁部横撫で、口縁部～頸部磨き。
第68図 64 PL-40	土師器 壺	肩部片	口 - 底 - 高 -	①細砂 ②酸化 ③にぶい褐	外面 肩部櫛描平行線文と波状文の交互施文。 上下波状文。 内面 撫で。
第68図 65 PL-40	土師器 壺	口縁部 1/6	口(23.0) 底 - 高(4.5)	①赤色細粒物 ②酸化 ③浅黄橙	幅広の折り返し口縁。下端は垂下。 内外面 口縁部横撫で後磨き。 頸部外面 ハケメ後磨き。
第68図 66 PL-40	土師器 (壺)	胴下位片	口 - 底 - 高 -	①赤色細粒物 ②酸化(硬質) ③灰白	外面 胴部中位に接合痕を明確に残す。 ハケメ後磨き。 内面 ハケメ後撫で。
第68図 67 PL-40	土師器 ひさご壺	口縁部 1/6	口(13.4) 底 - 高(5.9)	①緻密 ②酸化、硬質 ③にぶい黄橙	外面 縦磨き、細沈線による連弧文。 内面 磨き。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第68図 68 PL-40	土師器 甕	口～肩部 片	口 - 底 - 高 -	①石英、軽石、細砂 ②酸化 ③にぶい赤褐	口縁部内外面横撫で。 外面 肩部撫で。肩に沈線による斜短線文。 内面 篋撫で。
第68図 69 PL-40	土師器 台付甕 (S字)	口～胴上 位片	口(16.3) 底 - 高(8.5)	①赤色細粒物 ②酸化、硬質 ③褐	口縁部下段は直線的に開き上段は垂直に立ち上がり端部やや外反。肩が張る。 外面 口縁部横撫で。胴上半部～左上斜めハケメ後、胴上半部左下斜めハケメ後、肩部横ハケメ。右回り。 内面 口縁部横撫で。胴部指撫で。
第68図 70 PL-41	土師器 台付甕 (S字)	口～肩部 片	口(14.8) 底 - 高(5.6)	①細砂(多い)、黒色鉱物 ②酸化 ③灰白	口縁部下段は直線的に開き、上段は垂直に立ち上がり、上半でやや外反。 外面 口縁部横撫で。頭部～胴部縦ハケメ後横ハケメ。 内面 口縁部横撫で。頭部篋撫で。頭部～胴部指撫で後篋撫で。
第69図 71 PL-41	土師器 台付甕?	口～肩部 片	口(11.8) 底 - 高(4.0)	①細砂、赤色細粒物 ②酸化、硬質 ③淡黄	外面 口縁部横撫で。頭部～胴部縦ハケメ後横ハケメ。 内面 口縁部横撫で。頭部～胴部篋撫で。
第69図 72 PL-41	土師器 甕	口～肩部 片	口(16.6) 底 - 高(5.1)	①細砂(多い) ②酸化 ③にぶい黄橙	頭部に輪積痕。S字甕の模倣か。 外面 口縁部横撫で。頭部～胴部ハケメ。 内面 口縁部横撫で。頭部～胴部撫で。
第69図 73 PL-41	土師器 台付甕	口縁部片	口(14.1) 底 - 高(2.6)	①細砂 ②酸化 ③浅黄橙	口縁部内外面横撫で。S字甕の模倣か。
第69図 74 PL-41	土師器 台付甕	台部1/3	口 - 底(7.6) 高(5.6)	①緻密 ②酸化、軟質 ③にぶい黄橙	内外面 篋磨き。器面が荒れている。
第69図 75 PL-41	土師器 坏	口～体部 1/2	口(16.0) 底 - 高(4.3)	①細砂 ②酸化 ③橙	外面 口縁部～頸部横撫で。体部～底部篋削り。 内面 横撫で後暗文。
第69図 76 PL-41	土師器 坏	口～底部 1/5	口(13.2) 底(7.6) 高3.8	①細砂 ②酸化 ③橙	外面 口縁部～頸部横撫で。体部～底部篋削り後篋磨き。 内面 横撫で。
第69図 77 PL-41	須恵器 甕	口縁部片	口 - 底 - 高 -	①黒色細粒物 ②還元 ③灰	刺突文。7世紀後半～8世紀前半。 内面 自然釉。
第69図 78 PL-41	須恵器 坏	ほぼ完形	口12.8 底5.7 高4.4	①白色細粒物、細砂 ②還元 ③浅黄	轆轤整形、右回転糸切り痕。
第69図 79 PL-41	須恵器 椀	体～高台 部	口 - 底6.2 高(4.2)	①軽石、黒色鉱物 ②還元 ③にぶい橙	轆轤整形、右回転。付高台。
第69図 80 PL-41	須恵器 蓋	つまみ部	口 - 底 - 高(2.1)	①赤色細粒物 ②還元 ③浅黄橙	轆轤整形。
第69図 81 PL-41	丸瓦	小破片	長(10.4) 幅(13.1) 厚2.7	①砂粒含む、粗い ②普通 ③灰	文字瓦 篋書き「當」凹面。 凸面 平行叩き。 凹面 布目、側端面取り。
第69図 82 PL-41	丸瓦	小破片	長(11.3) 幅(7.0) 厚2.2	①砂粒含む、粗い ②普通 ③灰	文字瓦 篋書き「川」か凸面。 凸面 撫で、側端面取り。 凹面 布目、側端面取り。
第70図 83 PL-41	丸瓦	広端隅部	長(10.5) 幅(13.1) 厚2.7	①砂粒含む ②やや軟質 ③にぶい褐	凸面 撫で、側端面取り。 凹面 布目、側端面取り。
第70図 84 PL-41	丸瓦	小破片	長(13.5) 幅(12.6) 厚2.4	①砂粒、白色粒子多い ②普通 ③黒灰	凸面 撫で。 凹面 布目。
第70図 85 PL-42	平瓦	小破片	長(7.8) 幅(13.1) 厚2.8	①砂粒含む ②普通 ③灰褐	凸面 格子叩き、側端面取り。 凹面 撫で。
第70図 86 PL-42	軒平瓦	小破片	長(5.4) 幅 - 厚2.5	①砂粒含む ②普通 ③明褐灰	頸部剥離 分類番号不明。 凸面 撫で。 凹面 糸切り痕、布目、瓦当側横撫で。

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の特徴、備考
第70図 87 PL-42	軒平瓦	小破片	長(5.3) 幅 7.7 厚 4.8	①白色粒子含む ②良好 ③灰	国分寺P002B。 凸面 横撫で。 凹面 横撫で。
第71図 88 PL-42	軒平瓦	瓦当右端 部小破片	長(11.0) 幅 10.8 厚 3.5	①砂粒含む ②良好 ③灰	国分寺P001。 凸面 縦削り、顎面横削り。 凹面 横撫で、一部布目。側縁縦削り。側端面取り。
第71図 89 PL-42	軒丸瓦	小破片	長 - 幅 - 厚 -	①砂粒含む ②良好 ③灰	国分寺B101 一本作り。
第71図 90 PL-42	瓦不明	小破片	長(3.8) 幅(5.5) 厚 2.1	①砂粒、白色粒子多い ②普通 ③灰	文字瓦 篋書き 文字不明 凸面。 凸面 横撫で、側端面取り。 凹面 布目。側端面取り。

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	備考	挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	備考
第71図 91 PL-42	青磁 碗	口縁部片	龍泉窯系。12世紀後半～13世紀 中。中国。	第71図 94 PL-42	陶器 片口鉢	底部片	常滑。14世紀代。 すり面あり(すり鉢として使用)
第71図 92 PL-42	青磁 碗	口縁部片	轆轤左回転。中国。	第71図 95 PL-42	陶器 片口鉢	胴部片	常滑。14世紀以前。 すり面あり(すり鉢として使用)
第71図 93 PL-42	陶器 片口鉢	口縁部片	中世。 内面 自然釉。	第71図 96 PL-42	鉄器 不明	一部	くの字状。断面角形。

報告書抄録

ふりがな	もとそうじゃにしかわいせき							
書名	元総社西川遺跡							
副書名	国分寺進入路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告							
シリーズ番号	第288集							
編著者名	笹澤泰史							
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団							
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511							
発行年月日	2001年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇'〇'	東経 〇'〇'	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとそうじゃにしかわ 元総社西川	まえばしもとそうじゃまち 前橋市元総社町	10201		36°23'18"	139°01'35"	2000年1月5日～ 2000年6月30日	5664	国分寺進入路建設に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元総社西川	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 中世以降	竪穴住居, 畠 竪穴住居, 溝 土坑, 井戸	土器, 石器 土器 土師器 土師器, 須恵器、瓦 人骨, 馬歯, 古銭	

写 真 图 版



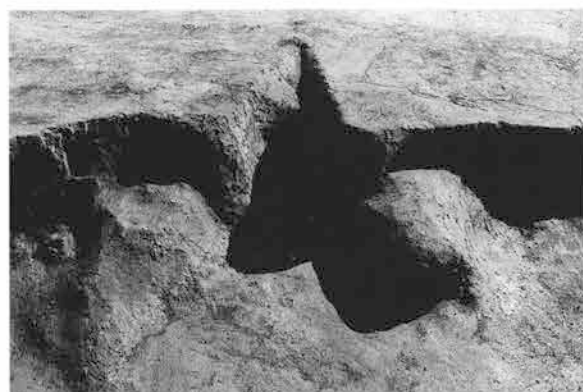
元総社西川遺跡から上野国分僧寺の築地塀を望む



元総社西川遺跡（上空より）



1号住居全景



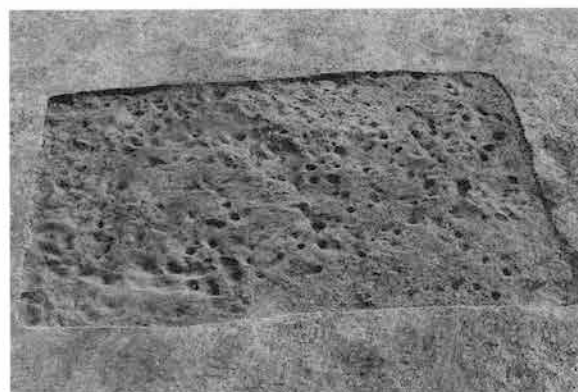
1号住居竈



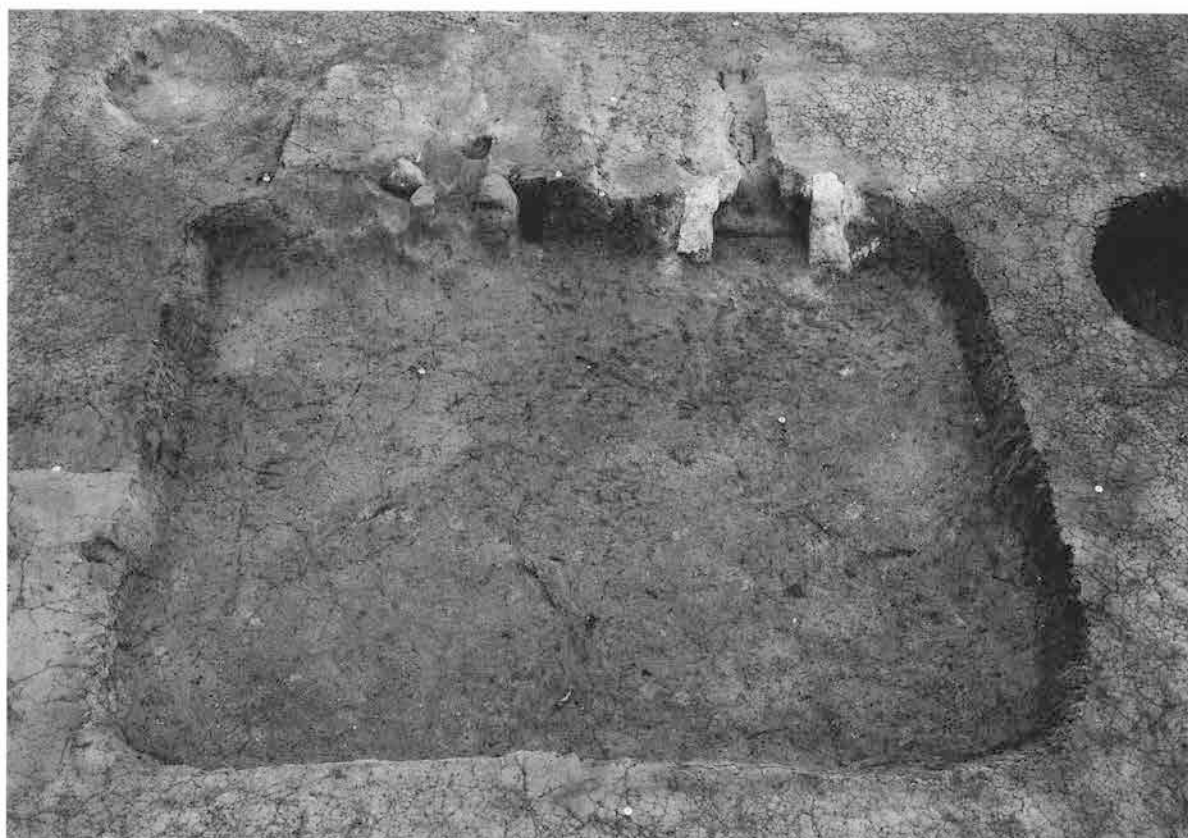
1号住居遺物出土状況



1号住居貯蔵穴



1号住居掘り方全景



2号住居全景



2号住居1号竈



2号住居2号竈



2号住居2号竈断面E-E'



2号住居遺物出土状況



3号住居竈遺物出土状況



3号住居竈掘り方全景



4号住居全景



4号住居竈



4号住居貯藏穴



4号住居掘り方全景



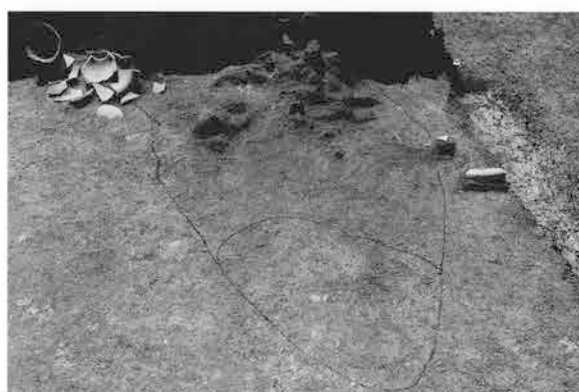
4号住居Hr-FA堆積状況



4号住居遺物出土状況



4号住居貯蔵穴周辺遺物出土状況



4号住居焼土炭化物分布範囲



4号住居竈遺物出土狀況



4号住居竈周辺遺物出土狀況



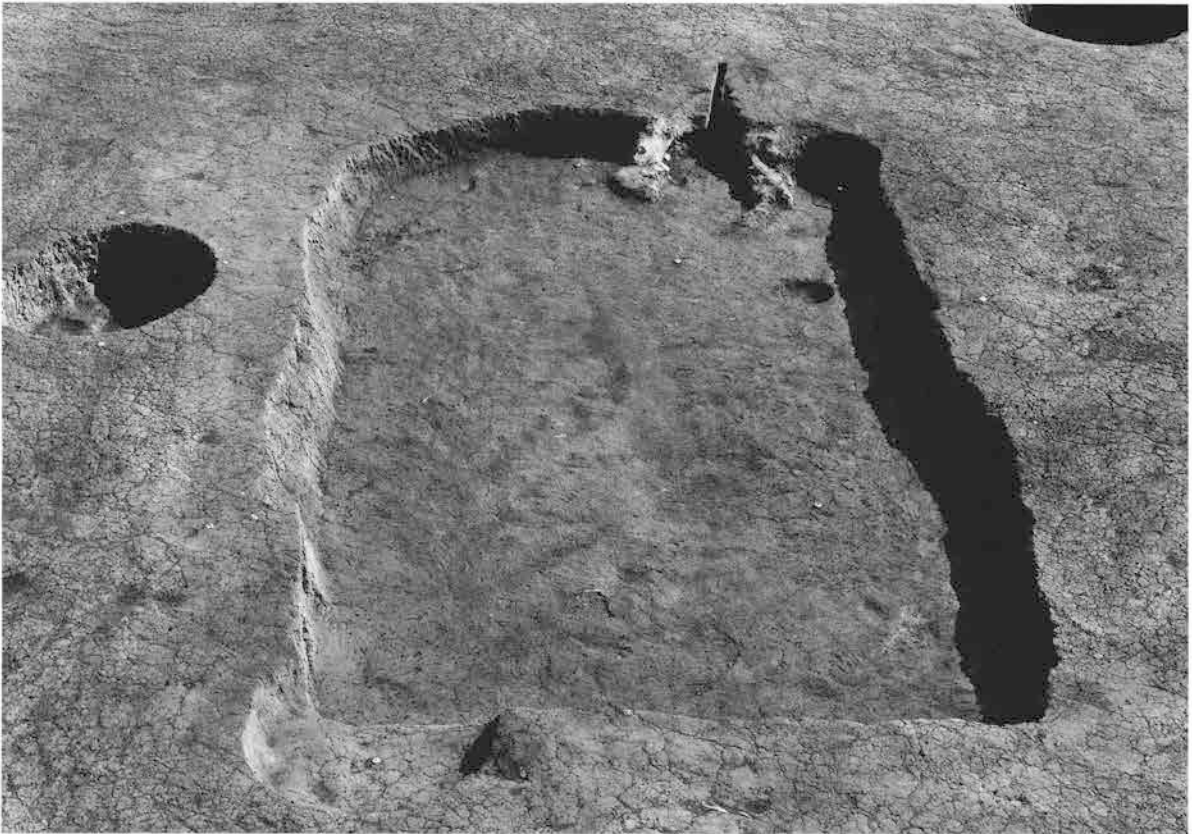
4号住居竈東遺物出土狀況



4号住居竈遺物出土狀況



4号住居竈遺物出土狀況



5号住居全景



5号住居竈遺物出土状況



5号住居竈掘り方全景



5号住居遺物出土状況



5号住居遺物出土状況



6号住居全景



6号住居貯蔵穴



6号住居貯蔵穴断面



6号住居炉



6号住居調査風景



6号住居C上遺物出土状況



6号住居C上遺物出土状況



6号住居炭化材出土状況



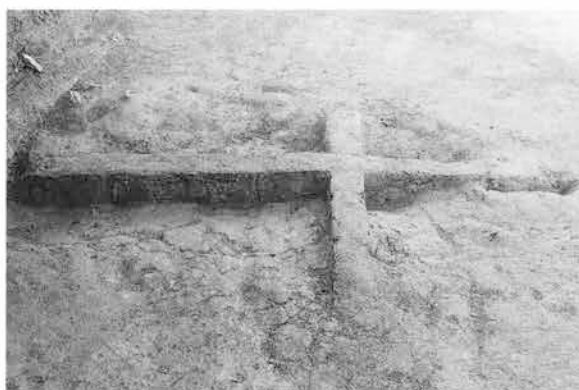
6号住居遺物出土状況



6号住居遺物出土状況



7号住居竈掘り方



7号住居竈断面B-B'



8号住居炭化材出土状況



8号住居断面C-C'



8号住居炉断面



8号住居柱穴1断面



8号住居柱穴2断面



8号住居柱穴3断面



8号住居炭化材出土状況



8号住居炭化材出土状況



8号住居炭化材下のAs-C軽石



8号住居遺物出土状況



8号住居遺物出土状況



9号住居遺物出土状況



9号住居竈



9号住居掘り方全景



9号住居遺物出土状況



9号住居貯蔵穴



9号住居柱穴1断面



9号住居柱穴2断面



10号住居竈遺物出土状況



10号住居竈



11号住居全景 (中央の白い軽石層はAs-C)



11号住居遺物出土状況



12号住居掘り方全景



12号住居遺物出土状況



12号住居遺物出土状況



12号住居遺物出土状況



13号住居全景



13号住居竈遺物出土状況



13号住居竈掘り方断面D-D'



14号住居全景



14号住居東壁断面



16号住居遺物出土状況



17・18号住居掘り方全景



17号住居貯蔵穴断面



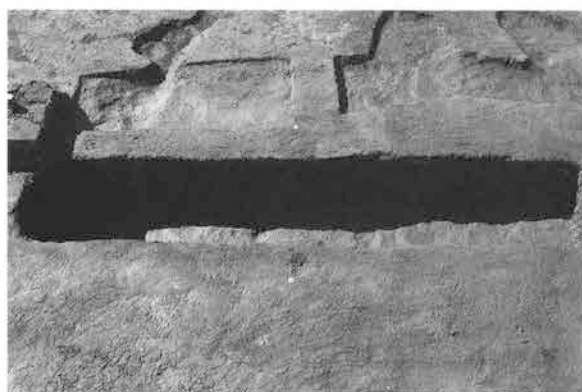
17号住居掘り方断面A-A'



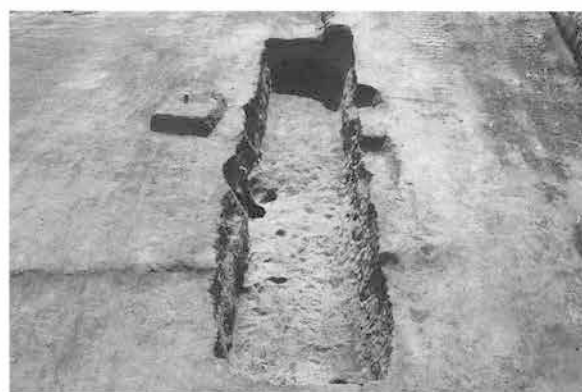
1号土坑全景



5号土坑全景



6号土坑全景



8号土坑全景



28号土坑全景



47・49号土坑全景



48号土坑全景



3号土坑全景



4号土坑全景



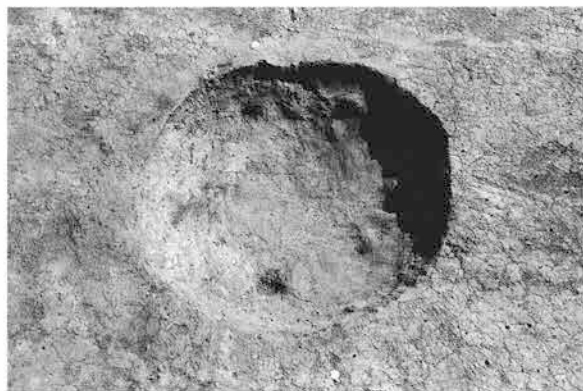
7号土坑全景



9号土坑全景



10号土坑全景



11号土坑全景



12号土坑全景



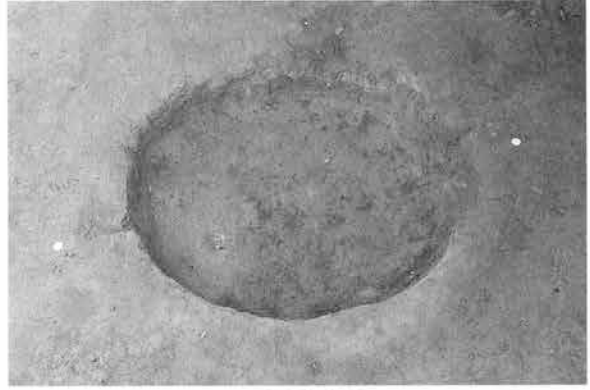
13号土坑全景



14号土坑全景



15号土坑全景



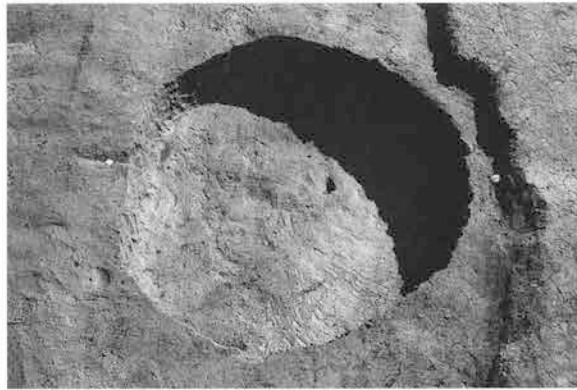
16号土坑全景



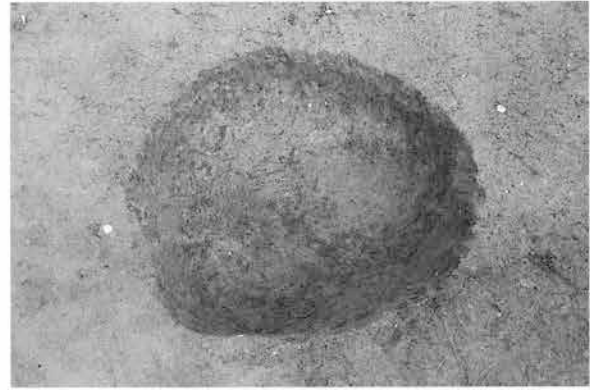
17号土坑全景



18号土坑全景



19号土坑全景



20号土坑全景



21号土坑全景



22号土坑全景



23号土坑全景



24号土坑全景



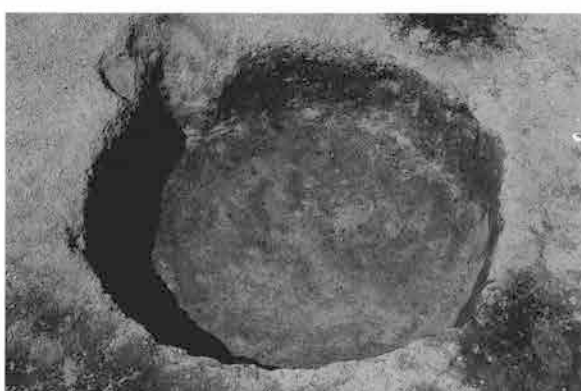
25号土坑全景



29号土坑全景



30号土坑断面



37号土坑全景



38号土坑全景



39号土坑全景



44号土坑全景



45号土坑全景



46号土坑全景



2号土坑全景



26号土坑全景



27号土坑全景



34号土坑全景 (人骨)



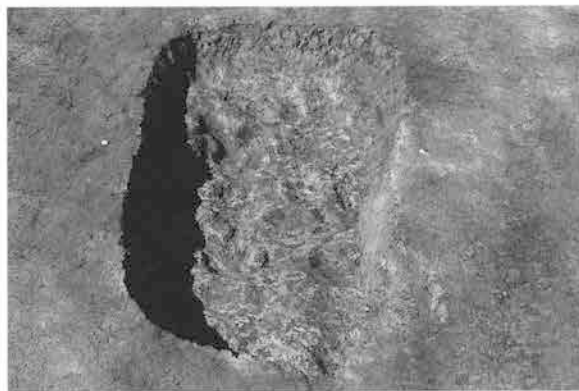
34号土坑全景 (人骨)



34号土坑出土齒



31号土坑全景



41号土坑全景



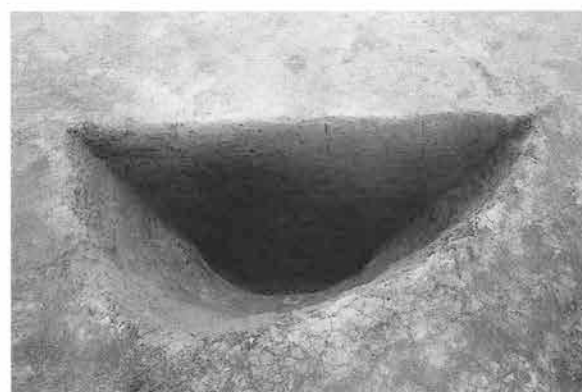
42号土坑遺物出土状況



52号土坑遺物出土状況



52号土坑遺物出土状況



1号井戸断面



1号井戸全景



1号溝全景



1号溝断面



1号溝全景



2号溝全景



8号溝 (1区部分)



4号溝全景



4号溝遺物出土状況



4号溝断面B-B'



5号溝全景



6号溝全景



7号溝全景



8号溝全景



9号溝土層断面



2号畠全景



2号畠断面As-C軽石堆積状況



1号畠全景



2区縁部トレンチ調査風景

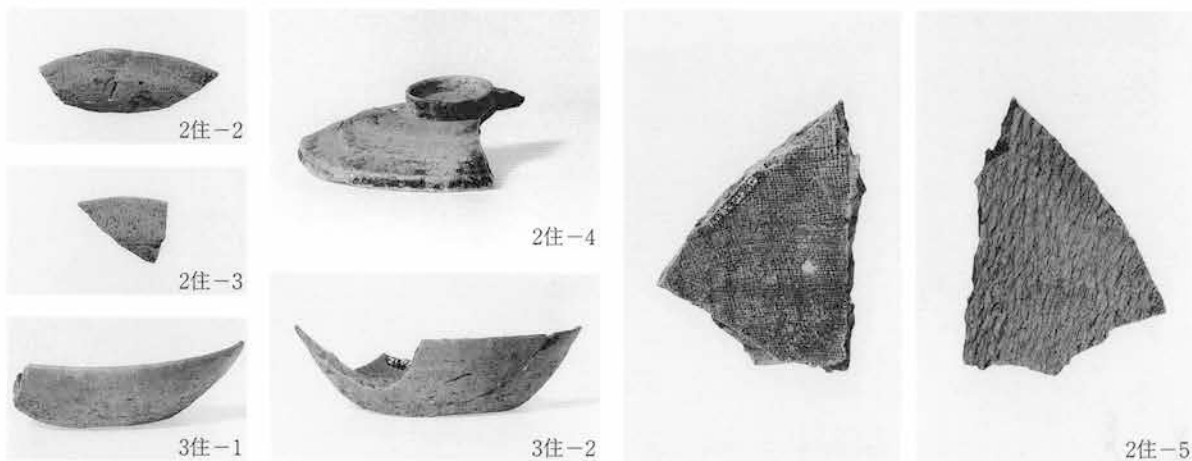
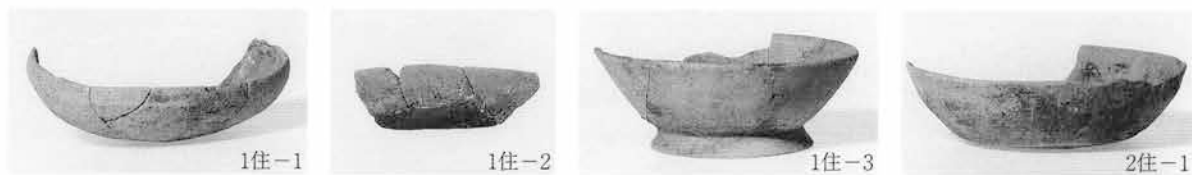


1区総社砂層上面



2区総社砂層上面

〔1〕 竪穴住居出土遺物



PL.30





4住-26



4住-27



4住-28



4住-29



4住-31



4住-30



4住-33



4住-32



4住-35



4住-34



4住-36



4住-37



4住-38



5住-1



5住-3



5住-2



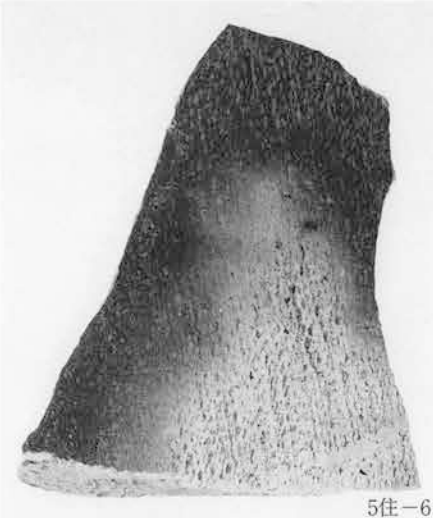
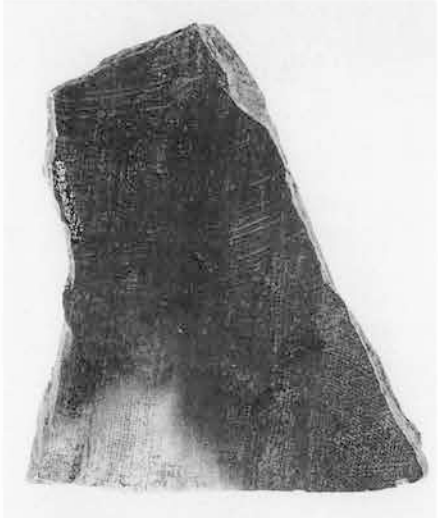
5住-4



5住-5



6住-1



5住-6



6住-4



6住-5



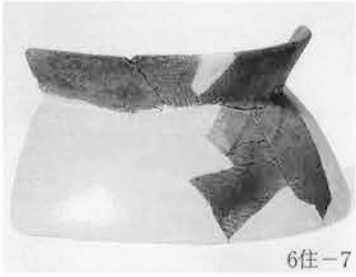
6住-2



6住-3



6住-6



6住-7



6住-8



6住-9



6住-10



6住-13



6住-11



6住-14

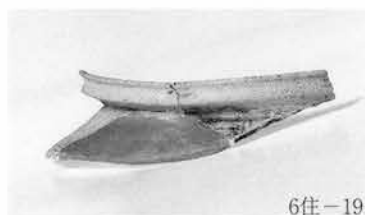


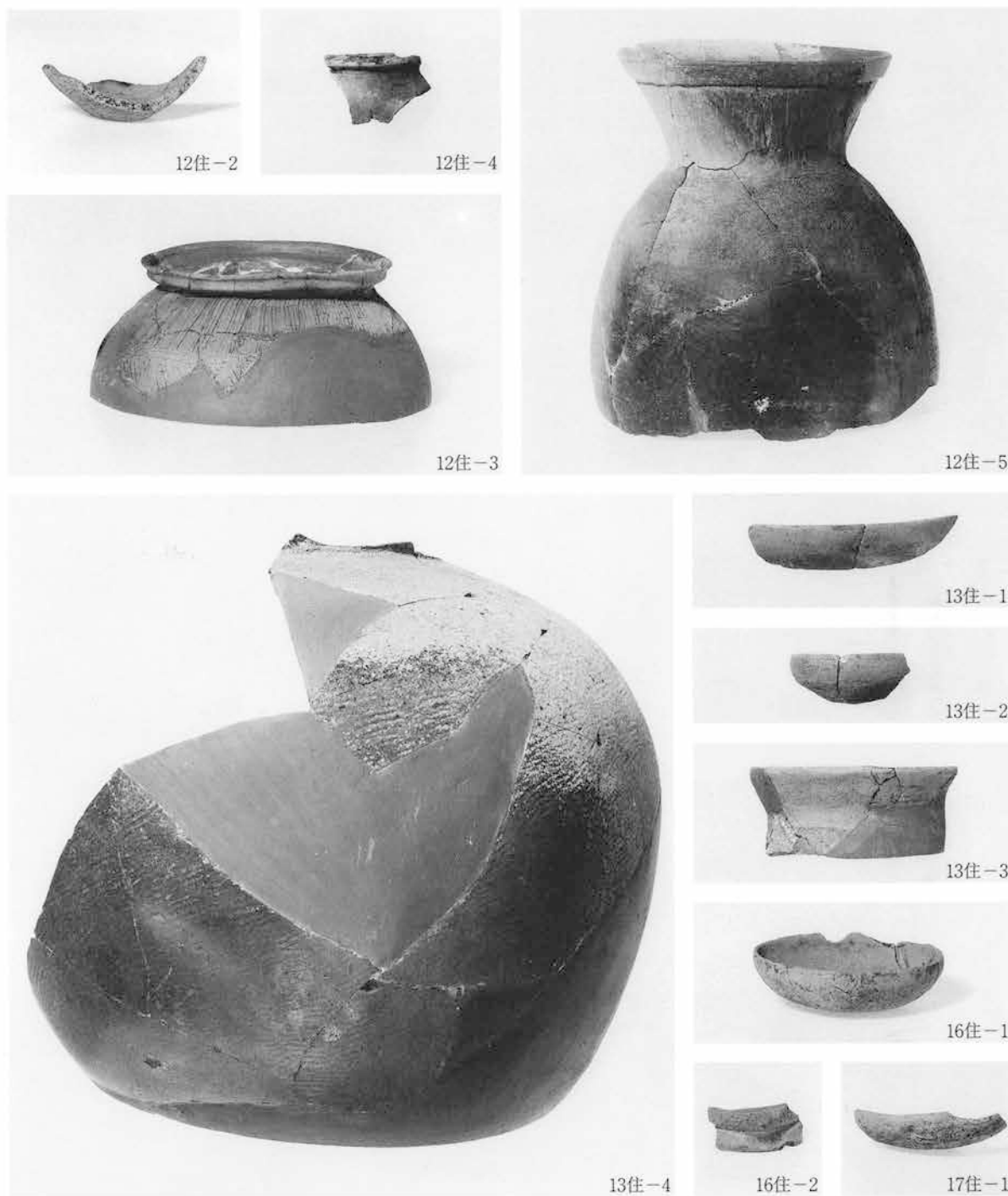
6住-12



6住-15

PL.34





〔2〕 土坑・井戸出土遺物

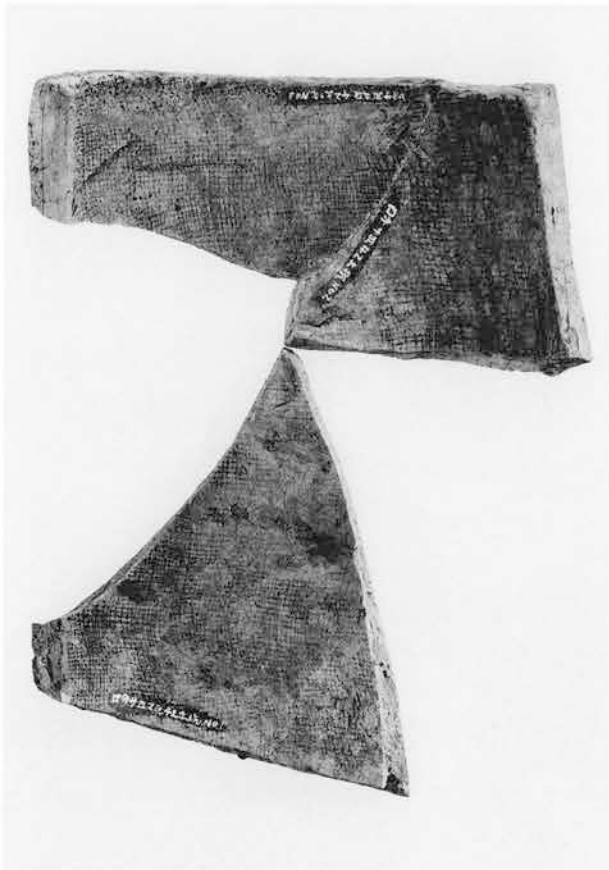




34±-3



34±-4



52±-1



52±-2



1井戸-1



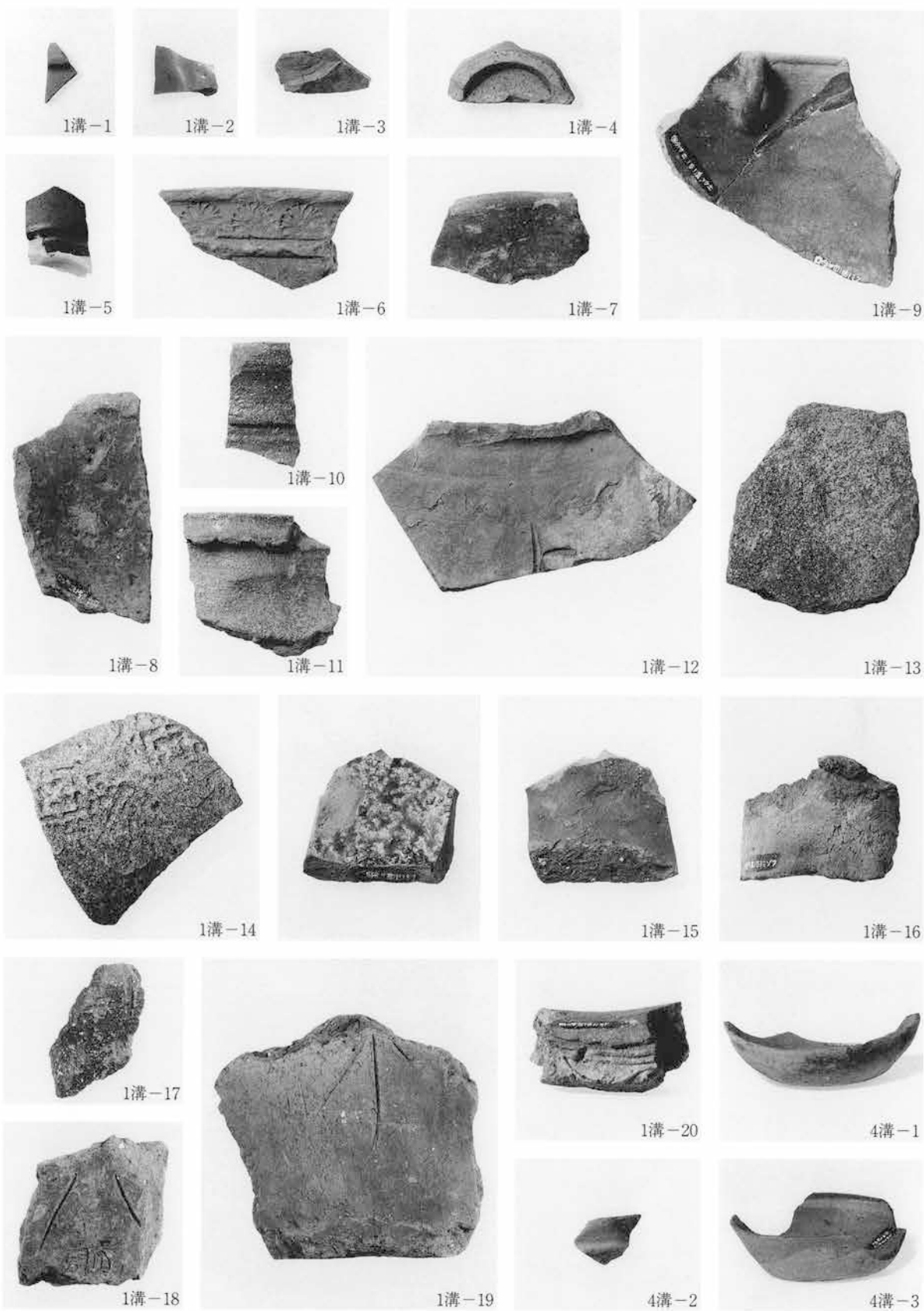
1井戸-3

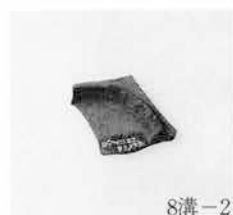
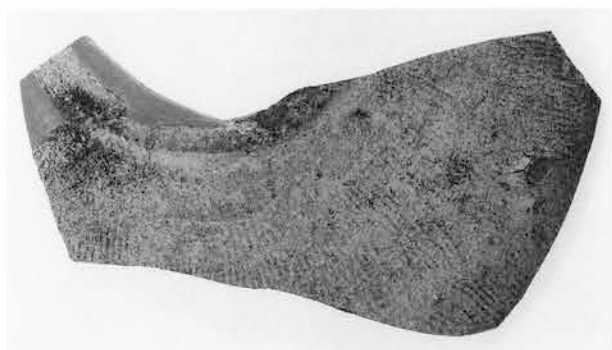


1井戸-2

42±-1

[3] 溝・畠出土遺物





〔4〕 遺構外出土遺物



外-1~43



外-44



外-45



外-48



外-49



外-50



外-46



外-47



外-51



外-52



外-53





外-54



外-55



外-56



外-58



外-59



外-60



外-57



外-61



外-62



外-63



外-64



外-65



外-66



外-68



外-67



外-69



外-70



外-71



外-73



外-75



外-72



外-74



外-76



外-77



外-79



外-81



外-78



外-80



外-82



外-83



外-84





群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第

元総社西川遺跡

史跡上野国分寺進入路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年12月18日 印刷

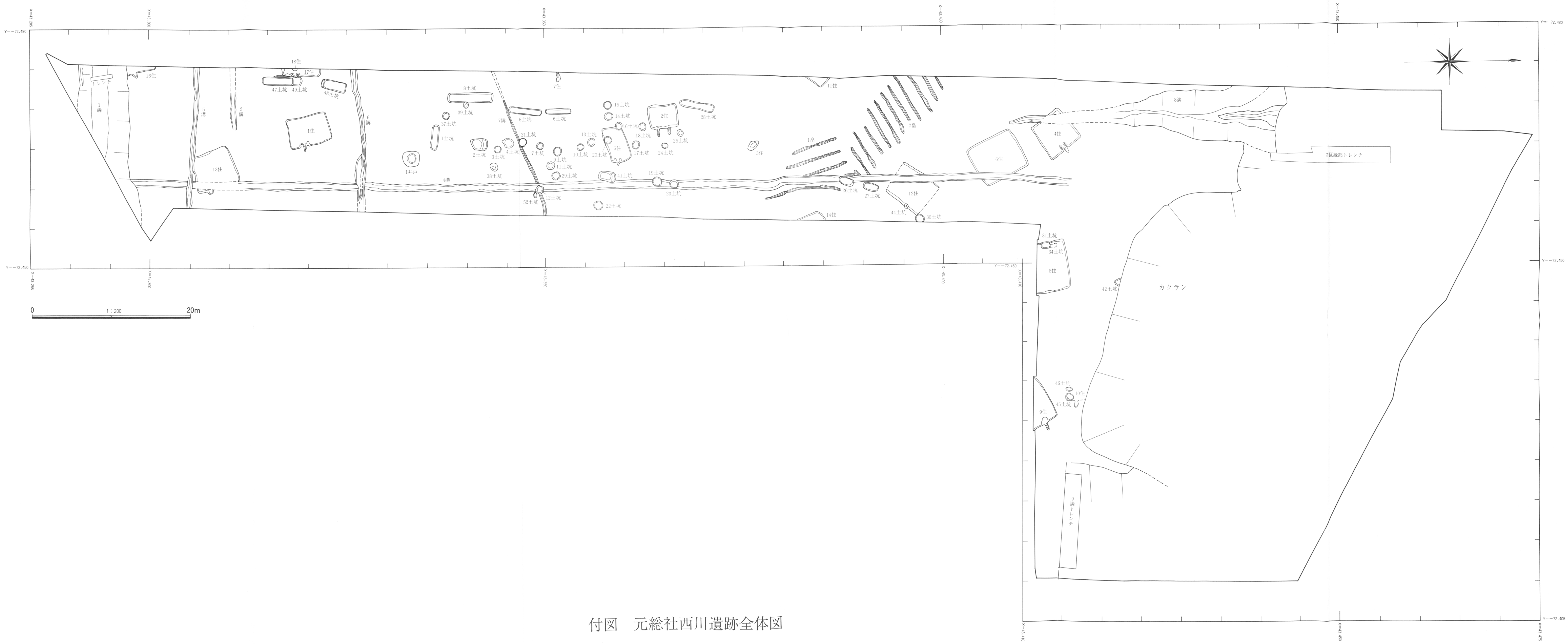
平成13年12月25日 発行

編集・発行／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷／上毛新聞社出版局



付図 元総社西川遺跡全体図